
獣の国でお嫁さん

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣の国でお嫁さん

【Nコード】

N7583U

【作者名】

つんどら

【あらすじ】

召喚されて異世界へ、「永久就職先見つけたと思えば全然」
獣人の国王（予定）の伴侶（予定）となり、濃い面々が勝手に守護者ベッになったり、何故か兄まで召喚されて来たり。平々凡々にスパイスを加えたような少女・城崎有馬（もうすぐ16）の、色々挑戦し
てずっつけてはほんのり成長していく物語。多少チートですがヘタレなので生かせません。むしろ本人より周りがチート。

1 永久就職

ここはとある異世界。獣人達が住む、アニマラーナという大陸国家があった。

この国の歴史は長く、はつきりとはしないが数千年。この世界でも有数の歴史を持つ国であった。

さて、この国の王家には、一つの奇妙な風習があった。

5代毎に異世界人を召喚し、国王の伴侶とするというものである。

風習とはいっても宗教的意味合いは無い。列記とした、極めて切実な問題だ。

獣人は文字通り獣と人から生まれ出でた種族である。普通、その血は半々程度で安定している。

ところが王家の血は何故か安定しない。獣人同士で子を作り続けると、何故やら5代ごとの国王の子供が奇形になる。

ただの獣だったり、意思だけ持つが人の姿になれなかったり、そもそも獣でも人間でもない姿をしていたり。

解決するために人間の伴侶を取ったりもしたが、結果は芳しくなかった。

この世界には純粋な人間が少なく、殆どに何かの血が混じっていて、純粋な人間はそれこそ太古から続くどこぞの王家くらいしか居ない。

生まれた子がますます異常な姿で、獣人たちは頭を抱えた。

そうして試行錯誤の末に達した結論　それがつまり、異世界から純粋な人間を召喚すること。

双方に好ましい状態とするために、召喚する相手は数々の条件を兼ね備えた者になる。

一つ、他種族との混血が無い純粋な人間である事。

一つ、王位を継承する者と性別が違う事。

一つ、生殖機能に不全が無く、健康である者。
一つ、恋愛感情を持つ相手が居ない者。
一つ、他人や物に過剰な執着を持っていない者。
この他にも様々な項目があり、これらを考慮して魔法が選定していき、そうして1人が選ばれる。

5代毎に繰り返される儀式。
それがこの度も、行われようとしているのであった。

春の匂いが遠ざかり始める、5月20日。

黒髪を腰の辺りまで伸ばした、美人とも不細工ともつかぬ造形の少女が、のんびりと歩いていた。

名前を有馬^{ありま}、苗字を城崎^{きのさき}という。偶然にも両方温泉地の名前だが、本人も親もそこまで考えてはいない。

体形はやや太り気味ではあるが、まあ中肉中背と言えよう。身長は153cm、体重は……言わないで置く。

胸はそこそこあるが、全体的に見ればその胸も脂肪の一部としか捉えて貰えないような体形である。

化粧はしておらず、黒髪に隠れた額には少しニキビが浮いている。両手の爪は素っ気無く切られ、特に気は使っていないようだ。

(また太ったか)

そう思いながら見た腹部は、数ヶ月前より出ているように感じた。虚しくはあるが、その程度の変化には感慨すら無くなって来た。

もうじき16歳になる彼女は、新しい環境に辟易気味であった。そこそ楽しいし、なんとか友人も出来たが、やはり中学校が恋しい

のである。

ついでに言うと、今までより行動範囲が広まり小遣いも増え、買い食いのしすぎで少々太りつつある。

(あーあ、何かこう……何だ?)

もやもやとした気持ちのまま歩き続けていると、前方の景色がゆらりと揺らいだ。

その中から、男の声が聞こえてくる。

『汝、アニマラーナ王の伴侶となる事を了承するか』

「はい？」

思わず聞き返す。が、それはどうも了承と取られたようであった。次の瞬間、肩に掛けていた鞆もろとも、少女はその場から姿を消していた

「っ痛！」

どんと音がして投げ出される。思い切り尻餅をつく事となり、有馬は目じりに涙を滲ませた。

「少々ずれたようですが、成功です、殿下」

「ああ、よかった……大丈夫か？ 手を」

痛む尻を撫でつつ、鞆をひとまず下ろし、有馬は条件反射的に顔を上げて差し出された手を取り、

「……失礼な」

自分の顔を見た途端に顔に落胆を浮かべた男を見て、思わずそう呟いた。

「！？ す、すまない」

慌てて取り繕うが、初対面でがっかりした顔をされると流石の有馬も怒りはする。

その感情を顔に出さないように努力しつつ、有馬は部屋を見回した。壁にかかったタペストリー。窓はなく、一面灰色の石で出来ていて、天井に丸い石がついていてそれが発光している。

ひんやりした空気は地下室を感じさせたが、確認までは持てない。

目の前に男が2人、他に人は居ない。

片方は失礼な男。肩口程までの少し跳ねた銀髪に所々白が混じっているが、まだ20代前半か10代後半に見える。目は深い青。

もう片方は、やや白に近い銀の長髪を横で結った、アイスブルーの瞳の男。年頃はもう1人と同じくらいのようにだ。

「状況は把握されていますか？」

「は？ あ……… 伴侶になれって？」

「そういう事です。なかなか物分りのいい御方で安心しましたね、殿下」

「そうだな」

有馬は、失礼な男の方が偉いのだなと検討をつける。そしてつけた後に文句を言おうとして、長髪の男に遮られた。

「手紙は読んでいただけましたか？」

「ちよつと へ？ いや……… 手紙？」

「はい。そちらで一般的な方法を選んで送った筈なのですが もしや、届きませんでしたか。申し訳ない」

口元に手を当て、そんなものがあつただろうかと考え込む。そして思い至り、ポケットから携帯電話を取り出し、メールボックスを開いた。

そして数日前に届いた、送り主不明のメールを探し出す。

「これ、のこと？」

「そうです。ちゃんと届いていたようですね」

件名、『あなた様は王の伴侶に選ばれました』。ぶつちやけて言うのと、怪しすぎて開きもしなかったのだ。

読んでみれば、確かに伴侶がどうたらと書かれている。有馬は溜息を吐いた。

「……… 読んでなかった。ごめんなさい？」

謝ったが、よく考えたら自分が悪くない事を思い出してか疑問形になる。

「いえ、ここで理解してくださればそれで構いません。むしろ、混

乱して暴れたりなさらないので私も安心しています」

(暴れてたらどうする気だったんだろう)

その笑顔に薄ら寒いものを感じ、有馬は目を逸らした。

逸らした先に見えたのは、タペストリー。出入り口らしいものは見当たらないが、その裏にあるのだろうか。

「あのさ　いきなり、嫁になれって言われても、今一理解できないんだけど」

「それはこれから説明しますから、一先ず上へ参りましょう」

微妙に不満を込めて言った筈だが、長髪の男はどこか反論できないような笑顔でそう言って、タペストリーの方に歩いていく。

有馬は溜息を吐いた。説明すると言われては、聞くしかない。そしてこの男が反論と拒否を許してくれない可能性は高い。

長髪の男は腰のあたりに差してあった、飾りのついた白く細い試験管のようなものに触れる。ぱちんとボタンを外し、覆っていたベルトのようなものを取って中から杖を取り出す。

真新しい白のチョークのような色の杖には、蔦が這うような模様が描かれ、太い側の端に輝く水色の宝石が嵌っている。

(魔法の、杖?)

それは確かに、映画などで見るような魔法の杖にそっくりであった。指揮棒タクトのような形で、有馬はかの魔法学校ホワットを思い出した。

(……魔法、って。ないない)

有馬は小説が好きだ。読むことも書くことも。時代小説からファンタジーまで何でも読む。しかしながら、彼女はリアリストであった。物語は、まるで夢だ。その奥深さを知れば知るほどに、目覚めた後の世界の味気なさが彼女を現実的にしていく。

魔法はない。エルフはいない。喋る犬猫もない。騎士もいなければ、錬金術師もない。

(……妄想にしては本気くさいしなあ、何なんだ)

しかしながら、今の状況はそれこそ魔法でないと説明がつかない事に気づいた。

空中から声が聞こえたのはまだいいとして、空間が歪んだ事がおかしい。高い熱でもあれば確かに空気が揺らいで見える事はあるが、まだ春先で肌寒いくらいだった。更に、眠らされて拉致された訳でもなく突然こんな場所にいる。寝起きの気だるさが全く感じられないから、自分の感覚を信じるならば眠ってはいないだろう。

「《 》」

長髪の男が、有馬に聞き取れない小声で言葉を発した。白い杖の先端が、淡い光を発する。そのままくるとタペストリーを円形になぞると、光が尾を引いて円を描き、続いてタペストリーが下から巻き上がる。

(……違う、違う違う。花火の光だって尾くらい引くよ)どきりとした。まさか本当に魔法なのかとも思ったが、有馬の常識と理性がそれ阻む。

花火の光と比べて空中に留まる時間が格段に長い事は、どうやら気にしない事にしたらしい。

長髪の男がその先にあつた階段を上がって行き、それにもう一人の男、そして最後に有馬が続く。

有馬は疑問を心の中でつらつらと並べ立てられながらも、黙って昇つて行つた。

「……わお」

そして上にあつた部屋に着くと、有馬は小さく歓声を上げた。円が二つ連なつたような、瓢箪型の部屋。両方の部屋の端に、それぞれドアがついている。

二つの部屋の間には段差があり、大きい方の部屋の方が高い。床には深い赤の絨毯が敷き詰められて、踏み込むと体が少し沈んだ。

(ホグーツの校長室みたい)

思わず心の中でそう呟く。きょろりと部屋を見回し、有馬はある一点に目を留めた。

大きな方の部屋に置かれた、机と椅子の横。

そこに一匹の、真つ白な狼が蹲って眠っていた。そして

「それが、花嫁か」

大きな口を開けて、妙に色気のある低音で喋ったのである。

そしてすつと立ち上がったかと思えば、すたすたと歩いてくる。

（な、な、何！？）

起き上がった狼は更に巨大に見えた。有馬の背が低いとはいえ、胸ほどまでのサイズは明らかに異常だ。

噛まれたら一たまりも無いだろう。思わず後退りをした有馬の背を、とん、と押す手。

「大丈夫ですよ」

長髪の男の声。有馬は戦々恐々としながら、近づいてくる狼を真っ直ぐに見据えた。

特に彼女の気が強い訳ではなく、野生動物に遭ったら目をしっかりと合わせると本で読んだのを思い出しただけが。

狼は、有馬の腹あたりに鼻を寄せてすんすんと嗅ぎ、しばらくそうしてから頬で擦り寄った。

「中々に、肉付きのよい女子じゃのう。よい、よい。心の臓の音も、穏やかで安定してある」

肉付きの良い。

有馬は仄かに目の下をぴくりとさせ、若干嫌そうな顔をした。しかし襲ってこないと分かり安心したらしい。

「あなたは？」

ひとまず冷静に、巨大な狼に尋ねる。

「我はこの部屋を守護し続けてきたもの。名は無い」

「……名前、無いの？ 何て呼べばいいの」

「そやつらは、守護者殿と呼ぶがのう」

「じゃあ、守護者……さん」

尊大な調子の狼に、すりすりすりすり腹のあたりに頬擦りをされ、有馬は顔を引きつらせる。

「守護者殿、どうなされたのです?」

「警しい匂いがする」

(に、肉の匂いでもするかな……) 思わず腕を上げてすん、と嗅ぐ。汗と埃の臭いがする。虚しくなつた。

「守護者殿、ひとまず話をせねばならないのだが」

「分かつておる」

低い声に合わせ、前触れ無く小さい側の部屋に二つのソファが現れた。

「っ!」

有馬は目を見開く。二度目だが、やはりさつきとは違い、誤魔化しの言葉も見つからないほど魔法染みている。

しかしまだ、自分に想像のつかないトリックがある可能性も否めない。

「座ってくれ」

そう促され、たじろぎつつも腰掛ける。高級げな赤いソファは、身を任せるとふんわり沈み込んだ。

その隣にひよいと狼が飛び乗り、座つた有馬の太腿に顎を乗せる。

有馬は若干体を強張らせたが、生来の動物好きの本能が勝つたのか、雰囲気やを和らげた。

「さて、説明を始めましょう」

もう片側のソファに、殿下と呼ばれた男が座り、当然のように長髪の男はその斜め後ろに立つ。

「まずは自己紹介から始めましょう。あなた様はアリマ・キノサキ様でよろしいですか?」

「あ、はい」

思わず返事をしたが、すぐに我に返って有馬は怪訝な顔をする。

「……いや、何で知ってるの?」

「伴侶候補のプロフィールを見たので。不快な思いをさせてしまったでしょうか」

「別に、いいけど……」

(……っでもしかして体重まで知られてるのかな?)

知られたからどうという訳でもないが、複雑な気分ではある。

「俺は、フォルテリア・ダグラス・シエパーダ・ウォルフ・アニマラーナ。

この国、アニマラーナ王国の第一王子だ」

「ふーん」

勿体つけるような口調の自己紹介を一刀両断。有馬は自分の体重について思案していて、上の空である。

「……フォルテ、と呼んでくれ……」

「うい」

フォルテは口元に手を当てて、小さく息を吐く。王族どころか王となる者だというのに、妙に哀愁ある仕草だった。

「私はシヴィルクス・アルマータ・レトリーヴァ・ウォルフ・アニマラーナです。シヴァとお呼びください」

優雅に一礼し、有馬もようやく目を向けた。落ち着いて見れば2人と、輝くような美貌である。

(……うん、よく考えたら美味しいか、イケメン2人に犬まで) さりげなく手を伸ばし、狼の頭を撫でる。柔らかな毛並みに、思わず口元も緩んだ。

「うむ。では、説明を始めよ」

狼は目を細め、そう言っただけで気持ち良さそうに耳を垂れた。それを見てフォルテとシヴァが妙な顔をしているが、有馬は狼に集中していて気づかないようだ。

「……。まず我らの国の事から説明いたしましょう」

釈然としない顔を笑顔に戻し、微妙に引きつったまま説明を始める。話が始まると、有馬は時折撫でる手を止めるほど聞き入った。

(嘘だとしても本当だとしても、物語みたいだ)

剣と魔法のファンタジーな世界、それだけで既に驚きに値する。2人の非現実的な銀髪にやや予想はしていたが、獣人だと聞いて更に

驚いた。

有馬はリアリストだが、それでいて非現実を待ち望んでいる節があった。

故に、一度信じてしまえばもはや疑う事なく受け入れて、むしろ次は何かときらきらと目を輝かせ始めた。

「なるほど、深刻だね」

「そんな嬉しげな顔で深刻とか言われてもな」

とはいえ、まだその目は映画を眺めているようなものであったが。

「この世界に人間はいるんでしょ？ 何でこっちの人を伴侶にしないの？」

「人間は、我々獣人を疎むのです。混じり物、とね」

「なるほど……人種差別ね」

何となしに言った言葉だが、ぴくりとシヴァが一瞬顔を硬直させ、フォルテも少し驚いた顔をする。

「人種差別、とは少し違う。そもそも俺たちは人間ではないから人種とは言わないだろうし」

「いや、人種差別は人種差別だよ」

「……まあ、いいか。変な感じだな」

有馬はその言葉に首を傾げる。2人はそれ以上言及せず、話を続けた。

「それとですね、今やこの世界に純粋な人間というもののほんの一握りしかおりません。王族、しかも歴史の長い国の方々だけでして。

分かっていただけましたか？」

「プライド高そうだし、無理だろうね。……純粋な人間じゃないと駄目なの？」

「はい。奇形児や半獣……人の形を取れない獣人、あるいはただの獣が生まれてくる事が大半です。ああ、平民はその限りではないです」

近親間の生殖でのリスクと似たようなものである。

ただし、比較的近親での婚姻を繰り返した王族とは違い、平民は安

定した血を持つているためそのリスクは無い　　と言われているが、真偽は定かではない。

「なんとなく分かった。　　んだけど、何でわざわざあたしみたいのを呼んだの？」

不細工だし、太ってるし、性格もいいとは思えないし」

「私達が求めるのは、そういった表面的な事では無いからです。

王と性別が違う事、この世界の人間と同じ身体構造をしている事、健康状態が良好で生殖機能に不全が無くこちらで対処できない病気を持たない事、その他色々」

「実用重視って事？　　……でも、そのくらいならもつと美人が居るでしょ」

「容姿は基準に入れていません。また、候補は見る事ができませんが、最終決定は術によるものでして。異性の好みはそこそこ反映されるはずですが」

「……………好み？」

フォルテが首を傾げる。彼自身あまり女性に興味のあるタイプではないが、それでもぼんやりと、女性に好き嫌いを感じる事はある。どちらかといえば健康的で明るく、素朴な風の女性に心惹かれる事が多い。

有馬は単に外に出たがらないからか色白で、長い髪の所為かやや大人しげに見える。

素朴な町娘というよりは、貧乏貴族の娘のような印象か。

「失礼だね、ほんと」

その呟きを聞いて有馬が、からかうような言葉をかける。フォルテが慌てて謝った。

「……………で、あたしを帰して新しく召喚するってというのは？」

「ほぼ不可能です。送還魔法は存在しませんし、再召喚も伴侶が子を成さないうちに亡くなった場合しかできません」

「なるほど。……………ん？　メール……………手紙は送れたのに？」

「あれは干渉魔法と呼ばれるものです。形ある物を送る事は大変難

しいですし、生命体となると完全に不可能とされています。

今回の手紙ですが、思念を電波とやらに変えて送る事が出来たので、随分と簡単でした。手紙となると、一時的に向こうの生物の体を借りて操って書かせるしかないのです。」

不便だ、と有馬は思った。魔法も万能ではないらしい。

（思念を、電波に……じゃあ電気にも変えられるかな？ ……携帯とか、プレーヤーとか、電子辞書とか、充電切らしたくないし、なんとかならないかな）

思い出したように携帯を出して、電源を切って電池を取り出す。電子辞書の充電機も抜き、それは何ですか？ というシヴァの質問を適当にかわして鞆にまた仕舞った。

プレーヤーはスリープにしてある。完全に電源を落とす方法は知らないため、早急に充電方法を探さなければいけないが、検討もつかなかった。

他に電化製品は無い。というより、普通の人を持ち歩くような電化製品は殆どこの程度だろう。

万歩計、ノートパソコン、電子手帳や携帯ゲーム機の類が加わる場合もあるが、有馬は持ち歩いていない。

「ねー、あたしにも使える？ 魔法」

「……どうでしょうね。歴代の召喚された方々は全く使えなかったそうですが……。」

アリマ様、学問は得意な方ですか？」

有馬は首を傾げる。魔法と一体どんな関係があるのだろうか？ そう思いつつ、正直に言う。

「物にもよるけど。国語とかは得意かなあ、あと情報処理も好き。歴史とかも」

「そうですね。ならば、出来るかもしれませんが、まあ、この話はまた後ほど。」

これからの事を、説明させて頂きます」

これからの事。有馬にとっても気がかりな案件である。

伴侶となるなら悪い扱いは受けないだろうが、心の準備もさせて欲しい。

「アリマ様は15歳でいらっしやいますね。この国では、婚姻を許されるのは男女共に、16歳からになります。」

この世界の暦はあなたの世界と同じですが、時間にずれがあるようです。

あなたの世界では春でしたがこちらではまだ1月の1日　つまり結婚するには半年近く待たねばなりません」

有馬の誕生日は、6月の6日だ。つまりあと半年近く待たなければいけない事になる。

「1月、1日……え、……元旦？　お祝いとかしなくていいの？」

「先年末に国王陛下が崩御なされましたのでね。それに、召喚する日というのは限られていまして、月と日が揃う日のみなのです。丁度良かったんですよ」

1月1日、2月2日、そういう日のみということだ。

これは魔法の決まりというよりは儀礼的な事だが、一応重要ではある。

「……はあ」

「ですから、半年ほどこの部屋で過ごしていただく事になります。それに、いきなり結婚するという訳にもいきませんから、一先ずは半年後に婚約発表ということ。」

さて、肝心な事を聞き忘れていましたが、これは殿下から

そう言っつてシヴァはフォルテに小さく耳打ちした。途端に、すっと真面目な顔になる。

見れば見るほど整った顔立ちだ。すっと通った鼻筋にきりりとした口元、何より有馬は青い目が気に入った。ツンとしたような感じで、少し釣り目気味である。

(かっこいい、かも？　いや、シヴァさんも捨てがたい)

のんびりとそう考えつつフォルテの言葉を待つ。

背がすっと伸ばされ、いつに無く真剣な顔で。

「アリマ・キノサキ。我が伴侶となり添い遂げ、子を成してこの国の力になってくれるか」

どきり、とする。初対面からまださして経っていないのだが、ストレートな言葉に気圧される。

何しろ、固い言葉ではあるが、意識してみればプロポーズの言葉なのだ。

「はい」

有馬は、一つも気の利いた言葉は思いつかなかったが、とりあえず返事をした。

「悪くはないしね。いいよ」

そしてあっさり付け加えるが、その言葉尻が僅かに震えた。それに気づけたのは、狼だけであったが。

「よかった。断られたら、どうしようかと……」

「その時は、あたしを殺して再召喚？」

真顔で述べると、フォルテもシヴァも少し面食らった。

反論しようとも思ったが、確かにその通りである。そのまま放るわけにもいかないし、下手に逃亡されれば王家の存亡に関わる。

結局は伴侶にするか殺すか、なのだ。あるいは無理矢理にでも子を産ませるか、惚れるまで必死にアピールするか。

「未練とか、無いのか」

「さほど無いよ。というか、先が見えなくて困ってたところだし、永久就職先見つけたと思えば全然」

小指の爪の先ほどもシンデレラストーリーに憧れる様子の無い淡白な台詞。

少なくとも世の夢見る女性達に見られたら殴られる事は確かである。しかし今の所、有馬に不満は無かった。むしろ社会のしがらみから解放されたと思えば自分の貞操くらい大盤振る舞いしてもいい位に思っている。

「って言うか、未練たらたらになりそうな人は召喚しないでしょ」

「その通りですね。条件に入っていますし」

「ま、無いでもないんだけど。まだ読みたい本も、やりたい事もあったけど。別になくても生きてけるし」

突き詰めてしまえば、人間など身一つで生きられない事も無い。少なくとも、有馬は生きていけないほど依存している物は無い。

強いていうのなら、紙と書く物が無い生活は厳しいかもしれないが、文も絵も書く事が好きなのだ。

「1つだけ言うなら、あたしを好きになって、別れるまでは好きでいて」

離婚か死別するか。それまでは、少しは好きでいてほしい。

ほんのささやかな願いに、フォルテは神妙に頷いた。

1 永久就職（後書き）

初めてみました。拙い文章ですがどうぞよろしくお願いします。

2 わたしの国は

「半年間はここと、向こうの部屋のみで過ごしていただくのですが」
シヴァが奥のドアを指差す。ふむふむ、と有馬は頷いた。

「蜜月？ 引きこもり？」

「まあそのようなものです。今までは成人の方ばかりでしたので、
婚姻までの1、2月程度で済んだのですがね」

本来ならば、召喚条件に“婚姻可能である事”が含まれている。

日本でも女性の結婚は16歳からなので、有馬はどちらの世界でも
まだ結婚できない事になる。

召喚術の不調なのか、それとも選定術の不調なのか 果たしてそ
れはまだ不明だが。

「ふーん」

「その期間、こちらの事を学ぶと同時に伴侶同士の親交を深める、
とそういう訳です」

「親交ですか……」

「ただし、婚前交渉は一応禁じられておりますので、程々に……
わかりますか？」

「あ、うん。エロい事すんなって事ね」

身も蓋も無い言い方だがそういう事である。

「まあ最後までいかなければ別にかまいませんけど」

「あつはつは。どこまでセーフ？」

愉快そうに笑う有馬は、割と耳年増というか まあ、下ネタに寛
容だ。

歴史小説にはよくそういうシーンが含まれるし、そもそも小学生の
頃から親の蔵書を読んでいて、うっかりそういう本を手取る事も
あった。

そう、うっかり。あくまでうっかり。

「どこまででしょうね。一発なら誤射としておいてあげましょう」

「やめる」

優雅な微笑みに似合わない台詞に、有馬は腹を抱えて笑い、フォルテは漸くストツプをかけるのであった。

有馬はその部屋に足を踏み入れ、感嘆した。

先ほどの部屋よりも更に毛足の長いふわふわの絨毯。薄汚れたローファーで踏むのがもったいない程で、思わず「靴脱いでいい？」と聞いた。

「ええ、もちろん。アリマ様の国では、家に入るときに靴を脱ぐのでしたね。」

こちらでは、自分の部屋では靴を脱ぎます。ここはアリマ様の私室にもなりますから」

「へー。こっちは外国だと靴履いたまま家入るし、そうなのかと思つた」

さりげなく日本の風習まで把握しているシヴァに感心しつつ、靴を脱ぐ。

側面に少し土がついているし、皺がついていてお世辞にも綺麗ではない。

「どこに置けばいい？」

「その棚だ」

部屋の入り口は丁度日本の玄関と同じように段差になっていて、低い方は石の床だ。

その脇に、棚が置いてある。高さは有馬の胸ほどだ。

「うい」

腕を伸ばしてその一番上の段に靴を入れ、開放された足で絨毯を踏みしめる。

靴下越しに伝わる柔らかさが心地よい。

「守護者殿」

「応」

フォルテの言葉に答えた狼が、さっと尾を振る。

置いてあったテーブルと椅子が低くなり、低いテーブルとソファに変わる。

(呪文とかいららないのかな? ……守護者だから? いや、守護者って何?)

ぼすん、と腰掛ける。先ほどのソファと同じ物のようである。

「さて、私は仕事がありますので、また後ほど」

フォルテと狼が部屋に入ると、シヴァはそのまま去って行った。

残された有馬は内心ひやひやしていた。背中にはじっとりと冷や汗。

彼女は、実を言うと人見知りである。人付き合いに関しては、兎に角受動的だ。

シヴァのように愛想のいいタイプや、狼のように懐いてくるタイプなら問題は無い。

フォルテはどちらかといえば不器用そうで、真面目に見えた。

仲良くなるに際して、非常に取っ掛かりが掴みづらいタイプである。

(……こ、この人の、妻になるんだよね?)

そう考えると、仲良くしなければいけない。人付き合いは、最初が肝要だ。

「あの」「なあ」

口を開いた瞬間が寸分変わらず同じだった。

「……お先にどうぞ?」

「いや、そつちから……」

フォルテもまた、困りきっていた。

彼は人見知りこそしないが、伴侶となる女性を前にどう接しているのか分からない。

表面上の付き合いで良いのならば彼は完璧な王子になりきって見せるが、将来の妻を前にそういう訳にもいかず。

そもそも、初対面の同年代相手に気まづくなる経験が全く無いのだ。何せ、彼に近づく者達はそもそも彼に取り入る事を前提にしてくるのだから、ぺらぺらと話してくる。

「似たもの同士じゃのう。はよう、仲良くなれ」

同時に狼を見て、情けない顔をする。

つまり2人は似たもの同士で、それ故に最初の一步が難しい。

そして、先に口を開いたのは有馬であった。

「フォルテさん、何歳？」

「……19歳だ。それと、呼び捨てでいい」

有馬は人見知りだが、実を言うと、自分よりも対人スキルの低そうな相手には物怖じしない。

決してフォルテが自分より人見知りだと見た訳ではないが、まあ、こういう時に決心が早いのは大抵の場合、女である。

「うん、わかった。シヴァさんは？」

「19だ」

「へえー、同じ年なんだ。仲良さそうだけど、幼馴染？」

「幼馴染でもあるが、あいつは従兄弟だ。先王……俺の父の弟の子だからな」

つまり、シヴァも傍系ではあるが王族という事になる。

「仲いいの？」

「……まあ、比較的良い」

有馬はにやつと微笑む。なんとなくこの相手の性格が掴めて来たらしい。

「案外、フォルテとは気が合うかも」

有馬は、相当仲のいい相手に対しても友情を疑ってかかる。無論心の中で、だが。

常に、相手が実は自分を嫌っている可能性を頭に置いている。

故に、最も仲のいい友人ですら、自分から親友だと公言する事はない。

気恥ずかしいのもあるが、相手が自分を同じくらいに思っていないかなったら という考えが強いのである。

それに、仲良くなりすぎると後が怖い。仲が良ければいい程、嫌われた後の反動は大きい。

「……合わなければ困るかな」

「ま、そうだね」

普通に友達、仲は良いよ、グループ的には同じだよ。

他人との関係をそんな言葉で誤魔化してきたので、フォルテには親近感が湧いた。

「フォルテは王子だけど、シヴァさんは何やってるの？」

「表向きには俺の側近兼護衛魔術師、裏で諜報部総督」

「あー……」

優雅に座ったシヴァが何処からともなく現れた忍者の報告を受ける様子をなんとなく想像し、有馬は納得したように頷いた。

「なんとなく、そういうイメージあるね」

「まあ、将来は親のレトリヴァ大公領を継ぐんだが……確かにこっちの方が向いているだろうな」

「別に、両立してもいいんじゃない？ 有能な兄弟や部下がいればね」

「……そうか？」

有馬の知る限り、日本の歴史上さほど珍しい事ではない。

かの石田三成だって、父に領地経営を任せて飛び回っていたのである。

「この国がどういう風なのか知らないけど、うちの国じゃ珍しい事でもなかったと思うよ。ずっと昔だけどね」

「……この国は、王都を中心とした王領と貴族領がある。貴族領は貴族が治め、あまり口出しはしない。逆も同様で、王領に口出しはしてこない」

説明しろと言った訳では無いが、そう言うと有馬は興味深げに口元に手を当て、少し考えて口を開く。

「つまり、大小の領地を持つ貴族の中で一番力の強い一貴族が王族、みたいな感じ？」

昔読んだ本の受け売りだが、的は射ている。

フォルテは少し驚いた顔をしながらも、妻となる者が案外しっかりしている事に安堵した。

妻とは言えど王族で、それなりに公務にも関わるし、意見を求められる事もあるのだ。

頭の悪い美女と頭の良い不細工ならば、王族としては後者を選ぶべきだ。ただの貴族であるなら兎も角。

「そういう事になる。有馬の国は？」

思わずそう言つて、フォルテは内心でしまった、と呟く。

どうやら詳しそうだから聞いてしまったが、これから夫婦になるというのにこんな話ばかりしていいのだろうか、と思つたのだ。

フォルテは王たる者として育つたから、政治には勿論興味がある。しかし有馬がそうだとに限らない。

「うちの国……日本は、領主とかそういうのは今は無いね。国民が投票で決めた代表者が国を治めてるよ」

「王は居ないのか？」

「天皇陛下がいるけど、政治関係は承認とかするだけだよ。つまりは象徴」

「……象徴？」

「傀儡政治って事じゃないよ。国民が崇める対象と、国民を治める人間は違つてだけ……かな？ あ、治めるのは1人じゃなくて

」

フォルテは認識を改める。詳しく、ではなく詳しい。知っているだけでなく、理解している。教育水準も低く、情報伝達も遅いこの世界ではなかなか難しいことだ。

「地方はどうやって統制するんだ？ 領主はいないのだろう」

「えーっと、国を都道府県、更に細かく市町村で分けて、その1つ1つにその町、その県の人たちが選挙で決めたトップを置いてるよ。誰かの領地って訳じゃなくて、指導者のなもんだけど」

「ふむ……都道府県と市町村とは何だ？」

「土地の単位かな。都道府県は、呼び方は違うけど“領”と同じような感じ。なんとか県、とかなんとか府、みたいな感じでね。

市町村はそのまま、市、町、村。大きさによって呼び方が分かれる

けど、都道府県の中はその市町村で分けてるのね。市って呼び方はこっちにはある？」

「無いが……つまり、都という事か？」

「そういう事。絵に描けばわかりやすいんだけど……あ、そうだ」カバンを開けて、中からお目当てのものを探す。

珍しく勉強しようと思っていたので、それなりに重く、雑多に教科書類が突っ込まれていた。

「あつた」

取り出したのは、社会の資料集である。地理ではなく政経のものが、表紙の裏に日本地図、裏表紙の裏に世界地図が載っていた。

「これが日本。字は読めないだろうけど」

「ほう……この本は？」

「教科書」

有馬は丁寧にな道府県を指差し、名前を言っていく。

「あたしが住んでいたのが、ここ」

いつの間にやら話が地理にシフトしているが、お互い真剣である。

「47の大きな地域に分かれるのね」

都道府県にはそれぞれ知事っていうトップがいて

その後もひとしきり知る限りの知識を披露しているうち、日も暮れた。

部屋には窓がないため2人とも気づかなかつたが、有馬の膝に頭を乗せて寝ていた狼が目を覚まして「腹が減った」と言った事でやっと気づいた。

「そろそろ夕食の時間だな」

「そういえばお腹めっちゃすいてた」

有馬は下校途中、5時半ほどに召喚されたが　こちらではまだ昼だった。

それから6時間ほど経っており、召喚されていなければおそらく眠っている筈の時間である。

「フォルテはどうするの？　なんか、晚餐とかそういうのは？」

「ここで食べる。有馬、また後で話してくれ」

フォルテも大分呼びなれたのか、名前の発音がすっかりしてきた。政治の話で打ち解けるのも変な話だが、そもそもこの2人が変なのだから仕方ない。

知識欲や好奇心が強い有馬は、知りたいものを知りたいだけ学んできた。だから得意分野は本当に得意だ。

しかし使いようの無い知識も多く、話が合う人間が少ない。鬱憤が溜まっていたのだろう。

「うん。フォルテは興味持ってくれるから、喋りやすいね」

幸いにも手元に資料集があり、有馬はそれを見つつ考えを交えて話した。

大勢の前で話すのは苦手だが、1人2人が相手ならばむしろ得意である。

「そうか」

フォルテはそう言って柔らかい笑みを浮かべた。次の話が心底楽しみらしい。

その後やってきたシヴァには呆れられたものの、一先ず打ち解けたため2人ともほっとしていた。

ワゴンに乗った食事が運ばれると、狼が尾を振る。

「わっ」

有馬が驚いた声を上げた。椅子とテーブルが突然高くなり、食事に適したものに変わる。

「アリマ様、お酒はお召しになられますか？」

「飲んだ事無い。うちの国じゃあと5歳は飲めない法律だし、できれば普通の飲み物で」

「分かりました」

有馬は食事が好きだ。テーブルに並べられる料理を見ながら目を輝かせている。

並べられた料理は、有馬にも見覚えがあるものから、全く材料が想像つかない物まで様々だ。

皿に盛られた料理に、それぞれ盛るための大きなスプーンがついて
いる。

スープの横には、スープ用の大きめのマグカップが置かれ、スプ
ーンが置いてある。

最後にどんと置かれた大きな四角い皿には、半円型で袋状のパンが
沢山入っていた。

「……手で食べるの？」

有馬の手に、スプーンやフォーク、箸の類は無かった。

どうやらこのパンに入れて食べるようである。

「ああ。有馬には馴染みが無いか？」

「いや、こういうのも食べた事はあるけど。スープは口をつけて飲
んでもいいの？」

「良いぞ。むしろ、スプーンは殆ど使わないな」

「へえー……」

王族の食事だから少し気を張っていたが、どうやら気にするほどの
礼儀は必要なさそうである。

「食事に道具を使う文化が定着しないまま、結局こつこつ形に落ち
着いたんだ」

フォルテが右手を丸めて左胸に触れる。どうやら食前の祈りらしか
った。

有馬もなんとなく両手をあわせ、いただきます、と呟いた。

「好きに取って、そのパンに入れて食べるといい」

「このパン、なんて言うの？」

「ピラと呼ばれている」

有馬は小学校の時に給食によく出た、ピタパンを思い出した。

ピタパンも円形で薄く、固めのパンだ。半分に切って、中に具を入
れて食べる。

「うちの世界にもピタパンって言うのがあるけど、そっくりだね」

「そうか。そちらから持ち込まれたのかもしれないな」

無い話ではない。確かにこの世界と有馬の世界は、魔方陣で繋がるのだから。

有馬はピラをひとつ取り、適当に目についた肉料理をスプーンで取って入れた。

(……ん？ 獣人の国なんだから、豚とか牛の獣人もいるのかな。つーかこれ何肉？)

口に入れると、どこか鳥肉のような食感。外側は豚肉のようなあっさりさだが、内部はどこか牛肉のように濃厚な旨みがある。

「これ、何の肉？」

「植物だ。人間のようには豚や牛を食べる訳には行かないから、この大陸ではこれが“肉”と呼ばれる」

「なるほど……え、植物？ これが？」

「こんがり焼けた肉は、どう見ても肉である。」

「大昔に発見された物で、ミートプラントという。葉が厚く、薄皮を剥くと中身は本物の肉そっくりだそう。茎は固く真っ直ぐで、筆記具に加工される。根も太くて、茶になる」

「そりやまた、便利な植物があるね」

「ああ。平民から王族まで誰もが食べるし、この大陸ならどこでも育ち、成長も早い」

これさえあればアフリカの食料問題は解決するな、と有馬は思った。「この国には普通の動物はいないの？」

「いる。ただし食用として飼われる動物はほとんど居ないな。獣人は、自らと同種の動物のみ飼う事を許されている。食べる事も食肉として売る事も種族の意向次第だが、大抵しない」

「そりやそうだろうね」

人間で言えば、猿を食用肉として売るようなものだろうか。

尤も猿が直接の祖先という訳ではないし、そもそも有馬にとって猿は食用のカテゴリから外れているのだが。

まあ、獣人達が抱く気持ちも似たような物である。

勿論全域でそういう意識がある訳ではない。地球でも、鯨や犬を食べる事には国ごとに抵抗があったりなかったりだ。人種や種族によって食文化は大きく違う。

それと同じで、同属でない獣を食する獣人はまだ多く残っているし、未開の山間部には獣を狩ったり家畜として育て、食べたりする部族も居る。

「しかし、ミートプラント……肉の植物ね。そのまんまだ」

「……そういう意味だとは知らなかったが。そちらの言葉なのか？」

「へ？ あ、うん。うちの国じゃなくて、外国の言葉だけど……じやあこつちの人がつけた名前じゃないのか」

「命名者は不明だが、恐らくそういう事だろう」

ピラに、ミートプラント。食事だけで既に二つも前の世界との繋がりを見つけ、なんとなく異世界というより外国にいる感覚になってきた。

（あ、これ……茄子味噌？）

そして3つ目のピラに入れた料理が、あまりに故郷のものと酷似している事に驚く。

かつての召喚者の中に、日本人も居たのかもしれない。

「足りたか？」

「うん」

有馬はその3つで食べる手を止め、スープを一杯飲んで終わりにした。

「小食だな」

「……獣人の女の人って、どれくらい食べるの？」

「種族にもよるが、有馬の倍以上」

獣人は人間より多く食べるが、そもそも有馬は少食な方である。

というか食べる事自体を面倒臭がっていたり、腹痛だったりとあまり食べられない。

ただし、自分の分として出された食事は極力食べきるが。

「まあ、普段ならもっと食べるんだけど、今はもう1つ食べたら半

分残しちゃいそうだし」

「残してもいいんだがな、別に」

「……だって、食べかけ残すのってなんかね」

「だったら、半分食べてやる」

有馬はその言葉に、目をぱちくりとさせた。

「……そういうのが普通なの？」

「……あ、いや、親子や夫婦の間でならな」

なんとなく顔を赤くしてお互い顔を逸らす。

まだ恋心がある訳ではなかったが、なんとなく気恥ずかしくなったのだ。

「じ、じゃあもう一つ、食べようかな。お言葉に甘えて」

デザートらしきものもあり、それを取ってピラに挟む。

果物とクリームを混ぜた物は、とても甘く感じた。

案の定半分程で食べ切れなくなり、フォルテに残りを托す。

その様子を、シヴァが微笑ましげに見守っているのであった。

2 わたしの国は（後書き）

色気のたりない人たち。

3 泣きたい事も

「それ、お祈りか何か？」

フォルテが食前と同じ仕草をすると、有馬がそう聞いた。

「……まあ、そうだな。獣人はそれぞれの始祖に祈りを捧げる。俺たちは、始祖ウォルフに感謝する意味で、こうする」

「紫蘇？」

「始祖とは獣と人から生まれた、その種族で最初の獣人ですね。私達にとっては直系の先祖ですが」

（動物と人で子供が生まれるもんかな……まあ異世界だからありか）無理矢理に納得したが、一体何があつて獣人が生まれたのかは怪しいものだ。

それを知るとしたら、建国の頃から生きていくく僅かな者達だけだ。

それから少し雑談を続けつつ、食器が下げられるのを待つ。

皿をワゴンに載せ、侍女は去っていった。

「今の侍女、クレイアか」

不意に狼がそう言つて、思い出したようにシヴァが口を開いた。

「殿下、紹介はまだしておられないので？」

「ああ、そうだったな。先ほどの侍女はクレイア、有馬の専属となる」

「せ、専属侍女？」

有馬は面食らった。王妃になる事は理解したし納得したが、そういう事は考え付かなかつたらしい。

彼女は一般市民だ。さして金持ちでもない普通の家庭に育っているため、全くもって馴染みが無い。

というか王族の侍女ともなると過保護そうなイメージがあり、なんとなく腰が引けた。

「あと、彼女の母が先王の腹違いの妹でな。一応俺やシヴァの従姉に当たる」

「お、王族じゃん……」

「そうだな。しかし母親が少々やかまして……父親は責任を取る形で転封されたが、一応人質としてこちらに残っている。

だが、幼馴染だからな。信頼は置けるし魔力も強い。教養もあるし、これ以上ない人材だ」

確かに、優秀な人材のように思えたが 有馬は、不信感というか、警戒心を抱いた。

尤も彼女は口を聞く生物全てを警戒している節があるのだが。ただ、程度に差があるだけだ。

「何やらかしたの？」

「先王とその弟への暗殺未遂だ。自らが女王になろうとしてな」

「え、ええっ？ 少々じゃないじゃん」

未遂という事は捕らえられたのだろうが、余計に危険ではないだろうか。

母親を捕らえられた恨みを胸に秘め、幼馴染として信頼関係を築いてから暗殺を試みる可能性がある。

やたら回転の速い頭が、そんなストーリーを描き出した。

「アリマ様の言いたい事は分かります。が、安心してください」

「……う、うん？」

「クレイアの母は、父、夫、兄、娘の全員と不仲でした。結局、夫であるダーメルシャン伯爵に捕らえられ、王自ら死刑にしています」

「うわ……ああ、でもそれなら罪が1人で済むしね」

「一族郎党皆殺し、と物騒な言葉が浮かぶ。

大昔の日本であれば改易か切腹、悪ければ一族全員処刑だ。

豊臣秀次が最たる例で、一族どころか関わった者達まで処罰されている。

それを考えれば、優しい結末と言えた。

「はい。完璧に無罪とは出来なかつたので転封していますがね」

(なるほど。それなら、その程度に済ませてくれた事に感謝して
かも……じゃ、心配しなくていいか)

そう考え、あっさりと警戒心を捨てる。

……どうやら、いきなり侍女を持つ事への抵抗は既に忘れてい
るらしい。

「難しいね」

「そう言う割にしっかり理解しているようだが」

「そうかな」

理解はしっかりしている。難しいと言ったのは、王政国家のし
がらみに対してである。

罰を与える事はしたくない、しかししなければ他の貴族への示
しもつかない。

それを考えての言葉だったが、まだフォルテはそこまで読み取
れないようである。

「とにかく、クレイアが戻ってきたら改めて紹介しよう」

「うん。……あ、そうだ。部屋とか、案内してほしいんだけど……

後でもいいか」

そういえば2人はずっとこの部屋で話通しで、ほとんど立ってす
らない。

この部屋は、さほど広くは無い部屋だ。

入ってきた扉以外にも二つ扉があり、壁にはいくつかの装飾品や
柵しかし先ほどの部屋よりも地味、というか落ち着いた雰囲気
の綺麗な部屋だ。

毛足の長い絨毯は赤で、壁と天井はなんとなく落ち着いた赤茶。

天井には光る石がいくつか、芸術的に配置されて部屋を照らして
いる。

煌びやかな貴族・王族の私室、というよりは年配のセレブがくつ
ろぐような部屋か。

「いや、今しておこう。……まず、この部屋は2人の共有になる」

「ふ、ふたりのね」

共有、と言われてなんとなく気恥ずかしい。どきまぎした空気が流れた。

かつては年の離れた兄と部屋を共有していたが、男性と同室だったのはその頃のみである。

そもそも、恋愛経験の全てが片思いという有馬には、突然の同棲もどきはハードルが高い。

「……、で、そっちが有馬の部屋だ」

フォルテは誤魔化すように声を出し、立ち上がって片方の扉を開く。どうやら、入り口から向かって右側が有馬のスペースのようだ。

「広いね」

入った先はまだ寝室ではなく、普通の部屋である。

こちらは先ほどの部屋とは趣きが違い、明るい雰囲気だ。

オフホワイトの壁、淡い水色の絨毯、ガラス張りのテーブルに可愛らしい白のソファ。壁際には淡い色の木で出来た机も置いてある。

家具もパステルカラーで揃えられ、なんとなくファンタジーの世界にそぐわない、愛らしい部屋である。

「かわいいけど、あたしには似合わないような」

「だったらすぐに変えられるが」

「……すぐに？ いや、後でいいよ。そっちは？」

部屋の中には二つドアがあり、フォルテは片方がトイレで片方が寝室だと説明する。

寝室へ続くドアを開けると、眠りやすいようにか、やや暗い色合いの部屋が目に入る。

上品な紺色の天井に、星のように光る石が散りばめられている。

壁も同色、絨毯は深い緑。

まるで夜の草原のようで、こっちの方は有馬も気に入った。

こちらの部屋にはドレッサーなどもあり、磨り硝子の扉があつてそっちはバスルームに続いているらしい。

「すっごいベッドだね」

そして窓際に、天蓋付きの大きなベッドがある。

お約束といえばお約束だが、やはり目の前にすると圧倒された。部屋に合わせて青系で揃えられており、見るからに布団も枕も柔らかそうである。

「そうか？」

フォルテは首を傾げた。まあ、生まれつきの王子様である。むしろ木とマットと布団だけのベッドの方に馴染みが無いのだろう。アリマはわくわくした顔でベッドに近づく。

「寝転がっていい？」

柔らかなベッドを見たら、寝たくなるのが人間だ。

フォルテは勿論、と頷く。嬉々とした表情で有馬はその布団に上半身を投げ出した。

思ったとおり柔らかく、至福の表情で顔をぐりぐりと押し付ける。

「はぁー……」

溜息まで吐いて癒されていたが、やがてフォルテに背をとんとんと叩かれて我に返った。

「次だ。……とはいっても、後は俺の部屋だが」

「フォルテの部屋ね、はいはい」

軽く言ったものの、有馬は内心、結構焦っていた。

（お、夫になる人の、部屋ね、うん）

小学生の頃はよく男の友達の家でも遊んだが、中学に入ってから全くといって無い。

寝室と自室を出て、元の部屋に戻る。狼は足元に丸まって眠り、シヴァは立って待っていた。

「ご苦労様です。クレイアはまだ来ておりません」

「そうか。今度はそっちを案内してくる」

「殿下の私室を？ おやおや」

「……何だ、その目は」

なんとなくニヤニヤした顔で見られ、照れ隠しの混じった目線で睨む。

「ふふ。隠すものは無いんですか？」

「……無い。有馬、こつちだ」

「あ、うん」

しゃがみこんで狼を撫でていた有馬は、手を止めて立ち上がる。

ドアを開いたその先には、この部屋と似た雰囲気の部屋があった。

ただ色合いは、青系で揃えてある。

家具の類はどれも木で、実用的なものを好むようだ。

「それが、執務用の机だ。ただ、基本的に仕事は最初の部屋です」

「へえー。……本がいっぱいあるね」

1つの面に本棚が置かれ、ずらりと並んでいる。

ただ、有馬にはその題名すら読めなかったが。

他に目新しいものは特にない。寝室は流石に案内せず、元の部屋に戻る。

少なくともこの寝室に世話になるのは、六ヶ月は先だと思われる。

……六ヶ月経っても進展しない可能性は高かったが。

「先ほども会いましたが、改めて。

クレイア・フォンティーン・ダーメルシャン・ウォルフ・アニマラーナと申します。これからアリマ様の身の回りのお世話をさせていただきます」

有馬の目の前で、肩口でくるりと内側に丸まった銀髪の美女が微笑んだ。

目はやや緑に近い青で、どうやら王族は銀髪と青い目が多いようである。

「あ、よ、よろしくお願ひします……?」

条件反射的に、丁寧な相手には丁寧に返す。

クレイアは上品に微笑み、白魚のような指先を伸ばした。

「?」

有馬は僅かに身を強張らせる。そしてその手が、有馬の頭の上に載ったかと思うと、何度か左右に往復する。

撫でられた、と分かったのはその手が去った後だ。

「緊張なされているようですね。アリマ様は異界からお出でになったのでしょうか？ この世にたった一人、心細い事でしょう。」

ですが、わたくしが誠心誠意、アリマ様をお支えいたしますわ」

アリマは数秒固まっていたが、すぐにはっとしたように片手を顔に当てた。

ぐい、と制服の袖が目を拭う。

(な、な、泣い、てっ)

零れかけた涙は袖に吸い取られたが、鼻がつんとする。

何故泣いてしまったのか、自分でも分からないような顔をしていた。

「……っ」

よく笑う有馬だが、人前で泣く事は大嫌いだった。

とにかく弱みを見せる事を好まない。

他人に対しても同様の考えを持ち、雰囲気悪くなるから落ち込むな家で泣け、と頭の中で文句を言う事すらある。

しかし今、有馬はこれ以上なく慌てていた。まさに自分がその状態になりかねない。

必死に言葉を探し、しかしありきたりな台詞は全て喉につつかえる。

そこに、ぽすん、と今度は大きな手が乗る。

「大丈夫だ」

その声は夫になる予定の者の声で、有馬はぐつと歯を噛み締めて耐えた。

「たった1人とは心外ですね。殿下に私に守護者殿、もう3人もいるというのに」

今度はシヴァの優しげな声が重なる。

(~~~~~っ……うっ)

暴風雨のように荒れ狂った感情を抑える。

軽く、言いながらも。平然としながらも、やはり不安はあった。自分では認めようともしない、漠然とした不安と慄き。

会ったばかりの男が夫になると言われ、いきなり親元からも故郷か

らも引き離され。

それで完璧に動じない人間がいたら、狂人が廃人だ。

「よく今まで泣かなかったな」

不器用な手が、クレイアとは比べ物にならない大雑把な手付きで頭を撫でる。

子供扱いされている感否めないし、なんとなく妹に対するような雰囲気だったが、それでも。

「……………」

言おうとした言葉は揺れて、消える。

有馬は下を向いて、袖で目を押さえ、泣き止もうとする。

それでも溢れ出る涙を止められず、次第に顔から耳まで赤みを帯びてくる。

刹那さと、恥ずかしさと、安心感が入り混じって渦を巻く。

俯いて震える姿は、ひどく年相応に見えた。

「ごめつ、ん、なさ、っ」

小柄な体が益々小さく見え、その姿を見て何故かシヴァとクレイアがぐつと手を握る。色味の違う二対の青の瞳が、物凄く輝いていた。シヴァは今までにない庇護欲、クレイアは母性を掻きたてられたらしい。

とろけるような満面の笑みで2人が有馬の肩に手を置く。

「おお、よしよし」

「大丈夫ですよー」

「……………」

有馬は頭上で2人を見るフォルテの生温かい視線にも気づく事なく、その手の温かさに戻ります涙が止まらなくなった。

こうしてシヴァは兄のような存在、クレイアは姉のような存在、と有馬に認識されるのである。

「ひぐつ……………」

「アリマ様、こちらをどうぞ。袖で拭いてはいけませんよ」

「ごべんなさい……………」

鼻声でハンカチを受け取り、ごしごしと拭く。

「殿下、絶対にモノにしてくださいよ」

「いや……、まあ、そうだな」

クレイアが穏やかな笑みを時折更に崩しながら、有馬の背を撫でて
いる。

それが余計有馬の涙を増やす事になり、まあ悪循環と言えばそうなの
のだが。

しかし有馬も、一度泣けば落ち着いてしまつタイプである。明日に
はけるつとしているだろう。

「では、アリマ様。今日はもうお休みになつた方がいいでしょうし、
お風呂にしましょうね」

「うん……フォルテ、シヴァさん、おやすみ」

恥ずかしそうに泣き顔を隠してそそくさと去っていく。

その後クレイアがしずしずと続き、シヴァとフォルテに頭を下げ
ていった。

「……妹が出来たようで可愛いですね、とても。殿下は？」

「あれでなかなか聡明で、頭も回る。きちんとした教育を施せば、

王妃としての仕事も任せられる」

「そういう事より、あの方を愛せるか、という事ですよ」

やや厳しい事を言いつつも、シヴァは未だにその頬を緩ませている。
普段のポーカークフェイスな笑顔ではなく、心から和んでいるようで
あつた。

フォルテは数秒黙り、そして口を開く。

「愛する」

「……愛せるではなく、愛する、ですか。愛している、に変わる事
を願いますよ」

「大丈夫だ、多分。友人としてならもう及第点だし、このまま少し
ずつ進めばいい」

「そういうのが一番失敗するんですよ。女友達に告白して『そうい
う目では見れない』なんて話、よく聞きますよね」

「お前、励ますのか怖がらせるのかどつちかにしろ」

溜息を吐いてシヴァを見ると、その顔ががらりと真面目な表情になつてゐるのを見て面食らう。

「義務として接すれば、恐らくあの子はすぐ気づきますよ　フォルテ」

この場に2人しか居ないからか、シヴァはフォルテを呼び捨てにした。

有馬は、人の感情の機微に、鈍いようできて敏い。

天性の敏さではなく、普段から相手の様子を注視している故に、だ。嫌われたくないと、無意識下にも強く願つてゐる。

機嫌を損ねさせない、喧嘩をしない、敵対しない、相手が自分を嫌つてゐると思えば自ら身を引く。

確かに人をからかう事は多いが、相手が怒らないラインは弁えていた。

フォルテに“好きでいて”と言つたのも、単に嫌われる事を厭う故もあつた。

勿論、愛の無い結婚への忌避感というのもあつたが。

しかし、けして愛されたい訳でも無い。もし愛されたいのであれば、
「愛してくれ」と言えばよかつたのだ。

「わかつてゐる」

フォルテは、そういう有馬を少しでも理解しようとしている最中であつた。

有馬は自ら、気が合うかも、とまで言つたのだ。

どういふ点についてそう言つたのかは分からないが、フォルテはフォルテなりに、それを見出そうとしてゐる。

既に有馬を可愛いと思わないでもないし、彼女が妻になると思うと気恥ずかしい、そんな恋の一步手前の感情は生まれてゐたが。

まだ自覚もしていない、その程度のものだ。

「期待していますよ」

「……期待が重い」

「そうですね。何せこれから国も背負うのですよあと半年。」

戴冠式を行い 婚約を発表するまでの期間。

19歳のフォルテが背負うには、国というものは過重とも言える。しかし、国王の息子に生まれた上は背負わねばならない物である。

「ああ」

フォルテは、むしろ国を背負う重さより、有馬を手に収める重さの上であるように感じた。

涙を流す有馬を見て、少なからず罪悪感があつたのだ。

いくら王家の為とはいえ、16歳の少女を親元から引き離してしまつた。

勿論、不自由をさせる気は全く無かつたのだが、それで埋まる訳ではないだろう。

「どうなる事やら」

シヴァが呟く。この言葉にはフォルテも、全くもって同意見であつた。

シヴァもまた、笑顔の裏で責任の重さを感じていた。

有馬の存在は、婚約発表まで完全に隠匿される。

それが慣わしであり、危険から身を守る手段でもあつた。

今までの異世界人は魔法を使えない者達であり、自ら身を護る手段が無かつたからだ。

異世界から王妃を召喚する事は、王家の最大の機密事項である。

まず人道的にも危ういし、王家でありながら生殖機能に問題があるとなれば色々面倒事も発生する。

幸か不幸か獣人はさして長命でなく、薄っすら違和感に気づいたとしても5代過ぎれば誰も知るものは居なくなる。

5代前ともなると、相当評判が良い王でなければ忘れ去られるし、王妃なら尚更だ。

だから気づかれる事も殆ど無かつたし、代々の諜報部は秘密を守り通した。

下手に反乱の種にされては、王家どころか国自体が荒れる羽目になる。

ここで有馬の存在や秘密がばれると、2つ危険があつた。

まず、当然ながら貴族の反発。

王となるフォルテの正妻の座を狙う者は多い。既に何件か、牽制しあつた貴族の令嬢同士のいざこざも起きている。

尤も、生まれた瞬間からそういう事は付き纏っているのだが。

そして有馬の存在が露見すれば間違いなく反感を買うだろうし、危険な手段に出る者も出かねない。

もう1つは、人間の国が有馬を攫う可能性だ。

暗殺されるならまた召喚できるからまだしも、拉致されて幽閉されたなら 王家は途絶える。

人間達は獣人を見下し、嫌い、それどころか獣人を従属させて肥沃なアニマラーナの大地を手にしようとしている。

フォルテは実質、現時点では有馬としか子を作れないのだ。

記録が少ないため正確には分からないが、他の相手では獣や半獣が生まれてしまう。

混血児はまだしも、獣の姿をしたものが王位を継ぐ訳には行かない。そうなれば養子等の話が上がり、王家は混乱するに違いなかつた。

5代ごとの王に付いてまわる問題だが、今までに露見した事は無い。だからこそ、この代で失敗する訳には行かないのだ、とシヴァもまた重圧を背負っていた。

「ちよつ、」

一方の有馬は、赤くなった目を見開いて言葉を失っていた。

「アリマ様、湯船にお入りくださいませ」

風呂に入ると、そこは広い空間であった。

明らかに間取りがおかしいのだが、そこは魔法の何かだろう、と納得している。

そして全裸の有馬がどうしようかと思案していた所に、クレイアが入ってきたのである。

「えっ……あつ、はい」

クレイアはメイド服の袖を捲くり、石鹸や何かの入った籠を手に行っている。

有馬は嫌な予感を感じつつも、ひとまず体を隠すために湯船に沈んだ。

「では頭を濡らしますね。目を閉じていてください」

「……あ、やっぱ洗うの？」

「？ アリマ様の国では、頭はお洗いにならないのですか？」

「いや、洗うよ、洗うけど……クレイアさんが洗うの？」

「はい。勿論です さあ、流しますよ」

歌うように呪文を口ずさむと、頭上から温かい湯が降り注ぐ。

ちなみに、貴族や王族でも全員が体を人に洗わせる訳ではない。男性は普段は自分で洗う人が多かった。女性はその限りではないが、フォルテは生まれてから殆ど自分で洗うし、シヴァも同様である。また、クレイアのような侍女も自分で洗う。洗う側であるからある意味当然だが。

「アリマ様の髪は綺麗ですね。黒くて艶々しています」

「んな事ないよ、毛先痛んでるし」

滑らかな指が、濡れた髪を漉いて、頭皮を揉む。

有馬は恥ずかしがりつつも、その気持ちよさに負けつつある。

「では頭に石鹸をつけますよ。目に入ると痛いですから、閉じていてくださいませ」

(石鹸つつーか、シャンプーあるんだ……)

とろりとした液体が頭につけられ、クレイアはそれを馴染ませながら粟立てる。

どうやら無臭で、刺激も無いただのシャンプーである。

「流しますね。少し、上を向いてください」

心地よい時間が過ぎる。くいつと上を向くと、再び温水が降り注いでシャンプーを洗い流した。

「匂い、しないんだね」

なんとなく呟くと、クレイアは微笑んで言った。

「獣人の多くは、香水の強い匂いを好まないのですわ。

どちらかといえば、自然の香りを好むのです」

「なるほど……」

「でも、有馬様の御髪は素敵な香りがなさいますね。……花のような香りです」

素敵な香りというか、有馬が使っていたシャンプーの匂いである。

「そっか。ありがと」

(……体臭には気をつけないと)

軽く礼を述べると共に、有馬はそう決意した。

髪を洗い流し終わると、クレイアは手早くタオルで髪を絞り、頭の上に纏めてタオルで包む。

そして今度は、体を洗いにかかった。

「い、いや、体はいいって！ 自分で！」

「あらあら、恥ずかしがらずに」

「やつ、いや、ちよつと、ひゃっ」

クレイアの細腕は、有馬のぶにぶにした腕よりずっと力が強く。

石鹸の泡で全身くまなく洗われ、有馬は結局諦めてクレイアに身を任せたのであった。

数十分後。

洗うだけには飽き足らず、無駄毛の処理をされ、爪を整えられ、髪
の先をいくらか切られ、有馬は近年稀に見るほどござっぱりしてい
た。

無論普段もしている事ではあったが、クレイアは兎に角細部まで徹
底している。

今は風呂から上がり、ベッドの上でおとなしくマッサージされてい
る。

「今のままでもお可愛らしいですけど、絞る所は絞りましょうね」
そう言われ、有馬は自分の腹を見て赤面する。ぽこんと出た腹の中
身は、夕食か、脂肪か。

クレイアの手は魔法のようであった。

洗う時だつてくすぐったさは少なく、むしろ心地よい。

マッサージされている今も、有馬はこれ以上なくリラックスした顔
をしていた。

「毎日すれば、1月程ですばらしい体形になれますわ」

ある意味不敬な台詞だが、有馬はふにゆふにゆと微妙に笑っただけ
で済ませた。

今までマッサージをされた事など無かったためか、肩や腰を少し揉
んでもらっただけで憑き物が落ちたようにすっきりしたのだ。

同時に眠気も襲ってきたのだが。

「眠い……」

「ではそろそろ終わりにいたしましょう。お休みなさいませ」

「うん……おやすみ……」

有馬はごそごそと布団の中に潜り込んで、すぐに寝息を立て始める。
クレイアは微笑んで片づけをして、そつと部屋を去ったのであった。

その日、有馬はいつになくぐっすりと眠った。

「というか少しデレデレしていましたよね。どうなんです？」

「……。」

「おや、黙秘ですか。それにしてもアリマ様は本当にお可愛い。ここにこ笑っていらっしやるのに、弱みは見せたがらないところが良いですね。」

ああ、私達に警戒心を持っていたのも高得点です。最初は警戒していたのに段々ほっとしていく様子を思い出すと溜息が出ますね。

最初から尻尾を振って近づかれるよりよっぽど素敵ですね。クレイア」

「ええ、本当に。それでいて警戒心を捨てきれない所も素晴らしいですわ」

そして上品に笑うクレイア。その両手がぐっと握られ、「寝顔も本当に……！」と搾り出すような声。

こいつらの好みは謎だ、とフォルテは一人溜息を吐いたのであった。

3 泣きたい事も（後書き）

定番ですかね。

7/21 最後あたりをちよつと改訂。

特に本筋に関わる事でもないので読み飛ばしても大丈夫です。
ようは“バレると危ないよ”って事です。

4 狼さんと一緒

ここはとある異世界。獣人達が住むアニマラーナという大陸国家の国王が住処、つまり王城の一室。紺色の部屋の中、青系で纏められた調度品に囲まれ、布団に埋もれるように少女が眠っている。

服は上等そうなものだが、顔立ちはさして可愛らしくも美しくもなく、平凡。見れない顔ではないのだが、好みは分かれそうだ。

こんななりの少女が近い未来に国王となる男の伴侶（予定・ほぼ確定）なのだから、人生とは分からないものである。

彼女の名前は城崎有馬^{きのさきありま}という。

すうすうと寝息を立てる彼女が、不意に目を開けた。

枕元の、水の入ったグラスに時計を閉じ込めたようなそれが、朝5時42分を指している。

有馬はいつもこのくらの時間帯に起きていた。早起きは勉強のためではなく、PCや携帯を弄るためだが、健康な生活と言えよう。

「んあ？」

そして普段寝ている固いベッドとへたつとした布団とは違う感触に、疑問を隠せない目をまた閉じようとする。

そういえば体が全く痛くないし、いい匂いがするし、寝汗の匂いすらしないほど清潔。

これはおかしい、と有馬は体を起こした。

「あ」

そして思い出す。先日この国の王子に召喚され、伴侶となる、というある種の契約を交わしたことを。

コンコンと扉がノックされ、有馬が「うい」と返事をするとかく。

入ってきたのは銀髪を方のあたりで内側にくるりと巻いた、見目麗しい女性。

明らかに有馬より高貴だが、身に纏うのはメイド服。

シックな紺と白のそれがよく似合う。彼女は有馬の専属侍女、クレイアだ。

「おはようございます、アリマ様」

「おはよう、クレイアさん」

眠たげに目を擦る有馬の目じりが少しだけ、赤い。

「アリマ様、こちらに背を向けてくださいませ。髪を梳かしますので」

「あ、うん……」

徹底的に洗って乾かしたためか、いつもより寝癖は無い。

アリマが背を向け、クレイアはドレッサーの上にあった櫛を取って、その黒髪を頭の頂点から丁寧に漉く。

何時もより艶のある髪は、容易く櫛の歯を通した。

「すげー……」

「アリマ様、そのような言葉遣いは人前ではなさらないでくださいませね」

「う、うん。分かってる」

有馬はそのまま身を任せ、うつらうつらとし始める。

元々髪を触られるのは苦手だった筈だが、クレイアの手にかかれば有馬は子猫も同然であった。

昨日もそうだ。風呂では抵抗したものの、結局その白魚のような手に負けた。

されるがままに洗われ、整えられ、マッサージされ、最早高級エステの域である。

有馬は鏡を見る。色んな意味で、未だかつてなく輝いていた。

「ではお顔を洗いましょう。こちらを向いていただけますか」

「あ、うん」

「失礼いたします」

この過保護な侍女は有馬の手を使わせない。

どこから現れたのやら不明な盥から、半透明の寒天のようなものを掬い上げて有馬の顔を撫でる。

額から鼻、瞼から頬、そして唇、顎へと降りてゆく手。

有馬には一体何をしているのか分からない様子だが、終わってみると顔がさっぱりしていた。

「何これ？」

「半固形にした洗顔水にございますわ」

「え、あ、うん？」

つまり洗顔ジェルだろうか、と検討を付けていると柔らかなタオルに顔を拭かれる。

その手付きはどこまでも優しく、有馬は文句を付けようにも出来ない。

「……ねえ、あたし顔洗うくらい出来るよ」

「駄目です」

(断言しただと……)

心の中で慄く。どうやらこの侍女、徹底して世話を焼くらしい。

次に有馬は、着替えという新たな難関に突き当たる。

当然のようにクレイアは自らの手による着替えをさせず、そればかりか脱ぐ事すら許さない。

「ちょ　　ちよつと！　着替えくらい！」

「駄目です」

「ちよつと　　っ！！」

あれよあれよという間に、脱がされる。ついでに今度は先ほどとは違うジェルを塗られ、異様にさらさらする肌に驚愕しつつも服を着せられる。

ドレスではなく、紺色のワンピース。丈は膝下ほどで、ドレスを着せられるのかと密かにビビっていた有馬は安堵した。

元の世界では私服にスカートは全く着なかったものだが、これなら違和感も無い。色もなんとなく制服に似ている。

「こつちの人って、普段はこういう服なの？」

「はい。とはいえいつでもドレスを着用なされる方もいらっしやいます。有馬様は御嫌でしょう？」

「嫌だ」

「そうおっしゃると思ひまして。ですが、最高級の服を揃えておりますわ」

「どうやらこの世界の王族や貴族は、案外庶民派らしい。」

「そういう印象を抱きつつ、フォルテと朝食を取るために有馬は部屋を出た。」

「おはよう」

「ああ、おはよう」

朝のフォルテは昨日のきつちりした様子とは違い、なんとなく眠たげで色気がある。

無造作に開いたワイシャツの第一ボタンに、有馬は軽く視線を送った。

(イケメン怖え)

覗いた鎖骨がまたエロティックで思わずときめいたが、妻となるからにはあれ以上に刺激的なものを見ねばなるまい。

有馬は朝から考えてしまった事に少し恥ずかしくなりつつ、椅子に腰掛けた。

「ねえ、あたしって何かすることあるの？」

「そうだな……ひとまずは、守護者殿からこの世界について学んでもらうことになる。あとはクレイアに、振る舞いや礼儀を学んでくれ」

「ふーん……あ、ねえ、魔法も教えてよ」

「魔法か……。俺も午後には暇が出来るから、その時にな」
「なんとなく兄妹のやり取りのようである。」

大分気まずいところもなくなった2人は、極普通に朝食を食べ終え、

フォルテは公務のために部屋を出て行った。

午前中は、自室で勉強の時間である。

狼が有馬の部屋のソファを大きくし、端に寝そべる。

「今日はまだ疲れておろう。勉強は明日からだ」

「うん、ありがと」

狼の腹の上に頭を寄せ、ソファに横向きに寝そべる。

恐らく現時点で、有馬が一番気を許しているのが狼であった。

彼女は動物が好きだ。しかしあまり動物に好かれられない。

それ故に、自ら歩み寄ってきた狼にはとことん懐く。

「守護者さんって、名前ないんだよね？」

「……はて、昔はあったんじゃないか。忘れてしまったわ」

「つけていい？」

きらりと目が輝く。狼は寝そべったまま、有馬の方を見て言う。

「……ふむ。貰おうか」

有馬は寝転がったまま、うーんうーんと考え始めた。

悩み通して数分、決めた、と呟く。

「ロボ、ね」

「ロボか」

けしてロボットのロボではなく、由来は狼王ロボだ。

有馬は読書好きであり、シートン動物記は小学校の頃に読んでいる。

ちなみに後の候補は、モロとホロ。由来はまあ、言わないでおく。

「わかった」

実を言うと、この世界において名を与える行為は、有馬が思っよりずっと重い。

原始魔法による契約の第一段階でもある。

「ロボー」

「……有馬よ」

「ん？」

原始魔法による契約は、名を与える、血を交換する、誓う、の三段階が必要だ。

狼　ロボは、有馬を気に入っていた。契約しても良い、と思うほどに執着を持っている。

契約する、しかも名を貰う。つまりは相手に従うという事である。

ロボは有馬の首元に鼻を寄せながら、不思議そうに言う。

「ぬしは不思議じゃのう。けて美しくないというのに、心を掴む」

「そんなことないよ」

二重の意味で。

ロボは少し姿勢を変えると、まっすぐに有馬を見る。

有馬は嬉しげに抱きついて、ロボの顔にすりつき、ついでに眉間に

口元を近づけ

もふ、と毛の中に唇を埋めた。

「……」

流石にロボも呆れたが、有馬的には別段おかしくはない。

何せロボは、動物であり、狼であるのだから。

有馬は動物に甘い。というかむしろ人間に厳しい。自分には甘いが。

「有馬、約束をしよう」

「んー？」

呆れはしたが嫌がるでもなく、ロボは顔を有馬に摺り寄せる。

人間の姿になったらどんな顔をするだろう、と思いつつ。

「我はぬしを守る。ぬしは……うむ、我を撫でる。約束じゃ」

「うん、いいよ」

軽く言ったが、これは立派な誓いとなる。

魔物や悪魔が契約を結ぶ場合、大抵は魔力だとか定期的な血の供給を求める。

ロボに対する報酬は撫でる事。明らかに破格である。

「有馬、この世界では強い約束をする時、血を交換するのじゃ」
「血を？」

「うむ。嫌ならばよいが……」

「んにゃ、別にいいよ。でも指噛み千切るとか無理だよ、あたし」
犬歯尖ってないし、と有馬が言う。

「手を」

「ん」

（血を交換って、なんか怪しい契約っぽいよね……ま、こっちじゃ
約束程度の意味なのか）

微妙に核心を突いた事を考えつつ、左手を差し出す。

ロボはその指を口に含むと、指の腹に軽く牙を突き立てる。
ぷつり、と肌が破れて血が出た。

「これでよい。有馬、私の血を」

「うい」

指を離すと、既に血は止まり傷もない。

ロボは更に、自らの鼻の上あたりを爪で傷つける。

「舐めればいいの？」

「ああ」

有馬は抵抗なく、ぺろ、とそこを舐めた。

一度では血が拭いきれず、二度、三度と舐める。

「……契約は成立した」

そして口を離れた後、ロボが低い声で言う。

有馬は驚いたように目を瞬かせた。

「契約？」

「“ブランカ”よ、永久に忠誠を誓い、守護する事を誓う」

「いや、……え？」

ブランカとは、古代語で“我が君”のような意味合いを持つ。

「な、何？ 契約？ ブランカって何？」

ついでに言っと狼王ロボの伴侶、白い雌の狼はブランカという名である。

「我が君」という意味の古代語じゃよ」

「わ、わがきみ？」

「ぬしは我をロボと、我はぬしをブランカと呼ぶ。他の者に呼ぶ事は許されぬ、2人だけの契約名じゃ」

「け、契約って何？」

有馬としては、守護者殿、とどこか他人行儀な呼ばれ方をするロボに名前があつたら、と思っただけなのである。

その方が自分も呼びやすい、それだけだった。

「主を守る。我を撫でる。それだけじゃが」

「だ、だけって」

「ふむ。契約の事から説明せねばらんか？」

有馬ははあ、とかうう、とか妙な声を漏らしていたが、こくこくと頷いた。

「まずこの世界の魔法じゃが、数千年前に大成された現代魔法。これに對比し、それ以前の原始的な魔法をそのまま原始魔法と呼ぶ」

「は、はあ、げんしまほー」

分かつているのかいないのか微妙な顔だが、有馬は頷く。

「原始魔法による契約、その内でも守護者と主の契約というものを結んだ。これは多くの場合、魔物や神獣が、守護者や使い魔として契約する際に使用する」

「う、うん？」

「手順は簡単、名を与え血を交換し宣誓する。どちらかが死ぬまで契約はけして解けない」

「……………うん？」

「契約すれば、相手の位置が分かる。意識すれば感覚や知識の共有が可能となるし、声も伝わる」

「その心は？」

「我らは一心同体という事じゃ」

面白そうに笑うロボに、有馬は溜息を吐いた。

(つまり……………使い魔じゃん。いや、でもロボって何なんだろう……………)

考え始めた有馬だが、体がなんとなく暖かくなり、何故だか眠くなる。

「口……ボ……」

あっさりと眠りに落ちた有馬の中で、変化が起こりつつあった。

「ふむ、……始まったか」

契約を行うと、体が世界に合わせて変質することがある。他世界から召喚した使い魔は、しばしばこちらの世界と体質が合わない事があるのだ。

「興味深い。魔法を使う機能が生まれておるのか」

異世界人は基本的に魔法を使えない。

何故なら、そもそも異世界人の体には魔法を使う機能が無いのである。

この世界の人が当たり前に持つ、魔力を使う素養が無いのだ。

魔力自体はあれど、それを感知する事が出来ない。

そして有馬の体は今、魔法を使える体に変化しようとしていた。

「次からの召喚者は、守護者と契約させる事にするか？ いや、伴侶自身と契約させても良いか」

ぶつぶつと呟きながら、ずるりと落ちそうになった有馬の体を魔法で引き寄せる。

「魔法を使えればある程度の自衛も可能、契約者もある程度の力を持つ者にすれば更に危険は無くなるであろうし」

そこまで言うと、ロボはくああと大きく欠伸をした。

「後でフォルテの奴に言うておくか」

考えはしたが、あくまで彼は国政に口を出さない存在である。助言のみで終わらせるだろう。

ロボは、始祖の実兄だ。

ロボの父は狼、母は人間であった。しかし神が母に呪いをかけ、それは子に受け継がれ、そして今でも残っている。

その呪いとは 5代ごとに伴侶を人間とせねば、その子を異形とするというもの。

王家の血が安定しないのは、この呪いの所為である。

怒り狂ったロボが神の喉笛を噛み千切ったが、呪いはとけなかった。

「我也寝るか」

神の血を浴びたせいでロボは不死の存在となり、始祖の子らを見守る事に決めた。

それから更に紆余曲折を経て、城の守護者としてここに居る。

尤も、先ほどからは有馬の守護者だが。

永い時を過ごしてきたロボは、初めて拠所を持った。

彼は守護者であったが、けして王を主として崇めていた訳ではない。ただ守りながら、弟の子孫達を一步引いたところで慈しむ、そんな存在だった。

「全く。可笑しな事じゃの」

有馬に対する気持ちは違った。恋人に対するような甘い気持ちでは無いが、とにかく大切に思う。言葉に出来ない感情は、“気に入っている”としか言いようがない。

「眠るがいい、ブランカ^{我が着}」

有馬が眠った気配を察してか、毛布を持ったクレイアが静かに部屋に入る。

ロボが呟いた名は、彼女の耳には“有馬”と聞こえていた。

4 狼さんと一緒（後書き）

獣に甘い。ただし獣には鬱陶しがられる人

5 魔法と杖の精霊

昼食を食べるために部屋に戻ってきたフォルテは、僅かな違和感に気づいた。

目の前で座っている有馬は、一見していつもと変わらない。しかし

「……有馬、何かあったか？」

「え？ いや、何も」

もぐもぐと、野菜を突っ込んだピラを齧る。

昨日と何ら変わらないように見えるが、纏う雰囲気はどこか違った。

「ふむ……まあ、いい。午後から魔法を教えるが」

「おおーっ」

有馬は能天気にも、歓声を上げた。

フォルテが感じた違和感は、有馬の魔力が変化したことだ。

今までは無意識に放出されていた魔力が、不要な消費をしないように少し抑えられている。

この世界の者ならば普通は後者の状態になっているが、突然変化した事が違和感を招いていた。

暫くして食事を食べ終えると、クレイアが静かに食器を下げて部屋を出る。

代わりにシヴァが入ってきた。

「お食事は済みましたか」

「ああ」

「では、魔法の事を少しずつ説明いたしましょう」

実を言うと説明しなくとも、ロボが知識共有を行えばそれで済むが、有馬は姿勢を正し、真剣に話を聞き始めた。一言たりとも聞き逃さないように。

その様子に和みつつシヴァは説明を始める。

「まず魔法の根底にある、魔力というものの説明から始めましょう

か

魔力というのは、この世界の殆どの生き物が持つ力である。生きる事に必要ではない力であり、生命力とは違う。しかし、命の危機に瀕すると生命力を補う事もある。

魔力の量や質は人それぞれだが、王族は決まって大きな魔力を持っている。

基本的に不可視だが、人によっては強い威圧感や冷気、暖気を感じさせる事もある。

体からあまり離れる事はないが、触れる事で魔力を与えたりするのは可能。ただし魔力を自在に操るにはやはり修練が必要だ。

「なるほど」

有馬はあっさりと納得した。確かに自分の世界には無いエネルギーだが、魔力やマナといったものは物語等で馴染みがある。

「魔力を感知する事は出来ますか？」

「感知って言われても。……うーん……あ、分かったかも。今のが魔力？」

シヴァが手を近づけ、魔力を放出する。ぼんやりとした冷たさがあった。

「ええ。それでよろしいです」

また空気の中にも、世界そのものの魔力　自然魔力マナが含まれている。

そういった自然魔力と生き物の持つ体内魔力は、質や濃度は異なるが、基本的には同じ物質である。

具体的に言うと自然魔力の方が数段濃い。

つまり、ダイヤモンドと黒鉛のような同素体の関係だ。

体内魔力は“魔力”、自然魔力は“マナ”と呼ばれ区別される。

「ねえ、誰でもない魔力があるんだけど、これは？　なんとなく濃くて、ふわふわした」

「……はい？」

「マナじゃな。ブランカ有馬には感じ取れるか」

「うん……？ うん」

魔力は誰にでも分かるが、マナを感じ取れる者は少ない。無論マナを普通の魔法に転用できるし、自然魔法という類のものも使えるため、強い。

その存在は希少であり、ここ数百年は生まれていない。

「有馬、本当に感じ取れるのか？」

「いや、そう言われると自信が無いけど。マナって何？」

「自然魔力、つまり世界そのものが持つ魔力の事です。マナを感じ取れる者は少ないんですよ」

「へえー……」

ちなみに口ボにもマナを感じ取る事は出来るし、使える。

始祖も同様に使えたらしい。

「さて、次は魔法についてご説明いたしましょう」

この世界の魔法は、大きく分けて二種類。

まず、原始魔法。魔力をそのまま現象にする、というストレートな魔法だ。

仕組みではなく殆ど感覚で使ったためか、学ぶ事も難しく、今は殆ど使用者が居ない。

そして、現代魔法。数千年前に完成したと言われる、比較的扱いやすい魔法だ。

種類としては、言語魔法と論理魔法、特殊魔法がある。

言語魔法は文章、論理魔法は式の組み合わせにより構築される。

特殊魔法はそもそもの仕組みが違い、種族の持つ特有の魔法等がこれにあたる。

また、道具や陣を用いるものは魔術、生物を召喚したり力を借りるものを魔導と呼び表す。

「言語魔法は、口に出す、あるいは文章を頭の中で組み立てる事で構築されます。」

口に出さない場合は詠唱破棄と言いまして、これは中々高度な技術ですね。

雛形である呪文は本などに沢山記されていますが、必ずしもそれに従うという訳ではありません。

ある程度自由度があるのがこの魔法の利点です」

「ふむふむ……」

「論理魔法は、“魔法式”というものを使用します。

魔法式とは古代文字と数字を組み合わせたもので、発音は不可能です。

私達に備わった“魔法式構築領域”という場所に保存しておき、自由に引き出して発動できます。

利点は、発動の早さと手軽さ、正確さですね。咄嗟に威力を変えたり、構成を変えたりすることは難しいですが」

つまり文系と理系の違いとも言えるか。

纏めると、言語魔法は自由度が高いが発動速度は遅く、論理魔法は応用が難しいが発動速度は速い。

「魔法式構築領域、ってどこにあるの？」

「分かりません」

「え……」

「目に見える訳ではありませんし、どうやら物質としてある訳ではないようですし。」

魔法に関する機能は心臓の上にあると言われていますが、ただの言い伝えですし」

いいのかそれで、と言いたげな目でシヴァを見る有馬。

しかしシヴァは涼しげな顔で微笑むだけであった。

「それで、有馬様はどちらを先に習いますか？」

「んー……どっちの方が簡単？」

「簡単かと言われれば、言語魔法ですね。ただし、後になると難しくなるのですが。」

……論理魔法は、逆に最初は難しく後からは楽です」

「じゃあ、言語」

「かしこまりました。では、この杖をどうぞ」

シヴァが恭しく差し出したのは、茶色の杖。

先日の白い杖と似た形で、30cm程の長さである。

シンプルではあるが、上品な造りだ。

「杖いるの？」

「そうですね、無くても可能ではありませんが。魔力を効率的に放出するためには有用ですね」

「ふうーん。魔力の収束、みたいなの？」

「そういう事です」

有馬は受け取った杖を、指揮するようになると振る。

先端からきらきらと光が舞い、2人が僅かに反応する。

「……何をした？」

「え、何？ まずかった？」

「いや……魔力は空気と同じで見えませんが、魔法を使う際の反応で輝いたりしますが……何もしていないのに光るといのは変ですね」

「うーん？」

そう言われても、有馬はただ振ってみただけでしかない。

3人は顔を見合わせるが、答えは出ない。

守護者さん
「ロボ、なんかわかる？」

「うむ……手にした時点で杖は媒体となる。魔力に満ちた杖が、大気に満ちるマナを掻き回しただけじゃろって」

「掻き回した……？ マナは空気のようなものだろう？ 動くのか」

「マナは流動する。そもそも空気も魔力も、目に見えぬだけで動いておる」

「目に見えないのですから、動いても分かりませんしね。

興味深い。後で研究部に回しましょうか」

「いや、やめておけ。有馬の存在が」

有馬はどうやら関係無さそうな話なのでスルーし、杖を弄っている。

杖の後ろの方には細かな彫刻が施され、緑色の宝石が嵌め込まれている。

(あの映画じゃユニコーンの鬣とか入れてたけど、そういうのかな?)

あの映画とはあの映画である。世界的に有名な某魔法学校だ。

じいっと見つめると宝石の中が揺らぎ、何かが見える。

更に見つめると、なんとなく言葉が聞こえた。

『　　』

『お?』

『ちよつと、じろじろ見ないでよー、恥ずかしいから』

どことなくほわほわした、声変わり前の少年の声である。

「シヴァさん、フォルテ」

「はい、何でしょう?」

「杖が喋った」

シヴァが笑顔のまま一瞬停止した。

彼はまじまじと有馬を見て、そして杖に目を留める。

そして思い出したように言った。

「……杖の、精霊でしょうか? 御伽噺ではありませんが」

「精霊?」

「長く使われた杖は、魔力が宿り、やがて意識を持つ精霊になるという話ですが……」

『おー、君、可愛くは無いけどステキな魔力だねえ』

「へし折っていいかな……」

「……杖、替えてきましようか?」

有馬はぎぢぢちと杖に力をかけながら笑顔で首を横に振った。

『痛い、痛いよー、やーめーてー』

「いや、いいよ」

『折れるうーっ』

「ますます不思議ですね」

「異世界人とはそういうものなのかもしれん」

「ですが、今までの方々にそういった事例は……いえ、そもそも魔法すら使えませんでしたし。」

「そうだな……有馬、それ以上は折れる」

「ああ、うん」

有馬はあっさり杖から片手を離す。そもそも致命的に運動神経に欠ける有馬は、当然力も弱い。力を入れても折れはしないだろう。

「では気を取り直して。言語魔法の基本から始めましょう」

シヴァが白い杖と小さな石を2つ取り出す。

「私の真似をして唱えてください。《石よ、浮かべ》」

「《石よ、浮かべ》」

白い杖に指された石は浮かび上がるが、茶色の杖に指されたものは浮かない。

「……出来ない」

不満げに口を尖らせる。杖の精霊がからかうように笑うと、更に眉根を寄せた。

『おかしいや。君、使ってる言葉が違うんじゃないかなあ』

「？」

「では、もう一度やっていただけますか？

声に魔力を込める感じですが、わかるでしょうか」

「うーん……《石よ、浮かべ》」

やはり浮かない。

（腹が立つけど、この杖の言う通りかね？　そもそもどうして言葉が通じてるのやら）

「シヴァさん、言葉が違うんじゃないかな」

「言葉が？　……ああ！　そうでした。あなたには翻訳魔法がかかっているんですね。ですが、よくお気づきに」

「この杖が、言葉が違うって」

「ふむ……すみません、少し貸していただけますか」

「うん」

有馬が杖を手渡す。暫くシヴァは宝石のあたりをじっと見つめたり

していたが、はあ、と溜息を吐く。
何も見えないし、何も感じられなかった。

『シヴァ坊や、さつきぶり』

「私には何も聞こえません。殿下はどうですか？」

「俺が使っていた時には何も無かったがな」

「……………あれ、お下がりなの？」

「ああ。昔練習用に使っていた物だ」

(じゃあこの腹立たしいのはフォルテの魔力……………いや……………うん)
微妙な顔をして杖とフォルテを見比べる。

確かに最初の反応は失礼だったが、それからのフォルテはおおよそ紳士的である。

真面目で少し固い性格も、好ましいといえば好ましい。

(いや、杖は杖、うん……………)

「では、やはりこの世界の言語を学ぶ必要がありますね」

「……………それなら、我が教えておく」

「ええ？　そうですか……………まあ、守護者殿が言うのでしたら」

どうやるのか、と一瞬間疑問を浮かべたもののあっさり了承する。

「では、論理魔法の方に行きましょうか」

「うい」

正直なところ、どちらから始めようと構わなかった。

ただ、比較的最初が楽だと言うから言語魔法にしたのだが。

「まず、魔法式構成領域を知覚する事から始めなければいけません」

「うん……………？」

魔法式構成領域。

難しい言葉を並べられると引いてしまうのが日本人である。

「そう難しく捉えなくてもいいですよ。……………とはいえ、私達に説明するのは難しいのですが。生まれつき知っている感覚なので」

「うーん……………呼吸の仕方を教えるって言ってるようなもの？」

「そういう事です。的確ですね」

「……………どういう風に見えるの？　魔法式構成領域って」

「見える訳ではないんですが……難しいですね。頭の中にある感じ
です」

「うーん」

「文字が見えるんですよ。頭の中に勝手に浮かんでくるような」
有馬は目を閉じて、体から力を抜く。左手で片目のあたりを覆い、
じっと集中した。

（ 文字、文字が浮かぶ感じ）

なんとなく文字を思い浮かべる。古代文字と言うのだから、ヒエロ
グリフや甲骨文字のようなものだろうか、とぼんやりとしたイメー
ジを浮かべて。

『や、難儀だね。僕が手伝ってあげようか』

精霊が暢気にもそう言う。有馬は口に出さず、『ちよっと黙ってて
と心で思った。

すると精霊はそれが聞こえているかのように、『はいはい』と言う。

「……ん？」

「どうしました？」

「いや、なんでも」

心を読まれているのか、言葉が通じたのか。ひとまず深く考えない
事にして、有馬はじっと集中した。

そのうちに気づく。何か、得体の知れない魔力が己に流れ込んでき
ていた。

魔力は蜘蛛の巣のように広がり、何やら自分の魔力らしきものを時
折つつく。

有馬の目の奥がじわりと熱くなり、一瞬の後に

「うわっ!？」

膨大な文字列が脳内に浮かんでは消えてを繰り返し始めた。

目の前がちかちかと輝き、頭がじん、と痛くなる。

「大丈夫ですか？」

「う、いや、何か文字が」

見えている、のではない。感じているとしか言いようが無かった。

脳裏に浮かんでは消える文字列が、やがて数を減らしていく。

『おっと、ごめんね　ちよつとばかりお手伝いしてあげただけどー』

ありがた迷惑だ、とばかりに杖を睨む。

くすくすと笑う気配がして、恨み言を言う気も失せる。

「そうですか。恐らくそれが領域ですよ」

「ふーん……あ、消えた」

頭の中の文字が抜けきり、安堵の溜息を吐く。文字に押しつぶされて気絶するかと思ったのだ。

勿論そんな事はないのだが。

「では、簡単な魔法式からお教えいたしましょう」

そう言つてシヴァは一冊の本を取り出す。表紙の文字は読めない。

「基本となる、《対象指定》の魔法式です。まずはこれを覚えねばいけません」

数ページめくつたところに載っていた古代文字の羅列を、長い指先がなぞつた。

有馬は溜息を吐く。数学の公式や化学式を覚えるのは得意ではないかといつてそこまで苦手でもない。英単語は覚えられるのだし、他のものが記憶できない訳では無い。

ただ、やる気の問題という訳である。

「……覚えればいいの？」

「先ほどの領域に、その式が現れればいいです。そうすればもう忘れる事はないですから」

一体どういう仕組みなのか気になるが、頭の中にパソコンのようなものがあるらしい、と解釈する。

有馬は本を手を取つて、指先で文字をなぞりながらじつと見る。

最初はつまらなかつたが、途中で（これはつまり魔法書つて事なのか！）と気づくなりやる気が出た。

未知の文字列も、そう考えれば面白く見えてくる。じつと形を見つめていると、意味が頭に流れ込んで来た。

「んー……？」

有馬は、はた、と気づいた。魔法式を見るのは初めてだが、無駄が多すぎるのだ。

約分されていない分数を見たような、あるいは整理されていない式を見たような気分。

釈然としないが、領域に魔法式が浮かび上がる。

「出来たけど」

「はい。では、次はその下の式です。というかそのページは全て覚えてくださいね。」

上から順に、《範囲指定》、《発動》、《起動》、《停止》です」

有馬はそれらを見ながら、釈然としない気持ちを感じた。

面倒だ。とても面倒くさい。面白いのだが、手順が多すぎる。

発動する際は組み合わせで一度にするのだからうけれど、全て一緒にたにしてしまえばいいのに、と思った。

しかし基礎は大切である。基本の式を覚えずして、応用は身につかない。

そう言い聞かせながらそれらを覚え、後で改造しよう、と心に誓ったのであった。

魔法勉強の時間が終わると、有馬は腕をうーんと上に伸ばした。

「なんか、疲れた」

なんとなく身体がだるく、疲れがある。

魔力は体力や生命力に直結してはいないが、消費すると疲労感がある。

有馬が疲れたのは、領域を維持し続けて多少魔力を消費したからだろう。

「そういえば魔力って、どうやったら回復するの？」

やっぱりエーテルとかエリクサーとかかな、と思いつつ聞く。

「魔力は、そのままでも少しずつ回復する。食事や睡眠を取れば一

気に多く回復する。他人の魔力を流し込むと一番効率が良いが」

「ふうん……流し込むってどうやって？」

「魔力を水に込めたり、難しいがそのまま固めたり。あるいは、直接 その……あー」

「粘膜同士を触れ合わせる事で尤も効率良く魔力が交換されます」

「歯に衣着せないね」

つまりキスやらあれやこれやで魔力が交換されるのである。

熟年夫婦の魔力が似通っている事が多いのはこのためだ。

同じ魔力を長期間に渡って摂取していると、魔力が交じり合うのだ。

「魔力そのものが、魔力を回復する機能を持っています。魔力がゼロになると、他人に魔力を注いでもらうか、暫く回復を待たなければいけません。注意してくださいね」

「ふむふむ。魔力を使い果たしたら、ちゅーっと」

「そういう事ですね」

「お前らな……」

呆れたように溜息を吐く。

笑う有馬の周りでちらちらとマナが輝き、杖の精霊も笑っている。

尤も、2人には聞こえないが。

「ねえ、契約してよ」

「……なんか、杖が契約しろって言ってるんだけど」

「契約？ ああ、媒体契約ですね。しておくといいいですが、やり方は？」

「わかかないけど。媒体契約って何？」

「自分と媒体 杖との契約ですね。契約とはいえ、意思を持たない杖ですから正式な契約とは違いますが。」

魔力を通し、杖を心臓の少し上につけるだけです」

有馬は言われた通り、体内を巡る魔力を杖に送り込む。

そしてその先端を、心臓の上あたりに付けた。

ぼんやりとだが魔力が通りやすくなったような気がするが、精霊は不満げに言う。

『違うよお、名前と血をちょうだい。僕は今血が無いから、魔力をあげるね。飲めばいいよ』

「名前と血を寄越せって言ってる。代わりに魔力をやるから飲めつて」

「……古の契約ですか？ 契約内容をきちんと確認してくださいね。死後に魂をとか言ってますんか？」

保険会社の人みたい、と有馬が忍び笑いを漏らす。

杖の精霊は話を聞いていたのか、のんびりとした声で言う。

『望むことは特にないよ。ああ、有馬には精霊魔法を教えてあげる。魔導つてやつね』

「要求は無し、見返りは精霊魔法の教授」

「おや、それはよかったですね」

「精霊魔法か。という事はやはり、その杖の精霊なのか」

『ぼくはー、元妖精族の魔導士なんだけど。獣人の王族を暗殺してこいって、悪い人間に命令されてね。』

やだつて言ったら、精霊化魔法をかけられて、石になっちゃったんだ」

「……」

はたして言ってもいい事だろうか、と迷う。

『それが、15年くらい前かなあ？ 石のままアニマラーナに運ばれて、杖に加工されて、フォルテ坊やの杖になったんだよ。』

この人、原始魔法は使えるみたいなのに、現代魔法はいまいちでね。お手伝いしてあげたのさ』

「精霊化魔法をかけられた、妖精族の魔導士だって」

色々突っ込みたいところはあるが、ひとまず有馬はそれだけ言った。

シヴァが怪訝そうに眉を潜める。

「精霊化魔法も禁止魔法ですが……」

「人間に暗殺を命令されて、断ったらされたって」

「……ふむ」

フォルテの目が僅かに冷たい光を帯びる。
王族であれば暗殺の危険は常に付き纏うが、獣人族はやや特殊な種族である。

多民族、しかもそれぞれが群れのように集まるこの国は、王家を頂点に置くからこそ纏まっていられる。

しかし王家が消えてしまえば 横の繋がりも絶たれ、国は分離する。

新たな王家が立てられるより前に、種族ごとにばらばらになって国の体裁が取れなくなるであろう。

「ねえ、フォルテって原始魔法を使えるの？」

「……それもその杖が？」

「うん」

はあ、と溜息をついてから喋る。

「始祖の直系の子孫には原始魔法が備わっている」

「へえー」

「俺は生まれつき魔力が多く、現代魔法よりは原始魔法に向いていた。だから下手だった」

「細かい作業に向いてない訳ね。原始魔法ってどういうの？」

「呪文や魔法式を介さず、意識によって直接魔力を現象に変換する」

「……うん。よくわからん」

「……現代魔法は、魔力を燃料として現象を起こす。原始魔法は、魔力そのものが現象になる」

「まあ、なんとなく分かったような」

つまりガソリンで車を動かすか、ガソリンを燃やすかの違いだ。前者の方が安定して便利なのに低燃費だが、後者は応用力と威力に勝る。ただし魔力が多くなければ使い物にならないが。

『ねえー、はやく契約しようよお』

「杖、元は妖精族でしょ？ 名前はないの？」

『んー、シエンカ・ルウだよ。でも、名前はちょうだいね』

「杖の精霊の名前、シエンカ・ルウだって。何か知ってる？」

ふむ、とシヴァが口元に指を当てる。
なにやら思い出しているようだ。

「妖精族に魔導士は多いですが、その中でも“ルウ”の称号は最高位です」

「最高位……ふうん……」

『けーいーやーくー』

「後で。……この気の抜けたようなのが最高位ってねえ」

自分の性格は柵の上に放り投げ、有馬はつつんと杖についた石をつつく。

「とりあえず、今日はこれで終わりにしよう。そろそろ夕食だからな」

「あ、そうだね」

有馬は時計を見る。壁かけ時計は無いが、暖炉の上に時計が置いてあった。

時刻は6時を回った頃で、そう思うと急に空腹を思い出す。

「……う、なんか、すっごいお腹すいた」

「初めて魔力を使ったからですよ。すぐクレイアが食事を運んでくれますから、それまでの我慢です」

腹を押さえて机に突っ伏す有馬を、微笑ましげにシヴァが見た。

5 魔法と杖の精霊（後書き）

ファンタジーらしくなってきましたか？

6 派手好きと契約

一夜明けて、朝である。

先日も徹底したマツサージを受けたせいで、有馬はぐっすり眠り、そして清々しく起床した。

「あーたーらしーいーあーさがっきったー」

髪を漉かれるのは慣れてみれば心地の良いもので、有馬は小さく歌う。

それを聞き、クレイアが怪訝な顔をした。

「アリマ様、それは……」

「ん？ あ、ごめん、歌ってた」

「いえ、よいのです。……ですが、歌には翻訳魔法がかからないのですね。アリマ様の国の言葉ですか？」

「あ、うん」

クレイアの耳に聞こえたのは、聞きなれた言葉ではなく意味の分からない言葉であった。

つまり日本語である。

「……ま、いいか」

有馬は一応それを心に留め、朝食の時に聞く事にした。

「歌に翻訳が働かない？」

朝食のピラを食べながら、有馬は朝の事について話した。

「……翻訳魔法は、口に出そうとした意味を読み取ってこちらの言葉に変換する。

意味を込めて歌ったらどうだ？」

「意味を込めて……」

「しかし、気になるな。少し歌ってみてくれ」

「ご飯食べたらね」

「……ああ。お前、意外とマナーとか気にするんだな」

「うちの国じゃ、文字習う前に食事の仕方を習うからね」

……勢いで言ったが、あくまでそれは人それぞれである。

「そうなのか」

「日本は礼節の国だからね」

「……お前、本当に日本人か？」

「失礼な。あたしは場を読める人間だから」

「そうか、俺の前では礼節は不要、と？」

「いいじゃん、どうせ長い付き合いになるだろうし。」

猫被ってたって仕方ないし、それはそれで化けの皮が剥がれた時にシヨックだよ」

「……何度も思ったが、よくあつさりと受け入れられるな」

「先の見えない就職氷河期、しかももてない、何を楽しみに生きればいいやらわかんなかったからね。こつちの方が楽しい」

とりとめのない会話。

この世界に来て三日目、五回目の食事だ。

未だ接し方を決めあぐねているものの、有馬の口調は澁みない。

それに、有馬の声は耳に心地よい、それなりに綺麗なものだった。

「ごちそうさま」

女性らしくする気がなくとも、その澄んだアルトは十分に女性らしい。

人間、声質は飾りようが無い。そう考えると有馬は割と恵まれていた。

「では、歌ってみてくれ」

「って言われてもねえ。まあ、いいけど」

何を歌うか一瞬迷ったが、有馬は小さく口を開いて息を吸い込む。

短く、日本語としても簡単で、歌いやすいもの。

春が来た、と歌い出した声は普段とはまるで違った。

フォルテが僅かに目を見開き、じっと聞き耳を立てる。

普通に喋る時のアルトとは違う、伸びやかなソプラノが一番を歌い

きった。

有馬が歌を止めると、フォルテが息を吐いて小さく微笑む。

「……確かに、意味はわからないな」

「うーん」

「だが、上手いな。意味が分からなくとも、心に響く歌声だ」
ストレートな褒め言葉に弱い有馬は、ほんのりと頬を染める。

「う、うん。ありがとう」

たとえ微塵も意味の分からない言語でも、リズムとメロディーに心が惹かれる事は多々ある。

「音楽は、言わば共通言語だからね」

照れ隠しにそう言っていると、紅茶のカップを取って飲み干す。

「そうだな」

大人びた所もあるが、こういうところは子供らしい。

フォルテは不意にどきりとする胸に戸惑いを覚えつつ、柔らかく微笑んだ。

有馬は今日もロボの身体を枕にして、すうすうと寝息を立てていた。ロボとの間で知識の共有が行われ、この世界の言葉や文化を頭に入れているのである。

眠っているのは、負担を減らすためだ。

「ねえ、早く契約してほしいんだけどな」

「黙っておれ。ブランカが目を覚ますであろう」

「ブランカって。きみ、随分とこの子を慕ってるんだね」

「軽々しく呼ぶな、貴様」

テーブルに置かれた杖に向かって、ぎろりと目を向ける。

「わあ、怖い怖い」

少しも怖がっていない様子で、シエンカが騒ぐ。

緑の宝石がちらちらと輝き、ロボが溜息を吐いた。

「けして懸想するな。あとは好きにしても良い」

『言われなくても分かっているよ。あのフォルテ坊やお嫁さんでしよ？』

「そうじゃ」

『僕、すっかり気に入っちゃったよ。契約霊具になっちゃおうかな』
「……もう実体になれるのであるう。従者としての契約ではないのか」

『実体に戻っても、僕はもう杖の精霊だもん。見た目は変わんなくてもね』

「そうか」

『君がもうただの半獣に戻れないように、僕もただの妖精には戻れないよ』

精霊と 神獣は、くすくすと、くつくつと、笑いを漏らす。

「じゃが、ブランカは望まぬじゃろうて」

『そうかな』

しゅると杖から出てきたシエンカは、手を伸ばしてさらりと有馬の頬を撫でた。

右側に一房残して左側で結われた長いプラチナブロンドが、百合の花弁のように広がって輝く。

色白の有馬より更に白い透き通るような肌、ピアスが幾つもついた尖った耳。

絶妙なバランスで配置された、中性的ながらもはっきりと男だと分かる美貌、宝石のような灰色の瞳。

エルフが好むゆつたりとした服には、いくつもの装飾品が輝く。

「派手好きなエルフが居たものじゃ」

背は有馬よりやや高く、身体は華奢で筋肉はあまりついていない。妖精族、その中でも人に近い容姿を持つエルフ族は、それでも人間に勝る身体能力と丈夫さを持つ。

その恵まれた身体能力と魔力故に、エルフ族の魔法剣士は全種族でも有数の強さを誇る。

『精霊は光り物が好きなんだよ。今となってはいららないけどね』

「……ふむ。おぬし、今は精霊魔法を使えるのか？」

『昔とは感覚が違うけど。精霊と対話するんじゃないくて、自分より下位の精霊を使役したり、精霊を作ったりできるから』

「そうか。ならばブランカを守るに支障は無いな」

『そーだねえ』

シエンカは指輪が幾つも嵌った指で、さらさらと有馬を撫でている。面白がるような、それでいて慈しむような瞳で見つめながら。

「ベル」

有馬は傷つけた指を舐められながら、名前を与えた。

由来は無論、かの妖精だ。

ベル・シエンカ・ルウは、人差し指を舐め回してから有馬を見上げる。

『僕もたまに、きみのことをブランカと呼んでもいい？』

「いいんじゃないの」

『ありがとう。では僕の“血”を』

ベルが白い手を伸ばし、有馬の掌の上に輝く雫を落とす。

きらきらと光るそれはもやのように揺れるが、蒸発したりしない。

白金の輝きを、口を開けて流し込む。

「……うまい」

それはどこか爽快で、懐かしい甘味。具体的に言うと三 矢サイダ
ーのような。

『“ブランカ”に永久の忠誠と、永遠なる精霊の守護を』

跪いて忠誠と守護を誓うと、仄かな温かみが有馬の心臓の上あたりに生まれる。

マナがぼんやりと体に集まり、きらきらと輝く。

「これ……」

眼のあたりが僅かに温かくなり、思わず眼を擦って閉じて、そして開ける。

景色が、様変わりしていた。

「…………へ、あ、えっ？ 何！？」

世界が、比喻でなく輝いて見えた。

目の前のベルが神々しいまでの光を帯び、横で丸まっているロボも白銀の靄のようなものを発している。

自らの手からも瑞々しい金の靄が流れ出て、その異様な風景に度肝を抜かれる。

部屋のそこかしこに色んな色の靄が浮いて、可愛らしい部屋が一気にどこぞの山奥のような神々しさを持つているように見えた。

「眩しいだろうから、止まれって意思を込めながらゆっくり瞬きして」

「う、うん」

言われた通りにすると、その景色は元に戻る。

「それは《精霊眼》、マナと魔力を見る事が出来るよ。僕と契約したから開眼したんだねえ」

「はあ……眼が痛くなるから二度とやりたくないんだけど」

「まあ、使い慣れれば便利だからさあ」

有馬の《精霊眼》はただ無差別にマナや魔力を見るだけだ。

人間が使うには処理能力的な意味で足りていないのか、すぐに頭痛がするし、眼も痛む。

しかも集中して見なければいけないため、まだ便利とは言えない。

しかしベルのように洗練された魔導士や精霊の《精霊眼》は、便利だ。

視認する魔力を選べるし、魔力の色を見てとれば相手が使おうとする魔法が分かる。

魔法による罫や呪いを見破ることも出来る。

敵の魔力量や質を見る事も出来るし、魔力状態から健康状態を読み取る事も出来る。

希少なだけでなく、それに見合った特殊なスキルを持つ。それが魔導士というものだ。

「まあ、たまーにね。頭いたい」

『ゆつくりお休み』

「うい」

有馬は抵抗なく、するりと眠りに入った。

『知識の方は、どこまでいったの？』

「世間一般の知識に、こちらの言語だ。古代語はまだ教えていない」

『じゃあ、僕が古代語と精霊言語を教えるね』

ベルは有馬の手を取って、ソファの端に座った。

知識共有は離れても可能だが、肌に触れると効率も速度も増す。

高速で与えられる知識の数々を知覚しつつ、ロボは密かに感嘆していた。

（あれほど膨大な量の知識を詰め込まれておるのに、拒絶反応が全く起こらぬとは。

起きた後も頭痛すら無い……異世界人は頭の出来が良いんじゃないだろうかの）

契約者同士の知識共有は、現代魔法による知識共有に比べてずっと優秀だ。

しかし、ロボが長い人生（犬生？）の間に見たその行為は、やはりある程度の拒絶反応を伴う。

流し込まれた知識の多寡にもよるが、倦怠感、痺れ、鼻血、頭痛、眩暈、昏倒。

中にはそのまま三日目覚めないような者も居た。

果たして有馬がおかしいのか、それとも異世界人の特性なのか、あるいはロボとベルの力量か。

それはまだ、誰も知らない。

「言葉の方はどうだ？」

「あと2日もあれば日常会話に問題は無いじゃろ」

「！？」

午後になってもぐっすりと眠る有馬を横目に、こんな会話が繰り返されたのであった。

余談ではあるがベルは杖に戻っていた。まだ姿は見せないようだ。

6 派手好きと契約（後書き）

ファンタジーといえはエルフ。

7 万能侍女クレイア

要塞にも思えるような天蓋付きベッドに、呻き声を上げる有馬がいた。

「うーん……うー……うー」

枕元に置かれていた杖がきらりと光り、靄のようなものが出てくるやがてそれは美しい、妖精のような少年の形を取って顕現した。

『うなされてるねえ。僕は夢魔じゃないから夢の中まで覗けないけど 《眠りの》、どうにかしてあげてよ』

有馬の頭上に、靄のようなものがふわふわと現れる。

雲にも見えるそれが、体に綿のような服を纏った、羊の角を持つ少年に変貌する。

彼は《眠りの精霊》。動物の巢や人の寝所から生まれる精霊だ。

『はい、はいはい。ぐっすり安眠をお届けしますよお〜』

見た目こそ10歳ほどに見えるが、随分とミニマムサイズである。およそ20cmほどの彼は、割り箸程の腕をくるくると回す。

『そーれ、眠れ〜。《眠りの雪》で楽しい夢をプレゼント〜』

柔らかく微笑んだ彼の腕から、薄桃色の雪が降り注ぐ。

それは有馬の顔に触れると、音も無く消えた。

次第に有馬の表情が柔らかくなり、小さく笑みを零して寝息を立てる。

安らかに眠り始めた彼女を見て、《眠りの精霊》は満足げに跳ねた金髪を揺らして消える。

『これで、安心かな』

彼も満足したように呟くと、杖の中に消えていく。

夜明け前のひんやりとした空気に、僅かなマナの余韻が残された。

それから数十分後、有馬がぱちりと目を覚ました。

寝ぼけ眼を擦りながら、暫くぼーっとする。

こちらでは1月4日。真冬のベッドの中で、有馬は幸福を噛み締めた。

(ああ……布団から出たくない……)

ややあほらしい幸福だが、真冬の朝はある意味天国である。布団を一步出ると地獄だが。

(これでもうちよつと寒かったらなあ)

この部屋は魔法で温度管理されているのか、とても過ごしやすい。季節を感じさせないような適温は確かにいいが、物足りないと言えば物足りない。

有馬としては、冬の朝は寒い方が好みだ。

凍えるほど寒いのは嫌だが、外が寒いからこそ布団の温もりが好ましい。

暫く目を開けたり閉じたり、寝返りを打ったりしながら布団を堪能する。

何時もなら起きたのを察知して入ってくるクレイアも、暫く放っておいてくれるようだ。

(ああ、こりゃ元の世界とかどうでもよくなるわ……)

ここまでくると逆に清々しい。呆れるほどに未練が無かった。

元の世界で使っていたよれよれの羽毛布団と違って、この布団は軽く柔らかくそして手触りも良く、寝心地は最高である。

そうして10分ほど経つと、ようやくクレイアがノックして入ってくる。

「おはようございます、アリマ様」

「おあよう」

呂律の回らない舌で言い、布団から両腕を出して伸びをする。

そしてそのまま、くたり、と力が抜けた。

「……お目覚めくださいませ」

「あ」

そして目を閉じるなり、布団を引き剥がされる。

シンプルな白い寝巻の裾が捲れて、太腿まで露になっていた。

「まあ、申し訳ございません」

全く反省していない口振りだが、有馬は全く気にする様子も無い。小さく呻いてから太腿を隠し、のろのろと体を起こした。

ほんのりと赤い頬は、寝ていたからなのか、それとも羞恥か。

「今日から私がお召し物を選びますわ」

「うん……」

諦め気味の有馬だが、なんとか4日目にして“自分で顔を洗う権利”をもぎ取っている。

クレイアは難色を示したが、“服装・髪型を好きにしている権利”を提示すると了承した。

ちなみに今までは服は自分で選べたが、そっちは手放した事になる。それではプラスマイナスゼロだ、とは思いたくない様子だ。

そんな訳で人間らしく文化的な生活を、と有馬はポジティブに考えていたのだが

「ではこちらを」

クレイアが持って来た服を見て、早くも後悔した。

全体は落ち着いた風の胡桃色だが、これまでと比べて格段にフリルやレースが多い。

膝丈のスカートの内側には何十も薄布の重なった、所謂パニエを着るらしい。

腰のあたりがきゅっと締まっていて、中央を紐で編み上げてある。

「……着るの？ これ」

「着せませすわ」

有無を言わせない口調。美人故にますます迫力があり、有馬は溜息を吐く。

「……はい」

最早、諦めるしか、無い。

自分の好みを大きく外れたワンピースを着せられながら、有馬はつくづくそう思う。

クレイアを前にすると、何事も諦めざるを得なくなる。しかもそれが自分にとつての不利益になり得ないから、性質が悪い。

「とてもお似合いですわ!」

服を着せられ、髪も結われ、鏡の前に押し出される。

似合う訳が無い、そう思いながらも顔を上げる。

案外。そう、案外似合っていた。

有馬の顔立ちは平凡で、この世界の同年代と比べれば大分幼い。

背は低く、おまけにやや太めの体形。

けれどもそれらの特徴は、クレイアによって全てが生かされていた。

「……まあ、うん」

コンプレックスだった太い脚や大きな腰は広がったスカートで隠れるし、腹だつて締め付けられていて目立たない。

人並み以下だと思っていた自分が、初めて人並みの少女だと思えた。

有馬は仄かな感動を噛み締めつつ、でもこの程度の服で限界だ、と現実的な事を思った。

フォルテは居間に入ってきた有馬を見て、危うく手に持っていたカップを落としかけた。

「お、はよう……」

「おはよ」

すんでの所で持ち直し、ゆっくりと挨拶を交わす。

有馬はふわりと裾の広いスカートに四苦八苦しつつもソファに座る。

クレイアが微笑を浮かべながら紅茶をカップに注ぐ。有馬はふう、と溜息を吐いてちびちびと飲み始めた。

「……今日はやけに気合が入っているな。どうした?」

何を言うべきなのか迷った末に、フォルテはそう聞いた。

そして少しだけ後悔した。女性が珍しい格好をしていたらまず褒めるべきではないだろうか、と。

「クレイアさんが」

「……？」

「選んだから？」

強いて言うならば取引の結果だが、有馬はとりあえずそう言った。フォルテは「そうか」と言う。

快適な室内温度に融けるように、会話が途絶えた。

気づけばクレイアは消えていて、2人はぼーっとして紅茶を飲む。

獣人は本能的に合理的な事を好む種族だが、貴族は本能的に華美である事を好む。

そんな貴族の娘達に比べれば、今の有馬など地味でしかない。

「似合うな」

けれどそれは問題にならなかった。地味とはあくまで、派手の対義語でしかない。

「……あり、がとう」

クレイアの手は、確かだった。一流のメイドであると同じ位に、一流のファッションコーディネーターで、エステティシャンで、ヘアースタylistで、メイクアップアーティストだ。

間違い無く有馬は人生で一番輝いている。七五三で振袖を着た時よりも、ずっと。

「有馬は着飾るのが好きではないんだっただな」

「そりゃ、そうだよ。面倒だし金かかるし」

有馬の中では、容姿や服装はさして重要な要素ではない。

彼女の頭を占めるのは物語や絵、あるいは歴史や音楽だ。

家で趣味に没頭するだけの休日に、洒落た服は必要無い。

けれど興味が無い訳では無い。見ている分には美人が良いし、自分がそうであったなら良いなとも思っているのだ。

ただ、そうなるうとする努力が全く伴っていないが。

「そうか。もう金は気にしなくて良いんだがな」

「あ、そうだね。王妃様に永久就職する内定を手に入れたんだっただ」

「……。まあ、そういう格好は似合っている。遠慮なくするといい」

「えー、ほんとに？ あたしにはちょっとね」

胡桃色のスカートを摘み、唇を尖らせて言う。

普段下ろしている髪は後ろでハーファップにされて、深みのある赤のリボンが垂れていた。

フォルテは紅茶のカップを置いて、僅かに首を傾げる。

「そうか？　可愛いと思うが」

「服が？」

「いや、お前が」

事も無げに言うと、有馬がぴたりと動きを止める。

「かわ、いい？」

そして胡乱な目つきでフォルテを見つつ、手を口元に当てる。

耳のあたりがほんのりと赤い。

「ああ」

言っているフォルテは平然としている。

実を言うと今だ戸惑いが抜けきらず、自分が何を言っているのか分かっていないのだが。

無意識というのは恐ろしいものだ。

「はー……まあ、ありがとう」

流石王子ともなればお世辞が上手いな、と有馬は勝手に納得した。

しかし頬あたりの熱は冷めない。

「貴族のご令嬢とかにも可愛い可愛いって言うの？」

誤魔化し半分にそう言う。しかしフォルテは、あっさりと右手を振った。

「可愛い、とは言わないな。貴族の娘というのは大抵プライドが高いし、子ども扱いは好まないだろう」

「あたしは子ども扱いか」

「……いや、そんな事は無い」

「どーせ小さくて背が低くてチビですよ」

三回も言わなくても分かる、とフォルテが笑う。

有馬は誤魔化しきれない熱を吐き出すように、大きく深呼吸した。

朝食を食べ終わると、何時も通りフォルテは仕事に出て行く。最近執務が忙しくなったらしい。間違いなく有馬に付き合っただけ午後を潰しているからだと思われるが。

「ロボー」

有馬は自室に戻ると、スカートに毛が付くのも厭わずにロボに抱きつく。

ソファの上で眠るように目を閉じていたロボは、ゆっくりと横を向いて瞬きした。

「む？ 今日には可愛らしい服装じゃの」

「もつと褒めてー」

「有馬は可愛いのが」

「ロボも可愛いなあ」

「そうか……？」

ひくひくと鼻先が動き、眉根が寄る。たまに見せる人間じみた仕草がまたいい、と有馬は思っていた。

『ねえねえー、僕は？』

テーブルに無造作に置かれた杖から、ベルが現れる。

「……ベルは……綺麗じゃないかな」

ずい、と近づいた顔を押しつける。絹のように滑らかな肌に触れると、有馬はあからさまに眉根を寄せた。

「って言うか何なの？ 白すぎじゃない？ さらにさらすぎない？」

『普通だつて、エルフはみんなこんなもんだよ』

「ちくしょう！ ……あと何？ 何でこんなにまつげ長いの？」

有馬の手が伸びて、ベルの顔を弄繰り回す。

瞳を引っ張ったり唇をめくってみたりとやりたい放題だが、ベルは特に抵抗しなかった。

「良く出来た人形みたいだよー。ビスクドールって言うかさ」

『それ、よく言われたなあ。有馬もぬいぐるみみたいだよー、いたたたた』

真顔になつた有馬が両頬を全力で引つ張つた。

『いたいたいいたい、痛いー』

「あはは」

『有馬、顔全然笑つてないよー』

「そうだね。ぬいぐるみは笑わないね」

『ごめんつてばー、有馬』

「心が足りない」

『申し訳ございませんー、我が君ブランカ。どうかお情けをー』

「うむ、許す」

傲岸不遜にそう言つて、両手を組みつつ笑つ。

ベルはまだ出会つて1日でしかないが、最初から人外であると分かつていたためか有馬はすぐに慣れたらしい。

契約したからというのもあるが。

「ベルよ。あまりブランカをからかうな」

からかわれた有馬が冗談半分に怒り、それをにこにこしながら受け入れるベル、和やかに見守つて時々釘を刺す口ポ。そんな構図が既に完成しているようだ。

口ポが無言で尾を振り、ソファが横に伸びる。音も立てずに腰掛けで、ベルはテーブルの杖を手に取つた。

『なんかこれ、つままないよね』

「はあ？」

『装飾少ないしー、色が気に入らないよね！ よし、変えちゃおう』

「ちよつと、一応借り物だから」

ベルが杖を指先でなぞる。マナが集まつて、きらきらと輝いた。

精霊が使う魔法は、主に精霊魔法と自然魔法である。

下位の精霊を使役したり、作り出したりするのが精霊にとっての精霊魔法だ。

そして今使つたのは自然魔法。精霊はマナで出来ているが、本来器のようなものである。その器一杯まで取り込んだマナによって魔法を使うのだ。

ただし大抵の場合は使える種類は少なく、自分に合ったもの 例
えば《眠りの精霊》は睡眠や癒しに関するもの、しか使えなかった
りする。

また彼らの得意魔法には、自らの名の枕詞が付いている事が多い。
ちなみに《眠りの精霊》の《眠りの雪》は、安眠を与える魔法であ
る。

『こんなもんかな？ 宝石の周りもちよつと』

「……どうやるの？ それ」

『気になる？ 後でね』

ベルの場合、元々の魔力量が多かったためマナ容量もかなり大きい。
そのため精霊としては高位の存在だ。

更に属性も得意不得意があまり無いし、元が妖精族だったからか魔
力の扱いも上手い。

“ルウ”の称号は伊達ではないのだ。

「今更物理とか化学とか言わないけど、これは、ねえ。どうなつて
んのか」

マナに包まれた杖の材質が、木ではなくなっている。

とろりとした不思議な光沢と透明感のある白色。

蠟が垂れるように形を変えていき、緑の宝石に絡みつくように固ま
つていく。

有馬は興味津々にそれを見つめていた。

『こんなもんかな？ はい』

全て固まると、ベルが杖を手渡す。どこまでも滑らかな、磨かれた
大理石のような触り心地である。

「これ、何？ 素材」

『木だけど』

「いやいやいや、ねーよ」

『うん、嘘だけどね。魔力伝導率がこの世で一番高い物質、エーテ
ルの結晶だよ』

「えー……え？ エーテル？ ここで来たか」

エーテル。物語やゲームでもよく見る名称である。

その多くは魔力回復薬としての物が多いのだが、本来はアリストテレスの提唱した第五元素である。

この世界でのエーテルは、マナが変質して固体化・液体化した物だ。ちなみに液体エーテルを摂取すると高い魔力回復が得られる。

ただし過剰摂取すると体が魔力に耐えられず、体に異常をきたしたり、酷い時は死に到る。

固体エーテルはよく魔力を通す上に、一度魔力を込めると消費してもマナを吸収してその分まで回復する、という性質があるため魔石によく使われた。

ただし双方、現代では物凄く希少な品だ。

『そう、エーテル。知ってるの?』

「うちの世界じゃ、物語とかで魔力回復薬の代名詞だね。いろいろあるけど」

『へえー。こつちでのエーテルはマナが変質したものの。液体と固体があつて、確かに液体のは飲めば魔力が回復するなあ。』

……ああ、でも飲みすぎると魔力が溢れて危ないからね。エーテルは今のところあんまり出回ってない筈だけど、気をつけて』

うん、と頷きつつも有馬は杖で空中を掻き回す。

魔力の流れを大分つかめるようになってきた有馬は、エーテル素材の優秀さに感嘆していた。

杖の先端まで染み渡った魔力は、意識を巡らせると自在に動く。くるくると回せば、前より沢山のマナが煌めいた。

「ほあー……」

球形らしい宝石が透けて見える様は、とても美しい。

しかも媒体として最高の素材を使っているため、実用性も最高。有馬は大いに杖を気に入ったらしく、空中に絵を描いて遊んだ。

煌めくマナは暫く消える事がなく、緩慢に空中を落ちていく。

『ほら、遊んでないで。精霊魔法使ってみたいんでしょ?』

「原始魔法もじゃろう? ほれ、始めるぞ」

「うーい。じゃ、精霊魔法から」

娯楽の少ない世界で、有馬は魔法という格好の新知识に目を向けていた。

元々興味がありさえすればやる気の湧いてくるタイプなのだから、止まらない。

シヴァから論理・言語魔法と魔術、ベルに精霊魔法（及び他の魔導も）と自然魔法、ロボに原始魔法を教えてもらう事になっている。

何が得意なのかまだ分からないため、一通りやってみる事になっている。

『精霊と対話する事から始めようか。ま、僕と話せるから問題無いけど。この部屋には精霊がないから　とりあえず僕が作ってあげる』

ベルがきよろきよろと周りを見て、ある一角に目を向ける。

ふわりとソファを降りてその場所にしゃがみ込み、白い両手で何かを掬うような動きをした。

『この子が《埃の精霊》。部屋が綺麗だからあんまり集まらなかったけど、埃は人間の生活の痕跡だからね。意思疎通は簡単な筈だよ。ベルの手の中から、くるくるとカールした灰髪の、小指サイズの少女が浮かび上がった。

向こう側が透けて見えるのは、力の弱い精霊の特徴だ。存在が希薄なのである。

「おおー。可愛い」

服装は襪襦切れのようなものだが、伸びた手足は白く滑らか。顔立ちも可愛らしく、浮かびながらあたりをきよろきよろと見ている。

『精霊ってというのは、人間の理想的な形を模してるものだからねえ。僕は元々だけど』

「人間じゃない形のはいないの？」

『いない訳じゃないけど。みんな基本的には人型で、たまに他の姿になったりしてるかな。火関係の精霊の一部とかは好んで別の姿してるけど』

「……トカゲ？」

『うん。爬虫類型が好きみたいで 何で知ってるの？』

「パラケルスス先生が」

『誰？』

パラケルスス。

本名をテオフラストウス・フィリップス・アウレオールス・ボンバ
ストウス・フォン・ホーエンハイムという。長い。

医師であり錬金術師でもあり、ホムンクルスを作ったとか賢者の石
を持っていたとかで有名だ。

サラマンダー・ウンディーネ・シルフ・ノームの四精霊を提唱した
人物でもある。

ファンタジー好きなら聞き覚えのある名前かもしれない。

「火の精霊がサラマンダー、水がウンディーネ、風がシルフ、土が
ノーム。それをうちの世界で考えた人」

『ふうん……こっちの精霊は、そういう名前は持たないけど』
この世界の精霊に、固体としての名前は無い。

精霊王と伴侶、精霊化された者などは名を持つが、他の精霊は《眠
りの精霊》や《埃の精霊》という呼び名があるのみだ。

普通は《眠りの》、《埃の》、と縮めて呼ばれる。

「おいでおいで」

『《埃の》、って呼んであげてね』

「うい。《埃の》、元気？」

指先を伸ばすと、ふわふわと《埃の精霊》が寄ってくる。

『……？ んん！ 元気だ。お前誰だ？』

「あたしは有馬」

『有馬！ お前、精霊語が喋れるか！ 精霊魔導士か！？』

「……精霊語？」

可愛らしい声に似合わない乱雑な口調に和んでいた有馬が、首を傾
げる。

『ああ、この前古代語と一緒に教えたからね。自動で切り替わるの

かな？」

「いや、普通に喋ってるつもりでいるんだけど」

『じゃあ、翻訳魔法が働いてるんだろうね。ってというか、翻訳かあ

……』

口の中でぶつぶつと呟き始めたベルを無視して、有馬は《埃の精霊》と戯れる。

小指の先に抱きついてきたり、有馬がつついたり、顔に張り付いたり、髪の毛に絡まったり。

有馬は大型の動物が好きだが、勿論小動物も好きである。

ハムスターやハツカネズミ、文鳥にセキセイインコ、エトセトラエトセトラ。

ピグミーマーモセットが欲しいと思っていた事もある。

「可愛い、超かわいい」

どちらかといえば可愛いよりかっこいい方が好きだが、可愛さに絆されないほど冷たくはない。

精霊というより妖精のような《埃の》に、有馬は思い切りデレていた。

余談ではあるが、その時口ボが後ろで拗ねていた　　のをベルが目撃したという。

7 万能侍女クレイア（後書き）

そういえば、ブランカは意味としてはマジエスティ。本来は陛下とか殿とか殿とかそういう感じでの敬称です。ロボは名前として契約に使っていますが。

8 我が子を谷に

原始魔法は簡単のようでいて、凄まじく難しい魔法だ。

有馬は唇を結んで、可愛らしい服装のままソファに胡坐を掻き続けている。

とはいえふんわりしたスカートのせいで、外から座り方は見えないが。

「……………」

体内を巡る魔力を感知しろ、とロボに言われた。

魔力そのものは確かに分かったが、巡る、という感覚が掴めない。

『……………ふあー』

「うるさい。杖入れ」

『ちえー。あ、じゃあちよつと外出てくる』

「そう」

しかし有馬は粘った。かれこれ1時間は胡坐を掻いて瞑想している。口数も少なく、その顔は真剣そのもの。

午前中は結局精霊と戯れて終わったが、午後の彼女は今までに無く集中していた。

やや俯き加減で目を伏せ、両手はスカートの上で軽く組んでいる。

一見して寝ているようにも見えるが、意識はどこまでもはつきりとしていた。

（ 心臓の上 ）

1時間で掴めたのは、力の根源が心臓のやや上、鎖骨との間あたりにあること。

コップから溢れる水のように、身体に魔力を送り出している。鼓動のような動きは無いから、ただ生み出されるままに流れるだけなのだろう。

そして体表から少しずつ出て行って　交換されるように、新しく取り込まれているのが分かる。

（マナを、吸い込んでる……？　呼吸？　……あ）
有馬は、なんとなく気づいた。

魔力は魔力を回復させる効果を持っている。なら、マナも同様と考えていいだろう。

呼吸によって体内に入ったマナは、そのまま吐き出される。

けれど体内にある時、ほんの少しずつだが吸収されて、魔力を生んでいるのではないか。

（……それはいいとして。流れを、辿ればいいのか）

全世界が驚愕しそうな発見はあっさり引っ込めて、集中する。

心臓のやや上から溢れる魔力は、また水面に流れ込むように緩やかに消えていく。

（噴水の、水の出る所と、水が溜まるところ、みたいな）

そう想像した瞬間、なんとなく　魔力の水面が波立つのを感じ始めた。

波紋が、身体の端まで広がっていくような。

（波紋……ああ、そっか、波紋が……波紋ね！　座ったまま跳ぶアレ）

思考がぶれて明後日の方向に向かう。同時に、流れがまた分からなくなる。

（ああ！　しまった、無駄な事考えた）

再びじっと思考の海に沈むように、真面目に瞑想を再開する。

本人も他の人も与り知らぬ事ではあるが、この世の理をガシガシ暴いているのはまあ、ご愛嬌としよう。

夕方になるとぐったりしたフォルテが部屋のドアを叩き、入ってきた。

「お、おつかれ？　あ、座って座って」

「……ああ……何してるんだ？」

瞑想していた有馬は、ソファの上で胡坐を掻いたままである。スカートの中は見えないので正座でもしているのか、とフォルテは判断したが。

「瞑想。魔力の流れを掴んでみようと思って」

「流れを？ 原始魔法でも習うのか」

「うん。ロボが教えてくれるって」

あっさりと言い切る有馬に、フォルテは微妙な顔をする。

原始魔法は、習おうと思って習えるものではないのだ。

言うなれば、感覚。古代の生き物に備わっていた、当然の感覚。

今では殆ど誰も持ち合わせないが、まるで呼吸するように原始魔法は行使されたという。

廃れたのは燃費の悪さと、新たな魔法の便利さ故だ。

しかし単発の威力と応用の幅の広さは、他の追隨を許さないとかわれる。

そしてもう一つ

「……そうか。守護者殿が、か」

ロボ自身についても、フォルテは不思議に思っていた。

「うん？ ……うん」

（やべ、そういえば人前でロボって何回も あれ、でも全く突っ込まれない？）

今更気づく。が、何時もの通りに“魔法だから”と簡単に納得した。当のロボは有馬の横で寝こけているが、その姿すらフォルテには信じがたい。

「守護者殿は、俺達の師でもあるんだが…… 厳しいんだ。叱咤して出来なければ叩き潰して、這い上がれと言いなから頭を押さえつけてくるような」

「うわあ」

「俺達を見捨てないのが唯一の優しさだ、とまで言われていた」ちなみにそれは歴代王族の共通見解でもある。

ロボは王族に厳しい。原始魔法と戦闘に関する事を教えるのだが、

妥協は一切無い。

出来なければ鞭。出来たら出来たで鞭。飴は無し、そんな感じだ。

「……、ロボは優しい、と、思うけど」

「そうなのか。有馬にだけだと思いが」

「えー」

先日受け取った知識と一緒に、関連する記憶の一部も流れ込んでいた。

教育とやらの記憶は無かったが、王族と接する記憶は大多数を占めていた。

歴代の王族を慈しみ、そつと見守ってきたロボの気持ちを知るからこそ。

ロボがただ厳しいだけとは思えないのである。

(厳しく接するけど、可愛くは思ってるんだよね……?)

有馬は顎に手を当てて考え、そして思い至る。

「……ツンデレ？」

いくら何でもあんまりな結論だが。

「ツンデレ……？」

「う、うん。ついつい意地張っちゃう人、みたいな意味」

「意地を張って俺の肩を外したり、シヴァを塔から投げたりするの
か」

「……はは」

乾いた笑いを零しつつ、横で眠るロボをそつと撫でる有馬であった。

ロボは何処で寝ているんだろう。

有馬は寝巻姿でベッドに潜りながら、今更そんな事に思い至った。

「……ロボー」

「何じゃ」

口に出して呼んでみると、すぐに扉が音も無く開いてロボは現れる。契約というのは便利なもので、ある程度遠くとも言葉は伝わるのだ。

「ロボ、どこで寝てるの？」

「居間かのう。いつもは」

「一緒に寝よー」

「うむ」

何の疑問も無く返事を返す。

ロボは尻尾を一振りし、自らの身体のサイズを変えてベッドにひよい、と上がった。

「便利だねえ」

「うむ」

「かわいい」

有馬は布団の中にロボを引きずり込み、背中を自分の方に向けて抱きしめる。

「ロボってさー」

「何じゃ」

「厳しいんだってね。フォルテとシヴァさんに」

ロボの大きさは丁度いい。有馬の鼻先に後頭部があり、太腿のあたりに尻尾がある。

抱き枕にするなら一番いいサイズだ。

「厳しい、か？」

きよとんとした調子で言うロボに、やっぱりか、と有馬が笑った。

「厳しいよ。でもロボ的にはまだ甘い？」

「そうじゃの。あれらは優秀じゃったから、随分甘くしてやったんじゃないが」

「……突き落したり脱臼させたり以上って、どういう？」

「ふむ。先代の時は何度も魔領に置き去りにしたな」

我が子を谷に突き落とすレベルじゃなかった。

ちなみに魔領とは文字通り魔族の領土であり、魔王が治める地域だ。国ではないため魔領と呼ぶが、正式にはディーヴィアと言う。

古代語で魔(ディ)を抱(ウル)く地(イア)という意味で、古くはディヴルイアと呼ばれた。

人間と魔族は、人間と獣人以上に致命的に仲が悪い　　というか一方的に人間が突っかかり続けている。

殆ど勝てた試しは無いが、稀に勇者のような存在が現れて魔王に肉薄していくらしい。

尤も、残念ながら今代魔王は数千年前から負け無しでピンピンしている。

ちなみに獣人族は性質も心情も魔族寄りだが、やはり人間は好き、という者が多い。何故か。

閑話休題。

「ロボ、さあ」

「うむ」

「それを敵しいと思ってるのが問題だね。あと、愛が伝わりにくい」

ロボは永遠とも言える長い年月を、王族を見守る事に費やす存在だ。深い慈しみと愛の籠った視線を送っている、筈である。

「そう……か？」

「もっと可愛がってあげなよ」

「可愛がっておるぞ」

「ええー……」

その可愛がりのせいで怖れられているのは分かっているらしい。長命だと色々鈍くなるのだろうか。

「……、てか……守護者って、何？　ロボって何でここにいるの？」

「……おお。話しておらぬな、そういえば」

「うん」

ロボの過去を、有馬はほんの断片しか知らない。

ゆっくりと昔話を始めるロボの声は心地よく、有馬はじつと耳をすませる。

「我が父は白銀の毛並みを持つ狼、我が母は海のような蒼い瞳の人間じゃった」

「……ん」

フォルテ達ですら知らない話を、詠うように語っていく。
有馬にとっては、まるで物語のような話だった。

神話にも近いが、有馬はそういう方面にも興味はある。
日本神話は勿論のこと、北欧神話やギリシャ神話も好きだった。
尤も興味を持ったのはつい最近で、学ぶ前にこちらに来てしまった
のだが。

「天高く飛び上がり、神の喉に喰らい付き」

「おおっ……」

手に汗握る展開に低い美声が合わさり、物語と言つかボイスドラマ
感覚。

「そして この口で噛み千切り、神を地に墮とした」

「……！」

「神の血を浴びた我らは、身体を紅に染め」
さりげなく我らと言ったが、有馬は迫真の演技（声だけだが）に夢
中である。

「永遠の命と力を得た。そして子々孫々を見守るため、今もこ
の国に暮らしておる」

文句なしのクライマックスだ。有馬はロボの前方で両手をぱちぱち
と叩く。

「面白かった」

「うむ、それは重畳」

「また、話して、ね……」

くたり、と力が抜ける。有馬の瞼が降りて、すぐに寝息を立て始め
る。

「おやすみ」

力の抜けた腕の重みを心地よく思いつつ、ロボも瞼で蒼い目を覆い
隠した。

8 我が子を谷に（後書き）

始祖の兄だとは全く気づかないのが有馬です。
今回ちょっと短めかな？

9 あちらこちら

異世界生活、5日目。

有馬はふと、鞆に仕舞い込んである携帯達を思い出した。

「……電波には変換できるらしいよね？」

「何がじゃ」

「あ、魔力。……ロボ、魔力で雷は作れる？」

「作れるぞ。部屋でやると些か危ないが」

「あ、いや、やんなくていい」

ちなみに本日の服装は若草色のワンピース姿で、頭に花のついた飾りを付けられている。

昨日ほど派手ではないので有馬は安心した。

安堵の溜息を吐いた後にクレイアが見せた意味深な微笑みが気にかかるが。

「とりあえず、電源入れてみよう」

鞆は無造作に、机の横に掛けられている。

有馬は中から携帯電話を取り出し、電池パックを入れた。

電源を付け、暫く待つ。

「何じゃそれは？」

「携帯電話……って言ってもわからんだろうけど。機械だよ」

「機械？」

「……あ、機械ってわかんない？」

「いや、少しは分かる。300年ほど前に魔領に赴いた時、妙な男が作っておった」

「へえー……」

有馬は電源の入った携帯電話を見て、ぴくり、と眉根を寄せる。

新着メールと不在着信が大量に入っていた。

「……え」

そして理解した瞬間、危うく手から取り落としそうになった。

「どうした？」

「あ、え……あー……」

胸がざわざわとして、落ち着きなく携帯のボタンを押す。

その手が、僅かに震えている。

「……」

着信履歴。親、友人、先生、その他色々。

日付を見る。5月20日から始まり、最新のものは5月25日。

5日間。

つまりこちらに来てからの日数と同じだ。

「ロボ……」

「なんじゃ」

「ど、どうしよう。怒られる？」

混乱と驚愕のあまりに色々おかしい事を言っている。

メールを開く勇気が出ないらしく、いよいよケータイを握る手に汗が滲み、不安げに顔が歪む。

「安心するがよい。有馬を叱責するなど、我が許さぬ」

「あ、あ、ありがとう？」

ロボはロボで通常運転である。ちなみにベルは昨日から帰ってこない。

有馬は震える手でメールボックスを開き、とりあえず友人達のメールから見ていく。

どこにいるの、が大多数を占めている。

残りは、返信ください、心配している、そんな感じだ。

突然失踪して、行方知れず。

学校に来なくなった有馬を、友人達は不思議に思ったのだろう。

中学の友人達も、毎朝駅で会っていたのだから気づかない筈が無い。痕跡1つ残さなかった有馬との、繋がり。それは携帯しか、無かったのだろう。

「……………」

有馬は申し訳なく思つより前に、強い恐怖を覚えた。

ぞくぞくと、胸に、背中に、不快感。それは爪先や脳天まで全てをざわつかせる。

口ポに擦り寄って、落ち着かないように爪先で床を叩く。

「うづう、どうしよ、う、どうしよ」

有馬は、あっさりと異世界を受け入れた。

それはつまり、今までの自分が関わってきた全てをあっさり捨てたという事になる。

捨てた物から縋りつかれる、まるで遠くに捨てた人形が帰ってくるような恐怖。

「有馬……………」

口ポが有馬の背を尻尾で撫でる。表情を読みづらい狼の顔だが、目が心配げに揺らんでいる。

そのまま撫でられていると少しは落ち着いたようで、有馬は再びメールを読み始める。

有馬は、ひたすら手の掛からない子供だった。

兄と比べて格段に大人しく、そこそこ優秀で、物欲も乏しい。

悪戯もしないし、無茶な遊びもしなければ、悪い友人も居ない。

極端な浪費もしない、芸能人に現を抜かさない、事件に巻き込まれたりもしない。

つまるところ有馬は、親に大きな迷惑をかけた経験が、無い。

「……………」

もし、戻ってしまったら。

親や教師の叱責。弁解も説明も不可能。奇異の目線。落胆。嘲笑。

被害妄想にも近いが、有馬はそれを考えるとどうしようもなく、怖ろしくなる。

「情けない顔をするでない」

「……………」

メールは、まだ半分以上残っている。読み進める度に、悪化する精

神状態。

有馬は人生で一番のどん底を味わいながら、それでも携帯電話のボタンを押す。

最後の一通まで読み終わると、有馬は乱雑な手付きで電源を切り、電池を取ってテーブルに置く。

「……ごめん、気持ち悪い……寝る」

許容、出来ない。

今までに無い、一度に向けられる同じ感情と言葉を。

たとえそれが悪い物でなくても、有馬にとっては同じだった。

不安も膨れ上がり、体中が不快感に包まれてぞくぞくとする。

「わかった。ゆるりと休め」

ソファの上、ロボの体を枕にして横になる。

中々眠気は訪れず、有馬は浅い息を繰り返し、両手を握り締めて目を閉じる。

その時、きらりと頭上が輝いた。

光は靄となり、靄は20センチメートル程の少年の姿をした精霊となる。

「何じゃ、ぬしは」

ロボも精霊を見る事が出来る。怪訝そうに言うと、精霊はふわふわと浮かびながら笑った。

跳ねた金髪に羊のような巻き角、ふわふわした綿のようなものがついた服。

《眠りの精霊》である。

「……」

有馬は背を向けたまま反応しない。

『《眠りの風》。おやすみ、お嬢ちゃん』

ふんわりと笑みを浮かべ、右手を振る。薄っすらと桃色の風が吹き、有馬の体から力が抜ける。

「ふむ？……おお。礼を言っ」

有馬が寝息を立て始める。ロボの声を聞き届けてから、《眠りの精

《靈》は満足げに消えた。

昼頃、部屋に戻ったフォルテを出迎えたのは クレイアだけだった。

「アリマ様はお眠りですわ」

「……またか」

フォルテは溜息を吐いた。有馬が昼まで寝ているのは二度目である。

「よく眠る奴だな」

「そうですね。まだお若いからでしょうか」

有馬の部屋に続くドアをノックする。

しばらく間を置いて、ロボの声が返ってきた。

「失礼」

静かにドアを開ける。

ソファの端に座るロボと、その腹を枕にして丸まって眠る有馬が居る。

「……有馬？」

その背中が、ひきつるように震えている。

小さく呻き声も聞こえ、爪先は強張って時折びくりと震える。

明らかに、うなされている様子だ。

「何か、あったのか」

「それは直接おぬしが聞くべき事じゃ」

ロボは大きく欠伸をする。フォルテは足音を立てないように気を使いながら、ソファに近寄る。

背もたれに向けている横顔は、苦しげに歪んでいる。

浅い息を繰り返して、頬や額に薄っすらと汗が滲む。

「我は席を外す」

「……はい」

「寝かすも起こすも、おぬし次第じゃ」

ロボがするり、と有馬の横から抜け出る。

魔法を使っているのか、有馬の頭はそのままの位置に浮いていた。しかし温もりが消えたのが嫌なのか、呻き声を上げる。

「任せた」

ロボはそう言っつて、部屋を出て行く。ぱたんと扉が閉じた。

「……」

フォルテは意を決して、有馬の左肩に手を差し入れ、持ち上げる。そしてロボが座っていた所に座ると、その頭を脚の上に乗せた。

有馬の手が伸びてきて、服の端をきゅっと掴む。

「……っ」

どきり、と心臓が跳ねた。

行き場の無い手を迷わせていたフォルテは、とりあえずその手に触れる。

自分の手で容易に覆い隠せる、小さな手。

汗の滲んだそれは、ひんやりと冷たい。

「……う……う」

呻き声が聞こえる。ぎゅっと力が入った手を、フォルテはそっと解かせて片手で包む。

「大丈夫だ」

もう片方の手で有馬の頭を優しく撫でると、幾分か安らかな顔になった。

フォルテは有馬が目覚めるまで、ずっとそうしていた。

眠る有馬の目から、涙が一滴、零れ落ちた。

有馬がぼんやりと目を覚ましたのは、それから1時間ほど後だ。

「起きたか？」

「……う」

寝起きで声も出ないらしい。フォルテはテーブルに置かれたベルを、小さく鳴らす。

数秒もせずにクレイアが入ってきて、微笑んで水差しとコップを置

いていく。

「（読心術……！？）……。有馬」

「ん……」

慎重な手付きで有馬の体を仰向けにして、少し引き寄せながら起こさせる。

そしてコップを持たせようとして、すぐに諦めた。

明らかに力が入っていないし、持たせたら間違いなく落とす。

生まれたての小鹿状態の有馬の背を支え、コップを左手で持って顔に近づける。

「口を開けてくれ」

「う……い」

ぼんやりとしたまま口を開け、丁寧に、ほんの少しずつ流し込まれる水を喉に落としていく。

半分ほど飲ませると、コップをテーブルに置く。

「……ふおる」

ようやく潤った喉から、少し掠れた声が出る。

「……て？」

ゆっくりと紡がれた名前。語尾が上がってはいるものの、確信じみた響きがあった。

今だ目を開かないのは、涙で瞼が開きづらいからだろう。

「ああ」

はつきりと返事をする。

有馬の顔が僅かに緩み、安心したように息を吐いた。

「……フォルテ」

戻っていない、という安堵。

「何だ？」

ゆっくりと目を開く。ここ数日で見慣れた、フォルテの顔が目に入る。

有馬は深く息を吐いて、じんわりとたるさの残る両手を握る。

（……何でフォルテが？ あれ？）

今だぼんやりとした意識のまま、疑問が浮かぶ。

しかし背中を支える手にひどく安心して、離れる気にならない。

有馬は、触れ合う事は嫌いではない。

まだ無邪気に両親を好いていた頃は、よくこういう風にしてもらった記憶がある。

大きくなるにつれて物理的距離は離れ、やがて精神的にも離れてしまったが。

「……………今、何時？」

「1時……………10分だ」

「うん」

4時間近くも寝ていた事になる。

有馬はフォルテに体を預けながら、「ごめん」と呟く。

「何がだ？」

「いや……………フォルテ、仕事してるのに……………なんか、寝てて……………」

「別に、構わない。それより、何かあったのか」

寝る前の事を思い出してか、有馬は少し体を強張らせる。

「あ、……………えーと」

どう説明していいのか分からない。

有馬はテーブルの上の携帯を指差すと、ゆっくりと話しはじめた。

「……………あれ、携帯電話って言うんだけど……………遠くの人と喋ったり、

文章を届けるのに使う機械。シヴァさんが手紙届けたのも、これね」

「そうか……………携帯電話がどうしたんだ？」

「……………なんか。こっちに来てからも、繋がってたらしくて。いつぱ

い手紙、きてた」

フォルテが目を見開く。

「……………本当か」

「うん」

有馬の体が僅かに強張る。無意識だが、強く手を握り締めていた。

それに気づいて、フォルテはそっと左手を伸ばす。

「爪が刺さるぞ」

「……………うん」

大きな手が、有馬の拳を解く。有馬は目をぱちくりとさせたが、ふう、と息を吐いて大人しく手を開いた。

今までにない近い距離。

有馬は左耳でフォルテの鼓動を感じながら、ゆっくりと思いの丈を吐き出す。

「心配、してるんだって、思った。でも、怖かった」

「……………そうか」

「あたし、元の世界のことなんか、何も考えないで、連絡なんかしようとも思わないで……………みんな、す、捨てて」

有馬はじわりと熱くなる目を押さえようと、右手を引く。

しかし、フォルテの手が伸びてきて押さえられた。

「え、」

「泣くなら、泣け」

もう片方の手を伸ばそうとしたが、また押さえられる。

無理矢理両手を重ねられ、纏めて握るフォルテの手は、大きい。

「や、やだ、離してっ」

フォルテは言われた通りに手を離す。

そして代わりに、体ごと引き寄せた。

有馬の顔を自らの胸に押し付け、背中に腕を回して抱きしめる。

「擦ると赤くなる」

「……………っ」

「すまなかつた」

ぼろぼろと零れる涙を隠すように、頭を押し付ける。

服が濡れる事などまったく気にせずに、フォルテは頭と背を撫で続けた。

「も、もし、何かあってっ、む、向こうに帰っちゃったらっ、どう

しようかと、おもっ、て」

「……………帰りたくないのか？」

「か、かえっ、たら、怒られるっ」

泣きじゃくる有馬を撫でながら、フォルテは笑みを零す。

「怒られる、か」

昔は、ロボに怒られるのが怖かった。怒るだけで終わらないからだ。何かやらかす度に逃げて、どこかに隠れた事もあった。

その気持ちと同じだろうか、と微笑ましくなる。

「大丈夫だ。怒られるときは、俺も一緒に怒られてやる」

「ほ、ほん、と？」

「本当だ。約束する」

もしも本当に、有馬がうつかり戻ってしまう事態になったなら。

何としてでも追いかけて一緒に怒られるべきだと、フォルテは思う。

「それに、有馬のご両親に挨拶しなければな」

「そ、だね」

泣きながら、笑う。

フォルテは鼓動の早まりを感じながら、有馬の背中を抱きしめた。

「だ、抱きしめましたわ」

「やりますね、殿下……」

「ふむ、腰抜けではなかったようじゃの」

2人と1匹が隣の部屋から魔法で覗き見ていた。

幸か不幸か、フォルテと有馬は全く気づかなかったが。

9 あちらこちら（後書き）

家庭連絡された日に自宅に帰りたくない心情。

それはそうとやっと恋愛要素らしきものを。

10 閑話・魔領置き去り事件（前書き）

今回は先王、つまりフォルテの父親の若い頃のお話です。

10 閑話・魔領置き去り事件

心まで沈むような曇天の中、銀髪を後ろで結った若い男が必死の形相で走っていた。

「うおおおおおおああ！！」

蒼い目には焦燥が浮かび、汗と煤で顔をドロドロにしながら駆け抜ける。

その速度たるや人間の限界を超えているように見えるが、息切れはしていない。

何故なら、彼は強靱な体とスタミナを誇る獣人族だからだ。

「待てええええええええ！！」

「待つか　！！」

獣人の国アニマラーナ、第一王子　ダグラス・エルトニア・シェパーダ・ウォルフ・アニマラーナである。

その名から窺える通り、フォルテの父親　の、若い頃だ。

普段は明るく気さくで魅力的な青年だが、今はただ、必死である。

後ろからは魔物の大群が押し寄せて来ており、いくら魔力の多い王族といえど流石に分が悪い。

「　兄様ーっ！！」

そんな時、頭上から声。

声変わり前の少年のようだが、軽やかな声は少女のようにも聞こえた。

「アル!? な、何だつてこんな所につ」

「兄様が危ないと聞いていてもたつてもいられなくて 守護者殿に頼んで連れてきてもらいました!」

「……お前、これどうにか出来る?」

「無理です!」

「ばちこーんとウイソクをして、アル アルマータ・レラン・レトリーヴァ・ウオルフ・アニマラーナは逃げる体制に入った。

声も少女のようだが、見た目は更に少女じみている。

腰まで伸びた銀髪は先端が緩くウェーブし、兄と同じ蒼い瞳は円らで、長い睫に彩られている。

背丈も160センチに5センチほど足りないし、体つきも華奢。

どう見ても絶世の美少女だが、かろつじて服装のおかげで男だと分かった。

兄と同じ、金糸や宝石で彩られた紺色の詰襟。腰には杖と剣がある。

……まあそれでも、男装した美少女、と言った方が信憑性があるが。

「とりあえず、この場所で戦うのは不利でしょう。洞窟か何かあれば良いのですが」

「見渡す限りの荒野だな」

「はい!」

「先立つ不幸をお許してください……」

「兄様、気が早いです! これからミカ兄様もいらつしゃいますから!」

「ミカが……? そうか、ならいけるかもな!」

アルマータは銀糸を風に靡かせながら、兄に負けない速度で走る。

にこにこ笑つて腰の杖を抜き、時折魔法を放ちながら。

「……アル! 何で走りながら集中できるんだ?」

「魔法に名前を付けて簡易詠唱すればいいんですよ 《竜の雷》」

蛇のような東洋のドラゴンの形をした雷が、地面を舐めるように飛んでいつて魔物の一部を蹴散らす。

彼は論理魔法を得意とする。行動中の集中力の低下は、魔法式

に名前を付けて簡易詠唱する事で完璧に補っていた。

後に“魔法式名詠唱法”と呼ばれるこの手法は彼が考案したものと
して幅広く使われるようになる。

「本当か!? あー、えーっと 《火の玉》!」

ダグラスは剣を抜き、後方に向けて魔法を発動する。

ぼひゅん、と音を立てて火の玉が消え去る。

「……ちくしょう!」

諦めたように走りを早める。彼は現代魔法が苦手であった。

相変わらず背後の魔物たちは砂埃を上げて駆けてくるし、どうしよ
うもない。

仕方ないし迎え撃つか、と思い始めた頃 前方にストーンと着地す
る影があった。

「遅れて相済みませぬ、兄上、アル」

「ミカ!」

肩口に届かない銀髪に、2人とは違う紫の瞳。

服装は似ているが、色は黒。口元は幅広の黒い布で覆われ、まるで

忍者のような印象を受ける。

ミカエル・フィート・シエパーダ・ウオルフ・アニマラーナ。

彼は遙か昔の召喚者の祖国、“ニホン”の文化を愛している。

何分昔の話だから色々とずれているが、彼が目指すのは忍だった。

「アル、陣を」

「はい、ミカ兄様!」

アルマータは杖を振り上げ、美少女然とした顔に笑みを浮かべ、簡
易詠唱する。

彼の頭の中で、保存されていた魔法式が一気に引き出され、文字の
嵐と化す。

「《地形変質》 《隆起》」

間を空けず発動された、一般人なら1つ使うのも精一杯の魔法。

3人の周りの地面が、半径100mほど一気に隆起する。

巨大な壁が出来上がり、魔物たちは一瞬だけ躊躇うような動きを見

せた。

しかし本能が勝ったか、目を血走らせて再び突進してくる。壁際に追い詰めたという優越感もあり、勝ち誇ったような顔をしていた。

「相変わらずだな。すごいぞ」

「いえいえ。序の口ですよ」

「……うむ。行きますか、兄上」

「おう！」

ミカエルは両腰から、鍔の無い短めの刀を抜く。

白銀の片刃は魔力を帯びて、ざらりと凶暴に輝いた。

「では行つてらっしゃいませ、兄様方」

「いざ参るっ！」

「行くぜっ！」

背後は、高い壁。半円形に切り抜かれたたった3メートル程の本陣に、アルマータが立つ。

その両脇に進み出るダグラスとミカエルは、まるで姫君を護る騎士のようだった。

1時間もすると、魔物の大群は3分の1程までになっていた。

元々この3兄弟は、個々でも能力が高い上に3人揃うと更に強い。アルマータの補助魔法を受けながら残りの2人が敵を切り払う。

戦法も何も無い力押しだが、そう簡単に出来るものではないのだ。無茶な戦いを可能にするのはアルマータの豊富な魔力と魔法。

かといってダグラスとミカエルのどちらかが抜ければこうは行かない。

防御の厚い戦士型のダグラスに、速度を誇る一撃必殺の盗賊型、ミカエル。

戦士、盗賊、魔法使い。個々の力量が高いならば、理想的なパーティ

イである。

「 《狼王の咆哮》 」

そしてアルマータが、今までと違ったタイプの魔法を放つ。頭上に現れた霧が巨大な狼の顔を形作り、口を大きく開いたかと思うと 千里の向こうまで鳴り響くような、咆哮を上げた。

「魔力の枯渇が近いです。撤収いたしましょう」

魔物が一斉に脅えて硬直する中、涼しい顔でアルマータが言う。しかしその言葉は本当のようで、頬にじわりと汗が浮いていた。

「承知したっ」「分かった！」

2人は一斉に、踵を返してアルマータの方へ駆ける。

好機とばかりに、脅えから回復した残りの魔物達が追ってきた。しかし

「 《隆起》 」

3人が近く寄った瞬間、アルマータは再び魔法を発動させた。

足元が勢い良く隆起し、高く高く上がって行く。

群がる魔物達を眼下に、どんどん地面は隆起していた。

「よく考えたら、討伐してやる義理も無い訳だな」

「適当な所で逃げればよかったですね」

「全くでござる」

「はあ……………」

そして壁の頂点にたどり着き、最早山の頂上のようになったそこに3人、転がる。

「で……………」

「……………」

「……………」

「どうやって、帰る？」

久しぶりの戦闘に血が湧き立っていた3人は、がっくりと落胆した。数十年前、魔領のとある荒野での出来事である。

「で、3人で魔王の城まで行って、頭下げて転移してもらった」

「あの時は笑われましたねえ、魔王様に」

「お前らは勇者一行か！とおっしやっていたな」

物真似が似ていたのか、2人はくつと横を向いて笑いを堪える。王城の庭で白いテーブルを囲み、錚々たる面々が談笑していた。

国王ダグラス。

騎士団長ミカエル。

宰相アルマータ。

ダグラスの膝の上にはフォルテ、ミカエルの膝にシヴァが座って機嫌よく話を聞いている。

「お前らもそのうち魔領に投げ込まれて大人になるのか……」

「いえ、守護者殿は何故か殿下とシヴァに甘いですからねえ」

「そうでござるな。我らはこの年頃には森に3日放置されたりしていたというのに」

不満げに漏らすアルマータ。どうやら幼い頃から過酷な修行を課されていたらしい。

そんな苦労も知らず、幼い子供たちは無邪気にはしゃいで父親にねだる。

「ちちうえ！ おれも魔領にいつてみたい！」

「まだ早いなあ」

「父上、ぼく、魔王様にお会いしてみたいです」

「うーん。それもまだ早いですね」

あれから10年。

18歳だったダグラスは28歳になり、ミカエルは26歳、アルマータも24歳。

同じ年に生まれたダグラスとアルマータの息子も、5歳になった。

「国王なっちまったし、息子も出来たし。もうあんな無理はできね
ーなあ」

「してもらっては困り申す。戦は拙者に任せて頂きとうござる」

「そうですね。あの時は高揚してたから平気だったんでしょけど、
2人とも相当傷だらけでしたよ」

「え、そうか？」

「すぐにその場で寝始めたので、寝てる間に治療したんです。

陛下なんて、背中が一字に切れてましたし。団長殿も、正直死ぬ
ほど血が流れてました」

「……若さ故の過ちというものでござる。今はもうそのような無茶
は致さぬ」

相変わらず黒い布を巻いたミカエルは、まだ結婚はしていない。

しかし恋人が出来たらしく、兄と弟は暖かい目で見守っていた。

「ま、若いつてのは楽しいもんだ」

はっはっは、と笑う国王。

漸く安定し始めた国内が完全に安定するのは、これから更に10年
後。

ダグラスが死ぬまでは、14年。

しかしそんな事は露知らず、王家の面々は和やかに談笑するのであ
った。

10 閑話・魔領置き去り事件（後書き）

戦闘シーンは難しいですね。戦闘らしい戦闘してませんが、精進精進。

そついう訳でフォルテとシヴァの父親と、その間の兄弟のお話です。次世代組より個性のきついキャラなので書きやすいです。

あ、みてみんなにいくつか絵を上げてみました。名前は同じですので、よければどうぞ。

11 寝る子は育つ

『元気してるか』

夢の中で、なんとなく懐かしくなった兄の顔を見た。

有馬はうん、と頷く。

『そりゃ良かった』

たったそれだけの、夢だった。

有馬は何時も通り柔らかな寝具の中で目を覚ました。

頭が痛い。はつきりしない意識の中で、のろのろと気だるい体を動かす。

「……………」

体が凄まじい倦怠感に包まれている。

有馬はぼんやりする頭を働かせて、寝すぎたか、と思い至った。

昨日、どうやら泣き疲れたらしく、フォルテの腕の中でそのまま眠ってしまった。

そこからの記憶は無いが、夕食も食べずに寝たのは確かである。

体は清潔のようだから、恐らく寝ている間に風呂に入れられたのだろう。

午前中を寝て過ごしておいてよく目が覚めなかったな、と有馬は感心する。

起きて1時間で寝て、また起きて1時間と少しで寝て。結局昨日起きていた時間はたった2時間と少し。

そこまで寝れば頭痛もするし、だるくて当然だろう。

コンコン、と扉がノックされる。

「……ん」

静かに開いたドアから、美しく微笑みを湛えたクレイアが入室してくる。

「おはようございます、アリマ様。お体はどうですか？」

「あ、たま、いたい……だるい」

声も掠れている。有馬はゆっくりと手を動かし、目を擦る。

「った」

結局、泣きはらした目は痛かった。寝ている間にもまた泣いたらしく、涙が固まって開きづらい。

クレイアはそつと有馬の手を顔から引き剥がすと、有馬をゆっくり抱き起こした。

正直だるさで体が起こし辛かったので、有り難い。

「お顔を洗わせていただきます。よろしいですね？」

「……うい」

この時ばかりは、有馬も異論はなかった。もはや指先を動かすのも億劫だ。

有馬は従順に顔を洗われ、服を剥がされ、体も軽く拭かれる。

更に朦朧とし始めた思考のせい、一切の抵抗を見せない。

というかまた目を閉じてうつらうつらとし始めた所を、クレイアに何度も起こされる。

「お辛いかもしれませんが、起きていてくださいまし」

「う……い」

「寝てしまうと、もっと酷くなりますわ。あとで頭痛のお薬はお持ちしますけれど」

着せられた服は柔らかい綿のワンピースで、体を締め付けない。

けれど地味すぎる訳ではなく、紺色の布地の所々が黒いレースで飾られて優美に見える。

襟元や裾に金のラインが入っていて、有馬にとっても比較的好みなタイプである。

「朝食はどうなさいますか？　こちらへお持ちしましょうか」

「……や、あつちで……」

「かしこまりました。立てますか？」

有馬は力なく頭を横に振る。

クレイアはくすくすと笑って、有馬の背中と膝の裏に腕を入れる。

「っ！？」

軽々と持ち上げられ、有馬は体を強張らせた。

「く、クレイアさん」

「大丈夫ですわ。私の種族をお忘れですか？」

獣人族は力や感覚に優れた種族だ。

体格や防御力では竜人に劣るものの、膂力や瞬発力は竜人族を凌ぐ。尤も獣人族の中でも種族が数多くあるため、全部が全部そのタイプという訳では無いが。

ちなみに獣、といつても哺乳類だけではなく、鳥類や爬虫類、両生類の獣人も多い。

ようするに獣とは毛のある四足動物というより、動物全般を示しているのだ。

「……獣人」

「はい。これでも力は強いのですわ」

有馬はふと、3人の獣人らしい姿を見ていない事に気づいた。

イメージとしては獣の耳や尻尾のついた人間か、顔だけ獣か、服を着て歩く獣。

結局だるさに負けてそのまま抱かれ、連れていかれる。

居間のテーブルと椅子は、何時もと配置や形が違った。

「……？」

半月型のテーブルに、緩やかな弧を描く大きな椅子が、1つ。

「では、朝食をお持ちいたしますので」

丁寧に下ろされ、有馬は背凭れに体を預けてぼーっとする。

(……ま、いいか)

隣に座るくらい、何でも無い。

痛む頭を背凭れに乗せて、有馬は静かにフォルテを待った。

フォルテが居間に入ると、有馬は既に船を漕いでいた。

「まだ寝るのか……？」

思わず呟く。昨日は何故か寝ながら服を掴んでくる有馬を引き剥がせず、夕方まであのままだった。

夕方になると流石にクレイアが来て起こそうとしたが、起きない。仕方ないので引き離して風呂に入れさせてベッドに寝かせ、そして今に至る。

「有馬」

とりあえず肩を軽く揺らす。有馬は頭を不安定にゆらゆらとさせた後、ずるりと右側に向かって フォルテに向かって倒れこんでくる。

「……」

無言でその肩を受け止め、とりあえず隣に座ったフォルテは溜息を吐く。

「起きろ」

そして暫くの間、ゆらゆらと揺すり続けた。

「おはよ」

五分ほど経った頃。

有馬はようやく目が覚めたといった感じで、欠伸をする。

隣にフォルテが居る事に関しては特に何も言わず、テーブルの上に置かれたポットから自分で紅茶を注ぐ。

「大丈夫か？」

「なにが？」

物凄く危なっかしい手付きにフォルテははらはらしたが、とりあえずは見守る。

底に刻まれた魔法陣で保温・保護されているポットは冷めないし、落としたとしても中身は一滴も零れず、割れる事も無い。

とはいえ落とせば音はするし、もし足の上なんかには落としたり当然痛い。

「1日近く寝ていただろう。だるくはないか？」

「だるい。頭いたい」

ちびちびと紅茶を飲む。猫舌の有馬は、時折ふうふうと息を吹きかけている。

「そうか。もう寝るな」

「寝れないって」

熱いまま飲む事を諦めたのかカップを置いて、おかしそうに笑う。

フォルテは呆れたように「寝てたじゃないか」と言った。

曖昧に笑って、有馬はだるい体を目覚めさせようと体を動かし始める。

ふらふらと足を彷徨わせる姿はお世辞にも行儀が良いとは言えないが、フォルテは特に文句は言わなかった。

朝食が運ばれてくる。有馬は昨日昼も夜も食事を摂っていないため、物凄く空腹だった。

とはいえ寝すぎのせいか口が何となく渋い感じがして、眉を顰める。

「有馬、食べられるか？」

気遣うような言葉に、生返事を返す。

有馬は生野菜や果物ばかりピラに詰め込んで食べる。

正直言つて肉やら魚が食べられる気はしなかった。

「アリマ様、これならどうでしょう。魚なのですが、あっさりしていますわ」

「……？ あ！」

クレイアに勧められたものを見て、有馬は目を輝かせる。

そこにあつたのは確かに、シーチキンだった。

有馬はサラダを詰め込んだ上からそれを乗せて、はぐはぐと頬張る。

「いかがでしょう？ 海辺の方で、つい最近考案されたそうですの」

「うまい」

「それは結構にございますわ。また仕入れましょうか？」

「ん！」

有馬は左手の親指を立てる。

彼女は食事を摂るのが面倒な時、大抵はシーチキンを白米やらパンに合わせて食べていた。

まさかこちらに来てから食べられるとは思っていなかったらしく、嬉しげだ。

「食事が終わりましたら、こちらを水で。お体に合えばよいのですけれど……」

「ん、ありがとう」

薬包紙らしき四角い包みを乗せた小皿を置く。

有馬はもう一つピラを取ると、中にサラダとシーチキンを詰め込んで食べた。

「昨日は、ごめんね」

食べ終わって薬を飲んだ有馬は、思い出したように謝った。

「何がだ？」

「ずっと抱っこしてもらったまま寝てたみたいだし」

「……抱っこ、ってな」

妙に子供じみた物言いに、フォルテが苦笑する。

「俺は一応、抱っこじゃなくて抱き締めたつもりだったんだが」

「へえ、そう？」

有馬はにやにや笑いながらフォルテの腕をつつく。

「随分と女慣れしてらっしゃるよーで」

「……お前な……俺にそういう経験は一切無いからな」

「へえー？」

「小さい頃から、伴侶以外の女は絶対に手を出すな、と言われてきたんだ」

「男は？」

「阿呆か」

溜息を吐いて、フォルテの手が有馬の頭を軽く押さえる。

阿呆、と言われたにも関わらず有馬は目をぱちぱちと瞬かせ、笑顔を浮かべた。

「もう一回言って」

「……阿呆」

「うわ、何か……良い！ フォルテもアホとか言うんだ」

有馬はほんのりと頬を紅潮させてフォルテを見つめている。

思い掛けないタイミングでそんな目を向けられ、フォルテは狼狽した。

「……そういう趣味か？」

「さあ？」

首を傾げる。実の所、有馬は自分が何をされて嬉しく思うのか、あまり知らない。

というか、される事よりもしてくる相手の方が重要なのだろう。

「フォルテ、仕事は？」

「ああ……そうだな」

フォルテは何故か、意を決したように真面目な表情で立ち上がる。

「？ がんばってね」

「ああ」

有馬は知らないが、彼はこれから 昨日休んだツケを支払う必要があるのだ。

積み上げられた書類の量を見て、珍しくも彼が逃げ出したい気持ちになったのは言うまでもない。

「あ、ロボ。どこ行ってたの？」

部屋に戻った有馬は、先ほどは居なかつた筈のロボを見つけた。ソファの足元に伏せているロボは、くい、と鼻先を上げる。

「少々出歩いておっただけじゃ」

「ふーん」

有馬はソファに座り、足まで乗せる。

「ベル」

今日のスカートは胡坐を搔きにくいいため、足を揃えて斜めに座っている。

杖からきらきらと光る精霊が現れ、有馬は溜息を吐いた。

「……いつ帰ってきたの？」

『昨日だけど』

「昨日のいつ？」

『昼』

思い切りニヤニヤしているベル。昨日も杖は、このテーブルに置かれていた。

つまり、全て見られていた訳だ。

「……まあ、いいや。観賞代」

『じゃ、自然魔法を教えるって事で』

「よろしい」

有馬は満足げに笑う。

そういう訳で、今日は自然魔法の練習を始める事となった。

自然魔法とは、文字通り自然魔力マナを操る魔法の事だ。

本来マナを扱えるのは精霊や神獣のみだが、他の生物にも時折扱える者が生まれる。

とはいえ適性があっても、使い方を知らないまま一生を終える事が多い。

しかし運良く師を得たならば、一騎当千の大魔法使いにもなり得る。

『マナの流れは掴める？』

「んー」

マナの流れを掴むのは、魔力の流れを掴むよりは簡単に思えた。血流よりも風の方が分かりやすい、という事だろう。

『そう、そんな感じ。最初は風からだね』

「風ねえ」

『一番簡単なんだ。風が空気の流れだって理解できればね』

「それくらい分かるけど」

『ま、ぶつちやけ感覚だからねえ。そうそう、《精霊眼》使ってみるといいよ』

有馬は頷くと、渋々と言った顔でゆっくり瞬きをする。

「つつ」

瞬時に視界が色とりどりの靄に包まれる。

自分から立ち上る金、ロボから染み出す銀、ベルから漂う白金。体表から数センチで解けて消えるそれは、魔力とマナの輝き。

『無色の所がマナだよ。場所の影響とかで色つきになるマナもあるけど』

「これを動かせばいいんだよね」

『うん。頑張つてー』

へらへらと笑うベルを横目に睨んで、有馬は気合を入れた。

有馬はとりあえず、感じているマナの流れを引き寄せた。

まるで手足を動かすようにあっさりと流れてきて、しかし髪をそよがせる事のないそれ。

触れる感覚は曖昧で、温度も感じないのにそこにある事が分かる。

「……えい」

おもむろに右手を上げ、つい、と指を振る。

そこにあったマナが感じられなくなると同時に、室内にふわりと風が吹いた。

『おお、すごい』

確かに、感覚で操るとしか言いようが無かった。

今やった事を説明しろ、と言われても出来ないだろう。

「次は？」

『じゃ、水。そのコップに水を満たして』
やる事だけを提示し、丸投げする。

有馬としてはもう少しコップを教えてもらいたいが、先ほどの感覚からして言葉に表し辛いのだろう。

黙ってコップを握り、とりあえず中にマナを集める。

つい最近分かった事だが、空気中のマナの量にはムラがある。

どうやら多い場所と少ない場所が存在しているのだ。

「水、ね」

水 酸素と水素、 H_2O 。有馬はそんな事を思い出しつつ、コップの中のマナを操る。

人差し指を差し入れて、マドラーのようにくるりと回す。

一周する時には既にコップは清涼な水で満たされていた。

『よくできました。はい飲んで飲んで』

「……………うまい！」

水の味など分らないが、冷たくて喉に染みる。

有馬は「これで放り出されても生きていける」とシビアな事を呟きつつ、魔法の便利さに感心するのであった。

11 寝る子は育つ（後書き）

— 晩寝たら忘れる凶太さ。

12 おつかれさま

昼食になってもフォルテは帰ってこなかった。

どうやら今日中に片付けるべきものも多いらしく、机にかじりついているらしい。

「そういう訳で私も忙しく……なかなか魔法をお教えできず、すみません」

「いや、いいって。半分あたしのせいだし」

「そんな事はありませんよ。殿下のせいです」

そう言うてにっこりと笑うシヴァにも、何となく久しぶりに会うような気がした。

それだけ忙しいのだろう、と有馬は同情する。

「それに、本日中には落ち着く予定ですよ。ああ、あと　こちらを」

「……本？」

シヴァが二冊の本を手渡す。

両方合わせて4センチメートル近い厚さになる本だ。

最近覚えたこちらの文字で、それぞれ“論理魔法の手引き”、“言語魔法呪文参考書”と書かれている。

「よければどうぞ。守護者殿がクレイアに読んでもらえば読めるでしょうし」

「ああ、あたし読むのはなんとかなるようになったよ」

「……はい？」

「言葉ももうちよっと慣れれば、翻訳魔法といってもいいって」

受け取った本をぱらぱらと捲る有馬に、絶句する。

こちらに来てまだ一週間足らず。確かに口ボは“あと2日ほど”とは言っていたが、半信半疑だった。

「……一体どういう教え方を？」

「睡眠学習？」

「物凄く気になるんですが……では、そろそろ」

暢気に手を振って、どこかふらふらしながら出て行くシヴァを見送る。

疲れてるんだな、と的外れな事を思いながら。

午後からは言語魔法の勉強がてら、その本を音読してみる事にした。

「えーっと。本書における魔法はいわゆる現代魔法を指す」

言語魔法は文字通り言語が重要な魔法である。

はつきりと綺麗に発音しなければ発動しなかったりするので、発音テストの代わりにもなる。

有馬はややたどたどしい発音で音読しつつ、時折杖を取って魔法を試し打ちしていく。

「……《風よ、渦巻け》」

空中に小さな旋風が生まれる。

「おお、出来た」

杖をくるくると振って、嬉しいのか嬉しくないのか分からない声を上げる。

マナが掻き回されて光り、ついでに風が発生して旋風を打ち消した。

「……あ」

『ありや』

どうやら自分で作ったものでも、現代魔法より自然魔法の風が勝るらしい。

有馬の得意不得意によるものかもしれないが。

「んー……《火よ、灯れ》……《灯れ》！」

「力むでない。言いなおしたら無効になる」

「《火よ、灯れ》！」

杖の指す方向の空中に、ぼつ、と赤い火が生まれる。

「で。こうすると」

左手の指をつい、と振る。青い炎が赤い炎を薙ぎ、打ち消した。

「……ふむ？」

「ところで、火って温度が高い方が青くなるんだよ。知ってた？」

「へえー！ そうなん……あれ？」

何かに気づいたベルが、ぽかんと口を開ける。

「あと、金属を燃やすと色が違う火になるんだよ」

「ほう。面白いな」

豆知識を披露しつつ、両手で炎を出したり打ち消したりする。

横で茫然としていたベルが有馬の肩をがしりと掴んで叫んだ。

「ちよ、ちよ、ちよっと！ 両方一度に使えるの！？」

「え、使えないの」

「普通は無理、というかそもそも魔法は一度に1つしか発動出来ないものじゃが」

「そうだよ。複合魔法を作るなら兎も角、同時発動なんて……」

珍しく余裕の無さそうな様子到有馬はニヤニヤしている。

自分が常識を堂々と蹴り破った事は特に気にしていないらしい。

「でも、種類の違う魔法だからだと思っよ」

「……ああっ！！ そうか！ そんな簡単な事に……！！」

ベルがぱつと立ち上がり、ゆったりした服のどこかから杖を2本取り出す。

どちらも白色のエーテルで作られた品で、金属や宝石の飾りがついていて見事な品だ。

「おお？」

「《火よ灯れ》！」

短縮された詠唱だが、しっかりと右の杖の先に炎が生まれる。

ベルは美しい顔をきりつと引き締め、左の杖を振った。

同色の炎が杖の先に現れ、その顔がみるみる喜色満面になる。

『で……出来た！ 出来たーっ！』

「はいはい、おめでとう」

全力ではしゃぐベルを生温かい目で見る1人と1匹。

『うわあ……有馬！ いや、我が君ブランカ！ 最高！』

「何だかよくわかんないけど、はしゃぎすぎ」

『だって！ だってね！ 一度に2つ魔法が使えるなんて！』

魔法を同時発動する、という発想は無い訳ではなかった。

しかしその研究は既にされていない。何故なら、現代魔法においては明らかに不可能だからだ。

同時に2つの呪文を唱えられる者はいない。顔が2つあれば別かもしれないが。

論理魔法も魔法式を展開して発動するには集中しなければいけないし、同時に2つの式に意識を向ける事は不可能。

よって先人は、同時に発動するより2つの効果を持つ複合魔法を作る方が良いと判断したのである。

尤も複合魔法はかなり難しい上に使用魔力も単純な合計ではなく、使える人間も限られるのだが。

「まあ、滅多に使わない方がいいよね」

「そうじゃろうな」

『あー。目立つし……いや、複合魔法に見せかければいいんじゃない？』

「あ、そっか。なるほどなるほど」

日本人らしくひたすら拘りつつ、有馬とベルは自然魔法と現代魔法の同時使用について研究していく。

ちなみにロボは自然魔法や原始魔法も使えるが、現代魔法には手を出した事が無いらしい。

彼からすると細かい過程が面倒なのだそうだ。

普段使っているのは特殊魔法に近い。神の血と一緒に得た能力だ。

いわゆる神術や神聖魔法と呼ばれるもので、生物を直接傷つけるが

出来ないが、それなりに応用が利く。

尾の一振りで連発できるため、同時使用の必要はあまり無い。

「できるだけ動作に差を無くして　　っていうか、一度に発動できれば……」

『片手は隠しておいて、袖の中でちろつと動かすだけに　　』

「いや、流石にまだ対象に向けないと難しいし　　」

真剣な顔で工夫を繰り返す2人を暫く見ていたロボだが、やがて瞼を落として昏寝に入った。

「殿下」

一方のシヴァは、仄かに疲れを滲ませた顔で呼びかけた。

「……何だ？　俺は忙しい」

「見れば分かります。……アリマ様の事なのですが」

シヴァ以上に疲れた顔で書類を捲っているフォルテの肩が、ぴくりと動く。

「何かあったか」

「いえ。……学ぶ速度が速すぎるのです。本人曰く、睡眠学習との事です」

「学ぶ……ああ、言葉の方か？」

「ええ。もう少し慣れれば翻訳魔法を解いても構わない、と」

胡乱げな顔でシヴァに顔を向け、聞き返す。

「慣れれば？　つまりもう理解はできていると」

「そういう事でしょう」

シヴァの方は諦めの境地に至ったような顔で、執務室のソファに腰

を下ろす。

そして目の前のテーブルに積みあがった書類に手を伸ばし、溜息を吐く。

「守護者殿は、どういう教育方法をしてるんだ……」

「ですから、睡眠学習だそうです。私には意味が分かりませんが」

「夢の中で教えている、とか」

「へえ。で、どう効率上がるんです？」

「……そうだな」

2人はそれきり黙りこんで、時折事務的な会話を交わしつつも書類を捌いていった。

日が落ちる頃になっても、書類はまだ残っていた。

尤もこの部屋に窓はなく、外の様子を窺い知る事は出来ないが。

「1度、夕食に戻るとするか」

「……どうぞ。ああ、私の分も頼んでおいていただけますか。軽いもので良いですので、ここに」

「ああ」

精根尽き果てた表情で、フォルテはゆらりと立ち上がり、シヴァはがくと机に突っ伏す。

「ここまでくると、いっそすぐに戴冠式を執り行いたくなりますね」

「しっかりしろ」

あまりに迷走した言葉に、フォルテは思わずその背中を軽く叩いた。

「いやあ、この国まで呪いたくなりますね、全く」

「……貴族の前で言うなよ、絶対に」

恐ろしく弛緩しきったシヴァは、放っておけば色々危ない発言を繰り返しそうだ。

今日1日で何度も溜息を吐いたが、フォルテは一際深い溜息を吐く。

「……というか、別に遅らせなくとも良かったのではないかと、思うんだが」

「何をおっしゃいますか……今更。どうせ慣習のせいで3ヶ月は掛かるのですから、倍に伸びたって大して変わりません」

この国では王位を継ぐ前に、準備期間を設けている。建国時から続く慣習だ。

王となるには国民の信頼を得てから、という名目で国王代行として執務などを行う。

期間は3ヶ月。無事に勤め上げてやっと、戴冠式。

尤も、勤め上げられなかった国王は今だかつて居ない。

それでも愚王と呼ばれた者が存在する事から、あくまで慣習でしかないのだろう。

またこの期間には、もう1つの目的がある。

5代ごとの国王が伴侶を召喚し、この世界に慣れさせ、序でに親睦を深める。

召喚する資格を得るには、王位を継承する事が確定しなければいけない。

つまりこの代行期間の間に召喚する訳で、自然と期間は重なるようになっていくのだ。

「そうか……まあ、良いんだが。フォローは頼んだぞ」

「分かっていますよ」

まあ、今となつては殆ど形骸化したようなもので、王の顔見せの意味が強い。

されど今のこの国やフォルテ達にとっては、全くもって都合が良い慣習だった。

「……兎に角、打てる手は全て打つ。出来るだけ先延ばしだ」

「殿下こそ、貴族の前でそんな事は絶対に仰らないでくださいね。勘違いされますよ」

「そうだな。じゃあ、暫く休め」

6カ月の間に、せめて尻尾だけでも掴まねばならない。

3代前の国王　愚王、狂王と呼ばれ悪名高いバルガス。

かつて彼に賛同した者や、彼の信奉者たちの残党を、全て消し去る

ために。

「ええ」

突然すぎるダグラスの死も、明らかに関連した事だと2人は確信していた。

何せダグラスは死のたった一ヶ月前、やっと仕上げだ、と笑っていた。

お前には苦勞を残さずに済む、と。

「お気遣い、ありがとうございます」

扉の閉まる音を聞くと、シヴァはテーブルの上につ伏したまま寝息を立て始める。

どこか人間離れたような彼だが、こうしていると 何となく年相応な、受験疲れの学生のように見えた。

疲れきったフォルテを出迎えた有馬は、妙に機嫌が良かった。

「座って座って」

「……ああ」

なんとなくその言葉に違和感を抱いたが、疲れで考えるのも面倒なフォルテは一先ず椅子に座った。

「あ、クレイアさん呼ぶ？」

「呼んでくれ。ああ、ついでに執務室のシヴァにも軽食を」

「うい」

有馬は壁にかけられた通信用の魔道具に触れる。

魔道具というのはつまり、魔術によって魔法を込められた道具だ。

三角錐のような形の底の部分を口に近づけ、用件を伝える。

残念ながら一方向の通信しか出来ないが、クレイアには必ず伝わるようになっている。

受信する方の魔道具はクレイアがアクセサリーとして身に付けているのだ。

「フォルテ、疲れた？」

「……それはもう」

「おつかれー。肩をもんであげよう」

有馬はいそいそとフォルテの後ろに回り、両手で肩を揉みはじめ。以外にも力強いその手が凝った肩を揉み解していく。

「上手いな」

「にーちゃんに鍛えられまして」

ぐいぐいと、体重をかけるように押す。

ぱらりと黒髪がフォルテの肩に落ちてきて、離れていく。

今だに染み付いたシャンプーの香りが、フォルテの鼻を擦った。

「そうか。そういえば兄が居るんだったな」

「うん。肩揉めとか、腰踏めとかよく言われた」

「……仲が良いんだな」

「そこそこね。まあ、血の繋がった人の中では一番信用してたよ」
相変わらずの控えめな表現で言うが、有馬の兄に対する信頼は絶大だった。

兄は数馬という名前で、5歳年上の20歳。一応は社会人だ。

自宅の近くで小さな喫茶店を営む傍らで小説家をしている。

有馬よりも頭も顔も良く、猫被りではあるが非常に愛想が良かった。幼い頃からその彼に可愛がられて育った有馬は、色んな点でその影響を受けている。

「有馬とは似ているのか？」

「性格はちよつと似てると思うけど、見た目はあんまり」

「そうか」

猫を被っていない素の数馬は自分と妹本位で、口が悪く率直、適当だが要領が良い。

けれど有馬には優しく、唯一の理解者であり家族であり、叱ってくれる人間だ。

「……あたしってさあ」

「？」

「我ながら、奉仕の心が足りないんだよね」

数馬も有馬も、親や祖父母のことが嫌いだ。

理由は特に無いが、2人の趣味や嗜好は似ている。だからたまたま2人が嫌うタイプの人間が家族だった、としか言いようが無い。

「……まあ、喜んで尽くすようには見えないな」

「うん。だから、自分で肩を揉んであげよーと思ったのは初めてだから」

感謝しろ、とばかりに言う。フォルテからは見えないその表情は、少し恥ずかしげだ。

「ありがとう」

その言葉を聞くと、照れたように笑ってフォルテの後頭部に額を寄せる。

こつんと頭同士がぶつかり、吐息が首筋にかかった。

「っ！」

フォルテが驚いたように目を見開く。有馬としては殆ど無意識の行動で、気にもかけていない。

兄とはしょっちゅうくっ付いていたし、この程度ならスキンシップの内にも入らない。

尤も、正面から抱き締められたのはフォルテが始めてだったが。

「あんまし、無理しないで、ねー」

「……ああ。……ん？」

「んー？」

その時、フォルテはやっと違和感の正体に気づいた。

「言葉……もう喋れるのか」

「あ、うん。違和感ない？」

「全く無かった。……本当に早いな。どういう教え方をされたらそうなるんだ」

「よく分かんない。寝てる間に覚えてたような……」

その時、ノックの音が響く。どうやらクレイアが食事を持って来たようだった。

有馬はぱつと顔を離して椅子に座る。横のフォルテは離れた温もり

をどこか名残惜しく思いながら、ぐったりと背凭れに体を預けるの
であった。

12 おつかれさま（後書き）

ちろつと裏事情を出してみました。

ところでバルガスとダグラス、ごっつい名前でしかも若干音が被ってしまった。

自分で間違えないように気をつけます。変える気は無し。

13 猫、襲来

異世界生活も1週間。7日目の朝は爽やかで、有馬はベッドを這い出て伸びをした。

二重の意味で身の丈に合わないベッドにも、着ている気がしない程軽くて滑らかな寝巻にも、もう慣れた。

人間は郷に入っては郷に従い、朱に交われば赤くなる生物である。

「おはようございます、アリマ様」

絶妙なタイミングでクレイアが入ってきて、カーテンを開けて部屋に光を入れ、手早く朝の準備をこなしていく。

窓の外は快晴。有馬の過ごす空間では、ここからしか外を見る事が出来ない。

有馬は窓の外をぼーっと見て、ふと窓枠の向こうの塀のような所に目を落とし、そして小さく口を開けた。

「ね……」

「? ……あら、猫ちゃん」

素で猫ちゃんと言うクレイアに感動しつつ、有馬はその猫をじっと見る。

コラットという種類の猫によく似ている。銀青の毛並みだが、毛先だけ銀色にきらきらと輝く。

朝日を浴びる体はしなやかで、その瞳は両目で色が違う。

右に琥珀を、左に翠玉を嵌めこんだような煌く瞳に、釘付けになった。

「やっべ……」

「どうなさいますか? ……ああ、もしかしたら猫の獣人かもしれ

ません。魔法で確かめるまでは入れてはいけませんよ」

「え、……た、確かめようよ」

猫の獣人、という言葉にぴくりとした有馬だが、目先の猫が逃げしまわぬか戦々恐々している。

クレイアは仕方ないですね、という風に溜息を吐いて「少々お待ちください」と部屋を出て行く。

有馬は窓に寄って、じつと猫と目を合わせた。

「美人な猫だなあ……美猫か……」

猫はのんびりと丸まったままこちらを見ている。

見れば見る程美しい猫だし、野良猫とは思えないほど毛並みに艶がある。

暫くするとクレイアが戻ってくる。手には小さな円筒のようなものを持っていた。

「少々お下がりにくださいまし」

「うい」

有馬は大人しく下がる。クレイアは窓を細く開いて腕を伸ばし、円筒の先端を押し付けた。

そのまま数秒。猫は円筒を見つつも、嫌がってはいないらしくぼつとしてる。

「……どうやらただの猫でございますわ。中に入れましょうか」

「うん！……その道具は何？」

「獣人に押し付けると反対側が光る道具です。このように」

クレイアは猫を抱き上げて有馬の腕に降ろした後、自分の腕にそれを押し付ける。

反対側がぼんやりと紫色に光った。

「なるほど。……っかわいい、猫かわいい」

有馬が動物好きなのは今更説明するまでもない。

「飼うのであれば殿下に了承を取ってくださいませ」

「うん、もちろん」

「では、お着替えを。猫ちゃんは暫く離しててください」

「……………うん」
名残惜しげに猫を離す。ベッドの上に丸まった猫を一撫でして、有馬は着替えるために床に足を付けた。

「猫、か」

「飼っていい？」

「別に良いが……普通の猫か？」

「さあ。別に喋ろうが魔法使おうが、見た目がこれなら何でも許せる」

フォルテが呆れたように溜息を吐いた。

有馬の手は膝に乗る猫を撫でていて、暫く離しそうにない。

「もし人語を解するようだったら、注意はしておけ。守護者殿が居るから滅多な事は起きないとは思うが……」

「うい。何かあったら言うよ」

「ああ」

あっさり猫を飼う事が決まる。

有馬は上機嫌で食事を取り、猫も用意された餌を床で行儀良く食べていた。

「……………もしかすると、密偵という可能性もある。獣の言葉を介する者も稀に居るし、意思を読み取るならもっと居るからな」

「あ……………そっか。でも、ここに置いた方が良いよ。もう見られたんだし、戻って報告させない方が先決だつて」

「まあ、そつだな。ひとまず外には出さないでおけ」

「あいあいさー」

にゃうん、と合わせるように猫が鳴いた。

フォルテは今日も忙しいらしく、すぐに執務に取りかかった。

有馬は何時も通り魔法の練習でもしようと考えつつ部屋に戻る。

そこに居たロボが、勢い良く顔を上げた。

「……………」

「え、何？」

ぎろりと蒼い目が有馬の方を　正しくはその腕の中の猫を睨んでいる。

「……………何の真似じゃ……………ブランカから離れよ」

いきなり剣呑なロボに困惑する有馬の腕から、ひょいと猫が飛び降りる。

テーブルに降り立って優美に尻尾をしならせた猫は、宝石のような両目を細める。

「え、マジで密偵ルート」

思わず呟く。ロボは猫を睨み、猫はゆらゆらと尻尾を揺らしている。ざわり、と背筋に悪寒が走った。

「！」

思わず杖を取って壁際に寄ると、ますますロボは毛を逆立てて威嚇する。

「好い加減にせぬか　ディアヴァルシア！」

有馬は2匹が旧知である事を理解しつつも、杖を握り締めて扉に背中を押し付ける事しか出来ない。

目の前の猫の底知れない何かに、本能的な脅えが発生する。

……………ついでに、怒るロボがかなり怖い。そういえば最初はロボに脅えたな、と有馬は思い出した。

(にしても、迂闊だった、かな。ロボの手に負えなかったら……………)じわりと汗を滲ませて見守る。猫はぴくぴくと耳を震わせて、その口を開いた。

漸く聞こえたその声は、思いのほか涼やかなアルトだった。

「暇になってしまったから来たんだ。そしたら素敵なのが居たから、つい」

「ついじゃないじゃろう！　国はどうした、国はっ！」

心底呆れ返った、そして怒った声を上げるロボ。

新鮮だなーと場違いな事を考えつつ杖の底を叩いてベルに呼びかけ

る。

……返答が無い。有馬は心中で舌打ちした。

「だ、か、ら。暇になったと言ったただろう？ 察してくれ。あと国じゃない」

「……え、王様なの？」

「そうさ。生まれついで王様だったのさ」

「ブランカ、危ないから近寄るでないぞ。そやつは」

「ああ、まだ言わないでくれ、驚かせるのが楽しみなんだよ」

「王は王でも、魔王じゃ！」

「全然聞かないなあ、相変わらず」

有馬は啞然とした後、妙に冷静な気分で納得した。

なるほど魔王なら脅えても仕方ないな、と。

「ま、いいか。ネインクルス・アヴロニータ・ディアヴァルシア。

前魔王だよ、よろしく頼む」

「はあ……」

恐ろしい拾い物をしてしまった、と有馬は溜息を吐いた。

猫はそんな有馬の心情を知ってか知らずか、ひよい、と肩に飛び乗ってくる。

「う、わ」

「うん、濃厚芳醇、まさしく甘露の如く 素晴らしい魔力だ」

べろりとざらついた舌が首を這う。先ほどとは違う悪寒に、有馬は杖を取り落としかけた。

ぶつつん。

今度こそ何か切れたような音がした、ような気がした。

ざわり、とロボの毛が逆立ち、蒼い目が怒りに爛々と光る。

「ひっ」

結論から言つと、ロボの発した強烈な威圧感に有馬は耐え切れなかった。

「あ」

「!?!」

小さく喉を引き攣らせて倒れた有馬を、誰が責められようか。何せこの場の2匹は世界トップクラスの危険生物であり、その片方が本気で向けた殺気を浴びてしまったのだから。

「…………ふあ」

1時間後目を覚ました有馬は、微妙に信じられない物を目にする。

「え、何してんの」

不自然な姿勢で床に頭を摩り付けたロボと、隣で押さえつけられている猫、もとい魔王。

小さな頭を床に押し付けられ、2匹とも　そう、土下座しているように見えた。

「…………怒りに我を忘れ、よりもよってブランカを気絶させ…………不甲斐ない」

「本当だよなあ、ははは」

「貴様の所為だ。すまぬ、ブランカ、本当にすまぬ」

「え、いや…………あれ？　何が、あつたんだっけ…………」

有馬は気絶する前の記憶がすっぱり抜けているようだった。

猫が魔王だった所までは覚えてはいるが、そこから全く思い出せない。

「ロボだっけ。彼がちょっぴり怒ってね、殺気にびっくりして気絶したんだよ」

ちょっぴりどころではなく龍の逆鱗に触れたようなレベルだったが、嘘も方便である。

「あらまー。ごめんね」

「…………！　ブランカが謝る必要など無い！　我的手落ちじゃ」
本気で打ちひしがれるロボを撫でようとした有馬だが、体が動かない。

痛みもだるさも無いのに、ぴくりともしないのである。

「…………動けない」

金縛り状態。

ますますロボが額を床に打ち付けんばかりの勢いで謝った。

「……すまぬ。すまぬ」

「いや、いいって」

「殺気で体が強張ってるんだろっよ」

ひよいと猫がソファに乗り、有馬の頬を一舐めする。

それだけで体の強張りが取れて動くようになり、有馬は目をぱちくりとさせた。

「あ、ありがとう」

「礼には及ばないさ」

ゆっくりと体を起こす。魔王は平然と有馬の足の上に乗る、腹まで見せた。

「っっ」

殆ど衝動的に手を伸ばし、猫の顎の下あたりを攪り、腹を撫でる。

魔王だろっつが触り心地は最高で、「ごろごろと喉を鳴らす姿は恐ろしく可愛い。」

「このっ……魔王め！ 可愛い！ ちくしょう！」

「ふっふっふ。好きなだけ撫でてくれてかまわんのだよ」

有馬は葛藤しながらも撫でるのをやめない。

その様子を見てロボが再び怒りを浮かべる。

「貴様……」

「おやおや、焼きもちかな？」

にゃーんと声を上げて尻尾を有馬の腕に絡める。

「くやしいつ……っっ……でも撫でちゃっ」

色んな意味で危ない台詞を吐きながら煩惱に任せて撫でまくる。

柔らかな毛並みはそれはもう撫で心地が良く、掌で整えるとまるで絹のように滑る。

「……。それで……前魔王とはどういう事じゃ」

「諦めが早いなあ。言葉通りの意味だよ」

「譲ったのか、奪われたのか。それを聞いておる」

猫らしからぬ仕草でクスクスと笑い、猫は言う。

「奪われたよ」

悲壮感の無い言葉だが、ロボは渋面を作り、有馬も事情を察する。

「反乱つてやつ？」

「いや、そういう訳でも無いんだけどね。まさか寝込みを襲われて魔王の証を取られるとはなあ」

「阿呆じゃの」

「何とでも言ってくれ。まあ、可愛らしいお嬢さんだったから許したんだけど。向こうはそう思ってくれないようだね」

どうやら蹴落とされて亡命(?)してきたらしい。

有馬は能天気さに呆れながらも手を止めず、緩急をつけて撫で続ける。

「魔王つてもつところ、絶対的な力を持ってて、誰も逆らえないもんだと思ってた」

「その通りだね。ま、それも魔族相手だけのことだからねえ」

そう言いながらも心地良さそうに撫でられて喉を鳴らす。

「……よく分かんないんだけど、魔王つてどういうもの？ 魔族以外にとっては」

「人間派の種族にとっては畏怖と恐怖、忌避の対象じゃのう」

「獣人とは友好的さ。ながーい付き合いだね」

「ふうん……魔族に対して強制力はあるの？」

「魔王の証を持っていれば、自分の魔力がそのまま強制力になるよ。そういう道具だからね」

「……ふーん？」

「とはいえ適性も必要だし、魔力が相当無いと生かせないんだけど、有馬はその手を止めずに撫でつつ、質問を浴びせる。

「反乱した人の種族は？」

「魔物さ」

魔物とは、いわゆるモンスターの類である。

理性と教養を持つ魔族とは違い、破壊衝動が強く荒々しい。

ただし高位の魔物ならば高い知性を持つし、個性が強く自分本位。

滅多なことでは他の者に忠誠を誓う事も無いという。

「……………どうして此処に？」

「亡命、という事になるか。飼ってくれるんだよね？」

「別にいいけど……………」

「それはよかった」

猫がひよい、と体を起こして有馬の膝から肩へ飛び上がる。

有馬も「まあいいか」と許容して、ロボに手招きした。

「よしよし」

その頭を撫でる。途端に表情が和らいだのを見て、肩の上の猫が笑った。

「面白い。神獣を手懐けるとは、異世界人はやはり違うな」

「あれ……………知ってるの？」

「伊達に長生きしてないさ」

ロボを撫でながら、首筋を撫でる尻尾にくすぐったそうに目を細める。

謎のサイクルが出来ていた。

「さて、私も手懐けてくれるのかな？」

「はい？」

「よければ名前を貰いたい。まさかネインクルスと呼ばせる訳にはいかないだろう」

有馬は「そっか」と、何の疑いも持たずに名前を考え始める。

「ルーン、を捻って……………ルネ」

ちなみに他の候補は“ Baron ”、“ジジ”で、流石にイメージと違うと思っただけらしい。

(オッドアイでこの毛色だし、ぴったりじゃん。我ながらいいネーミングだ)

ちなみに縮めたのは、ロボやベルが2文字だからである。

猫は満足げに目を細めた後、かぶ、と有馬の耳に噛み付いた。

「！？？」

「こら、暴れるな」

次いで尻尾が口に突っ込まれ、じわりと鉄の味が広がる。ざらりと舌が耳朵を舐め、ぞわりと背中に悪寒が走る。

「んなっ」

飛びのこうとした有馬が、ぴたりと動きを止める。

色の違う両眼に眺められ、体が動かない。倒れこむ事すら出来ない。

「では死ぬまでよろしく頼む、我が君ブランカ」

「魔王のプライドとかそういうのは無いのかっ！」

「え？」

「えっ」

空中停止している有馬。その肩から、ひよい、と飛び降りる。

今の今までルネが居た場所を、強烈な風が吹き抜けた。

「どうも貴様は我に殺されたいらしいのう」

「神獣対魔王とはなかなか強烈な試合になるね」

「そんな神話レベルのバトルは他の世界でお願いします！」

有馬は動けないまま必死に叫んだ。

こうして有馬に、猫（前魔王）という一際濃い守護者が増えるのであった。

13 猫、襲来（後書き）

こうして無計画にも増えていくお仲間。
ロボはシートン動物記、ベルはピーター
ルネ（ルーン）の元ネタはジリです。
まあ名前だけです。 ンの妖精、そして今回の

14 愉快的な守護者たち

昼食の時間。ルネは我が物顔で有馬の太腿の上に陣取っていた。足元には口ボが、どこか不機嫌な顔で伏せている。

有馬はルネの背を撫でながらも、どこか疲れた顔だ。

「……………有馬？」

「あー……………フォルテ。お疲れ」

「お前の方が疲れて見える。何かあったのか？ ……その猫か？」

「ああ、うん……………そうそう」

隣に座ったフォルテに、有馬はルネを抱き上げておずおずと述べる。

「……………ネインクルス・アヴロニータ・ディアヴァルシアさんです」

「……………は？」

その口から出た予想外の名前に、フォルテの思考が一瞬、停止した。フォルテほどの立場なら誰だって知っている、その名前。

「つまり、魔王。元、が付くけど」

「……………つはああ！？」

今度こそ目を見開き、フォルテは思わず大声を出す。

その反応を予想していたようで、有馬は小さく苦笑する。

「紹介された通り、私が前魔王だ。このたび有馬の飼い猫として契約を交わした」

「……………っ飼い猫！？」

「おっと、正しくは守護者か。まあ死ぬまでの仲だし、よろしく頼むよ」

「は、……?」

「そういう訳だそうだから、あ、名前はルーンって呼んでね。ほんとは違うけど、契約名だから」

契約した相手のことは基本的に契約名で呼ぶ。

しかし他の者には元の名で呼ばれるのが常である。

ロボは契約名が他人に分からないような魔法をかけているし、ベルの名はそもそも他で出しておらず、ルネは他人にはルーンと呼ばせる事にした。

「ルーン……様。何故この国に? それと……元、とはどういう事でしょうか」

「ああ、呼び捨てで構わない。言葉通り、既に魔王位を退いているからな」

「……………っは!？」

ルネ もといネインクルスは、それこそアニマラーナ建国当時から魔王として君臨してきた、生きた伝説である。

獣人族や他の種族にも怖れ敬われ、魔王派の種族の王たちは敬意を払い、立場上は同等でも丁寧に接し、王位に就いた後等に挨拶に行ったりもする。

人間達には「悪い子は魔王に攫われるよ!」と脅しに使われるほど、絶対の悪であり畏怖の対象とされている。

それがあっさりと退位したと聞いて、フォルテは再び驚愕に目を剥く。

「ああ、本当なら魔王であるうちに会いたかったものだ。残念な事に蹴落とされてしまったのだがね」

「……蹴落とされっ……………!？」

声も出ないほど驚いているフォルテを、有馬はニヤニヤしながら見ている。

「そういう訳だね。まあ、気楽に有馬嬢にじやれて余生を過ごす予定さ」

「だそうで」

「いや……それは構わない、のだが……その、魔王位を奪還されないのですか？」

躊躇いがちに問うと、ルネはくっくつと喉を鳴らして笑う。

「いらん」

「いや、いらんって……」

「元々面倒だったのだ。それに、可愛い部下ももういない」
いない、というのは存在しないという訳では無い。

新たな魔王に忠誠を誓っているのだろう、という意味でだ。

「……そんな、まさか。新たな魔王がどんな者であるかと、突然出てきた者に忠誠を誓う訳が」

「あるのだよ。心でどう思おうが、証を持つ以上逆らう事は出来ないさ。そして無理に逆らって殺されるくらいなら従っていてほしい」
色違いの瞳が細められる。有馬はなんとなく可哀想になって、ルネのしなやかな体をぎゅつと抱き締める。

「おや、慰めてくれるのかな」

「か、かんちがいしないでよね」

物凄い棒読みである。

「ま、よろしく頼む、フォルテ」

「……はい」

フォルテは色々と聞きたい気持ちを押し込めて、頷く。

そもそも、元とはいえ魔王。逆らえる筈が無いのである。

「ま、あとは若い人に任せようじゃあないか、ロボ！ お2人さん、どうぞ仲睦まじく」

「つな」「ちよっ……」

「ふむ、それもそうじゃ。少しは男の甲斐性を見せよ、フォルテ」
とんでもない捨て台詞を残した2匹を、2人は呆然と見送るのであった。

食事を配膳し終わると、クレイアは丁重に頭を下げ、部屋を出て行った。

いつもなら甲斐甲斐しく給仕をこなしているのだが、2人に漂う微妙な空気を感じ取ったのかもしれない。

「……男の甲斐性って、何？」

「何だろうな……」

「浮気は男の甲斐性、とはよく言うけど」

フォルテは危つく口の中のものを嘔き出しかけた。

「じ、冗談じゃない」

「だよな」

心臓のあたりがもやもやとする。甘酸っぱいな、と有馬は思った。勿論味覚ではなく心情的な意味で、だ。

「……愛の告白でもしてみせろ、と？」

「！……いや、その」

「フォルテにはまだ早いよね」

「どつという意味だっ」

僅かに耳のあたりが赤いフォルテを見て、有馬は緩く笑う。

（まさかとは思うけど、恋愛に関してはこつちが上手……なのか）

元の世界では、間違いなく遅れに遅れていた有馬である。

しかしながら片思い経験があるだけフォルテよりは上であった。

「いや、女性経験ゼロでしょ？ あ、好きになったことは？」

「……無い」

「その割に時々口説くような台詞言うよね。天然か、まさか」

そう言いながら緊張感無くピラを頬張るのを見て、めら、と何かが燃え上がる。

「……」

「ん？」

こつん、とフォルテの手が肩を掠める。何だ、と横を見た有馬はびっくりと肩を揺らす。

「何？」

妙に真面目な顔で見つめてくるフォルテに、どきりと心臓が跳ねる。

「……す」

「っ!？」

「き、かもしれない」

「おい」

全力で思わせぶりだった。

有馬はひく、と口元を引き攣らせてフォルテの頬を指でつつく。

「そこはちゃんと言おうよ」

「……いや……その。好きなのか何なのか……自分で自分が分からない」

「ああ、恋愛経験無いから……はあ」

深々と溜息を吐く。フォルテは相変わらず耳元を赤くして、「すまない」と呟いた。

有馬は苦笑して、肩に手をぼん、と置いた。

「もし見てて動悸が激しくなったり顔が熱かったり他の人と喋って欲しくないと思ったりしたら言っただけでね!」

「何でそんなに楽しげなんだ」

「いや、フォルテめっちゃ面白い。あ、あと胸が締め付けられる感覚とか」

「……それが恋なのか?」

「世間一般的にはこんなもんだと思うけど。ま、症状も人それぞれだよ、恋の病」

俳句になつてると喜んでる有馬も、人に教授できるほどに恋愛に達者ではない。

しかしフォルテにとってはそれすら目新しい知識である。

ちなみに王宮にはあらゆる種類の本がぎっしり詰まった図書館があるが、残念な事にフォルテはあまり小説の類を読まない。

つまり物語の恋愛すら知らない男なのである。

「なら……」

「ん?」

「……いや。いい」

心の中で、密かに思う。

それが恋だというのなら、とっくに。

「じゃあ、守護者殿とルーンによるしく頼む」

「うい。いつてらっさい」

ひらひらと手を振る有馬に、小さく微笑んで返す。

妙に余裕ある態度に、有馬は首を傾げつつクレイアを呼んだ。

城崎有馬の初恋相手は兄、らしい。何せ自分は覚えていない程の幼少時だ。

はたしてそれが恋愛と言えるのかは謎だが、よく「おにいのおよめさんになるー」とのたまっていたらしい。

兄は兄で「俺は亭主関白だぞー」と笑っていたそうだ。

ちなみに当时有馬3歳、兄は8歳。なんともませた子供である。

それからも数度の恋を経て、けれど中3くらいからは誰にも恋していない。

「っっていうか、ベルは？」

「……はて。今日は見ておらぬが」

有馬は首を傾げて、杖の底の宝石を見た。

最初見た時の僅かな揺らぎはそこにあり、ベルがそこにいる事を示している。

「どーしたんだろ。ルネが怖いかな」

「それは無いよ。精霊が魔王を怖がるなんてさ」

「いや、元は妖精族だから怖いのかも」

杖をくるくると振り回し、でてこーい、と口を尖らせる。

「まあ、そのうち出てくるじゃろって」

「うーん……」

諦めたようにテーブルに杖を置く。

何を思ったかルネはテーブルに飛び上がり、宝石をぺろりと舐めた。
「何してんの？」

なーうと猫の声で鳴くルネに、怪訝な目を向ける。

ゆらりと宝石の周りが揺らぎ、一瞬だけ煌いた後

「わっ!？」

有馬の方に向かって見慣れた姿が倒れこんできた。

「……む？」

思わず両手を突き出すと、手首を掴まれる。焦った有馬が顔を上げると、ふらふらと頭を揺らすベルが居た。ただし

「うっわ! 何!?!」

大分、色合いが違う。

「……き、きもちわるい……っつえ」

「どしたの? す、座って」

「う……っぶ」

くらりとよるめいて有馬の隣に座るベルは、白髪に褐色の肌 所謂ダークエルフのような姿になっている。

そして姿が妙にはつきりとして、声もいつもの響くような感じが無い。

「何……したんだ、よ……」

「ちよつと魔力を注いであげただけさ」

「……ッ……頭いった……」

何時もの飄々とした様子は何処へやら、両手で頭を押さえて呻く。

「大丈夫？」

「あー……」

「水は？」

「いる……」

有馬は壁際に置いてある低い棚の上から、水差しとコップを取る。横の箱から氷を出して入れ、水を注いでベルに渡す。

魔術で冷却されている冷たい水を飲み干すと、ベルは気だるそうに溜息を吐いた。

「どんな冗談？ 前魔王が猫の姿でやって来るって」

「おお、刺々しい」

「っていうか、この色！ やだ！」

「それはそれでエキゾチックな魅力が無いでもないさ、精霊くん
ぎろりと睨みつける目は灰色のままだ。」

「男に褒められても嬉しくないなあー」

「おっと有馬嬢、ご指名だ」

「はぁーい、ご指名ありが……何さなんだ！」

見事にノリ突っ込みを決めた有馬。何故か拍手するベルとルネ。

「気が合うかも」

「そうだな」

途端に和やかな空気で拳と尻尾を合わせる1人と1匹に、ロボが盛大な溜息を吐いた。

「ま、しかし……有馬、一生命の危険無いよ、こりゃ」

「うん？」

「そうじゃのう。我1匹でも十分過ぎる程じゃが」

「精霊に神獣に魔王まで揃えといて勾引かどわかされたら笑いものだよね
！」

「まあ、確かに」

有馬は口元に手を当ててはっとする。

（これは……フラグ）

どんなに優秀な護衛が居たとて、護られる方が有馬なのだからいくら注意しても足りない。

魔力があっただって、有馬は有馬だ。体力無し、運動神経無し、どんくさい。

更に言えば注意力散漫、人の気配など読めないし、人を傷つける度胸も無い。

「……いや、気は付けてね？」

「うむ、もちろん」

「人間は脆いからな。気をつけるさ」

「一番弱い種族だしね、人間って。やつこいし」

うん、と頷きかけた有馬はベルの視線に気づく。

その行き着く先にも気づいて、ぐ、と片手を握り締めた。

「腹を見ながら言っなっ！」

「ぐえ」

見事に鳩尾を直撃する拳に、ベルは人間に対する認識を改めかけた。

「とはいえ、実は私も魔力を半分以上奪われた状態だね。回復にはかなりかかるな」

「ええー」

「僕も随分長く籠ってたから鈍ってるし。マナが使えるから前よりは強いと思うけど、元々戦闘向きでもないし」

「……」

「ふむ。じゃあ今は我だけが即戦力という訳か」

「そうか？」

そんな会話を聞いて益々不安が高まるのであった。

14 愉快的な守護者たち（後書き）

ニヤニヤ展開は書いててニヤニヤするので楽しいです。
あんまりニヤニヤ出来なかったらすいません。精進します

最初は300行弱くらいずつ書いてたんですが、段々短くなってますね。
どれくらいが丁度良いんでしょう。

15 お久しぶりです

有馬は隣のフォルテに寄り掛かりながら、すーはーと深呼吸を繰り返していた。

「っし……頑張る」

「頑張れ。大丈夫だ」

「う、うん」

今日は1月11日。なんとなくぞろ目の日にしてみたのは、召喚の儀に倣ったのことが。

有馬はぎゅっと目を瞑り、手に持った携帯電話を握り締める。

今日の服装は、落ち着いた青のワンピースだ。下に履いた黒い靴下のせいで、なんとなく大人っぽく見える。

「……よし」

勇気を与えてくれるのは、足元のロボと、テーブルに鎮座するルネと、杖の中のベルの存在。

それから、何といても隣のぬくもりが一番有馬を落ち着かせてくれる。

電源ボタンを長押しすると、暫くして電源が付いた。

久しぶりに見る待ち受け画面。やはりまたメールが届いている。

「……」

途端に身体を強張らせる有馬を、フォルテの手が宥める。

背中をやわやわと撫でられると、有馬は息を吐いてメールボックスを開いた。

この前ほど、多くは無い。しかし前回と違うのは、前回見た時には

無かった名前。

「よしっ」

他のメールは殆ど流すように読み、最後に残った兄のメールを開く。
『連絡くらいしろ』

その簡潔さが兄らしい、と有馬は思った。

「電話するから、静かにしててね」

一応釘を刺し、アドレス帳を開こうとしたその時。

「っ!?!」

電話が、鳴った。

着信メロディが流れ、フォルテも驚いた顔をする。

有馬は思わず携帯を取り落とす。柔らかな絨毯の上に落ちたその画面に、掛けてきた相手の名前が表示されていた。

城崎数馬。

「え、あ」

「おいつ!」

ルネが叫ぶ。携帯電話が一瞬妖しく光り、沈黙した。

「……え?」

通話中、と文字が表示される。

無意識に伸ばした腕。その指先から妖しい光が広がり、全身を包み込み、そして。

「あ、」

フォルテの腕が身体をすり抜けた。そして一際眩く光ったかと思うと

「有馬っ!?!」

有馬の姿が、その場から掻き消えた。

荒々しい傭兵の男達に混じり、1人だけ颯爽とした雰囲気醸し出す青年が足を組んで何かを見つめている。

「カズマ、また彼女の写真か？」

「妹だっつってんだろ」

手にした文明の機器　携帯電話。薄暗い中でぼんやりと光る画面は、相手の電話が切れた事を示している。

城崎数馬は電源を切ったそれを丁寧にバッグに入れると、焚き火の脇から魚の刺さった串を一本取った。

「ったく」

電源が入っていない、というメッセージは流れなかった。だから繋がったと思ったのに、1秒ほどで切れた。

恨めしげに、妹のくせに、と呟いたその時である。

「うおっ!？」

「何だあ！ 敵かつ！」

「いや……女の子だ！ 女が降って来たぞ！」

数馬はその慌しさに、何だ、と顔を上げる。

そして目を見開いた。

「おい、こりゃ参ったな！ 天の恵みか！」

「仕立てのいい服だな。どっかの貴族の娘か？」

「靴も履いてねえしなあ。魔物に攫われて落っこちたか」

「でもあんまり顔は可愛くねーな」

驚愕の表情を浮かべる数馬には気付かずに、男達はしげしげと少女を眺める。

「……おい」

そして、数馬が地を這うような声を上げると、ぎこちなく振り返る。

「フォルド、その汗臭い腕を離せ」

「な、何だ？ 自分だけ楽しむつもりかよ」

「あ？」

ドスの聞いた声を上げる。フヨルドと呼ばれた屈強な男は、う、と呻いて大人しく少女を受け渡す。

「……こいつは」

言おうとした言葉を遮る声。

「何か見たことあるな。……あ、カズマの彼女だ！」

まだ若い、枯草色の髪の毛の男が陽気な声を上げる。

傭兵達は「ああ！」と声を上げ、途端に和やかな空気になった。

「そうか、なら仕方ねえ。楽しんでこいや」

「おう。流石に人の恋路は邪魔できねえさ」

「いやー、しかしおつでれーた。相手が貴族だったとはよ」

「まあカズマならなあ」

「すげえ偶然もあつたもんだな」

口々に言う声に、数馬のこめかみがびくびくと動く。

「しっかりそんなちっせえ娘で大丈夫なのか？ お前、下もでけえだろ」

そしてその言葉を聞いた瞬間、拳が飛んだ。

「がっ」

即頭部に叩き付けられた強烈な一撃に、2メートル半はあるうかという屈強な巨人族の男が倒れ伏す。

哀れにも近くで下ネタを吐いてしまった彼の倒れる音が、妙に大きく聞こえた。

あたりが再び静まり返り、恐る恐る、少女を抱いたまま立っている数馬に視線を送る。

「……妹だつつつてんだろ？」

「すいませんっしたあああ！！」

全員が見事に地面に額を擦り付けて土下座する。

数馬はそれを見て満足げにしつつ、腕の中で眠りこける　有馬を、しっかりと横に抱きなおすのであった。

有馬はぱちりと目を開き、誰かの膝の上に居る事に一瞬呆然とした。

「起きたか」

「あー……兄ちゃん？」

目を擦りながらそう言つと、何故か周りから「本当に妹だったあああああ！」と声上がる。

「カズマ！ 妹さんを！ 俺にっ！！」

「何抜け駆けしてんだあ！」

「妹だっつーんだから良いだろうがあ！ 早いもん勝ちだ！」

間近に聞いた事の無い、荒々しい男達の声にびくりと肩が震える。有馬は何がなんだか分からないまま、無意識に数馬の服を掴んだ。

「ビビってんだろっつがっ！」

数馬の怒声と同時に、ごんっつと重い音が響く。

「いてえっ！！」

どうやら数馬が誰かを殴りつけたらしい。有馬は混乱した頭でそれだけ理解した。

ざわめきが静まると、溜息を吐いて数馬が口を開く。

「悪いな。馬鹿だらけで」

「え、あ……うん？」

「さて。その服装からすると、どっか金持ちんとこにでも居たのか」「あ、まあ……」

生返事を返しながら、黒い靴下を履いた爪先を引っ込める。

どうやら場所はどこかの森の中。電話を掛けた時は昼頃だった筈だが、あたりは薄暗い。

「……ここどこ？」

「アエンシア大陸、ホアンクン半島、エルダ山麓」

「ほ、ほあんくん……えーと……」

アエンシア大陸。人間族の人口が多く、大きさとしてはアニマラーナ大陸の1.5倍。

アニマラーナ大陸から見て西にあり、そう遠くは無いが　ホアンクン半島は最西端。

つまり、大陸の中でも一番アニマラーナから遠い場所なのである。

「……か、帰んなきゃ」

「何処に？」

「……城？」

疑問系で言う有馬に、あたりが再びざわつく。

「城？ ……侍女か何か、にしちやあ服装がおかしいな」

「王族だったらもつと派手だろ？」

「使用人にしちや服が上等だしな」

数馬はざわめいた男達に、手をしっしつと振って他の場所に追いやる。

そして有馬の頭に頸を乗せる。昔からよくした姿勢なので、有馬も文句なく受け入れる。

「で、どういう事情だ？ 召喚されたか？」

「あ、うん」

「そうか。勇者パターンか？ 嫁？ 生贄？ あ、魔王とか」

「あー、……嫁かな」

「そうか。お互い大変だな……ああ、テントで話すか」

こくりと頷く。後ろにあるテントに入ると、外の音と殆ど聞こえなかった。

どうやら防音の魔法がかかっているらしい。数馬は外に「入るなよ」と声を掛けてから、テントの入り口に布を下ろした。

今度は床に布が敷いてあるので遠慮なく胡坐をかいて向かい合う。

「さて、久しぶりだな。つっても10……11日ぶりか？」

「うん。いつ来たの？ こっちに」

「向こうは5月25日だったな」

「って事は……こっちだと1月6日かな。……ああ、寝すぎて動けなかった日だ」

「何だそりゃ」

言いはしないが、フォルテに抱き締めてもらった翌日でもある。

有馬はあの時の事を思い出して若干恥ずかしくなった。

「まさか」

「ん？」

「……………やった？」

「やってないっ！！」

真剣な顔で問われ、渾身の叫びを返す。

一瞬想像してしまい、顔がじわじわと熱くなるのを感じた。

「その反応からして、せいぜいハグ程度だな」

「そ、その通りでございます……………」

相変わらずの洞察力と言うか、有馬を理解し尽した物言い。

有馬はほんのりと熱を持った頬を押さえ、呻いた。

「……………寒い」

そこでやっと、刺すような寒さに気がつく。

「そりゃそうだろ。1月だぞ」

ほら、と手招きする数馬に近寄る。

膝の間に収まって背中を預け、上着の中に入れてもらう。とても暖かい。

「じゃ、説明」

「うい」

体育座りで、今まであったことを話していく。

1月1日。元の世界で5月20日 召喚された、あの日のことから。

「で、まあそういう訳で、異世界から嫁取りしなきゃいけないんだって」

「面倒だな。つーか、そんなもんか？ 血って」

「魔法的な何かだと思う」

「もう全部それで解決だな」

よく分からない事は全て「魔法的な」で済ませる。

掻い摘んで簡単に説明を終えると、ごっん、と頭の天辺に数馬の顎が乗った。

「こっちは苦勞してんのにのうのと」

「……………いや、知らないし。兄ちゃんは召喚されて来たの？」

「おう。我らをお救いください勇者様ー、だつてよ。知るかつーの」
「え、この世界ってそんな危険に瀕してんの」

「城に籠ってちゃ分からだろっが、人間は魔物の相手すんのに必死だぞ」

「え、そこまで……？」

目をぱちくりとさせる有馬。確かに魔物は脅威だと聞いたが、そこまでだつたとは知らない。

「そこまでなんだよ。で、魔王を倒せと言われた訳だ」

「ふーん。じゃあ何で騎士とかと居ないの？」

「付けられる前に逃げた」

「……だろっね」

人の為に働くのが嫌だ、という理由で喫茶店や小説家をやっていたりした彼である。

完全に道楽だというのに父母よりずっと金持ちだつた数馬には、有馬もしょっちゅう金銭面で世話になっている。

「可愛い巫女さんとかは？」

「いたけどなー。あからさまなんだよ」

「……魔王を倒した後にあわよくば妻に！ みたいな」

「そういう事だ。後は国王の娘2人と、騎士の女と、侍女と、以下略」

「相変わらずだね」

数馬は、女性に全く不自由しない男だ。

顔はそれなりに整っているが、絶世の美男子とまでは行かない。フォルテやシヴァと比べれば普通だ。

しかし秀囲気イケメンというのか、かなりモテていた。

猫を被っていれば落ち着いた風の男で、時々見せる男らしさに惚れてしまうらしい。

「騎士は思わず食っちゃまったんだが」

「わあひどい」

「へいへい。そしたら責任云々言われて面倒で面倒で」

「……あーあ、かわいそ」

有馬は数馬の女性関係を殆ど知っている。知りたい訳では無いが、嫌でも目に入るからだ。

何故か人にはあまり知られないが、物凄くとつかえひつかえだった。1度として本気で付き合った事が無いというのも殆ど知られない事実である。

そんな風に、数馬は人に物事を隠す事が得意であった。

「で、だ。逃げて、持ち去った金品を売り払い、特に金色のやたら眩しい剣が高く売れた」

「清々しいくらい最悪だね」

「ありがとう」

「ベタな事言うな!」

有馬の肘がごすと腹に突き刺さるが、全く気にしない。というかぶつけた肘の方が痛かった。

「その金で実用的な装備を買った後、冒険者の女に世話になって」
「……うん」

さり気無くまた女性が絡んだが、最早突っ込みもしない。

「色々教えて貰って、ギルド登録の時も紹介して貰ったから少し安くなったな」

「へー。っていうか、いいなー、ギルドとか」

有馬も、この世界にギルドが存在する事は知っている。

この世界において、ただの“ギルド”といえれば世界冒険者組合を指し、その名の通り世界共通で運営される巨大組織である。

有馬達の持つイメージとほぼ似たような組織で、依頼の仲介、仕事の斡旋等を主たる役目としている。

また、ギルドの建物内には銀行と荷物預かり所が必ずある。大きな所では宿や酒場もあるらしい。

「登録したいなら連れていくが、あんまりお上品な所じゃねーかな」

「うん。兄ちゃんの仲間もあんまりお上品じゃないけど」

「ああ、あいつらは傭兵ギルドの連中だ。隣の都に仕事見つけに行く途中」

「傭兵……どうりで」

「俺も行きたい方向が同じだったからな。あと猫被らなくていいし」「珍しい……」

「あまりに馬鹿だらけで猫被るのも面倒になった」

数馬が、猫を被らない相手。有馬はそれをほんの数人しか知らない。有馬と、昔からの付き合いのある友人たちくらいだ。

言い訳してはいるが、つまりは彼らを認めているのだろう。それなりに。

「で、どうする？」

「あたしは城に戻りたいんだけど。でも冒険者とかそういうのも楽しそうだよな」

「まあな。そういや、魔法は使えるか？」

「うん。自然魔法も使えるよ」

「そりゃ良かった。即戦力だな」

「うん……？」

不穏な空気を感じて逃げ出しかけた有馬の腹を、がしりと掴む腕。

「靴も履かずにどこ行く気だ？ なあ？」

「不当な労働を強いられそうな心配が」

「不当？ そうだなー」

たらりと冷や汗を流す有馬に、背後から宣告。

「明日から働いてもらうぜ、人間電子レンジ」

「……異世界に来たんだから、心機一転して優しい兄ちゃんにならない？」

「優しいだろ？」

とてもいい笑顔で言い切った兄に、何故かそこはかたなく安心する有馬であった。

15 お久しぶりです（後書き）

お兄ちゃん登場。基本的に仲良しのよくいる兄妹です。嘘です。兄が居ると若干落ち着く、ぬるい信頼関係です。隣に攻略本が置いてある心境。

あとやっぱりおっさん分は必要ですよね（真顔）

16 傭兵団エインヘルヤル

「先ずは兄の世話になる事にしたが、有馬にはそれをフォルテ達に伝える術が無い。」

「いや、有馬が本当に呼びかけようと思ったのなら必ず守護者たちに声は届くのだが、忘れているらしい。」

「……よし」

有馬はきよろきよろとテントの中を見回す。

「数馬は先ほど外を見てくる、と言って出て行ったため居ない。」

「……」

そして、有馬の目当てのものも居なかった。

有馬はそつと入り口の布を上げ、外を見る。

居た。

「《風の》」

名前を呼ぶと、緑の髪を腰まで伸ばした小さな精霊が、嬉しそうに振り向いた。

「そう、伝えればいいのね？」

《風の精霊》は、外ならば大抵の場所に居る。街中にも、森にも、海の上にも風は吹く。

ただ場所によつては淀んでいたり冷たかったりはするが。

「うん、よろしく。お礼は何がいい？」

有馬は精霊語でそう言いつつ、テント内のマナをゆらゆらと動かす。精霊は《精霊眼》をデフォルトで持っているため、魔力やマナの動きを見るのが好きなのである。

つまりはご機嫌取りだ。

『あなたの魔力が欲しいわ！ ちょっぴりでいいの』

「いいよ」

『ありがとう！』

緑の髪を揺らし、愛らしい少女の姿をした精霊が有馬の頬に軽く口付ける。

軽く魔力を抜かれる感覚がしたが、不快感はさほど無い。

精霊の身体が光り輝き、少し大きさが増した。

『すごいわ、すごい！ やっぱりあなたの魔力、とっても美味しいわ！』

「味するの？」

『ううん、本当に味って訳では無いわ。でも他に表現のしようが無いから、みんな味に例えるのよ。』

それにしても、これならもっと早く着けるわね』

そういえばルネにも言われたな、と有馬は思い出す。

有馬の魔力はどうやら人よりも濃いらしかった。

「……もっとあげたらもっと早くなる？」

『ええ！』

わくわくした顔で見てくる《風の》の可愛さに、有馬はぐっと手を握る。

（やっぱり見る分には綺麗どころの方が良い！）

「じゃ、どうぞ」

『いただきますっ』

今度は有馬の手を取ると、その指先を口に含む。

その舌は濡れた感じはせず、走る電車や車の窓から手を出したような 空気に当たる感じがした。

2、3秒ほどそうしていると《風の》の輝きが増し、そして身体がみるみる大きくなって有馬と同じくらいの背丈になる。

流星に有馬は驚いたように目を軽く見開いた。

「でっかくなっただね」

『霊格が増したのよ』

「霊格？」

『精霊の強さよ。マナをどれだけ多く取り込めるかってこと』

心なしか、少女から女といえる体つきに変わった《風の》が微笑む。精霊はマナで出来ているが、器のようなものである。というのは前に説明した。

つまりその器の大きさを霊格と呼び表すのである。

その大きさによってランク付けがされたりもするが、一般人には精霊が見えないためあまり意味は無い。

一部の強大な精霊は言い伝えに残ったり、各地に昔話や信仰として存在したりもするが。

「なるほど。どれくらいになったの？」

『人間の精霊魔導士が上位とか上級とか言うくらいにはなったわね』

「……ほんと？ いや、全然魔力減った気がしないんだよね」

『そうみたいね！ あなたって質も量もすばらしいのね』

《風の》はにこにここと笑って有馬の腕に絡みつく。動く度に髪が重力に反して舞い、煌く。

有馬はぱちぱちと眩しそうに瞬きをし、その髪を指で漉いた。

「ま、とにかくよろしくね」

『そうだったわ！ 今すぐ伝えに行くわね』

さらりと有馬の頬を撫でる、風のような手。ぶわりと入り口の布が風に吹かれ、次の瞬間にはその姿が消えていた。

有馬はふう、と息を吐いて姿勢を正す。《風の》が動く度に風が巻き上がるため、髪が少し乱れていた。

黒い靴下を履いた足を見つめ、溜息。

「どうすんの、靴も無しに」

そう、目下の問題はそれであった。

ひとまず食事に混ぜてもらおう事にし、有馬は布の上に座って、久し

ぶりに食べた本物の肉を味わっている。

「嬢ちゃんはアニマラーナに居たのか。いいところだろ？」

「城から出たことないし……」

「ええ！？ 箱入りだなあ」

右隣には数馬が居るが、左隣から話しかけてくるのは若い獣人の男だ。

茶髪からぴよんと出た長めの耳。形は兎にも似ているが、それにしては少し短いように見える。

「俺の住んでた地区はなー、荒れに荒れてたが、それでも広い原っぱが側にあつたからな」

「へー。……つていうかにーさんは何の獣人？」

「何だと思う？」

「うさぎ？」

「はっはっは。カンガルーだよ」

なんとなく黒目がちな瞳に、人懐っこそうな顔。

言われてみれば確かに、カンガルーのような雰囲気がある。

「カンガルーか！ そっかー。ところで名前なんだっけ？」

「おお、教えてなかったな。カラカ・レングルだぜ、よろしくな！」

「うい、よろしく」

有馬は初めて見た獣人らしい獣人に興味深々である。

ぴくぴくと動く耳は快活そうな顔に反して愛らしく、物凄く、触りたくなる。

その欲求に耐えつつ、有馬は肉にかぶりついた。

「そうだ、嬢ちゃん。あつちの情勢とか、知ってるだけ聞かせてくれねーか」

「ん、いいよ。あんま知らないけど……えーとね、去年に国王の……」

……ダグラス陛下？ が死んだ」

「陛下が！？ ……つて事は息子が次の王か」

「うん。まだ即位はしてない」

「そっか……何つつたっけ、あの王子。俺より1つ下だったか」

「ふおるてりあ……えーと、何だっけ。そんな感じ」

普段フォルテとしか呼ばないので本名をあまり覚えていない。

「フォルテリア。そう、フォルテリア殿下だな、そうだそうだ」

思い出した、と手を叩くカラカ。有馬はじーっとそれを見つめ、袋はあるのかな、と真剣に思索していた。

……ちなみにカンガルーの雄の腹に袋は無い。が、そこまで考えが及ばないらしい。

「しつつかし、アニマラーナに人間が住むたあ珍しいな。獣人は人間好きだが、逆は違うだろ？」

「らしいね。っていうか、何でそんなに人間が好きなの？」

「さあなあ。本能みたいなもんだ」

「……相手に嫌われるのに好きでいれるの？」

「いんや、んな事ないぜ。個人を嫌う事は多々ある　が、人間って種族全体を嫌いになれないんだな」

最早、本能なのかもしれない。

獣人って不思議だ、と思いつつ食べ終わった肉の串を弄ぶ。

だらだらとカラカと会話しつつぼーっとしていると、新たな人物が現れた。

「なーに独占してんだよー、カラカあー」

「すまん。どうにかしてくれないか、これ」

明らかにでろんでろんに酔った様子の、金茶の髪に尖った耳、翠の目の少年。

疲れた顔でその肩を支える、黒髪に紫の目の青年。よく見れば瞳孔が少し縦長だ。

「アリマちゃん、俺、サンドルって言うんだけどー、うへっ、へ」

「うへへじゃないだろー！」

いかにも苦労人な彼に同情しつつ、有馬は転がっていた木のコップに自然魔術で水を注ぐ。

「え、えーえー、なにー？　お酌？　してくれんのー？」

「……うん？　うん」

サンドルは潤んだ目でへらへら笑い、コップを受け取った。

「すまん。俺はランラクル・ファセル、竜人だ」

「うい。ランラクル、ね」

「呼びづらいならラルで良い。アリマ、だったか？」

「うん。よろしくー、ラル」

竜人には初めて会う。まあ今まで獣人と人しか見ていないので、当たり前と言えば当たり前だが。

有馬は興味深そうにその鋭い瞳孔を見ていたが、隣のサンドルの方も気になってくる。

「……ああ、あとこいつはサンドル・クルツ、見ての通りのエルフだ」

「よろしくねー、えへ、へへ」

「出来ればまともな状態で挨拶して欲しいんだけどね」

「まっただよなー。ほら、しゃきつとしろ」

亜人3人組はこの傭兵団でも一番の若手である。ちなみに亜人とは人型を取る人間以外の種族の総称だ。

サンドルが笑いながらふらふらとよろめく。ランラクルが腕を離すと、どさ、と地面に倒れた。

「放っておくか」

「そうだな。つーか何であの量で酔えるんだ？ あいつ」

「エルフだからじゃないか？」

「ああ、酒にも毒にも弱いしな、そういや」

「そうなの？」

「おう。竜人は酒豪で毒も効かない、ただし薬も効きづらい。獣人は酒に強いが毒には弱い、エルフは両方弱い」

けらけらと笑い、カラカはうつ伏せに倒れたサンドルを転がして仰向けにする。

サンドルは草まみれにした顔を幸せそうに緩めたまま、すうすうと寝息を立て始める。

それを見て、ランクラルと有馬も笑った。そしてこう思う。

(……大丈夫がこの傭兵) 全くである。

向かっている都は、このホアンクン半島の根元あたりにある。

アエンシア大陸の西端付近はササラサル共和国の領土だ。この半島もササラサルに含まれる訳だが、次の都、つまりシャンヤンは王都ササルに次いで繁栄している。

ササラサルの文化は、数馬曰く「アジアを丸ごとミキサーに掛けた」という感じの雰囲気を持つているらしい。

余談だが、数馬が召喚された国は海の向こうのスーアルカルド王国だ。

スーアルカルドとは古代語の^{聖なる}スウアル、^{護り}ルカル、^{古き}ド スウアルルカルドが訛った国名である。並べ替えて、^{聖なる}古き護り、という意だ。

仰々しい名前に相応な宗教国家で、天神スイル・ルイスを崇め、勇者はスイルに力を借り、数年かけて召喚するらしい。

その手間たるや気が遠くなる程で、更に物凄い費用もかかる。数馬を逃がした元凶 つまり迫っていた女達は、今頃針の筵かもしれない。

「しっかり掴まってるよ！」

そんな訳で、傭兵団に部外者2人を加えた面々はシャンヤンの都を目指して再出発した。

傭兵団、エインヘルヤル。ラグナレクに備えてヴァルハラに住むという北欧神話の戦士達の事であり、数馬がそれに因んで命名した。ちなみに一昨日。

有馬は2メートルを軽く越す身長巨人族、ラグマ・ナガーヤの肩

の上で揺られていた。

肩の上とは言っても肩車ではなく、左肩にちよんと乗って頭にしがみ付いている。

彼らは個人の荷物の他は、2台の荷車で荷物を運んでいる。メンバーは18人だけなので、これでも困らないらしい。

馬車があれば乗れるのだが、生憎今はない。荷車は流石に不安定だし荷物が崩れたら手間なので、結果として移動手段は人間になった。

「ゆっ、揺れっ、揺れる」

「おう？ 舌噛むなよ」

「うあつぐ！」

「遅かったか！」

がっはっはと笑うラグマは、巨人族らしく豪快だ。ちなみに巨人族にはクロプスとギガースの2種類が居るが、彼は後者の方である。

クロプスとは巨人の里から出ない、巨人の神ユイルに仕える神官達の事を言う。有事には神兵として戦う。

ギガースは巨人の里だけでなく世界中に散らばる戦い好きの巨人で、他種族が知る巨人族とは大抵こちらの事だ。

「しっ、ずかにっ、あるいてよっ」

舌を噛んだ有馬は涙目でラグマの頭をぐいぐいと揺らそうとする。微動だにしない。

種族差だとは分かっているものの、有馬はあまりの非力っぷりに切なくなつた。

「普通に歩いてんだけどなあ」

その巨大さ故に、普通に歩くだけでも肩に居る有馬にはかなりの揺れが来る。

正直言つて頭の悪い解決法だった、と今更ながらに後悔した。

「降りる！ もう降りるーっ！」

そう叫ぶ有馬を、遙か下の方から陽気な傭兵団エインヘルヤルのメンバーが見上げて笑っていた。

数馬が打ち解けているためか、有馬はするりとその輪に入り込めた。対人スキルが乏しい有馬だが、俺も俺もと話しかけてくる彼らに圧倒感を感じない。

ごつい見た目だが、フレンドリーで陽気な集団である。

有馬としては、腹に一物抱えた美人よりも分かりやすく、安心するような人々だ。

兄が、馬鹿ばかりだ、と言いながらも馴染んでしまう気持ちがよく分かる。

「初めからこうすれば良かった」

「……まあ、なあ」

今度はランラクルの背に負ぶさった有馬。お互い疲弊した顔である。ちなみに有馬はあれから数十分がくんと揺らされたため、ランラクルは有馬を背負え、と数馬に言われた時に散々カラカとサンドルにからかわれたからだ。

「早めに移動方法を考えよう……」

「街に着くまでの辛抱だろう。嫌かもしれないが、我慢しろ」

「別におんぶはいいよ。……靴があってもね。この早さで歩いたら、5分くらいで休憩したくなるから」

「……すまん」

自分のペースなら兎も角、自分より足も長く体力のある彼らに合わせているのは、本当に5分も持たない。

有馬は自分の体力を熟知していた。そしてそのあまりの乏しさに虚しくなった。

何が悲しくて今日1日で自分の体の脆弱さを思い知らねばならないのか、と腹立たしくもある。

しかしながら、ないものは仕方ない。幼い頃元気に飛び回っていた記憶があるので、純然たる努力の不足が原因だろう。

つまりは、自分が悪いのだ。

「やっぱ、鍛えた方が良いかない。体を強化して走りこみでもしたらどうにかなるかな」

「あんまり意味ないんじゃないか？ それ」

「いや、意味はあるよ。エルフの修行にそういつのあったー、ような。無いようなー？」

「へえー」

サンドルは素面でもあまり変わらなかった。カラカと合わせて元気系ダブルボケ、ランラクルと合わせて異種格闘技、とは数馬の弁である。

「大人がやってんのは見た事あるんだよねー、多分。足に強化だから護魔法かけて走り回ってたのをゲラゲラ笑いながら友達と眺めたよーな？」

「うっわー」

「うわあ」

「お前なあ」

「ちよっ、ちよ、待って！ 待ってよー！ 何その目！」

有馬はランラクルの背で軽く揺られながら、にやにやとサンドルを見ていた。

ランラクルは黒髪で、しかも背は数馬と同じくらい 180センチメートルと少し。

なんとなく背格好が兄に似ていて、安心する。年頃も同じくらいに見えた。

それに竜人族は体力があるし、力も強い。遠慮する必要が無いので、有馬はゆったり身を任せている。

「そうだ。アリマ、俺たちはいくつに見える？」

「……？ んー……カラカは17、18くらい。サンドルは16…

…15？ ラルはカラカよりちよっと上？」

「惜しいっ！」

「ラル以外は惜しいな」

「ああ。……いや、俺は難しすぎるだろ」

首を傾げる有馬を見て、サンドルが大笑いする。

ぼん、と肩に手を乗せてカラカがねたばらしをした。

「俺は20だ。サンドルは16だから、まあ正解だな。ランラクルは」

「ぼそ、と伝えられた数字。」

有馬は一瞬理解できずに停止し、そして次の瞬間目を見開いた。

「……同じ年いつ!?!」

「え、アリマつて15なんだ。12くらいかと思ってたよ」

ランラクル・ファセル、15歳。サンドルの失礼な発言にも気付かないほど驚いた。

数馬やフォルテ達と同年代にしか見えない彼は、ギリギリ高校生の有馬と同じ年だったらしい。

呆然としたまま有馬はランラクルの首をつつき、がっしりと筋肉質のそれに愕然とする。

「……あたしと同じ年月生きて、どうしてこんななんの?」

ランラクルは笑って、言った。

「努力の差だな」

なんとなく、ガンツと頭を打ち付ける。後頭部は固く、有馬はじんじんとする額に種族差とはまた違う格差を感じた。

「った」

「バカ! 竜人に頭突きする奴がいるかっ」

慌てたような気遣いの言葉。

有馬は額を押さえつつ、やっぱり兄貴肌だなあ、と思うのであった。

16 傭兵団エインヘルヤル（後書き）

古代語とか国名とか名前とか、元ネタはあったりなかったりですが、
だいたい直感です。今思うとアニマラーナはちよつとズバリ言いき
ぎです。

あとエインヘルヤルはエインヘリヤルとかエインヘリヤルとか色々
表記がありますが、ヘルヤルで採用。なんとなく。

スキンシップに抵抗無さ過ぎるのはちよつとアレですかね。
ただし だいたい 兄のせい

有馬は初めて目にするこの世界の都市に興味津々だった。

シャンヤンは巨大な防壁に囲まれた都市だ。防壁の上は歩けるようになっでいて、所々に見張りの台がある。

入り口に向かつて防壁を回る事数十分、漸く入り口が見えた。

「傭兵団だ。人数は20」

「あーいよ。種族は」

「巨人族、獣人族、竜人族、エルフとハーフエルフ、それぞれ1人ずつ。残りが人間」

「……獣人ねえ」

手続きをしていた男が、眉を顰めて傭兵団を舐めるように見る。

全員が何か文句あるか、という顔で睨み返すと慌てて目を逸らした。カラカは一見平然としているが、ラグマを初めとする背の高い者に囲まれて向こうからは見えない位置に居る。

借り物のコートに包まって負ぶわれている有馬は、む、と眉を顰めた。

「何か問題でも？」

「いいや、特に。……街の中で騒ぎなんか起こすなよ」

「……忠告、痛み入る」

団長エリック・アルバルは口元をつい、と歪めた。30代の後半になる彼は、金髪のベリーショートのいかつい男である。その実は少

々不器用でシャイなおっさん（数馬談）だ。

慣れていくらしく、簡単な手続きの後は平然として「では失礼」と言っただけだと歩いていく。

ふう、とカラカが肩の力を抜いた。

「毎度の事だけどなー、つたく、疲れるわ」

頭に茶色のキャスケットのような帽子を被り、耳を隠したカラカ。

その姿は人間と何ら変わらないが、耳ひとつ見せれば侮蔑の目を向けられる事も少なくは無い。

「みんなあなの？」

「いんや、みんなって事は無い。若いもんは気にしやしないし、気にしてる奴は大抵がお貴族様か、あるいはじーさんばーさんだよ」

「ふーん。って言うか、何で嫌われてんだっけ？」

「……何でだっけ？」

「……あ、混血が何たらか。でもさー、今じゃ人間だつて大抵何かの血が入ってるって聞いたよ」

「そうだな。例えばこのあたりだと、昔はホビットが多かったからその血が流れる者が多い」

「へー。どつりでさっきの人、背が低かった訳だ」

先ほどの男は、傭兵団の者たちと比べて大分背が低かった。

尤も、最近長身の男ばかり見ていたため色々と基準が狂っているのかもしれないが。

「あとはー、あ、そうだ。最初の頃の獣人って随分と野性的な生活してたらしくてねー。しかも言葉もあんまり喋れないし凶暴で、人間からすれば蛮族だったらしいよー」

「もうちょつと齒に衣着せろよ！」

「えー？」

デリカシーの不足したサンドルの発言に、ランラクルが腕を伸ばして小突く。

カラカは「気にしねーって」と苦笑した。

「その時、唯一人間と同じ生活から始めたのが狼一族！ 古来から

人間に寄り添って生きてきた狼だからこそだね！

白い狼を従えた銀の王伝説とか！ かつこいー！」

白き狼、という単語にロボを連想する。銀の王といえばフォルテが思い浮かんだ。

ほんの少し、帰りたい、と思った。けれど、フォルテやロボたちと居たい気持ちは強いが、もう少し外の空気を吸いたいのである。

「……詳しいね？」

「故郷に居た頃は勉強してたんだからねー！」

確かに、黙っていれば勤勉そうなエルフに見える。

後ろでぴよこんと結ったセミロングの金茶髪に、翠の目。特別美しい訳では無いが、素朴な感じだ。

「っていうか、何でみんな傭兵してるの？」

「あ、俺とラルはねー。もう5、6年前かな？ 人間の町で冒険者やろうと思ってるねー」

「初依頼で一緒になったんだが、人間に捕まってな。人身売買の犯罪集団だった」

「ほら、俺らって一応希少種じゃん？ 人間に比べれば、だけど。

そのテのオジサマに大人気なんだってー！ あっはっは！」

陽気に笑うサンドルに、懐かしそうな顔のランラクル。

(いや、割とヤバいんじゃない)

そう思った有馬は恐らく正しい。カラカは慣れているらしく、もはや生温かい目で見えていた。

「それで、エリック団長に助けて貰って、そのまま弟子入りして入団した」

「うんうん。懐かしいねー、土下座したよね」

「ああ、した」

「頭を地面に必死にこすり付けてお願いしますお願いしますってさー。オロオロしてたね、団長」

「うるたえてる内に他のメンバーが了承してたな」

少々不器用でシャイなおっさん。

有馬は脳内でそれに、ヘタレ属性、と書き加えた。

一行はまず傭兵ギルドに滞在報告をし、仕事を回してくれるように頼んだ。

なにやら大きな仕事があるらしく意気込んでいる。尤も、有馬と数馬は正式に団員ではないし傭兵でも無いのであまり関係無いが。

「仕事までは基本的に自由だ。各自依頼を受けるもよし、遊ぶもよし」

仕事は5日後、都近くの洞窟への討伐任務だそうだ。

喜び勇んだ傭兵達は街に繰り出して行く。有馬はと言えば、ランラクルと数馬と一緒に買い物に行く事になっていた。

サンドルとカラカは遊びたい盛りらしく陽気に去って行ったが。

「靴も欲しいけど、服も欲しいんだよね」

「服か。まあ、その格好じゃ目立つだろうしな」

「よし、ひとまず兄ちゃんが買ってやろう」

有馬は真正正銘の一文無しである。服はかなりの高級品だが、流石にそれを売るのは最終手段にしたい。

よって暫くは数馬に頼りきりになるだろう。

暫く3人で歩くと、靴屋らしき看板が見えた。

ブーツの絵が描かれた看板だ。識字率が低いため、どの店も絵で分かりやすく示してある。

有馬はこちらの文字も読めるが、数馬は読めないらしく、識字率の低さがむしろ有り難いらしい。

「いらつしゃい」

「こいつに合う靴が欲しいんだが」

店の奥で革靴を磨いていた中年男は、ふむ、と有馬の足を見る。

「24、いや、23と半分か」

「……！？ あ、はい」

目測でサイズを当てられ、有馬が目をぱちくりとさせる。

「はは、長年やってると見たただけで分かるんだ。で、どんな靴だい？」

「こういう服に合いそうな普通の靴と、丈夫で軽いブーツを一足ずつ」

「2足も買うのか。高いぞ？　うちは」

「構わない。予算はいくらあれば足りる？」

「そうだな、嬢ちゃんの大きさなら普通の靴は一足で400カル…材料によっちゃもう少し高くなるが。ブーツは丈夫な奴で1000カルだな」

「分かった」

数馬はポケットに手を突っ込み、金貨を一枚取り出して中年男の前に置く。

「釣りはいらんから、早めにいい靴を作れ。災難があつて無くしちまつてな」

「おやま、金払いのいい客だ。じゃ、お嬢さん、その椅子に座ってくれ」

有馬はこの世界の金銭感覚が分からないため、首を傾げている。

ちなみに硬貨は金貨・銀貨・半銀貨・青銅貨・銅貨・半銅貨がある。魔法で製造するので、形も含有率も一定。元の世界の古代人が見たら狂喜するレベルの高水準を保っている。

ちなみに製法は機密事項で、国や大陸によって模様が異なる。

「じゃあ、足に合わせて靴を作る。それまではありあわせの靴を貸そうか？」

「頼む」

「分かった。後で選んでくれ　　と、触っても大丈夫かい」

「うい、大丈夫です」

黒い靴下を履いた足に触れて、幅や高さを測って行く。

中年男の指の皮は固く、まるで肌が革で出来ているような感触だ。有馬にも、なんとなくいい職人なのかな、と分かる。

「じゃ、どんな靴にするか決めようかね」

有馬はデザインはあまり拘らず、色や形だけ指定した。後は数馬があれこれ口出しする。

図面に起こしてみると、現代日本でも立派に売れるようなデザインが出来ていた。

「ま、そんな感じでよろしく頼む」

「あいよ。ああ、靴下も欲しいなら同じサイズで注文しといてやるが」

「そうだな。10枚くらい頼んでくれ」

「……おう。普通のと、ブーツ用の厚いの、5枚ずつくらいかね？」

「そうしてくれ」

「分かった。靴下代はいらんよ」

ありがとう、と微笑む。その笑顔に裏は見えない。

変わったなあ、と有馬は思った。少なくとも以前の猫を被った愛想笑いとは違うように見える。

「じゃ、靴借りてくぞ。いつになる？」

「普通の靴は明日の夜に出来るから、取りに来とくれ。ブーツは3日後の夕方だな」

「分かった。よろしく頼む」

ドアを開いて外に出る。早速中年男がつきつきと奥の部屋に引っ込んでいくのが見えた。

金払いがいい客だとやる気も出るというものだろう。

「……兄ちゃん、金貨1枚って日本円でどんくらい？」

「10万くらいだな」

「ッ!？」

思い切りむせた。

数馬の考察によれば、金貨が10万円相当、銀貨が1万円、半銀貨が5000円。

青銅貨が500円、銅貨が100円、半銅貨が50円程度らしい。

通貨の名前はカルで、半銅貨≡1カル、金貨≡2000カルとなる。

「じ、じゅっ、じゅうまん!？」 靴2足に!？」

「金が有り余ってたよ。見るよこれ」

「……うわっ！ 金貨しか無い！」

ほら、と開いて見せた上着のポケットの中は金色だけで輝いている。ランラクルが驚愕し、有馬もその総額を計算しようとして諦めた。ぱっと見ただけでも相当の数がある。

「全部で300枚あった。……有馬、いくらだ？」

「……さん……ぜん……まん」

若干計算が怪しいが、一応合っている。

「よくできたな。小遣いをやろう」

「いつ、いや、小遣いレベルじゃないってそれ！」

金貨は500円玉よりも大きく、有馬が親指と人差し指で輪を作った程度のサイズだ。

きらきらと光る金貨。10万円ともなると、一気に使う事は難しい。

「ま、どっかで両替するか。ちなみに銀貨が1万円、半銀貨が5000円、青銅貨が5000円、銅貨が1000円、半銅貨が500円くらいだと俺は思っている」

「へー……」

「俺らの意識で言うと、1000円あればパンやらジュースやらが1つ買えるだろ。それを基準に考えて、まあこんな感じだな、と。」

ああ、ちなみに金貨300枚はあれな。失笑モノの伝説の剣売った金」

「……その手のアイテムにしちゃ安いような」

「そうだな。マイケル・ジャクソンの手袋だってもう少し高かったぞ。あー、金貨300と10枚くらいか」

「……手袋が金貨300枚!? ……そのマイケルって奴は聖人か何かか？」

ぶっ、と2人が同時に噴出した。

「ああ、確かにライブとか神々しいよね……っく、ふっ、ふふ」

「って事はあれか？ 聖遺物？」

その言葉に、更に体をくの字に折って笑う。

にやにやと口元を歪める数馬の腕にしがみ付いてひいひい言う有馬を、なんともいえない顔でランラクルを見た。

「変人に見えるぞ」

掛ける言葉が見つからず、ひとまずそう忠告した。

有馬は暫く数馬に引つ付いたまま息を繰り返し、やっと笑いの波を抑える。

「っはー、死ぬ、ほんと、もー、ひどい」

何がひどいのか全く不明である。

「何がだ。ほら、しゃんとしろ」

ぼんぼんと背中を叩き、歩け、と促す。

やっと落ち着いた有馬は、何故かまじまじとランラクルの顔を眺めた。

「……何だよ？」

「いや、兄ちゃんが増えたみたいで面白い」

「同い年だろ……」

呆れた顔でそう言うと、数馬が素っ頓狂な声を上げる。

「え、お前ら同い年!？」

「言つてなかったか？」

「聞いてねえー……15かよ。俺と同じくらいだと思つてた」

ぽりぽりと頭を掻く。確かに、どちらかと言えば数馬とランラクルの方が同い年に見える。

「……カズマはいくつだ？」

「20だよ」

「……16か17、くらいだと思つてた。……サンドルと同じくらいかと」

「はあああ!？」

どうやら大分、認識に齟齬があつたらしい。

有馬は「だから平然とタメ口聞いてたのか」と納得する。数馬とランラクルは、そのまま頭上で「老け顔めっ!」「なっ!?!?」……くっ、若作り!」と言ひ合いを始めた。

その時。

「うおおっ!?!」

有馬が（若干男らしい）悲鳴を上げ、勢い良く後ろに引つ張られた。非力な腕はあっさりと数馬から離れ、軽々と何かに引き寄せられる。

「有馬っ!?!」「アリマ!」

同時に2人が振り向くと、既にその姿は無かった。

有馬は飛んでいた。いや、有馬を抱えてい誘拐犯が飛んでいた。いや、飛ぶというよりも、跳んでいる。

「……………」

初対面の、しかも明らかに友好的でない相手と口を聞けるほど社交的ではない。

有馬は口を嚙み、眉を顰めて思考していた。

（……………逃げる？ いや、空飛ぶのとか知らないし、抜け出たとしても……………落ちるし）

屋根の上を飛び跳ねて、眼下には街の喧騒が見える。

落ちたらただではすまない高さだし、誰かを下敷きにしては大変だ。

（出来れば、こいつが止まったところで、逃げよう。うん）

正直言つて怖い。こんな強引な手段で搔つ攫われるのは初めてである。

姿勢こそ所謂お姫様抱っこなのだが、空中でこれはなんとも頼りない。

誘拐された事よりも、この高さとスピードが恐ろしかった。

（ってかあの2人！ 気配とか！ 読め！ 気付けっ!）

段々と恐怖が裏返つて怒りが湧いてくる。

直後に一際大きなジャンプをかまされて再び恐怖に塗り換わったが。

「もう少しの辛抱だ」

風に紛れて聞こえた声に、目を見開く。

(っっわ、喋っ……)

「舌を噛むなよ」

(……た、あ、ちよおおあ ああああああ！！)

遊園地のアトラクション以上の、急速落下。

屋根を蹴り、弧を描いて跳躍し、そして落ちていく。

絶叫系には強いと思っていた有馬だが、この時ばかりはじっとりと汗を浮かべ、ぎゅっと閉じた目から涙を滲ませる。

「……ッ」

何故か誘拐犯が息を呑む。有馬は最早相手が誰なのかも忘れ、必死に顔を、体を押し付けて両手でしがみ付いた。

思わず神と仏とタキシード 仮面に祈り始めた頃に漸く、ダンッ、と着地した。

「っっえ……」

ゆっくりと降ろされる。が、腰が抜けていてへなへなと座り込んでしまった。

誘拐犯は溜息を吐き、有馬の両脇に手を入れて再び抱き上げる。子供扱いにも程がある抱き方だが、憤慨する余裕も無かった。

アジトらしき建物に入ると、窓の無い部屋へ連れて行かれた。

古ぼけたベッドに下ろされ、ばたんと扉が閉じる。そして外から鍵を閉める音がした。

「……なさけな」

地面に降りた時点で、逃げるつもりだったというのに。未だに膝が笑っている。借り物の靴を見つめっていると、鼻がつんとした。

「結局、守ってくれる人がいないと、ねえ。あーあ」

ぼすん、とベッドに転がる。

「腹立つー」

腰が抜けた状態では逃げるに逃げられない。

いくら魔法が使えたって、本人がこれでは活用のしようも無い。

(何が目的なのか分かってからでも遅くない、かな)

目的が何にしる、恐らく兄は助けにくる。 有馬は、助かる事を

疑っていなかった。

その上で、相手の目的のパターンを考える。

1、金目当て。 先ほどの話を聞いていて、金貨300枚を得ようとした。

2、勇者目当て。 スーアルカルドの人間。

3、女目当て。 可能性は薄い^{アリマ}が、奴隷や、単純に性処理の目的。

4、傭兵団目当て。 何らかの恨みがある。

5、有馬の能力(自然魔法/原始魔法/他)目当て。

6、アニマラーナの者。 数馬とランラクルを誘拐犯だと誤解中。

(……普通に考えて金だよな)
金貨299枚。

宝剣にしては安いとは言ったが、大金である事は間違いない。

(まあ、兄ちゃんならなあ。 払うかな?)

数馬は合理的だ。 下手に突入して有馬に怪我をさせるより、金を渡して穩便に済ませる可能性が高い。

勿体無いとは思うが、下手に勇者精神を發揮するよりも安全で確實だ。

しかし。

自分に、金貨300枚もの価値はあるのか。

(兄ちゃんの事も捨てたようなもんだっし……っあー！ もやもやする)

実を言うと、謝ろうと思っていたのだ。 電話をして、説明と謝罪をしようと思っていた。

だから思いがけず兄がこちらにいた事で、出鼻を挫かれた。

兄は全く変わっていなかった。 そのせいで未だに、謝るタイミングが見つからない。

(参ったな……ってか、今はそんな場合じゃない)
相手の目的が何にしる、逃げ出せれば一番良い。

今のところ活用できそうなのは火・水・土・風等の自然魔法。それから、探せば居るであろう精霊。

原始魔法は練習中、言語・論理魔法は今だ簡単なものしか手をつけていない。

自然魔法と精霊魔法の手軽さにかまけてしまったのが悔やまれた。

(便利だけど、応用しにくいんだよね……)

有馬の自然魔法は、体を動かす事でイメージを補佐している。だから、表現しにくい物ほど難しい。

更に言うと、体から離れた場所に出す事も出来ない。ちなみにベルやロボは動作無しに体から離れた場所に出す事が出来る。

どうやら現代人としての常識が邪魔しているらしいが、修練次第でどうにかなるらしい。

けれど実戦の場に来てからそんな事を言っても仕方ないのだ。

(ドア吹っ飛ばして、そのまま出たとして。追いかけてきたらアウトですよー！)

流石にまだ殺人が出来るほど吹っ切れてはいないし、見知らぬ土地で逃げ切る自信も無い。

有馬は肉体系も雑魚同然だが、精神力も無い。安穏な世界で(兄に)甘やかされて育った有馬には、喧嘩の経験すら無い。

それに、うっかり殺してしまったら、と思うと攻撃するにも踏ん切りが付かないのだ。

水だって勢い良く出せばウォーターカッターになるし、風だって使えば火だってはかまいたちのように凶器となる。

魔法は危険なものだ。今だ扱い方が上手くないのに、それを生物に向けたくはない。

(まあ、相手が話すつもりだったなら、聞くだけ聞いて) かちやり、と鍵が開く音。有馬は体をばつと起こし、手を握り締め

そしてドアが開き、誘拐犯が再び部屋に入ってきた。

17 自由時間です(後書き)

甘やかす兄ちゃん。

……計算間違っていないかめっちゃくちゃ心配です
そのうち表でも作ってみよう。

18 勇者様の伝説の武器

「……危害を加えるつもりはない」

後ろ手に扉を閉めると、男はそう言った。

身長は数馬より少し高い。190とまでは行かないが、長身だ。

「私はヴラディーク。ヴラディーク・グルーハルト・ディーツベルグ」

（ドイツ人っぽい名前だな……）

ヴラディークと名乗る男は、先ほどまで着ていなかったマントを羽織っている。

襟の立った、表が黒く裏地が真っ赤なマントだ。

色白で痩身、顔は整っているが、その目は凝った血のように赤く、どこか不気味だ。

髪は金で、緩く後ろで結って流している。

（うーん、吸血鬼）

イメージとしてはまさにそれだ。

この世界に来てからやたらと美形を見た気がするが、今までに無いタイプだ。

強烈な色気があり、大輪の薔薇のような存在感がある。

尤も見目が良いだけで惹かれるような人間では無いので、有馬は平然としている。

ヴラディークは有馬をじろりと見てから、重々しく口を開いた。

「聞きたい事がある」

「……はあ」

この姿を見て、少なくとも金の話では無いような気がした。更に、女にも不自由はしていないと思われる。

なら残された可能性は、兄か傭兵団か、有馬の魔法か、アニマラーナの者か。

有馬はじつと黙って質問を待った。そして、

「前魔王陛下　　ネインクルス様の行方を知らないか」

思い掛けない質問に、目をぱちくりとさせた。

ネインクルス陛下。

ネインクルス・アヴロニータ・ディアヴァルシア。すなわち、ルネのことだ。

「……え、もしかして、魔族」

「察しが良いな。私は」

妙に赤い唇の両端が、つう、と上がる。有馬はその妖艶さにごくりと唾を飲んだ。

「屍魔族グルーハルト、族長。吸血鬼ヴァンパイアのヴラディークだ」

「うわやっぱり」

思わず言った後、はっとして口元を押さえる。

（やべっ……いや、まあいいや。っていうか、テンプレ通りに吸血鬼だなー）

「やっぱりとは何だ」

「……見た目がすごくヴァンパイア」

「そうか。……早く質問に答える。あの方は生きているのか？ 何処にいるんだ」

有馬は遠くのルネを恨めしく思いつつ、う、と言葉を詰まらせる。

「……生きてるけど。場所は教えるわけにはいかない、よ」

「何故だ」

「だって、……追っ手だったら、案内したら駄目だし」

ぎろりと睨みつけられる。有馬はびくりと肩を震わせたが、しつかりと睨み返す。

「私は追っ手などではない」

「新魔王には絶対服従でしょ」

「……確かに、奴の命令に逆らう事は出来ん。だが、私の忠誠は新たな魔王には無い」

「……“殺してこい”って命令されてる可能性もあるよ」

「私は“元魔王を追え”と言われたただだ　ふん、あんな若造が私を縛れるものか。」

“是非とも私に追跡の役目を”と、少し服従した様子を見せたらあつさり頷いた」

どうやら上手く言いくるめたらしいが、まだ演技という可能性は捨てられない。

その警戒を見て取ったのか、ヴラディークは少し表情を和らげて話した。

「それで、お前はネインクルス様とどういった関係だ？　せめてそれくらいは話せ」

「ああ、それなら。……えっと、契約した仲だけど」
「つな!？」

ヴラディークは目を見開く。

（あ、まずった……？　いや、元主君が人間の小娘と契約してたら気分悪いか）

「……どちらが名前を与えたっ!」

詰め寄られ、がしつと肩を捕まれる。有馬は一瞬びくつくが、はっきりと答えた。

「あたし」

「~~~~ツ……!」

がくりとヴラディークが膝を付く。有馬は若干脅えつつも、肩を掴んでいた手を離そうと触れる。

……微動だにしない。

（またか！　またかつ!）

あまりの非力さに、またも切なくなってくる。

骨ばった大きな手。その先の腕にも、あまり筋肉は付いていないよ

うに見える。

人間と他種族では根本的に体の強さが違うのだから仕方ないとはいえ、それでも以下略。

「お前……が……ネインクルス様の主、だと……？」

「まあ、そうなるかな」

「喜んでいいのか、悪いのか……！！ くそっ！」

床に片手の拳を叩き付ける。有馬はなんとも申し訳ない気分になった。

ヴラディークは複雑な顔をして立ち上がり、有馬から手を離す。

「……何はともあれ、お前と契約しているのならあの方は新しい魔王に従わずに済む。そこは礼を言うが……ッ」

「はあ。……文句はあると思うけど全面的にあいつのせいだからね」
「……何だと？」

「隠れ住むから名前くれって言われて、付けた直後に耳噛まれて、無理矢理血飲まされたの。不可抗力ってやつ？ ひどいよね」

「……ッあの方は全く……！！」

脱力したヴラディークにはあまり敵意というものが感じられず、有馬はひとまず安心した。

少なくとも殺される可能性は薄いように見える。

「それで、どうするの？ ヴラディークさんは。会ってどうするつもり？」

「それはもちろん、再び王位を取り戻していただく」

「いや、もう魔王にはなんないって言ってたよ。隠居するって」

「なっ……なんだと！？ そんなっ！」

打ちひしがれた表情。ルネが滅多な事では意見を変えないと分かっているのだろう。

有馬は可哀想に思いつつ、若干後退りする。

するとヴラディークががしりと手を取った。そして、顔を上げる。

「ならばお前が魔王になれ」

そして真剣な顔で言い放つ。有馬は一瞬ぼかんとした後、全力で首

を横に振った。

「断るっ！」

「なれ！」

「絶対やだ！」

「お前は黙って頷いて契約さえすれば良い！ 後は何も望まん！」

「いやーだー！！！」

「魔領の全てと我ら四天王が手に入るのだぞ！？」

「四天王いんの！？」

「居る！ 1人で国を滅ぼせるような魔族が4人だぞ！？ 世界すら思いのままだ！」

「いらぬ！ いらぬから！ どの竜王だよ！」

詰め寄ってくるヴラディークから逃げるように後ろに下がっていく。両手を突き出して拒むが、全く意味を為さずにどちらも押しのけられ、ついには壁に背が付いた。

(二重の意味でやばいっ！ 待て！ この体制はない！) がしりと両手首を捕まれて壁に押し付けられる。

「ぎゃーっ！！ やだーっ！ 襲われる！」

「襲つかッ！！ お前のような小娘に興味は無い！」

「言い逃れ出来ない姿勢だっっの！ 離せーっ！！」

ベッドの上で迫られ、手を壁に縫い付けられたこの状態。人に見られたら完璧に言い逃れが出来ない。

「このっ……いや、確かにそれはいい案かもしれないな」

ヴラディークは不意に、笑う。有馬の背筋にぞくりと悪寒が走った。

「は……はあ？ 何？」

「所詮人間は心弱き生物。快樂で体を縛れば言う事を聞かざるを得ないだろうな」

「うううわあああああ！ 変態だ！ ロリコン！ ペドフィリ

ア！ そういう発想ほんとありえない！ きもい！」

「ふん、何とでも言う方がいい。……ロリコンとは何だ？」

「真面目な顔して聞くなっ！ ロリータコンプレックス、幼女趣味

！分かる！？ ペドフィリアは小児性愛！」

大声でロリやらペドやら叫ぶのは年頃の少女として果たしてセーフなのだろうか。

必死に抵抗する有馬をふん、と鼻で笑う。

「そもそも私が幾つだと思ってる？ 人間など総じて遙か年下、老婆も赤子も同じではないか。今更気にせん」

「んな変態理論知るかつ！ ああもう！ 助けてーっ！！」

「くく、叫んでも無駄だ。助けなど」

悪役丸出しの台詞を吐いたその時、盛大な音と共に扉が爆砕した。粉塵が舞い、一気に視界を奪われる。ぎゅっと目を閉じていると、気付けばヴラディークの手が離れていた。

「……妹に、何をしてやがるこのロリコンペド野郎！」

数馬の声が、した。有馬はへにやりと体の力が抜けるのを感じ、ずるずると壁に背を預けたまま溜息を吐く。

「にーちゃん」

「おう、有馬。大丈夫か？ キスの1つでもされたか？」

「……セーフ。まだ何も」

「そうか。色々削ぎ落とす手間が省けた」

冗談まじりの声音だが、顔が明らかに真剣である。彼は本気だ。

「そこまでする？」

有馬はけほけほと噎せながら、指を前方に向けて振る。風が吹いて、粉塵はドアの方へ抜けていく。

視界が晴れると、堂々たる佇まいで相対する勇者と吸血鬼の姿。

「便利だな。……で、中ボスか？ あと魔族だろ。なんか強そうだし、四天王クラスか」

相変わらずの勘の良さである。

「……ふむ、お前……勇者か」

「……名答だ。どうする？ 何もしてないなら半殺しで勘弁してやるが」

「く、くくく……武器も持たずに何を言うか、愚かな勇者よ」

目の前で繰り広げられる、ベタなイベントバトル前会話。

有馬はうんざりした顔で2人を睨んだ。

「やるなら外で。出来れば町の外でよろしく」

「だよ。どうする？」

「ふん、勇者の力を見ておくとするか。外で待とう。私はヴラデイク・グルーハルト・デーツベルグだ。逃げるなよ、勇者」

悠々とマントを翻して去っていくヴラデイクを、生温かい目で見送る。

「あの人、自分の目的忘れてんのかな……」

「さあ。ま、行ってくるわ」

「あ、うん。武器は？」

「素手」

「……死なないようにねー」

ひらひらと手を振る。数馬はすたすたと出て行き、入れ替わりにランラクルが入ってきた。

「アリマツ！ 無事かっ!？」

「あ、うん……ぐえ」

駆け込んできたランラクルに抱き潰され、蛙が踏まれたような声が出た。

「俺が油断したせいであ……！ 無事で、本当に良かったっ」

竜人族の力は強い。肺の中の空気が急激に押し出され、ひゅ、と喉がか細く鳴る。

声も出せないほど圧迫され、謝罪がヒートアップしているランラクルの背中を弱弱しく叩いた。

折角無事だったというのに、このままでは複雑骨折か呼吸困難で死にそつだ。

「有馬が怪我でもしていたらと思うと……ッ」

（今まさに怪我しそうですね！ ギブ！ ギブ！）

「アリマ？ ……ああっ！ すまん！」

全力で背中を叩く。無意識にだが自然魔法で威力が強まったらしく、

漸くランラクルが気付いて力を緩めた。

「っげほ、ひゅっ、……げほっ」

必死に酸素を取り込み、肩を上下させる。

「だ、大丈夫か？ すまん！」

「……………っ……………しぬ」

「ほ……………本当にすまん」

せえせえと荒く息を繰り返す。ランラクルは申し訳なさそうにその背中を擦った。

「……………まあ、助けに来てくれてありがとう」

「あ、ああ」

涙目のまま礼を言うと、今度は目を見開く。そして思い出したようにぱつと体を離した。

「？……………あ、腰抜けて立てないから、またよろしく」

「分かった。……………どうする？ 宿に戻るか」

「や、兄ちゃんがちよつと心配だから、見に行こう」

「ああ。じゃあ、街の外だな。……………ほら、乗れ」

ベッドの横にしゃがんだランラクルの背に、よいしょ、と体重を預ける。

「裾の広いの着ててよかったわ……………」

「そうだな」

しみじみと思いつつ、アジトを出る。外から見てもぼろい屋敷は、かなり前に打ち捨てられたものらしい。

街外れの静かな道を歩き、僅かに響いてくる戦闘音に耳をすませる。

「……………どうやって渡り合ってたんだろ、素手で」

「音からして、……………肉弾戦か？」

中ボス戦にしては地味すぎる。

やがて都からの出口が見え、ランラクルは足取りを速めた。

「ここから男が2人出て行ったか？」

「あ、ああ。今は行かない方が……………」

「身内なんだ」

足早に、開いたままの門から出る。

ずっと向こうに、砂埃を上げて本気の殴り合いをしている2人が見えた。

魔法などは全く見えない。有馬は思い切り溜息を吐いた。

「ほんとに殴り合いだし」

「相手は魔族か？」

「うん。吸血鬼で、屍魔族？ の族長だって」

「はあ！？ じゃあ、あいつ……ヴラディーク・ディーツベルグか！」

「え、知ってるの」

「竜人族は魔族寄りだからな。そういう話も入ってくるさ」

2人は被害が来ない程度場所に陣取る。

そしてそのまま、繰り広げられる戦闘を観戦し始めた。

マントを翻らせたヴラディークの鋭い蹴りが腹の横を通り過ぎる。

数馬はそのまま距離を詰めると、思い切り右腕を振りぬいた。

「甘い」

にんまりと笑うと、吸血鬼らしく尖った牙が覗く。

引き戻そうとした腕を取られ、手首に思い切り噛みつかれた。

「つてえ！」

何かが抜かれるような感覚がし、一瞬の酩酊感。即座にその顔を左手で殴ろうとすると、すぐさま離れる。

ちらりと見た手首には、綺麗に2つの小さな穴が開いていた。

「ちッ、何しやがった」

「吸血鬼ヴァンパイアだぞ？ 私は」

ぞわりと寒気を感じて跳び退る。横薙ぎに走らせたその手の先端に、

明らかに先程より尖った爪が付いていた。

有馬が見れば、数馬の体液を媒介に魔力で水増しした物だ、と分かるだろう。

吸血鬼は相手の体液を吸い、相手との親和性を高めて魔力を効率的に吸い取る事が出来る。

その魔力と血を元に細胞を操作したり、相手と自分の繋がりを強める事で精神系魔法を上手く掛けたりといった事が出来る。

ちなみに彼らのメインウェポンはその肉体である。血肉と魔力を操る事に長けた彼らは、魔族でも随一の格闘一族だ。

「身体操作？ …… グルーハルト生ける屍っつーだけあるな」

グルーは古代語で屍、ハルトは生ける、という意味である。

屍魔族という名は昔からあった訳ではなく、古来にはそのままグルーハルトと呼ばれていたのだ。

「ほう？ 今の人間には珍しいな。古代語を知るとは ああ、勇者だからか」

「便利な魔法がかかっているんでな」

数馬は召喚された際、神の加護という形で翻訳魔法と身体強化、更にある程度の魔法耐性を得た。これらは本人が解こうとしなければ、死ぬまで解除されない。

「しかし、恐ろしい身体能力だな。私と同等とは」

「それも勇者の特権って奴だ」

勢い良く体を屈めると、その頭上を通り抜けた長い足が髪を掠る。隙の出来た脇腹に拳を叩き込むと、僅かにバランスが崩れた。

「む？」

数馬は思い切りマントを引っ掴み、そのまま絡め取って引く。

「こんなマント着てんなよ」

「これは先祖伝来の品だからな」

「説明どう、もっ！」

引き寄せたヴラディークの襟を引っ掴み、軽く体を捻り 思い切り地面に叩き付ける。

やや変則的だが、柔道のような投げ技である。

「ほう、そう来るか」

ヴラディークは背中から地面に落ちたが、両足で思い切り地面を蹴って体ごと跳ね上がる。

勢い余って1回転したが、見事に着地したと思うとすぐに向かつてくる。

「うげっ」

「投げは繋げるのが難しいだろう。道場向きだ」

懐に飛び込み、腹に拳が叩き付けられる。体自体も強化されているのでさしたるダメージにはならないが、それでもその一撃は重く鋭い。

数歩押されて下がるが、戦意を失わない目がぎろりとその手を睨む。

「投げてだめなら」

腕をがしりと取り、そのまま思い切り足を振り上げる。

「折ってみろっ！」

ヴラディークを巻き込んで後ろに倒れる。落下していく事など気にせずに、上向きに掴んだその腕に　思い切り足をかける。

「っぐ！」

足を重力に従って下げ、掴んだ腕は躊躇せず上に向かって上げる。

ぼきり、と音がした。肘の関節が逆向きに曲がり、ヴラディークも流石に呻く。

耐えられるが、痛くない訳では無いのだ。

「もう片方イっつくか？」

「馬鹿め。この体制で反撃など出来ん」

しかし流石は魔族といったところか、すぐに立ち直って容赦なく腹に膝で一撃入れる。

「痛っ……っぐあっ！」

更に顔面を殴りつけられる。数馬は一瞬くらりとしたが、すぐに目をぎらりと光らせ

「っつてえな！」

「……?!?!?」

思い切り、腕に掛けなかった方の足を上に振り上げた。

遠くで見えていた有馬は思い切り噴出した。ランラクルは沈痛な顔で黙り込む。

数馬の片足が思い切り蹴り上げたのは、そう、男性の急所である。

どうやら魔族でもそこは鍛えられないらしい。

「めっ、めっちゃ痛がつ、てるっ！ 最高！ 変態ざまーみろっ！」
「……」

口には出さないが、ランラクルの表情は明らかに哀れみを浮かべていた。

そこからは数馬の独壇場だった。

痛がつて飛びのいたヴラディークに殴りかかる。腹のド真ん中に渾身の一撃を受け、その体は数メートルも吹き飛んだ。

「兄ちゃんもいよいよ化物じみてるなー」

有馬が《精霊眼》を発動すると、数馬の足や拳にマナが集まったのが見える。

どうやら魔法は使えないが、無意識下でマナを操っているらしい。

(……マナってそのまま使えるもんなの？ 身体強化……でもないよな)

空中を吹き飛んでいたヴラディークの鳩尾に、思い切り蹴りを叩き付ける。

格闘ゲームさながらに、落ちる前に叩き、落ちる前に蹴り上げ。

大体10発程繰り返した頃、やっと地面に落ちる。

「うわ」

数馬は遠目で分かるほどにんまりと笑い、軽くジャンプしたかと思うと 思い切り、両足でその背中に着地した。

「……容赦無いな」

「ま、まあ殺さないだけマシかも」

流石に見ていて可哀想になってきた有馬とランラクルであった。

18 勇者様の伝説の武器（後書き）

ステゴロは男のロマンだそうです。

戦闘シーンは難しいですね。

戦闘中に普通に投げ技が繰り出せるのは勇者的身体能力の為す所だ
としてみてください。

屍魔はしまと読んでください。いわゆるアンデッド系です。

ヴラデーイクは満身創痕のまま颯爽と帰って行った。

ちなみに去り際にはしっかき「覚えていろっ！」と捨て台詞を吐いて行った。

「……魔族って」

見た目が完璧なだけに、なんとなく残念な気持ちになった。

3日後、有馬は漸く動きやすい服装になって上機嫌で街を歩いていった。

深緑色のチュニツクに、枯葉色のズボン、足元はやや赤味がかかった茶色のブーツ。

上は茶色いスエード生地のコートで、なんと素材は魔物の革らしい。利用できる物は利用するという商売魂が透けて見える。

ちなみに金貨2枚分もしたが、高いだけあって丈夫で軽く、更にこれでもかと言うほど裏地に魔術を織り込んである。

防寒・防刃・防火・防水・防塵・耐熱・衝撃吸収・温度調整・軽量化、その他諸々。

最早魔道具と言っても良いレベルだ。

「全身で金貨5枚もかかっただけあるなあ」

チュニツクとズボンと下着その他で金貨2枚。靴2足で1枚。コ

トに2枚。

全身で50万円、とかなりお高い金額になっている。

少なくとも元の世界なら考えられないレベルだ。

「そうだな」

そう言いながら隣を歩くのはランラクルである。

ここ数日でもうすっかり有馬の付き人状態になっていた。

ちなみに数馬は武器屋を回ったり依頼をこなしたりと飛び回っている。

サンドルやカラカはそれに付いて行っているようだ。

「……ラルは何かすることないの？」

「探せば無くもないが。今はお前の護衛を頼まれてるからな」

有馬は毎日街を出ては魔法の練習に勤しんでいる。

街の近くにちらほら現れる弱い魔物を相手に戦ってみたりもしている。

相手は第十級程度の虫系の魔物なので、害虫駆除程度の気分であるが。

ちなみに魔物は強さ・危険度で第十級〜特一級までに分類され、不定形種や怪鳥種、無機物種、などに種別されている。

「お疲れ様です」

「おう、おはようさん。今日も練習か？ 気を付けろよ」

「ういっす」

すっかり馴染みになった衛兵に声をかけて、街の外に出る。

そこから暫く右に歩き、街の中から見えない程度の場所で準備運動を始めた。

「よいっつ、しよ」

昔に比べて随分固くなった体を、ぐい、と折り曲げる。

一応爪先に指は届くが、かなり痛い。

更に腕を回し、首を回し、後ろに腰を曲げ、とすっかり体を解す。

「……よし」

準備運動を終えると、ラルに声を掛けて更に歩いていく。

街の周り数百メートルは草原と砂地で、その先には森がある。

「じゃ、いつてみよー」

「ああ」

有馬は遠くを《精霊眼》で見る。森の中にちらほらと、魔物の黒い魔力が窺えた。

ついでに言うと《精霊眼》を使うと視力が大幅に上がるので、中々重宝している。

ただし使った後、多少目が疲れる。

森から少し離れた所で立ち止まると、有馬は右手を持ち上げて軽く振る。

「便利だなー、ほんと」

ふわりと風が発生して森に向かって吹き抜けると、誘われたように魔物が数匹出てくる。

今の風は普通のものではなく、虫の魔物だけを誘うという植物の香りを真似た匂いがする風である。

「ぼーっとするな。来るぞ」

「ういつ」

両手を前に向かって突き出し、ぎゅ、と唇を結んで集中する。

体内の魔力の流れを動かし、全てを手の平に向かって流していく。

「大丈夫か？」

「いける」

ギギユイツ、と奇妙な声が近くなる。有馬は一気に魔力を押し出し、同時に全て変換する。

「っ えい！」

炎の塊が飛んで行き、こちらに向かって掛けていた30cm程のバツタ型の魔物を焼く。

あつという間に勢いを失い火達磨になったそれらに、ふう、と胸を撫で下ろした。

「成功成功。消火ー」

斜め上空に腕を伸ばし、ぐるりと大きくかき混ぜる動きをする。

空中に現れた直径2メートル程の水の球を、燃えているバツタの上
に落とす。

じゅう、と音がして火が収まった。

「……どう考えても自然魔法の方が便利だな」

「あたしもそう思うけど。でもそれだけやってちゃ駄目だし」

こういった自然の中でなら、マナは殆ど無尽蔵である。

自然魔法は余りにも手軽で便利すぎるのだ。まだ応用は出来ないが、
無尽蔵に炎を生み出せる、それだけで圧倒的なアドバンテージにな
る。

だが、人間楽な事ばかりしては成長できない。

「部屋の中では使いにくい、んだっただな」

「うん。空気の抜ける場所じゃないとマナが薄いつばい」

マナは基本的に壁を通り抜けたりはしない。空気と同じようなもの
である。

ただしマナの籠った物というのもちろほらあり、そこのところは有
馬もよく分らない。

城の自室は何故かずっとマナが濃いままだったのだが、宿の部屋な
どは数度魔法を使うとマナが薄くなって威力が出なくなる。

暫く待てばまた元に戻るが、それでもその時間は命取りになりかね
ない。

と言う訳で、他の魔法を鍛えているのだ。

「しかし、もう少し素早く発動できないとな」

「う……まあ。うん」

「……まあ、練習だな。ほら、次が来るぞ」

うい、と有馬は視線を森に向ける。

今度は論理魔法を試してみる事にした。

城で覚えたものはあまり多くは無い。基本となる《対象指定》、《
範囲指定》、《発動》、《起動》、《停止》だ。

更にこちらに来てから、一応街の本屋に行って簡単な攻撃魔法の載
っている本を買った。

載っている内容は大したものではないのに銀貨2枚もした。全くもって恐ろしい。

と言う訳で、有馬は《火球》と《石礫》と《氷柱》を覚えた。どれも攻撃を飛ばす単純な魔法で、それだけに魔力消費も小さく数が打てる。

「《石礫》！」
地面の土を《浮遊》、《固形化》、《硬化》、《固定》、《射出》、という一連の流れを纏めた魔法が《石礫》である。

これに《範囲指定》と《発動》を組み合わせて纏めたものが、有馬の頭の中に入っている。

魔法式の纏まりに名前を付け、その名前を簡易詠唱とする事で発動成功率を高める、という方法はアニマラーナから広まった発想だ。何を隠そう、シヴァの父親の発明である。

「グロいっ！ 《氷柱》！」
虫がグチャアと音を立てて潰れた。有馬は後続の魔物達に向かって、尖った氷の柱を次々と射出していく。

魔力が多いためか、この程度では疲れも全く見えない。ちなみにこの世界では科学が発展していないため、氷や水、炎を生させる魔法についてはかなり抽象的になっている。

例えば火を発生させる魔法は《発火》だ。流れも何もなく、《発火》、《発動》、それだけで火を発生させる事が出来る。
ちなみに《火球》は、《発火》、《浮遊》、《成形》、《拡大》、

《固定》、《射出》からなる。

「《火球》！ ……終わり？」

「そんな乱れ打ちしてたらすぐ終わるだろ」

有馬からすれば「抽象的なくせに長くて面倒」なのだが、そもそも普通の人間は古代文字など読めないのである。

「って言うか、もつとこう、でかい魔法を打ちたいよね」

「自然魔法で試してみたらどうだ」

「……いや、……うーん？」

有馬は両手を上げて、掌を天に向ける。

「光とかなー。熱いやつ」

「光系はかなり難しいものだと思うが」

「いや、マナをひたすらぐるぐるやっていると光るしー、まあただの光る球なら簡単だと思う」

うーん、と唸って両手をくるくると上で回す。

次第にマナが球形に集まり、ランラクルの目にもきらきらと輝いて見える。

「……………おお」

「腕疲れてきた」

マナは掻き混ぜられた勢いのまま回りだし、くるくると光の帯になつて纏まっていく。

そして出来上がった高密度の光の球。

鞠のようにマナの糸で編んだそれを、有馬は「うーん」と一瞬悩んだ後、

「ていやっ」

そのまま森の中に投げ込んだ。

「おいっ!？」

「や、大丈夫大丈夫」

光球は木々をすり抜けて、そのまま霧散していく。

所詮ただのマナの塊なので、自然物に影響を与えることは無い。

まあ多少付近のマナが濃くなるかもしれないが。

「……………いや、ぶつけたら魔物はどうなるんだ?」

「へ? ……………どうだろ。平気なのかな?」

有馬は森の中からマナを引き戻し、再び手元に集める。

なんとまあ指先1つでそんな事が出来てしまうのだから恐ろしい。

「お、おおう……………ラル、剣用意」

《精霊眼》を発動させる。明らかにサイズの可笑しい黒い塊を発見し、有馬は慌てて促した。

「……………お前なっ!」

「いや、ほんと、ごめん！」

マナを吸い込んだのか、あるいはマナに惹かれて来たのか。魔物の正体は今だはつきりとせず、その生態も解明されてはいない。兎に角、危険であるという事だけははつきりと分かっている。

「下がってる。俺に当たらない範囲で攻撃を」

有馬はこくこくと頷き、マナを集めて塊にし始める。

黒い塊は駆け出したらしく、速度を上げてこちらに向かってきた。

「離れてろ」

そして森から飛び出して来た、有馬の頭ほどの高さがある巨大な

「う、……ね、鼠……？」

灰色の、鼠。

一直線にラルに向かって駆ける鼠は、涎を口から撒き散らし、血走った目をしていて 醜悪で、おぞましい。不快感しか生まれてこない。

有馬は数歩下がり、僅かに手を震わせながらマナを次々に変質させて行く。

火事場の馬鹿力というものが、塊を幾つも配置して変質させるといふ新技までやってのけた。

「うええー」

キシヤアアアと鼠らしからぬ叫び声を上げる魔物に、有馬はうるたえつつも火の球を放つ。

指先で弾くように飛ばしていく。剣で鼠を受け止めていたラルを器用に避け、火の玉は鼠の脇腹に命中した。

「上手いぞっ！」

「……っつい」

口をがば、と開いた鼠。その口から黒い魔力が迸り、有馬は鳥肌の立った腕を服越しに撫で付ける。

（無理ほんと無理生理的に無理マジ無理っ！）

鼠の皮は中々硬いらしく、斬りつけてもさほど傷つかない。

しかしランラクルはしっかりとその場で押し留め、有馬を気遣う程

度には余裕がある。

「キシャアアアアアア　ッ」

有馬は思いつきりびくついて後ろに飛びのいた。

そして我武者羅に左手を振り下ろす。噴き出した、高温の蒼い炎が鼠を舐めるように焼いていた。

しかし体を焼かれても止まる事は無く、むしろ更にグロテスクな様相になった。

「うひい……っ」

その手の耐性はあると思っていた有馬だが、実際に自分でした事となると鳥肌が立つ。

表皮は焼け爛れて崩れ、ぼたぼたと肉と血が零れ落ちる。

元々の醜悪さも相俟ってもう目も当てられない、が、目を逸らす訳には行かない。

「はあっ！」

ランラクルが力任せに斬り付ける。鼻先のあたりがそのまま千切れ飛び、有馬は「ひっ」と小さく悲鳴を上げた。

恐ろしい。おぞましい。気持ち悪い。

けれど、手を止める訳にはいかない。

有馬は手を振り上げた。自分の敵を、殺すために。

「っ」

大きく息を吸い込む。直径3メートル程もある巨大な岩が、手の上に出現した。

「下がってっ！」

「何だ、……っ!？」

思い切り飛びのくランラクルを見届けると、有馬は正義の鉄槌を振り下ろすように、その腕を振る。

その後聞こえた音がどんなものだったのか、有馬は覚えていない。

「っあ」

直後に後頭部に衝撃を受け、昏倒する羽目になったからである。

ファンタジーの、というかRPGの定番といえば、攫われるヒロインである。

大抵の場合主人公はそれを助けに行くもので、助けた後には愛が芽生えることだろう。

尤もその姫に裏切られるというえげつないストーリーのゲームを有馬は知っているが。

「……っう」

はたしてその姫たちはどんな気分だったのだろうか。

恐ろしかっただろう。魔物の巣窟に1人、どんなに心細かったか。

そんな状態に1番に助けに来たのなら、勇者だろうが、戦士だろうが武道家だろうが、全くもって関係なく釣り橋効果で一発だ。

有馬は目を覚まし、そんなハッピーエンドを期待したくもなる、と溜息を吐いた。

(……まさか。あのタイミングは無いでしょ、ふっつう)

柔らかなベッドに寝かされている。城の寝室の物と負けず劣らず高級そうなベッドだ。

滑らかで軽い絹が何枚も何枚も重ねて掛けられ、最早シルフィーク状態。

服もまた絹で、胸元や袖に恐ろしく繊細なフリルとレースが使われ、もう触れただけで溶けそうだ。

(……攫ったのにこの待遇。金持ちで、関わりがあるのは)

あの真面目なのか変態なのか今一分からない吸血鬼しか思い浮かばない。

有馬は眉を顰め、うんざりとした顔をする。

(魔王になれとか言ってくるのかな、また……)
いくら何でも、魔王ルートは遠慮したい。

ヴラディーク並、またはそれ以上の者が3人居て、更に元魔王や神獣や精霊を味方につけたとして、自分が勇者に勝利する光景は想像がつかない。

そしてもし、負けたとしたならば。

(魔族側は確か、獣人と竜人……だっけ?)

勇者対魔王。言わば、代理戦争というものだろう。人間達にその意識が無くとも。

負けてしまうと、獣人や竜人への風当たりは強くなるかもしれない。そう思うと、負けないに越した事は無い。

(……うーん)

暫く思案していると、ドアがノックされ、返事を待たずに開く。やはり予想していた通り、ヴラディークが入ってきた。

「目は覚めたな」

「死ね変態」

有馬は思い切り蔑んだ目でそう言った。

出会い頭の一撃に、余裕綽々だったヴラディークの顔が引き攣る。

「おっと間違えた。どうも、変態」

「……。小娘、その暴言は許そう。一先ず契約してもらおう」

「何が一先ずだっ!」

思い切り本題である。

有馬はとりあえず体を起こし、ヴラディークの端正な顔を睨む。

「契約するだけで良いのだぞ?」

「そっかー。ゴンザレスがいい? ゴン太がいい? 権左衛門がいい?」

「? どれでも良いが」

「つまり……」

皮肉は通じなかった。有馬は口を尖らせ、前攫われた時よりは緊張感無くヴラディークを見る。

あの時は殺されるかも思っていたので緊張したが、今となっては恐らくそれも無いと思われる。

「ここは？」

「魔領ディーヴィアの、東の城だ」

「……。うわー」

ジト目でヴラディークを睨みつけ、声を低くして言う。

「興味ないとか言つといて結局連れ込むんだ！……へえー」

「そういう目的ではないっ！ 思いつきも程々にしろっ！」

「どつという目的？ 小娘にはちょっと分からないんだけど」

「どの口でっ……！」

口喧嘩じみた会話をしていると、乱暴に扉が開かれた。

「いつまで押し問答してるんじゃこのボケ！」

「なっ！？ ボケとは何だ！」

入ってきたのは、極彩色、という表現の似合う人物だった。

ボリユームのある髪は腰まで伸びて、下半分はマゼンタ、上半分はレモン色、肌は白に近い緑、目は鮮やかな緑。

しかし元の世界のギャル達のように派手なだけという訳ではなく、見事に調和して艶やかさを出している。

顔立ちも華やかで、気の強そうな瞳に赤い唇がまた美しい。ただ1つ気になるのが、

「初にお目にかかる。僕はオーガス・ドルドイ・ベラドルン、樹魔族ドルドイの長じゃ」

「おっ……男、だ、よね」

「む？ うむ、男じゃよ。よく間違えられるがのう」

上半身を思い切り晒している事である。

しっかりと鍛えられた緑白色の肉体。腰に巻いた布は見事な刺繍が施されていて中々美しいが、それ以外に何も着ていない。

美女にしか見えない顔立ちに、未開地の部族じみた格好。

更によく見れば、頭の頂点から後ろに向かって 大きな緑色の葉が、生えている。

「……チコリー、じゃない、あ、どうも」

思わず言いそうになった言葉を押し込めて、一応挨拶をする。

「うむ。この魔力なら問題あるまい」

「だろう。やはり俺の目は正しいな」

「図に乗るな。ほれ、とつと連れて来んか！」

有馬は暫し、異星人に会ったようにじろじろとその姿を見ていた。

耳は尖っているが、エルフとはやや趣が違う。肌と少し色の違う薄緑のそれには、植物のように白い脈があった。

「さて。名はなんと？」

「……有馬、城崎」

そうか、と魅惑的な笑顔を見せるオーガス。

有馬は美人だなあ、と思いつつその顔の下方に目を向けては残念な気持ちになる。

（森の主って言うか……樹の妖精って言うか……）
両性具有（そうせいぐゆう）として見てしまえば、有りといえは有りなのだが。

「アリマ、手を出すがい」

「……」

怪訝な顔で、緩慢に右手を差し出す。

オーガスは滑らかな緑白色の指で有馬の手を取り、ふむふむと頷きながら掌の皺をなぞる。

「長生きはしそうじゃが、場合によっては世界か国の為に、若いうちに命を落とすかもしれんのう。あとは……攫われやすい体質じゃな。

恋愛に関しては、一生一途に思う相手が出るようじゃのう。家族には恵まれるようじゃ」

「……手相っ!？」

くっくつと笑って手を離すオーガス。

こちらにもあったのか、と有馬は驚愕を隠さずに自分の掌を見た。

「死後は子々孫々に崇められるじやろ。さて、丁度奴らも来る頃じゃて」

「っへ、……」

がちやりと扉が開き、まずヴラディークが入ってきた。

そして後に続くのは、2人の 魔族。

「……………^{ナイトメア} 夢魔の、メリーデイス・クティリル・ラガルベリー。妖魔族、族長……………」

酸素の足りていないような甘い掠れ声で話す、司祭服を着た12、13歳程の少年。

ベルに負けず劣らずの中性的美少年で、髪は桃色がかった不思議な色味の金髪を肩あたりで切り揃えている。

その瞳だけが闇のような黒さで、ヤンデレっぽいな、と有馬は思った。

「悪魔族クルスデーター族長、フィーリシア・クルスデーター・レイエです」

最後の1人は、理知的な雰囲気的女性だった。

きつちりとシニヨンに結った紫髪、冷静な光を宿す金色の瞳。

両腕に這うように描かれた黒い模様がなんとも禍々しい。

黒のチャイナドレスのような服を着ていて、体のラインがはっきりと見える。

出る所だけしっかり出たその体形を、思わず羨望の目で見てしまった。

「……………はあ、どうも」

魔族の四天王を前に、有馬は相変わらずうんざりした顔で返事をした。

19 地震・雷・拉致監禁（後書き）

ピー 姫ばりに攫われまくる運命だそうです。

なんかもう自分で魔法に関する設定が混乱してきた。
近々整理して一部修正するかもしれません。

うぐう……

20 閑話・城崎数馬の顛末（前書き）

今回は数馬兄ちゃんの話です。

20 閑話・城崎数馬の顛末

「大丈夫です。絶対に無事ですよ」

泣きじゃくっている母の背中を擦りながら、心にも無い気遣いの言葉を並べる。

数馬は柔らかに笑みを浮かべ、母を宥め続けた。

「有馬は僕の妹なんですから。そう簡単に死んだりしません」
それは母よりも、自分に言い聞かせたような言葉であった。

城崎有馬が失踪したのは5日前の事である。

普段通りに帰宅途中、道の真ん中で、塵気楼のように消え去った。歩いた形跡は其処で途切れ、匂いも消え、持ち物は何一つ残らず、近くに車が止まったような形跡も無い。

友人達は、神隠しか、と言った。その時は乾いた笑いすら出なかったが、確かにその通りかもしれない。

もしこれが人為的な物だったら、是非ともその技術を聞きたいものである。

「へりでさ。ほら、上から」

「そんなもん来てたらとづくに目撃されてるだろ」

「だよなあ、と赤茶けた色の頭を掻く青年。彼は数馬の友人、赤倉古^{あかくらこ}牧^{まき}である。」

良く城崎家や数馬の喫茶店兼自宅に押しかけてくるため、有馬とも知り合いだ。

「でもなあ。じゃああれだよ、UFOとか」

「……キャトルミューティレーションってか？」

「そうそう。そのうち足か手でも無くして帰っ、」

古牧の軽薄そうな顔面に、思い切りテレビのリモコンが直撃した。

「縁起でもない事を言っな」

不機嫌を隠さず、盛大に舌打ちをして冷蔵庫に向かって行く。

此処は数馬の喫茶店の二階部分で、居住スペースになっている。

数馬の部屋、書斎、リビング、そして有馬の部屋がある。

有馬はこの家に暮らす訳ではないが、週の半分程はこの部屋に寝泊りする。いや、していた。

「いったいなー。じゃあ他に何があるのさ」

ミネラルウォーターのボトルを持って帰ってきた数馬は、蓋を取りながら言う。

「そうだな。……やっぱり神隠しか？」

「でしょ？ サワくんの言葉は正しい！」

「電波の言葉に信憑性は無い」

サワくん、とは2人の友人、石和三船いさわ みふねの事である。

色々と性格に難はあるが、見た目（だけ）は王子様系だ。

「あ、そろそろ帰ってくるんじゃない？」

「そうだな」

「ダウジングの成果が出るといいけど」

「思ったんだが、そもそもあれは地下の水脈やらを見つけるモンじゃないのか。意味が、」

と言いかけた時、階下からドア、閉まる音がした。

三船が帰ってきたのである。

「来たね」

「ああ」

数馬は覚悟を決めたような声で返事し、重々しくボトルを置いた。

「今度は何を持ち帰って来るかな？」

「せめて俺達の目に見えるといいな」

亡霊やら何やらを連れ帰ってくるのはやめて欲しい。

無論2人が信じている訳では無いが、本人は真剣な顔で「見えないのか」と言ってくるのである。

そして扉が開き、問題の人物が部屋に入ってきた。

「ただいま」

人工的でない柔らかな色味の茶髪に、茶色の瞳。

表情を忘れてきたように無表情だが、人形のように整った顔立ち。

彼こそが石和三船である。

「おかえり」

「成果はどう？」

「……これ」

三船は包帯でぐるぐる巻きになつた右手を差し出す。

「何だ？」

そして、ぱ、と開いた。

すしこみ
Imprinting

殻を割つて生まれた鳥の雛は、初めて見た動くものを親と学ぶ。

数馬は初めて見た有馬を、唯1人の家族と思つた。

走馬灯か、と思ひながら数馬はぱちりと目を開けた。

白い。

兎に角白い。天地の見分けも付かず、広さが分からない程広い。見えるのは自分の体だけだが、その体もどこか奇妙な気がする。

「……影が無いな」

そう、あつて然るべき影が、1つも見当たらない。

その所為でどこか体は平坦に見えるし、気味が悪いことこの上ない。
(死後の世界、異世界、天界……どれだか知らんが、今までいた世界とは別物だろうな)

あっさりとそう判断する。冷静な顔を崩さずに立ち上がり、平衡感覚が無くなりそうな景色に眉を顰めた。

とりあえずこういう時は、と所持品を確認しようとした時

「起きたか、×××・×××××」

「は？」

後ろから声が聞こえた。

起きたか、までは日本語として聞こえた。

あとは、声とすら認識できず、雑音のように響き　ズキン、と頭が痛む。

「×××？……ん？　ああ、失われた名か。城崎数馬……こちらだと数馬・城崎だな」

「……何だ？……ああ、異世界の、神とかそういうのか」

白い背景に同化しそうな白金の長髪と色白な肌、水色の瞳。

その顔立ちは神々しいまでに美しく、体も均整が取れていて非の打ち所が無い。

「察しが良いな。俺はスイル・ルイス、この世界の天神だ。　そして、魔神アヴロ・ロヴァと対を成すものでもある」

色づいた唇が、つう、と弧を描く。無垢な美少女はそれだけの動作で、妖艶な色気を孕んだ。

「お前を異世界から召喚したのは、俺だよ」

悪びれない言葉に数馬は怒るでもなく、ただ「そうか」と言っただけだった。

「……ああ、おっと、彼らを忘れていた」

スイルは思い出したように、空中に手を　突っ込んだ。

そしてずるりと人間らしきものを引きずり出し、そのまま下に落と

す。

「っだ!」「……?」

赤茶と薄茶の頭が、揃って地面(?)に激突する。
数馬は軽く眼を見開いた。

「こいつらも?」

「それはこれから説明しよう」

ぶつけた額を押さえながら古牧が起き上がり、周りの景色と自分の姿に目をぱちくりとさせる。

「白っ! ……うわ、気持ち悪い!」

「……?」

三船はきよるきよると周りを見回し、ぼーっとしている。

「もっ少しマシな場所は無いのか? せめて光源くらいはつきりしてないと気持ち悪い」

「……仮にも神の空間に気持ち悪い気持ち悪いと……くそ、仕方ねえ」

ぱちんと指を鳴らす。

白いキャンバスに描くように、世界が塗り変わる。

ただ真っ白だった頭上が、空色と白に染まっていく。

白い足元が“地面”と言える物に変化し、数馬達付近は石畳すら現れる。

木々が生え、鳥が飛び、楽園のような空間が出来上がった。

「エデン」

ぽつりと三船が呟くと、数馬も「確かにな」と頷いた。

「さて、話をしようか」

石畳の上に、白いテーブルが1つと椅子が4脚。

テーブルの上には紅茶とクッキーまで用意してあった。

「座れ」

「え、何、誰!??」

慌てる古牧を他所に、優雅に椅子に腰掛けたスイルは説明を始めた。

迷魂めいこんというものがある。

生まれた世界を離れ、他の世界に転生してしまった魂の事だ。つまり前世をこの世界で過ごした者だ。

迷魂を持つ者は個性的である事が多く、何かの切欠で前世の能力を取り戻す者も居る。

しかし最大の特徴は、肉親の情を抱けない事だ。

元々違う世界の魂だからなのか、どうも合わないらしい。

数馬はその迷魂だという。古牧と三船もだ。

「なるほど、な」

生まれてこの方家族を嫌いだった事に、やっと今更理由が見ついた。

「力の強い迷魂ほど、無関心を通り越して嫌うようになる。心当たりはあるだろ？」

「ある。……ああ、何か物凄くすつきりした」

という事はつまり有馬もそうなのだ、と気付く。

今まで不可解だった事が何もかも分かっていくようで、なんとも小気味良い。

数馬は久しぶりに知識欲が湧き上がるのを感じた。

「有馬も迷魂だな？」

「……ああ」

「待って待って、もしかして超能力とか目覚めちゃうの!?!? いやよっしやー!」

「さあ。まあ人それぞれ」

「サクくんはどう? お化けとかやつぱは本当に見えてたの!?!?」
「当然」

ぼつり、と呟く。淡々とした三船を他所に、古牧ははしゃぎだした。数馬はそれを一瞥し、思い切り舌打ちする。

「煩い。騒ぐなら向こうでやれ」

「えー!?!?」

「スイル。聞きたい事は山ほどあるが、何時まで此処に居られる?」

「あと1時間も無いな。それくらいで人間の方の準備が終わる
ああ、そうだ。お前たち2人は手違いだから、すぐに元の世界に戻
す。」

ま、お前らは迷魂だからたまには里帰りさせてやるし、今生の別れ
じゃねーから安心しな」

だから黙ってるや、と裏音声で聞こえた気がした。

一転して意気消沈した古牧は大人しく紅茶を啜り、クッキーを摘み
始めた。

「1つ目だ。お前達神は、自由に迷魂を戻す事は出来るのか」

「迷魂といえど体は向こうの世界のものだ。自由に、とは行かない」

「どういう条件がある？」

「本人が願う、あるいはこちらの人間に必要な場合だな。神
だけの都合で人間を動かす事は許されない。まあ可能だが」

「……っじゃあ俺こっちに居たい！」

「僕も」

「却下。あのな、うっかりお前らも巻き込んだけど、一応違法だけ
ら。俺が木っ端神だったらもうとくに消されてるよ」

言い方が悪い政治家のようにである。

ようするにこの世界の最高神という立場を利用して誤魔化している
らしい。

ちなみにこの天神スイル・ルイスと魔神アヴロ・ロヴァがこの世界
で最も力ある神だ。

「とりあえず1度戻すが、暫く召喚なんか出来ん。他の神に目を付
けてもらおうように頑張れ」

「何それ！？ すっごい無理難題じゃない？」

「具体的に言くと、この魔法陣の上に手を置いて出来るだけ感情を
込めて『帰りたい……故郷に！』とか言えば引つかかるんじゃない？」

「それでいいのっ！？」

「お、時間。はいこれ、じゃあまたそのうちな」

スイルはにっこり笑い、2人に魔法陣の書かれた印籠のようなもの

を手渡す。

音も無く、一瞬で2人の姿が掻き消える。

流石に眼を見張った数馬だが、すぐに立ち直った。

「今渡したのは？」

「この世界の神に1度だけ願えるアイテムだよ」

案外悪どい天神だ、と数馬は含みのある笑みを零した。

「……じゃあ、次だ。俺を召喚したのがお前なら、有馬は？」

「有馬、は……その、だな。本来は普通の神に召喚されるように決まっていたんだが……」

言い辛そうに言葉を濁すスイルを、数馬が睨む。

「答える」

「……魔神アヴロ・ロヴアに横取りされてな。今は本来の役目として現世に居るが」

糾弾する気にもなれない程疲れた顔をしていた。

最初の威厳というか神秘性も何のその。今は上司のセクハラに耐えるOLのような顔に見える。

「召喚の魔法っつーのはどういう物だ？」

「魔法っつーより魔術だな。限定的に使える魔法陣を与えて、こっち……天界に召喚した迷魂を、降ろすんだ」

「なるほど。じゃあ」

時間にして40分、すっかり質問責めにした数馬がすっかりした顔をしていると 影が差した。

「ん？」

「っ……アヴロっ!!」

振り向くとある意味インパクトのある男が立っていて驚いたが、正体はすぐに知れた。

「魔神？」

「そうだな」

男は、真っ黒の和服を身に纏っていた。

足元はごついブーツで、頭からフード付きの上着を腕を通さず被っている。

フードから覗く髪は、黒。そしてその切れ長の美しい目は、赤だ。

「そやつがスイル・ルイスだと言うのなら、私はやはりアヴロ・ロヴァなのであるう」

「これまた、面白そうなのが出てきたな」

「お前はまたっ……………」

神々しいというよりは、毒々しいような美しさだ。点でも円でもなく、線で構成されたような鋭利な美貌を持っている。

魔神らしい容姿の彼は、やはり神らしい口調で語りかけた。

「汝の妹、」

数馬はぴくりと一瞬眉を寄せる。

「を、私にください」

「死ね」

神相手にも容赦ない一言が口をついて出た。

一瞬後、ほんのり後悔する。

「……………」

「……………」

「……………」

暫く沈黙が流れた。

その尋常ならざる空気に脅えてか、飛んでいた小鳥はじっと動かなくなり、虫の羽音すら聞こえない完璧な静寂が訪れる。

それを破ったのは、スイルの愛らしい声。

「お前って奴は本当に……………もう本当に……………ッ俺をどこまで苦惱させるんだ……………」

「美少女に言われると照れるであろう」

「顔が照れてねえんだよっ！！」

眩く光る太い光柱がアヴロを襲った。

しかし彼は涼しい顔で黒い球を体の周りに作り出し、防ぐ。

「目の前でそんな神話級のバトルは止める、頼むから」

若干どこかで聞いた台詞だが、やはり兄妹である。

「う……わ、悪い」

「そうだ。この者の申す通りであろう……全く迷惑な神も居たものだ。精進せよ」

「お前が言うかあああああっ！！」

愛らしい声を張り上げて叫ぶが、意に介さずアヴロは数馬に顔を向ける。

「私はこれでも一途だ。甲斐性も経済性も容姿も、人間が求める以上にあるぞ」

「騙されるなよ。こいつ、ただの人間を愛でるために数世紀も拘束まかして発狂させた前科があるからな」

「最悪だな ツ！？」

ズキン、と頭が痛む。

スイルが弾かれたように立ち上がった。

「アヴロツ！？ 何を」

「何もしておらぬ。……そなたは気付いておらぬか？」

狂気と狂喜とが入り混じった笑み。

数馬は頭を押さえて悶えながら、ぞわりと背筋がざわめくを感じた。

「先程自分で言ったではないか。有馬は」

痛みが増す。脂汗を掻きながら数馬は必死に言葉を聞き取るべく、耳をすませる。

「xxxxの」

しかしそこで、意識はぶつりと途切れた。

頭痛が治まる。

気付けばただ呆然と、光の中に、立っていた。

数馬は僅かに驚いた顔をし、「ここは……？」と呟く。

（まあ全部知ってるんだけどな）

スーアルカルド王国。どうやら妹にかけられた物と違い古代語やら精霊語やら種類を無視して翻訳してくれる便利な魔法によると、スウアル・ルカル・ド、聖なる古き護りという意味の名前。

スイル・ルイスを主神としアヴロ・ロヴァを悪神とする、スイル教の総本山だ。

呆然とした（振りをする）数馬の前に、1人の少女が歩み寄ってくる。

「ようこそいらっしやいました、勇者様」

「勇者……？ あなたは」

「わたくしは天神スイル・ルイスに仕える巫女、ディアナ・スウ・バルティアと申します」

ディアナ。

巫女の名前として魔デイが入っているのはどうなんだ、と数馬は思った。

彼女は聖女と形容できそうな美少女で、年は16、17か。

プラチナプロンドに水色の目で、何処かスイルに似ている。尤も数馬はスイルの容姿も声も全く思い出せないが。

（見覚えがあるっつーか、劣化コピーだな）

激辛評価を下されている事など露知らず、ディアナは儂げな微笑みを浮かべて恭しく言葉を述べている。

「……つまり……この国を、救えとおっしゃるのですか」

「はい。勝手な事を申し上げているとは思いますが　どうか。どうか、お願いします」

しおらしく目を伏せるディアナ。確かに、普通の男なら守ってやりたくもなるだろう。

「……分かりました」

ぱっと顔を上げたディアナに、数馬はにこりと微笑んで見せる。

「出来ることなら、やりましょう。この国を救ってみせます
偽りの覚悟を述べる。喜びに涙すら流すディアナを見ても、罪悪感
は無かった。」

（出来る事なら、片手間にやってやるさ）
彼が城から逃げる前日の話である。

20 閑話・城崎数馬の顛末（後書き）

濃い面々が出ましたが多分登場は大分先、もしくはは出ません。
伏線乱れ打ちしましたが回収できる自信が無いです。

有馬には超掻い摘んで話しましたが実は神様にも会ってました。

21 大人げないです

巨大なベッドの上で、有馬は体を起こして俯いている。それを囲むように、3人の魔族が立っていた。

「早く覚悟せんか」

「じきに魔王が来るぞ？」

「……私達は殺せと言われれば、拒めませんよ」

樹人のオーガス、吸血鬼のヴラディーク、悪魔のフィーリシア。

魔王直属の部下であり、それぞれが高い実力を持つ四天王の一員。

ちなみに残りの1名　夢魔のメリーデイスは、先程から有馬の横に倒れ伏して熟睡中だ。

「……」

思い切り不貞腐れた表情の有馬は、黙って彼らの言葉を聞いていた。ちなみにかれこれ数十分も説教紛いの説得が続いている。

「黙っててもどうにもならないぞ」

ヴラディークがそう言う。有馬は、わかってるし、と小さく呟いた。説教されるのが好きな子供はいない。むしろ、言われるほど反発する。

怒鳴られていないだけマシだが、それでも腹は立つ。

「って言うか」

有馬は喉から搾り出すように言う。

「全面的に、あんたのせいじゃん、死ぬかもしれないのも」

恨みがましくヴラディークを睨み付け、人差し指を突きつける。

ヴラディークは嘲笑うように口元を歪めた。

「今更気付いたのか」

「最低！ 最悪！ 鬼畜っ！」

「……何だと」

「あと変態」

「おいっ！」

真顔での一押しに思わず怒鳴ったヴラディークの脇に、両側から肘が突き出される。

「大元帥殿は少し黙ってていただけですか」

「おうおう流石じゃのう、子供相手に怒鳴るとは」

大元帥とはヴラディークの役職である。これでも有事には魔領軍を率いる軍人なのだ。

ちなみにメリーデイスは神官長、オーガスは術士長、フィーリシアは書記長である。

「っく……」

思いがけず1人だけ敵に回されてしまったヴラディークは焦った。

左右からの冷たい目、正面からの恨みがましい目。

そして更にもう一对、感情の読み取れない視線が加わる。

「……鬼畜外道」

寝言のような声がぐさりと突き刺さり、今度こそヴラディークは落ち込んだ顔ですごすこと引き下がった。

「……もういい。それで、どうするんだ」

「そうですね。このまま平行線では困りますもの」

「一応隠匿してはいるのじゃが、気付かれないとも限らんしこのメリーデイスが再びかくんとベッドに顔を埋めた。

有馬は援護射撃に若干感謝しつつ、ひとまず言う。

「……もう少し、考えさせてよ」

「ふむ……まあ、良い。1時間もあればよいか？」

こくり、と頷く。とはいえ選択肢は諾か死か、選ぶまでも無い。故に有馬が自分を納得させる時間、と言っても良い。

「何か必要な物はございますか？」

「あー……あたしの服は」

「そちらのクローゼットと籠に入っております」

「じゃ、特に無い」

有馬がそう言うと、今だ意気消沈しているヴラディークを蹴って押しながらオーガスが出て行き、フィーリシアもきっちりドアを閉めて退出する。

「……あれ？」

部屋には有馬と、眠りこけるメリーデイスが残されていた。

有馬はひとまず、何をするにも頼りない絹の服を着替える事にした。ベッドを降りて、柱に留められているカーテンを全て下ろし、寝ているメリーデイスを閉じ込める。

(起きるな……)

本来なら嫁入り前の彼女は男性と2人きりになるべきではないし、着替えなど絶対にアウトである。

しかし今は熟睡するメリーデイスを起こして追い出す手間すら面倒だった。

有馬はとりあえず寝巻の下からズボンを履き、上からチュニツクを被る。

そして服の中でもそもそもボタンを外し、脱いだ。

まさか異世界まで来てやるとは思っていなかったが、更衣室の無かった有馬の中学校ではこの着替えスキルは必須である。

「前開きで良かった……」

有馬はコートは着ずに手に持ち、とりあえず靴下と靴を履く。

「……………」

逃げるには適した格好になったが、逃げられるとは思えない。

何故かメリーデイスは残されているし、部屋に居ないとはいえ何らかの監視はされているのだろう。

有馬は部屋を見回す。椅子の類は無く、本当に寝るだけの部屋らしい。

溜息を吐いてカーテンを潜り抜け、ベッドの端に腰掛ける。

(……あーあ)

考えるとは言ったものの、有馬の思考も平行線を辿るばかりだ。

契約するまでは、帰すつもりは無いのだろう。そして四天王が長く固まっていると魔王が勘付いて、この場所を訪れ、ジ・エンド。

どう考えても、契約すれば全て丸く収まってしまふ。

契約すれば、圧倒的に生存率が跳ね上がる。彼らは魔王の支配から逃れ、ついでに自分の戦力は増える。

(デメリットが無い……うーん。その後魔族の親玉として狙われたり……いや、人間が丸ごとかかってきても平気そうな気が)

勇者に魔王に神獣に精霊。

今の所、有馬を裏切る事が絶対に無いと言いきれる者たちだ。

そしてこの世界でもトップクラスの戦闘力を誇る者たちでもある。

が、今は誰ひとり側に居ないのだから仕方ない。

(じゃなくつ、て、今だ今。今を乗り切れ)

有馬はもはや打開しようとは思わず、ひたすら自分を納得させようとした。

けれども、脅し急かしてきた彼らが恐ろしいと同時に不可解だ。

何故、彼らは直接的な恐怖を以って自分を従わせようとしなかったのだろうか。

有馬は、例えばカッターナイフでも突きつけられれば一分も持たずに意思が折れる、と自負している。

「きみは」

気付けばメリーデイスが幽鬼のようにゆらりと起き上がり、ゆっくりと這い寄って来ていた。

「主あまでなければならぬ」

闇色の目でじつと有馬を見ながら、やけにはつきりした口調で言う。
「どうやら有馬の思考に対する答えのようだった。」

「……どういうこと？」

「主を、害さない。大原則」

「まだ主じゃないし十分気分害したんだけど……っーか魔王ぶつこ
ろす言ってるのは誰でしたっけ」

「あれは王。主じゃない」

あっけらかんと言いつつ。

(や、王イコール主君じゃ……。どんだけ嫌われてんの……。)
まだ見ぬ、というか一生会いたくない魔王に若干同情した。

メリーデイスははずると這い、体を起こして座る有馬の横に来る。

「……主、ほしい。契約、しようよ」

渴望と狂気の色が見え隠れする目。

有馬は本能的な恐怖を感じ、思わず後ずさる。

「っちょよ、……。あの、怖いんだけど……」

「怖いもの、僕が、潰すから。何でもするから」

「………目、目が怖いつてー」

「決る？」

「いやいやいやっ、そんなスプラッタはいらんって」

こてんと首を傾げる。両目くらいなら本当に捨てそうな気配がして、

有馬は手が震えるのを感じた。

「ねえ……ねえ、契約、してよ、僕、ぼく、」

その目に今度は寂しさと懇願が宿る。

有馬は一転して切なげなその目を見て、う、と息を詰まらせる。

(……情緒不安定っーか、何か、何なんだろう)

喜怒哀楽の要素が根本的に違うような気がして、全く感情移入がし
難い。

けれど目の前のメリーデイスは寂しがっているように見えた。訳は
分からないが。

しかも彼は全く文句の付け所が無い美少年で、流石に見捨てる事は

躊躇われる。

ヴラディーク達は立派な大人なので遠慮せず拒絶できるが、メリーデイスにはなけなしの良心が働いてしまう。

「……うん」

ぶつぶつとうわ言のように言葉を紡ぐメリーデイスに、頷く。

なんとなしに手を伸ばし、桃色がかった金髪を撫でる。

「よくわかんないけど、……ま、いいや」

流されやすすぎ、と自嘲気味に呟く。

「名前は、……えーと。……メア。よろしく」

「うん」

ナイトメアだからメア。

今までで一番単純な名前だが、メリーデイス改めメアは嬉しげに微笑んだ。

「……弟みたいでいいか……じゃ、血」

有馬は若干和んだような顔で、左手を差し出す。

メアは再び真顔に戻って手の甲に口を付けた。ちくりとした痛みと共にメアの顔が離れ、ほんの小さな傷が残る。

「はい」

メアは右手の人差し指の腹に、親指の爪でさくりと傷を付ける。

「ちよ、切りすぎ」

明らかに過剰な傷から、ガラガラと血が流れる。

慌ててその手を取り、躊躇いがちに舐めとった。

「止血はー……」

「いい」

そのまま、何を思ったか指先を乱暴に絹の掛け布に押し付け、ぐりりと線を引く。

「つちよ！ 何して」

「逃げる」

血で描かれた円の中に、更に細かな文字を書いていく。

メアは書き終えた 血の魔法陣を布ごと切り取り、呆気に取られ

る有馬の腕と自らの腕をその布で結んだ。

「な、何で？」

「来た」

その言葉を言い終わらない内に、有馬が思わず飛び上がる程の轟音が響き渡る。

啞然としていた有馬をひよいと抱き上げ、メアは詠唱した。

「《デア・ディリ》」

古代語？ と首を傾げる間も無く、がしゅんと音がして目の前が開ける。

どうやら窓を割ったらしいと気付いたのは、空中に身を晒してからだった。

「ひつ……！！」

眼下に広がる広大な景色。欧風の街並みには、闘技場らしき建物や訓練場、騎士団が警備兵の詰め所、貴族の屋敷などが見える。

ヴラディークの真面目そうな性格を反映したように、城から放射状に道が何本も真っ直ぐ伸びていて整然とした印象を受ける。

が、有馬には観察する余裕が無いようだ。

「舌、噛む」

有馬よりも更に小柄なメアだが、見た目よりずっと力はあるようだ。背中から生やした蝙蝠のような羽で、ばさばさと羽ばたきながら飛んでゆく。

「……っつわ」

必死に首を曲げて見た背後の城は、切り立った崖の上にあるようだった。

ヴラディークの雰囲気にはぴったり合う美しい城だが、有馬達の出できたあたりの屋根が見るも無残に崩れ落ちている。

更に見ている間にも爆発があり、思わず目を閉じた。

「魔王、来た。怒ってる」

「……死なないかな、あの人たち」

「死ねない。大事な手駒」

死なない、ではなく死ねない、という所に含みを感じた。

有馬は小さく唸りながら、落ちないように身を縮こまらせる。

「……このまま魔領の外まで飛ぶの？」

「それは難しい。途中で夢に入って休 ……」

突然黙り込んだメアの視線の先を辿る。

そして有馬も口を噤み、ついでに引き攣らせる事となった。

「……ど、らごん……っすか」

遙か向こうから 地平線を遮るように飛んでき、黒い竜。

その巨大な羽の先から反対側の先まで、100メートル程もあるかもしれない。

鈍く紫に輝く黒い鱗、無駄の無いスマートなフォルムの美しい竜だ。
(色違いリードンとか……いや、ダークルア……ゼ ロム……)
思わず脳内凶鑑を参照した有馬を、ドラゴンの咆哮が現実引き戻す。

何故かスピードを上げたドラゴンは、真っ直ぐ2人に近づいてきている気がした。

「こ、こっち来てるんだけど」

「……竜人族の知り合い、いる？ 黒い髪、紫の目」

「へっ？ ……あ、ああ！ そっか！ いる！」

竜人族というのは竜族（古竜とも）から進化した種族である。

生まれると同時に古竜の魂 竜魂が胸に宿る。

彼らは生まれた瞬間は親と似た髪や目の色をしているが、竜魂が宿るとその竜の色彩に変化する。

鱗の色が髪の色に。目の色は目の色に。

また、体の何処かに竜玉というものがあり、その色も瞳と同じだ。

「……ラル」

そして彼らの最大の特徴は、宿した竜魂の主の姿になれること。

有馬は向かってくる竜がランラクルだと確信し、じわりと瞳に感動を滲ませる。

「どじするっ？」

大陸を飛び立ち、海を経て魔領へ。

いくら何でもそんな距離を助けに来るとは思いもしなかった。

(……ああもう！ 義兄妹の契りでも結んでやろうかつ！)

有馬は眼下の景色を見回し、広い場所を探す。

「あの闘技場に」

メアはこくりと頷くと、ゆっくりと降下を始めた。

21 大人げないです（後書き）

ヤンデレが好きです。

メアは特に恋愛感情でデレている訳ではないです。

今回ちょっと短めですかね。

広い闘技場の片隅に着地して、有馬はようやく地面に足を付いて立った。

メアは手首と手首を結んでいた布を取り、小さく息を吐く。

「……酔った……その布、何の魔法陣？」

「姿隠し。少ししか持たなかった、けど」

なるほど、と頷く。逃げる2人が魔王に悟られなかったのはこのためらしい。

有馬は何度か深呼吸を繰り返した。空の上はどうも空気が薄かったようで、少し苦しい。

それに季節はまだ冬だ。コートのおかげで体は常温だが、顔が物凄く冷たい。

「っはー……酸素補給とか……無いか。あ、来た」

空を切り取ったような闘技場の上の方から、巨大な黒い竜がゆっくりと降りてくる。

どうやら広さは問題ないようだが、降りるのに時間がかかるようだ。

もっと広い場所であればそのまま飛行機のように着地もできるが、

ここでは流石にそうもいかない。

ばたばたと巨大な羽を上下に動かし、風を巻き起こしながらも着陸する。

「やっぱラルだなー……」

着地して羽を畳んだ途端に、大きな首を揺らして溜息を吐くドラゴン。

なんとも人間らしい仕草だが、口から出たものは思い切りプレス系の技に見える。

苦笑しながら有馬が見ているとその背中から飛び降りる影があった。

「!?!」

翼を広げて100メートルの巨大な竜。

体より圧倒的に翼の方が幅が広いとはいえ、その体も巨大極まりない。

背中から地面まで3、40メートルあるだろうか。

そんな高さをひょいと飛び降りて平然と歩いてくる兄に、有馬は一瞬思考が止まった。

「よお」

「……いよいよ人外だね」

地上40メートルといえば、宇宙から来た銀と赤のウルトラなヒーロー（初代）の身長である。

またはビルにして7階くらいの高さと言えば分かりやすいか。

「軽くビルの屋上から飛び降りた気分だな。……にしてもお前、金髪男と空の散歩か……二度目だっけ？ どんだけソフィーだよ」

「……ハルかつ!!」

元より落ち着いていなかった息を再び荒げ、有馬は思い切り突っ込んだ。

「さて、一応心配したぞ。元気か？」

「元気ー。あ、何か攫われる人生らしいよ」

「何だそりゃ」

「手相占いで言われた」

両手の平を見せると、はあ、と数馬が溜息を吐いた。

なんとも緊張感の足りない兄妹である。

「で、そっちは」

「……メリーデイス・クティリル・ラガルベリー」

「メリーでいいな。俺は数馬だ」

メアはこくりと頷いた後、僅かに首を傾げる。

「アリマ様と、カズマ、似てる」

「ん？ 兄妹だよ」

なるほど、とでも言うかのように目を細めるメアを愉快げに眺める。

「目が口ほどに物言ってるな」

「案外笑うと可愛いしね」。弟にしよう」

「城崎3兄弟か」

「あ、ラル入れて4兄弟で」

人差し指を立てて笑う有馬の頭に、ぽんと、手が乗った。

数馬はどこか意地の悪い微笑みを浮かべてがしと頭を撫でる。

「あいつ滅茶苦茶心配してたぞ」

「えー……」

「二度目だからな。まあ、1人しか付けなかった俺も悪いんだがニヤニヤする数馬を胡乱な目で見ると。ついでにその肩の向こう側に居たドラゴンが既に見えない事に気付いた。

「アリマっ！！」

「うおおっ！？」

完璧に死角から抱き締められ、素っ頓狂な声を上げる。

抱き締めるといつかもう締め技の一種に近いが。

「（ギブ）！！　　っ（ギブううう）！！」

「すまんっ……本当にもう俺はもう……！！　すまん！」

「3！ 2！ 1！」

（カウントしてる場合かあああああ！！）

肺に入っていた空気が抜け、新たに吸い込む事すら出来ない。

ただ残った力で必死に背中を叩くものの、全く動じる事なくただ謝り続ける。

(死ぬ！ しぬうううう！ 学習してねええええ！！)

「……はなせ」

不意にその力が緩んだ。がっしりとした肩越しに、僅かに怒気を孕んだ黒い瞳が見える。

「え、あ、……っうわ！ すまん！」

血が上がったのか真っ赤になった顔でせえせえと息を吸い込み、有馬はへたり込む。

メアがすぐに近寄って背中を擦り、「大丈夫？」と声をかけた。

「しっ、ぬ、から……っ」

「そのうちコルセットに絞め殺されるんだから練習だと思っとけ、有馬」

「死ぬの！？ コルセットで!？」

肩で息をしながら赤い顔で立ち上がる有馬を、何とも言えない顔でラルが見ている。

その視線に気付き、有馬はにんまりと笑みを浮かべた。

「心配した？」

「……死ぬほどな」

「いや、死なないでね」

「もし有馬が死んでいたりしたら、俺も死ぬつもりだった」

真剣な声で言われ、有馬は表情を強張らせる。

数馬も驚いたように軽く目を見開いていた。

「はい？ ……何故に？」

「二度も攫われるなんて 流石に自分が許せない」

紫の目が、悔やむように細められる。

「ラル」

咎めるように呼びかけ、ランラクルを鋭く睨む。

有馬は困惑したように2人の顔を交互に見ていたが、メアの声が掛かった。

「アリマ様、そろそろ」

「そうだった！ 兄ちゃん、睨んでる場合じゃないって」

慌てて事情を説明すると、数馬は面倒そうな顔で有馬の脳天を平手で叩いた。

「面倒だな……」

「何で叩くの！？ めっちゃ痛……っ何かじわじわ来る痛みがああ！」

頭を押さえて蹲る有馬を一瞥し、興味深そうに呟く。

「物理攻撃時追加ダメージ20パーセント。念じてたら本当に付いたか」

「何魔法なのそれ！？」

今だじんじんとする頭を押さえつつも突っ込みを入れる。

魔法についての知識は一通り“貰った”有馬だが、勇者である数馬については今一分からない。

魔法は使えないのに、マナを無意識に操る。そもそも何故魔法が使えないのかも分からないのだ。

「さて、どうすつかね……」

数馬は顎に手を当てて3人を見回した。

「ドラゴラムしか使えない剣士、対人戦ヘタレ魔法使い、謎の少年

……よし、逃げよう」

「諦めたしこの人」

「ラル、とつとと竜になれ。逃げるぞ」

「ああ」

傭兵だけあつてか、現実的な判断だ。

有馬も特に異論は無いようで、ふう、と溜息を吐く。

(……悪い事したかな)

ふと罪悪感が胸を焦がした。自分がすぐに決断していれば、あの3人は魔王と、少なくとも戦えてはいた筈だ。

自分がいなければ抵抗すら出来ないのかと思うと、あの大人気ない魔族たちが可哀想に思えてくる。

(同情するなら契約を、ってか)

自分はそのもそも戦う、というラインにまで達していないから兎も角。

戦える彼らがそれを許されない、というのは如何にもどかしいことだろう。
様々な気持ちを押し隠しながら、有馬はドラゴンに姿を変えたランラクルを興味深そうに見つめていた。

ランラクルの背に上ると、あまりの高さに一瞬くらりとした。

「おおー……」
有馬の学校は4階建てで、屋上が上がってもここまでの高さは無かった。

これより高い建物といえば、昔泊まった高級なホテル、県庁の展望台、東京タワーや京都タワーくらいだろうか。
ランラクルは黒い羽をばさりと広げ、羽ばたく。

「おおおおあうああ!？」
両側からの風圧に前のめりになりバランスを崩しかけ、あまりよろしくない悲鳴を上げる。

すると背後から腕が伸び、有馬は数馬の膝の間に収まった。
傍から見ればちよつとしたカップル状態である。

「おお。……メア!」
「?」

「おいでー」
小首を傾げ、相変わらずホラー気味な所作でずるずると寄ってくるメアの服を掴み、引いた。

「3兄弟!」
「お前な……」

かくしてメアは有馬の膝に収まり、3兄弟的な構図が出来上がる。
嫁入り前がそれでいいのか、と言いたげなラルの咆哮と共に空に舞い上がった。

巨大な翼が上下し、黒い巨体が闘技場の石壁を過ぎて天空へと昇って行く。

「……っ!」

強い風の所為で息がしづらい。

有馬は咄嗟に片手を振り、魔法で体の周りの空気の流れを緩めた。

「お、いいなそれ」

「……え、これに耐えてきたの？」

「心肺機能まで強化されててな。海渡る時なんか普通に泳いで渡ったぞ」

「それ心肺の問題なの!？」

純粹に体力問題だと思われる。

騒いでいる間にも高度を増したランラクルは、大きく羽ばたきながらスピードを増す。

体が大きすぎて眼下の様子はあまり窺えないが、それでも中々に雄大な景色である。

「魔領って案外綺麗だよな」

「……東だから」

「ヴラディークの趣味？ そっぴやメア、領地とかは？」

「管理、弟がしてる」

「弟いるんだ」

「インキュバス」

「インキュバス……おお……ほんとに居るの」

こくりと頷く。

因みに、インキュバスとはサキュバスの男バージョンだ。

分類としては夢魔だが、淫魔とも呼ばれ、主に精気を喰らうという。

「メアに似てる？」

「似てる」

「それはまた……何か凄そうな」

露出の多いメアを想像し、有馬と数馬が微妙な顔になる。

「いいんじゃない？ エロシヨタ」

「うわ引くわ」

「まあ、俺は巨乳美女のサキュバスがいいな」

「それも引く」

「じゃあ何なら良いんだよ」

茶化すように笑う数馬に、うーん、と有馬は考える。

「城でお世話してくれたメイドさんがねー、美人で優しくてちょっと腹黒い感じがいいと思う。クレイアさんって言っただけどねー…あ、あと魔族のね、フィーリシアさんって人も秘書っぽい感じのクール美女でね」

よく考えてみればこの世界の女性の知り合いはこの2名だけだ。

「胸は？」

「……いや、そこなの？」

「あるに越したことは無いだろうが！」

一応少し緊張するべき場面なのだが、2人は胸談義に花を咲かせ始めた。

その話を聞きながら呆れたようにランラクルが溜息を吐く。鱗で分らないが若干頬が赤い。

そして、溜息というよりドラゴンのブレスにしか見えず、しかも若干火を噴いたのはご愛嬌だ。

有馬は徐々に休息を味わいつつ、両手の指をメアの頭上で適当に絡ませている。

今だ自然魔法の維持には動作が必要で、今は風を作って3人の周りを保護し、ついでに落ちないように調整してもいる。

火事場の馬鹿力を発揮した時から、大分魔法の幅が広がったように思えた。

そしてその時、ゆらりとマナが揺らいだように思えた。

「……ん？」

軽く眉を顰め、マナの流れを掴むように集中する。

マナを操る事が出来るのは、マナを感じる事が出来るという事でもある。

近頃は半径5メートルほどまでマナの流れを読み取れるようになった。

人が動けばマナが揺れる。とはいえ、マナは常に揺れているため人

の気配を読むには至らないようだが。

「後ろ、なんか来てる？」

感じたのは、ほんの僅かな魔力。マナとは違う、確かに生物から発せられる魔力だった。

《精霊眼》で見ると、黒い魔力が僅かに流れてきていた。

「……………ん？ ……ああ、もしかしてあれ、魔王か」

「やっぱりいいい！！」

魔物から発される魔力というのは、総じて黒い。

暇つぶしがてら道行く人々の魔力を観察した事があるが、大抵は明るい色で光っている。

人間からは悪とされる魔族ですらそうなのだ。現に目の前のメアの魔力は桃色で、若干目に痛い。

「ど、どうするの……………」

「積んだなー」

「兄ちゃんっ！！」

恐怖からか怒りからか震える有馬の頭をぼすん、と叩いて数馬は立ち上がる。

その腰にこの前は無かった剣がある事に、有馬は今更気付いた。

「ラル、安全飛行でよろしく。有馬、攻撃しなくていいから落ちないようにしてくれ」

「う、うん」

「メア、お前なんか出来るか？」

「……………戦える」

「そうか。じゃあ、有馬を頼む」

全く恐れる様子もなく剣を抜き、数馬は広い背の上に立つ。メアもひよいと立ち上がり、羽を生やして軽く羽ばたいた。

「……………アリマ様」

「何？」

「魔力、ほしい」

「あ、うん、いいよ。好きナだけ」

どうせ自分の魔力はあまり使わないし、と簡単に頷く。
すると、メアの目がきらりと光ったように見えた。

「いただきます」

そう言つて頭頂部に鼻先を押し当てる。

「……いや、その吸い方はどうなんだろう……クンカクンカすーはー、みたいなの」

微妙に変態くさい吸い方に引いた顔をするが、メアは止めない。
むしろ物凄い勢いで魔力が吸い取られていく。

「吸いすぎっ……へ？」

思わず後ろを向いた有馬は、思い切り目を剥いた。

「これで、戦える」

「は!？」

艶やかに弧を描く唇。

肩口までだった金髪は何故か腰あたりまで伸び、どう見ても身長・
肩幅共に成長しまくっている。

何よりその顔立ちから少女らしさが抜け、神秘的な青年司祭が其処
に居た。

「年齢が10くらいプラスされてるように見えるんだけど！」

「うん？ こつちが本当だけど」

「はいいい!？」

「小さい方が楽だから」

何が、と聞こうとした有馬は響く轟音に身を縮こまらせ、後ろを振
り向く。

「有馬ッ!! しっかり支えろっ！」

「へ? あ、う、うんっ」

見れば、既に戦闘は始まっている。

魔王。

口の中で小さく呟きながら、有馬は恐怖に震える体を叱咤して手を
動かした。

22 竜の背（後書き）

兄が来ると多少はっちャける妹。

本当はこの小説、最初は一人称で進めようと思ってました。楽なので。

まあ色々あって結局これなんですけど、なかなか難しいですね……

23 勇者VS魔王(前書き)

戦闘はぬるいですが残酷描写があります。

苦手な方はご注意ください。

ついでに言つといつにも増してクサイです。

魔王は、容姿だけは可憐な少女を模っていた。

ふわふわとした腰までのキャラメル色の髪、愛らしい薔薇色の頬、
円らな瞳は潤んだチエリーピンク。

有馬が全力で拒むような白いロリータ系のワンピースを見事に着こな
なし、肌は雪のように白く滑らかに見える。

しかし。

「っつ、え」

こんなに醜悪で禍々しいものを、有馬は初めて見た。
ふわふわとした茶髪が、蛇のように蠢く。

白い肌の内側に、蟲のような化物が詰まっている。

そんな錯覚が生まれる程、魔王の雰囲気は醜悪だった。

（なん、なの、あれ……気持ちわる……）

この前戦った鼠の魔物を何億匹も集めて煮詰めたような邪悪さ。
吐き気を催す邪悪とはまさにこの事だ、と有馬は思った。

けれど手を止める事は無い。じつとりと汗ばむ両手を振らないと、
集中する事すら出来なくなりそうだった。

（兄ちゃん……っ）

夕日を反射して橙色に光る、銀色の剣。

有馬はそれを見て、唇を噛み締めた。

セオリー通りとは言えない邂逅だ。

本来城に居て然るべき魔王は空の上、勇者は竜の背に仁王立ち。けれど魔王は、あくまでセオリー通りに口上を述べた。

「我が名は」

声質こそ見た目に合う少女の声だが、聞くとは何故か寒気がするような邪悪さがある。

「ネメペレゲ」

「……」

全国のネメペレゲ氏に申し訳ないが、なんとも気の抜ける響きだと数馬は思った。

（「マとかミ ドラスとか、せめてケ カとかオ イオとか……ラスボスつてのは威厳ある名前じゃなきゃ駄目だろ……」）

内心でぼやきつつ気を取り直すが、後ろで「はいいい！？」などと騒ぐ妹に若干気を取られる。

（あいつ本っ当に緊張感ねえな）

本物の魔王を相手にゲームの魔王を思い出している彼も緊張感はないのだが、何分突っ込みは不在である。

「憎き人類を滅ぼすため、異界より参った」

更に威厳ある口調で言うネメペレゲに、数馬は辛辣な突っ込みを入れた。

「自分の世界の人類滅ぼせよ」

全くもってその通りだが、勇者としても人間としても若干よろしく

ない発言である。

しかしネメペレゲは邪悪な雰囲気はそのままに、もじもじしながら小声で言う。

「もう滅ぼしちゃったし……」

数馬は腹の底がぐつぐつと煮えるような怒りを懷いた。

(ラスボス失格だろこいつ……!!)

物凄く斜め上の理由で。

ネメペレゲは取り繕うように咳払いしてから重々しく声を出す。

「……手始めに勇者を殺す。さすれば世界は絶望に包まれるであろう」

「今更取り繕ってもなあ……ッ！」

白いレースに包まれたデコルテのあたりに手をつ突っ込んだかと思うと、ネメペレゲは何かを投げつけてくる。

数馬は反射的にそれを切り払う。大きな爆発音がしたが、特にダメージは受けなかった。

しかし、爆風で少しよろめく。

広い背の上とはいえ、うっかりすれば落ちる。爆風で吹き飛ばされたりしたらたまらない。

「有馬ッ!! しっかり支えろっ！」

緊張感を取り戻すためにも、思い切り叫んだ。

有馬は情けない声だがしっかり返事をし、爆風をしっかり飛ばして数馬を支えた。

甘やかしすぎたのか判断力に欠ける有馬だが、その分命令には忠実で、少し時間をかければ最善の方向に持っていける。

「魔王が飛び道具つてのもな。姑息と言うか小物というか」

次々に何かの球体が飛んできたが、いくつかは逸れて空中に飛んでいく。

後ろから有馬の小さな悲鳴や呻きが聞こえるあたり、必死に逸らしているのだろう。

「何とでも言うがよい」

ふわふわとした髪が纏まり触手のようになって眼前を掠った。数馬は思わず横に飛んだ体を立て直すように右足を鱗に擦り、無意識にマナを爆ぜさせる。

直感に従い跳躍すると足元を影が通過した。キャラメル色の刃は空気を裂いても音ひとつしないような薄さらしい。

ガキンと音がした。ネメペレゲの眼前に着地した数馬は、剣を顔の横に立てている。

先程の刃の先端が剣の腹にぶつかった音であった。

「……ふ」

ネメペレゲが笑う。数馬は剣を振り下ろして跳ね除け、そのまま横に一閃した。首が離れる。

その断面から蠢く奇妙なもの。赤黒い触手のようなものは互いを引き寄せ合い、再び首と首を繋げた。

「キモッ」

飛びのきながら言う数馬を、無数の髪が追った。

数馬の剣にマナが集まる。そして青白い炎が纏わり付いた。これは便利とばかりに振り回すと髪の毛は燃え落ちていく。

後ろで「だから何それっ！」と悲鳴が聞こえたが応える暇は無い。

「ふん。良いご身分だ」

「ああ？」

「この世界の2柱は貴様の味方らしいな」

2柱。天神と魔神の事だ。皮肉げに唇を歪めた美少女魔王は焼け焦げすら残さず髪を元に戻し、今度は黒い瘴気のようなものを服の袖から噴出す。

「そりゃ勇者だからな」

ネメペレゲに負けず劣らずのシニカルな笑みを浮かべる。皮肉屋では無いのだが、こういう笑みは偶に役立つ。

瘴気は空気の流れに反して広がり、数馬を包み込む。数馬も驚いたが後ろの有馬の方がよっぽど慌てているため、むしろ落ち着いてしまふ。

(こつという時は全く助かる)

そう思いながら質量を持ち閉じ込めようとしてくる瘴気に剣を差し込んで抉り、桃を内から割るように振り下ろし、振り上げ、左右に割り開いて飛び出す。

予測していたのか、やはりネメペレゲは蠱惑的に笑って瘴気を放った。

「魔法とか使わねえのかよっ!」

「貴様こそ己の魔力は全く使わぬか」

どこか、ゆつたりとした戦いである。

勇者と魔王の戦いという割には、お粗末で。

(手加減……? いや)

奇妙な違和感に気付いた時、横から不可視の攻撃が襲った。

「つぐ!」

吹き飛ばされかけ、反対側から空気が支える。右から来たものもまた空気で、押しつぶされる感覚に一瞬目を瞑る。

「やれやれ、やっと来たか役立たずが。後は若い2人で、な」

魔王は薄笑いを浮かべて空中に逃れ、スカートから伸びる細い足を組み、傍観の体制に入る。

数馬はなんとか体制を戻して右を見た。其処には、あまりに酷い格好の

「……あ、ああああ、あ、うああああああ!!」

絶叫しながら向かってくる、紫髪の女性が居た。

「……つな……」

有馬は愕然とした表情で、ぼろぼろのフィーリシアを見た。

紫の髪を振り乱し、美しい顔かんせの半分は焼け爛れ、右腕がぶらりと垂れ、本来なら美しいであろう黒の翼も血に塗れ。

金色の瞳が、片方無くなっている。ぼつかりと開いた眼窩から血が流れている。

黒いドレスも殆ど千切れて太腿も胸すらも露になり、しかし少しも色気を感じ得ない程に抉られ、裂かれ、肉や骨すら覗いている。

「あ、あああ、あああああっ！」

その口から零れ出るのは最早あの冷静で知的な声ではなく、悲鳴と、絶叫と、慟哭。

完全に味方という訳でもなかったが、顔見知りの変わり果てた姿は有馬にシヨックを与えるには十分だった。

「ひ、っ……」

叫ぼうとしたのか、何か言おうとしたのか、自分でも分からない。ただ喉が詰まり、体の奥から温度が失われるような感覚。

「アリマ様」

すらりとした長身が視界を遮った。蝙蝠の羽を広げ、メアは慰めるように片手だけ後ろに回して頭を撫でた。

「今は、カズマを。気にしなくていい」

「あ、あ、ああ、うん、わ、わかつ、わかつて、るよ」

分かっているのか怪しい声で返事をする。振るう指先がぶるぶると震えている。

歯の根が合わず、視界すら歪む。泣いている事にすら気付いていない。

「あああああああっ！」

フィーリシアは片目から涙を流し、ぼろぼろの体ごと必死にぶつかっていく。

見ていて痛々しいような戦い方。

有馬は数馬を支えながらも、必死に風を起こしてフィーリシアを押し戻そうとした。

「やめ、て、……よ、……も、もう、やだ、」

逸らしそうになる目を、必死に目の前の現実には縫い付ける。

メアの背からちらちらと覗くその姿の悲愴さに、喉の奥がひくついて吐きそうになる。

数馬も傷だらけで体当たりしてくる女性には困惑しているのか、攻

撃せずに避け続けている。

「お前、もしかして」

「うあああああああつ、あああああああ」

「フィーリシアさんとやらか」

「　　っあ」

数度目の空振りをしながら、フィーリシアは驚いたように表情を変えた。しかし、攻撃を止めることは無い。止めることが出来ない。

「秘書っぽいクール美女。なるほど確かに、美人だな」

フィーリシアの声が、止んだ。

嘎れた嗚咽を漏らしながら髪を振り乱し、左腕を突き出す。

数馬は頬にその拳を受ける。本人の意思に関係なく力の籠った攻撃に、口の中が切れて血の味がした。

しかし、避ける事はやめたらしい。

数馬は忌々しげな目でネメペレゲを睨み付けた。

「クズ野郎」

吐き捨てるように言いながらも、肩に、胸に、腹に、血塗れの拳を受ける。

「言いたければ言うが良い。これでその娘も無力化できたであろう」

「ああ？　俺の妹がそんなヘタレだと思うか？　しっかり役割は果たしてる」

ちらりと一瞥すると、有馬はがたがたと震えながらも手を動かし、

風で数馬の背を支えている。最早死にそうな顔だが。

「しかし攻撃に移れるほどの度胸は無いようだな」

「あいつは守られるのが仕事だよ」

「ふん。……この竜を攻撃に転じさせれば良いものを」

「こいつが暴れたら妹が落ちるだろ」

「それもそうだな。はははははは、お優しい」

話しながらも、殴られ続ける。

数馬のコートは、有馬と似たようなものだが更に実用性が高い。それこそ神の加護でもついでいそうなほどで、全力で殴られたとしても全く痛みを感じる事はなく、衝撃が吸収される。

微動だにしない数馬を、ひたすら痙攣する左腕で殴打し続ける。

「妹がシヨックと罪悪感で死にそうな顔してんだよな。何したんだアイツ」

「その魔族と契約しなかったのだよ」

「しなかった？ ……流石に意味がわからんが、まあ」

ぱしりと手首を取る。軽く引くと、ふらふらの体はあっさり数馬の胸に収まった。けれど今だ殴ろうとしているのか左手に力が入っている。

魔王は僅かに面食らったような顔でその様子をただ眺めている。

「代わりに俺が責任取るって事で……ま、妹推薦なら遠慮する事ねーしな。」

とりあえず誓いのキスと洒落込むか、フィー」

数馬はぼろぼろの背中を支え、抱き寄せる。そして、

出合ったばかりの、ぼろぼろに傷ついた、1人の女に。
躊躇い無く、口付けた。

有馬が目を見開く。くたりと力の抜けたフィーリシア　フィーは、
確かに魔王から開放されている。

「……は、……い」
か細い声が誓う。薄っすらと微笑みすら浮かべたような、そんな表情で。

呼び掛けた愛称、フィーの口に付いた血と、数馬の傷付いた口内の血。

契約は為った。

崩れ落ちる体を抱き上げて素早くメアに預け、魔王に向き直る。

「俺の理想のラスボス像を教えてやる。誇り高く威厳に溢れ、

絶対的な力を持ち、部下には心酔され、1人で世界征服も出来るような奴がいい。ちやちな真似なんざしないで、世界ごと焼き払うような、そんなラスボスが良い。キーアイテム未使用だと数ターンで全回復しやがるような、そんな魔王となら、戦いたかったさ。まあ戦わずにすんで良かったとも言っが」

言い切つて、剣を構える。何の変哲も無い鋼の剣は、夕闇に染まり始めた空で煌く。

「お前はただの魔物ザコだよ」

何を考えているのか読み取れない、諭すような一言を落とした。

有馬は目を疑った。

《精霊眼》は発動していない、ならばあれは、あの眩い色は何だ？

「……え」

ほんの数秒眩く輝いたかと思うと、剣は姿を変えていた。灼熱のような色。角度によって赤とも黄とも見えるそれは、複雑怪奇に絡み合いながらも先端に収束して鋭利な光を放つ。

槍、だった。

「どういう……」

治療をなんとかしようと思つたと四苦八苦しつても、思わずそう呟いてしまふ。

数馬はすい、と槍を水平に持って前方に振った。

ダーツでもするかのように。

「……何、あれ？」

メアですら呆気にとられるような現象が起きた。

ネメペレゲは確かに避けた。浮いたまま、横に避けた筈だ。それで終わる筈だった。

数馬以外、全員が呆気にとられている。

「痛いかな」

ぼつりと零す。心臓ではなく、胸のど真ん中に、突き刺さった槍。

「熱血つぼく言うなら、これはフィーの分だな。ヴラディークともう1人の分も加算しておいてやる」

数馬は悠然と歩み寄り、ランラクルの背にゆらりと降り立つネメペレゲに向かう。

「次は有馬の精神的苦痛の分、更に俺の機嫌を害した分」
愛らしい顔も台無し、これ以上無い苦渋の表情。

数馬は槍を掴んで引き抜いた。風穴が開いて、覗いた赤黒い蠢きはまだもう意味を為さない。

「なん、なんだ、それは」

形が、崩れる。

ネメペレゲの体が、胸に空いた孔から広がるように、醜悪な怪物へモンスター変貌していく。

ごぼごぼと音がして、零れ落ちていく血肉のようなもの。

寄り集まって肉塊のようなものになり、容赦なく触手が迫る。

「人間風情が持って良いものではないっ」

ぐちゅりと肉塊の奥から粘ついた叫びが聞こえた。

数馬がぐるりと槍を回転させると、触手は粉々に千切れ飛び夜空に散っていく。

「そうだな」

槍を適当に振り回しながら、すいすいと近寄って行く。

「何でも使うのが人間ってもんだ」

「くそがああああああっ！ 馬鹿めっ！！ 門は開かれたあ
あっ！！」

それが醜悪なる魔王ネメペレゲの最期の言葉になった。

突き込まれた槍は解けていく。体内から溶かし、身を焼く痛みは一瞬で終わった。

そこにはもう何も無い。

いや、小さな球形の宝石がひとつだけ、遺されている。

数馬はそれを拾い上げ、まあとりあえず妹にでもやるか、と適当に決めた。

それが魔王の証そのものであるとは露知らず。

おまけ・ランラクルはその時

(いっ！……痛っ！ 何だ！？)

先程から断続的に何か丸いものが体に当たっては爆発している。

ランラクルは地味にチクチクとくる痛みに耐えつつ、数馬の言葉に従い安全飛行を心がけた。

「 ああああああ 」

ランラクルはひたすら飛ぶ。背中が戦場になるうと飛び続ける。しかし突然聞こえた恐ろしい慟哭に思わず喉をひくつかせた。

(何だ！？ 怖っ！ ……アリマが脅えてるな……)

上の様子は全く分からないが、有馬の様子が気がかかりである。

風の音に紛れて断片的に聞こえる恐ろしい悲鳴と、有馬の涙声に心臓がどくどくと鳴る。

(心配だ……心配すぎる……でもまあ、俺は安全に飛行するのが役目だしな。やっと役に立てるか……)

その大きさ故か上の惨状には頓着せずに済むランラクルは、もしかすると1番能天気かもしれない。

べちゃあと背中にも生ぬるいものが触れ、太く長い尾が思わずしなつた。

(うおおあっ!?! 気持ち悪っ! しみる! 何だっ!?!)

「グオオオオアア ツ!?!」

思わず咆哮するような不快感、そして痛み。染み入った体液のようなものが鱗の内側をじゅう、と焼いた気すらした。

しかしランラクルは微動だにせずそのまま同じ方向に飛び続ける。何故なら背の上に乗っているのは敵だけでなく、彼が認めた兄妹とその契約者なのだから。

(痛うううう!! でも、……今度こそ、期待に応えるっ……

!!)

「グオオオオオオ ツ!」

足蹴にされつつも頑張るランラクルは、間違いなく魔王戦の功労者に違いない。

23 勇者VS魔王（後書き）

いつにもまして戦闘シーンが難しい……もう少し人外じみた動きをさせるつもりだったのですが。アレレー。

魔王はあっさりです。バ モスポジションと行ってください。

ちなみに ーマとミ ドラースはドラ エ、ケ カはファイ アン、
オ イオはライ アライブです。全部スーファミ。

24 営業魔族オーガス

「先ずアニマラーナ方面に向けて飛ぶか、と決めた直後に有馬はヴラディークとオーガスの存在を思い出した。

慌てて兄とランラクルに言い、方向を変えて貰う。

最初はどうあれ、自分の所為で傷付いていると思われるので助けないと寝覚めが悪い。

それに彼らは一応紳士的だった。その結果がこれなので、やはり強引に契約してしまった方が良かったのでは、と有馬ですら思うが。

「また家から遠ざかる……」

冗談混じりに溜息を吐く有馬の頭を撫でながら、数馬は思わず口元を緩める。

(……ちゃんとした家が出来てよかったな)

生まれ育ったあの場所は確かに“家”だったが、居心地が良かったとは言いがたい。

それに、数馬の喫茶店の二階も有馬にとっての“自宅”ではなかった。

故に、有馬が帰りたいと思える家が出来た事が喜ばしいのだ。

「何ニヤニヤしてんの」

「何でも？」

「嫁さんが降って沸いたからってさあ……」

「ああ、それもあつたな」

「それもって」

他に何が、という視線には応えない。

「俺もアニマラーナに住むかな。他種族の風当たりは強いかな？」

「人間ほど差別しないよ。カラカ見てるとわかるでしょ。」

「ああ、そうだな。魔族と獣人ってどうなんだ？」

「友好的だと思うけど。」

他愛ない会話をしながら、時折眠っているフィーを撫でたりついたりする2名。

有馬は回復魔法を知らないため、少しずつ魔力を注いで自己修復させている。

ヴラデークが魔力を吸って手を強化したように、体の組織を魔力で作る事が出来るのだそうだ。

「結婚式どうするの？」

「白無垢は譲れんな。」

「衣装の話っすか……。」

「指輪か？ オリハルコンに賢者の石とか。」

「それはちよつとお目にかかってみたい。」

「ちなみにそれはエンゲージリングな。」

「……えーっと、マリッジリングは？」

「ミスリルに……そうだな。ブループラネット。」

「何アイランドの秘宝だよ。」

「強欲アイランド。」

「中途半端にぼかすな。」

脊髄反射的な会話を繰り返すうちに、眠気が襲ってくる。

時刻は既に夜と言って良い頃合い。両腕は鉛のように重いし、頭はじんわりと鈍痛がする。

今だ大人になりきっていない体は、休養を必要としていた。

「……寝る。ついなら起こして。」

「すぐ着くと思うが。」

「寝る。」

体を丸め、頭だけ数馬の脚に乗せる。五秒もせずに寝息を立て始めた有馬に苦笑しつつ、数馬は見張りを任せているメアに声を掛けた。

「お前も休め」

「……疲れていない」

「その姿、疲れんだろ」

メアは闇色の目を見開く。やっぱりな、と数馬は微笑んだ。

「なぜ？」

「小さいほうが楽」

からかうように、メアの言っていた事を指摘する。

「聞いてたの」

「聞こえた」

「……うん。小さい方が楽」

メアは淡く桃色の光を発し、元の姿に戻る。

魔族はある程度まで成長すれば、殆ど死ぬまで不変である。

種類にもよるが、大抵は20代程度の姿を保つものだ。

メア、もといメリー・デイス・クテイリル・ラガルベリーは魔族でも妖魔族でも、妖魔の中でも特異な存在だ。

夢に入る事が出来るのは妖魔の最大の能力だ。その時は肉体ごと消えるため、眠る生物が居るかぎり傷つけられる事のない、最強とも言える能力である。

メアは生まれてから、かなりの期間を夢の中で過ごした。

不可思議な事に、その夢から出る事は出来ず、他の夢に移る事も出来ない。5歳違いの弟が大人になった頃、ようやくメアは戻った。

「年齢で考えると、あれが本来の姿。……でも、まだそこまで成長していない」

「なるほど。……お前、実年齢いくつ？」

「113歳」

「……13歳って事にしとくか」

「かまわない」

その夢は、ほとんど普通の生活だった。赤子の姿のまま歩けるようになり、言葉を覚え、文字を学び、勉学を修めた。面倒を見てくれた者については、一切の記憶が無いのだが。

現実に戻ったメアは、体のちぐはぐさに悩まされた。突然大きくなくなった体は色んな面で手に余り、始めは動かす事すらままならず結局は体を赤子に戻してゆっくりと成長する事を選んだ。

けれどもやはり、大人の姿の方が戦いには有利だ。だから生活では子供、戦闘には大人、と使い分けるようになった。

「……………弟で、いい？」

そんな経緯もあり、彼は夢の中でしか子供扱いをされた事が無い。弟は尊敬の目のみを向けてきて、父母はどこか遠巻きに付き合うちに死んでいった。

孤独、だったのだ。血の繋がる家族が居ながらも。

自分より強大で、自分よりも目上である者　主を求めていたのは、そのためでもある。

懇願するような目に、数馬は笑ってその腕を掴んで引いた。

「おう。今日から兄弟だ」

膝を付いたメアの背中を、ぽんぽんと優しく叩く手。

この世で産声すら上げなかった夢魔は、不覚にも生まれて初めての涙を流した。

そこには美しい城の影は無く、無残に崩れ落ちた瓦礫の山があった。

「あーあ……………」

あの豪華な部屋も跡形も無いだろう。

有馬は《精霊眼》で2人の魔力を探しながら、勿体無い、と溜息を吐いた。

ランラクルも元の姿に戻り、メアと一緒に有馬に付いて周る。

「変だ」

数馬は1人離れた所で、今だ怪我だらけのフィーを背負いながら呟いた。

「……………なにが……………です？」

「これだけの事が出来る奴なのに、あの程度で終わった事が、だ」

「ええ……手加減、でしょうか」

「まあ俺も少々大人げ無かったんだが」

「……あの槍、は……」

「あいつの言う通りだ。まあ、人外の領域だろうな」

神からしても全くの予想外で前代未聞の事だが、数馬は己に与えられた力を逆手に取ってとんでもない事を成し遂げた。

身体強化、自動翻訳などは魔法に擬態した神の力である。故に、魔力ではなく神力、神気、と呼ばれる類のものが多少含まれ、召喚された者達に少しずつ供給されてもいる。

それを無理矢理に体から引き摺りだして剣に混め、魔力やマナよりも圧倒的に密度の高い神気で強引に形を変えてあんな槍に仕立て上げた。そして神の力の一端を受け、ネメペレゲの擬態が崩れたらしい。

因みにこんな事が出来たのは、契約によるものも大きい。有馬がロボと契約して魔法を使えるようになったのと同様に、数馬もフィーと契約した直後に少しずつ変化があったのだ。

己に流れる魔力、そして僅かな神力の残滓。それをほんの数秒で把握して尚且つ操作できるようになったのは、元々の彼の素質の問題だが。

「あなた、も……とても、魔力が」

「まあ、普通では無いだろうな。若干混じっただろうし」

「……？」

「気にするな」

数馬の魔力は有馬ほど多くはないが、混じった神気の所為でどこか人間離れしている。

《精霊眼》で見れば深い青に金を散りばめたように見えるだろう。

「つーか、眠いな」

「……ええ……」

「せめてベッドで寝たいが……いや、それはそれで眠れなそうだな」

にやりと笑って言うと、フィーは白い頬をほんのりと赤く染める。成り行きではあるが案外似合いの夫婦かもしれない。

「居たー！ ってうわ！ ぼろっぼろ！」

若干いい雰囲気になった所で有馬の声が響く。

「たく、と小さく呟いて有馬の方に歩き出した。」

ヴラディークは右腕が皮一枚で繋がった状態で、顔に大きな切り傷がいくつも付いていた。

オーガスも髪の毛が酷い事になっていて上に、腹は抉れ、肉どころか内臓が見え、そこかしこの肉が削げ落ちていた。

2人とも元が美形なだけに見るに耐えない姿であった。

気絶していたのでなんとか起こすと、満身創痍ながらも普段どおりに振舞っている。

「生きていたか。よく四天王が生きて残ったものだな」

「あー、腹痛が……ん？ おお、穴開いとる」

魔族の丈夫さに有馬は絶句したが、両側から肩を叩かれて我に帰る。

「あ、えっと、あの、ごめん」

「何がだ？」

「……え、あー、察してよめんどくさいな」

「本当じゃのう、全く」

「私が何をした……」

ぼたぼたと血を流しながら落ち込むヴラディークに、流石に有馬も申し訳なくなる。

しかし説明できるほど器用に出来てはいない。

もごもごと言葉を濁す彼女に、苦笑したオーガスが助け舟を出した。

「つまりアリマが決断せんかったせいで僕らが傷付いた、ごめん、と言いたいんじゃない」

「……ああ、そういう事か。遠慮なく謝罪しろ」

「……………ごめ」

「ちゃんと謝れ」

「……………ごめ、ん」

「声が小さい」

「……………ごめっ、な、さっ、う、うえっ、く」

罪悪感と精神的疲労に屈辱が追加され、あっさりと涙腺は決壊した。俯いて肩を震わせ始めた有馬を見て、ヴラディークは慌て出す。

「おっ、おい、泣くな、泣くな！ 卑怯者！」

じつとりと冷たい視線が周囲から送られる。

流石に怪我人を殴りはしないものの、絶対零度の視線を送る数馬、慰める合間に睨みつけるランラクル、瞳の闇色をますます暗くしてじつと見てくるメア。

そして思い切り白い目で見てくる同僚2名。いや、片方は寿退職かもしれないが。

「早く治せよ」

字面だけなら優しい言葉が掛けられる。が、その声は冷たいを通り越して凍っている。

「瀕死状態で殴るとすぐ死ぬからな」

殴られるために回復する羽目になった。己のうっかり加減に内心で荒れ狂いつつ、ヴラディークは「……………分かった」と渋々言った。自業自得である。

「お主本当に阿呆じゃの」

「……………生まれつきだ」

不貞腐れたヴラディークの眼前に、手が差し出される。

ひとしきり泣いてすっきりした顔の有馬がしゃがんで手を差し伸べていた。

「……………何だ？」

「魔力でも血でも」

「……………ありがたく貰っておく」

「とつと回復して兄ちゃんにボコられる」

笑顔で言う有馬に、ヴラディークは口元を引き攣らせて微笑みつつその手を取った。

そして双方、一生いがみ合いそうだな、と思った。

「……ツンデレだな」

「デレてないっ!!」

「未来の夫に申し訳ねーな」

ニヤニヤする数馬の腹を軽く殴りつけ、有馬は照れたように頭を掻いた。

「オーガスさんも、いる?」

「うむ、すまんが貰っておこう」

「うん。ほんと、あの、ごめんなさい」

「よしよし。怒っておらんよ」

「………何でそっちには普通に謝るんだっ!!」
年の功である。

魔力をたっぷりと吸った2人はゆっくりと回復していく。

「グロい……」

「ぐるい?」

「グロテスク。奇怪できもちわるい? みたいな」

「ほーれ」

「っひぎゃあ!」

眼前にぼろぼろの手を差し出され、有馬が悲鳴を上げた。

指は一本一本折られたらしく全て妙な方向に曲がり、爪は剥げ、指の股がざっくりと切られ、色々挟れたり骨が丸見えになったりしている。

肌の色が薄緑なだけに、隣の屍魔族グルーハルトよりよっぽどアンデッドに見える。

「びっ、びっくりした………いきなり出さないでよ」

「はっはっは。で、契約は?」

「え?」

まだ続いていたのか、と目を見開く。回復しだした手からは新鮮な血が滴り、確かに契約するにはちょうどいい、かもしれないが。

「………してくれんのかのう?」

「いつ、え、はい？　だ、だって、魔王いないし」

「そうじゃのう」

「だって……え、ええ？」

「また新たに現れるかもしれないじゃろ？　備えるに越したことは無いしのう」

「へ？　あ、……うん？」

怒涛の勢いで言いくるめられていく有馬に、数馬が溜息を吐く。

昔から男運も友情運も微妙だったが、知人運とでも言うのか。数馬も同じなのだが、変なものばかり引き寄せる性質である。

だからこそ異世界トリップ、などという珍事に2人揃って陥ってしまったのかもしれない。

「本当なら魔王になってほしいんじゃないのう」

「え、やだ」

「じゃろ？　だからのう」

大きな条件を提示し、断られたら少し小さな条件に変える。思い切り詐欺の定番である。

「亀の甲より年の功とは良く言つたもんだ」

全く止める気配もない数馬が、しみじみとそう言った。

「……カズマ、あれは止めなくていいのか？」

「別に。ようするに絶対に裏切れなくなるんだろ？」

「端的に言えばそうですね」

「強制力とかもあんのか？」

「命令として言えば、ある程度逆らえない筈です」

「いい事聞いたな、そりゃ」

「何に使う気だ、何に」

「そりゃあ、ナニに」

「おいつ！」

思わず声を荒げると、数馬はにやりと笑った。

「お前も新しい恋を探せよ」

「つな……！！」

そんな彼らを他所に有馬は完全に説き伏せられて契約に及んでいた。相変わらず、なんとも頼りない対人スキルであった。

魔領の中心部、魔王城と呼ばれる巨大な石造りの城の奥深く。

遙か昔　魔領がまだ魔帝国と呼ばれ、ネインクルスも生まれていなかった頃から変わらずに存在する謁見の間。

主のない玉座の上に、不意に黒い塊が現れる。

そして幾つもの声が聞こえ始めた。

「上手くやったか？　にしては小さいんだが」

「……また遊びすぎたんじゃない？」

「馬鹿者め。いいかげんにしろと……」

「いいじゃんっ！　じゃ、あたし最初いつきまーっす！」

にゅ、と塊から細い腕が突き出す。あたりを掻き回すように動いていたそれは、塊をがしりと掴んだ。

「んんんんんーっ！　太ったああ？」

ぐいぐいと塊……というよりも穴なのだろうか、もう片方の手が出てきて押し広げるように動き、やがて頭が現れる。

「頭隠して尻隠さずっ！　いやん！」

「とつとと出る色ボケっ！」

ネジが数本ぶっ飛んだような発言と共に黒い塊から飛び出したのは、コーヒー色の滑らかな肌をギリギリまで晒した女性であった。

ただし、体つきは全く豊満とは言えない。むしろ痩せすぎで、

見ている切なくなるポリウームの無さだ。背は高めで足も長いが、腰付きもあまり女性的ではない。

亜麻色のショートヘアから覗いた耳はツンと尖り、彼女が人間でない事を示している。

「……ほんつとに小っせえなああ、の糞豚が！」

「どこがあー？」

「胸だ！……ってちげえよ！！」

更に飛び出して来た12、13程度の少年が思い切り女性の背中を蹴り飛ばした。

「いったあい！」

「うっせえ！」

「ひどいっ」

少年の髪と目は赤で、いかにも苛烈そうな顔立ちだ。今も怒ったように眉が寄っていた。

小柄だが手足はがっしりとしていて、力がありそうな体躯である。

「狭い！ 広げんぞ」

「あいあい。なんかエロいねっ！ きゃんっ！」

「死ね変態っ！」

2人は黒い塊をがしりと掴み、左右に思い切り引く。すると塊がぎしぎしと軋むような音を立てて広がっていき、直径2、3メートル程になった。

その中から、更に幾人もの奇妙な者達が飛び出す。

「おおおっ、広い広い！」

「ほー。魔王はおらんの？」

「死んだんでしょ？」

「ネメっちは？ 死んだかね？」

人種も性別も年頃もバラバラで、共通する要素が何も無い。強いて言うなら、人間に近い姿をしている事くらいか。

最後に上等なフロックコートを纏う壮年の男性が優雅に出てくると、塊は消えた。

「おや、消えてしまったようだね」

白髪交じりのオールバックに銀縁の眼鏡を掛けた男性は、手にしたステッキでこつんと床を突く。

「ではまあ、皆の衆。ひとまず整列しておくれ」

烏合の衆にも思える奇妙な人々は、口々に返事をして横一列に並ぶ。

「楽しい楽しい侵略戦争だ。此度も十分に注意して、蹂躪しなさい」
そして生徒に注意する教師のような口調で、宣戦布告した。

24 営業魔族オーガス（後書き）

のろのろと休憩中。有馬とヴラディークは順調にライバル路線です。そして異界からの侵略者編、といきたいところですがそろそろゴーホーム。

強欲アイランド <http://bit.ly/qTzkBm>

25 おうちにかえる

ヴラディークとオーガスは後始末に残る事に決め、すぐに有馬たちは出発した。

ちなみに名前の方は、ブランとリーフになった。二文字ルールはあつさり捨てたようだ。

今度は一応魔王の脅威も無いので、全員思い思いにしつつ空の旅だ。精神的に疲れた有馬と昼寝中毒のメアは熟睡中である。

数馬も眠りはしないものの座ったまま軽く目を閉じ、フィーもうつらうつらとしている。

ちなみに飛行中の保護をしてくれる魔道具を貰ってきたので、風はあまり感じないで済んでいる。

眼下の景色は既に移り変わり、南側の街並みが見える。ここはフィーの管轄だ。

白い石造りの家が並び、街全体がきりりとした雰囲気に見える

「……そっいや、こっちの事はどうするんだ」

「元々、殆ど代理人任せですから問題ないです。私たちは基本的に城で暮らしていたので、特に業務は変わりませんし……魔王様が居なければ、成り立たないので」

「探すのか？」

「そうですね……アリマ様になっていたただければ、と思っていたのですが」

そう言うと、少し気まずい表情になる。無理に迫ってしまった事を思い出したのだろう。

よく考えてみれば、攫わないでもう少し方法を考えていれば誰も傷付かなかったかもしれない。

結局は誰も死なずに済んだのだから、円満に解決したとも言えるのだが。

数馬は何か思いついたようににやりと笑う。

「俺が兼任してやるうか」

「面白そうですね。無理ですが」

スーアルカルドの人間が憤死しそうなアイデアだ。

分かってるさ、と悪戯っぽく笑う。

「本当ならネインクルス様に戻っていただくのが1番なのですが…

…既にアリマ様と契約しているのであれば、難しいですね」

「何でだ？」

「王たるものが一個人の下にある、というのは問題だからです。それに、魔王は心までは強制できません。見ていないところでアリマ様を狙われたらコトですから」

「……ああ、だったら本人が魔王の方がマシだな」

「……いいのですか？ もし、アリマ様が魔王になったら」

「別に良いがな」

役割に引っ張られて敵対する程、数馬は簡単な性格をしていない。

そもそもスーアルカルドを逃げ出た今、勇者として認められているかも怪しいのだ。

いつそ有馬を魔王にしてその騎士にでもなってみれば面白いかもしれない、と人間側にとって悪夢のような想像が浮かんだ。

「有馬が了承するなら　ああ、あと嫁入りするのに支障が無いんならな」

「嫁入り、ですか……？ 魔王となるのなら、婿を迎える事になるでしょうけれど」

「生憎、こっちの方が先約だからな。こいつは」

言おうとした口を、不意に閉じる。

ファイが怪訝そうに横を見た、その時

「……！ つカズマさ、」

「伏せろっ！」

強い風と共に、神速の影が横切った。

アニマラーナの建国物語は、魔領でもそこそそ有名だ。

銀の王と、白き狼。

まだ荒れていた頃の大陸を駆け、調和を説き知識を与えた銀の狼王。狼族においての始祖である彼は、やがて人々にも王として慕われる。そして出来たのが、アニマラーナという国だ。

白き狼は神獣とも伝わり、その力で銀の王を助けたという。

その狼と錯覚するような、神々しい白い毛並みの狼。

ファイはその体から発せられる威圧感に気絶しそうになりながら、気づけば震えていた指先をぎゅっと握りこんだ。

「……。敵か？」

数馬は何故か半信半疑な様子で呟いた。

確かに、敵と言うには殺気が含まれていないような気がする。

白い狼　ロボが、1度有馬を気絶させてから有馬の前で殺気を発さないように気をつけている、という事は彼には知る由が無いが。とはいえ居るだけで圧倒的な存在感と、気圧されるような感覚。強いものだ、と戦わずとも分かった。

「とりあえず、だ。有馬を離せ」

「……断る」

今だ熟睡中の有馬が、ロボの足元にふわりと降ろされる。

お休みのキスでもするかのように優しく鼻先を寄せ、顔を上げると

再び凶悪に牙を剥いて威嚇する。

「去れ、蛮勇の者」

「……いや、空の上で無茶言つなよ」

威風堂々たる様子と甘やかしのギャップに若干笑いを堪える。先程からこちらを睨みながらもちらちらと心配げに有馬に視線を送っている様子が、なんとも可愛い。

「ブランカの前で人を殺しはせぬ故、迅速に飛び降りろ。それとも竜ごと沈めるか」

「それもまあいいけど、とりあえず話し合いからだよ、君」
今度は背後から声。見れば空の上を、平然と歩んでくる青銀の猫が居た。

その声を聞くなり、フィーが口をぱくぱくとさせて目を見開く。

「っ……ネインクルス様っ!？」

「やあやあ、フィー、久しいね。元気かな？」

空中をしなやかな体が歩み、ふい、と揺らいだ姿は次の瞬間には有馬の横に居る。

「やあ、と猫の声で鳴いて頬を舐めた。

「おはようさん。今日もよく寝るねえ」

「ん……? んん」

薄っすらと目が開く。

そして「る……」と呟くなり再び力が抜け、瞼が落ちる。

「くらくら」

もう一度舐める。うーあーと唸っていたものの、ようやく緩慢に手を動かして体を起こした。

「……っち」

いきなりガラが悪い。

有馬はだるそうに伸びをした後、眉根を寄せてそこにいるルネと口ポを見て、ようやく気づいたように目を軽く見開いた。

「口ポ？」

「っむ」

「あれ、私は無視かな？」

「すごいね、どうやって来たの？ あれ？ まだラルの背中だよね」

「飛ぶくらいなら造作ないからな」

「へえー、いいね……？ うん」

飛ぶのは“くらい”なのだろうか。突っ込みすら出てこないあたりまだ半分寝ている。

「……ベルは？」

「留守番だ。あれも随分力を蓄えたから、守護の役目くらいなら果たせる」

割と適当である。

やはり長く生きた上に神獣なので、大抵の事を有耶無耶にできる程に強いのだ。

ただし彼やルネは、魔力的に停滞していてもう伸び代が無い。

その点精霊としても生物としても若かったベルは、まだまだ成長の兆しがあった。

魔力を吸えば強大な存在になれるし、少しずつだが大人の姿に変わっていくだろう。

「それより早くゆくぞ。我にとっては脅威ではないが、禍々しいものが溢れている」

「……ええ？ どこに？」

「魔王城だね。あーあ」

事も無げに言うが、リアルに世界の危機である。勇者ではないので何もする気はないが。

黙って聞いていた数馬が、言われてみれば何かあるな、と顔を向けて難しい顔をした。

「そうだねえ、きみはまだ弱いから逃げるのが得策だよ。こんないい足もあるし」

「ラルをアッシー君扱いしないでよ」

「はは、アッシー君か」

気に入ったらしく、ルネは笑っている。有馬が不満げに耳を引っ張

るが、特に気分を害した様子は見せない。

「それより君　あは、ははは、いいものを持っているね。結局そうなるのか」

楽しげに笑ったルネがひょいと有馬の脚に乗り、ポケットに尻尾を突っ込む。

「何？」

取り出したのは、小さな球形の宝石のようなものだ。奇妙な事に、色がよく分らない。

そつえば数馬に貰ったもので、宝石が好きな訳でもないため忘れていたものだ。

首を傾げる有馬の手に、それが触れて　途端に宝石は、尻尾を振り払うようにつるりと飛び出して浮かんだ。

「え？」

眼前に迫るそれを払いのけようと思わず手を上げる。ふい、と簡単に避けられてそれは有馬の喉元に吸い込まれた。

「っあ、ぐ」

「ブランカっ!？」

途端に、熱した空気を吸い込んだように喉が灼ける。

突然呼吸が出来なくなつて有馬はパニックになり、涙目で体をくの字に曲げる。

「おい貴様っ、何をした!」

「私は何もしていないよ。あれの正式な選定を受けたから、ちょっと苦しいだろうね」

「ちよつとではないだろうっ!」

死ぬほど苦しそうである。

ランラクルの背中の鱗に縋るように這い蹲り、片手で喉を押さえて必死に息をしようとしている。

「どうしたっ!?　おい、有馬っ!」

「いや?　何でもないさ、勇者殿」

「殺すぞ化け猫野郎」

「ね、ネインクルス様……」

おろおろするフィー、殺気立つロボと数馬、飄々としているルネ、
今だ熟睡中のメア。

その様子をどこか遠く感じながら、有馬は己の奇運っぷりを呪った。
自分が不憫とは思いたくないが、どうしてこつも変な事態にばかり
陥るのだろう。

しかも今度ばかりは死にそうだ。サウナを極限まできつくしたよう
な熱が喉にあり、息を吸う事が出来ず、ただ掠れたような音を立て
て息が抜けていく。

この厄病猫、と声にならない悪態をついて有馬はまたも気絶した。

「け、痙攣していますよっ、ど、ど、どうしましょう」

「くっそ……とりあえず気道の確保か」

「魔法で空気を送る。鼻から抜けぬように摘んでおれ」

割と緊急事態だが、数馬は平静を保ったまま有馬を抱き上げて裏返
す。一応元の世界でしっかり救命の講習も受けている。もう必要な
いが、AEDもしっかり操作できる。

鼻を摘んで喉を少し上げさせ、びくびくと痙攣する指先を見て心配
になる。

しかし自分が平静を失ってしまったては困る。ここにいる面々は戦闘
能力は高そうだが、人命救助の心得がありそうには見えなかった。

目を開くと、なんだか随分と懐かしい天井が目に入った。

青を基調にした柔らかな布団は羽毛布団で、最初はこの世界にも羽
毛布団があるのかと感心したものだ。昔の人はシーツだけ掛けてい
るイメージがある。

薄ぼんやりとした明るさは、天蓋から下がるカーテンのせいだ。こ

のおかげで毎朝眩しくないのは助かる。突然明るくされるのは苦手だった。

「おはようございます」

聞きなれた女性の声に、ううん、と唸って目を擦る。

「起き上がれますか？」

小さく頷く。のろのろと体を起こすと、グラスを渡された。

「ありがとうございます」

とてつもなく喉が渴いて声も掠れている。柑橘風味の冷たい水を飲み干すと、生き返ったような気分になる。

そこで有馬ははっと目を覚ましたように顔を上げた。

「いつの間ここに」

「一昨日お帰りになられました。1度目を覚ましましたが、覚えておられませんか」

「ああまたこのパターン……全然覚えてない」

「高熱が出ていました。峠を越えるまでは危険でしたし、記憶が飛んでも仕方ないですわ」

「ひー……」

知らぬ間に生死の狭間を彷徨っていたらしい。

有馬はばくばくとする心臓を押さえ、そういえば何か夢を見た気がするな、と思い出す。

とても辛いような夢だった気がするが、きっと死ぬような目に合っていたからだろう。

空腹に耐えつつ顔を洗い、体を軽く拭いて着替える。過保護なクレイアは何時も通り過保護だが、必要以上に喜んだり説教したりはしない。

体がだるいので、それは有難かった。優秀なメイドなのでしっかり弁えているのだろう。

「では、お食事をお持ちいたしますので」

「ういー……」

淡い桜色のワンピースと白いカーディガンを着た自分を見下ろす。

気のせいかもしれないが、少し痩せた。

「最近気絶するか泣き叫んでるかだしなあ」

自分で言っただけで切なくなるが、転移して気絶し、攫われて気絶し、戦ってはガタガタ震え、ついでに泣き、そんな感じの7日間だった。そう、たったの7日間。

転移してからシャンヤンまで3日、更に3日後に攫われて、その夜から戦い通して決着をつけたのが7日目になったあたりだ。

色々ありすぎて頭が痛い、戦いを経て少しは成長した気もする。もう死地に身を置くのは遠慮したいが。

そう思っていると勢い良くドアが開き、これまた久しい顔が飛び込んでくる。

「有馬っ！」

まさか寝室に来るとは思っていなかったため、啞然とする。ぼーっとしている間に駆け寄られ、勢い良く抱きつかれて思考が停止した。フォルテの両腕に抱き締められ、そのまま勢いでベッドに倒れる。

「ふぎやっ」

ランラクルの抱擁よりは穏やかで苦しくもない、が。

別の意味で苦しい上に恥ずかしい。

さらりと銀髪が頬にかかる。頬と頬がくっついて、体温がはつきりと分かる。

「あ、あ、あーっと、えっと」

しどろもどろに言葉を探すが、何も出てこない。

フォルテはやや斜めに覆いかぶさって、両腕が頭と腰に回されている。

丁度心臓と心臓のあたりが重なって、鼓動がどちらのものなのかすら分からなくなる。

（少女漫画かあああ！）

内心で叫びながら、所在無く彷徨っていた両腕をとりあえず、フォルテの背中に回す。

なんとなく安堵感があり、口を閉じようと思った、が。

「……フォルテ」

「何だ？」

「つぶれる」

割と切実な問題なので、服を引っ張って抗議する。

緩慢に体を浮かせたフォルテの目が有馬の顔を見ると、少し焦ったような表情に変わった。

「有馬っ、顔が赤い。まだ熱があるんじゃないか」

何時もより切羽詰った調子で言うフォルテに、思わず横を見て「くっ」と息を漏らす。

（ベタだ……ベタだ！ 天然だ！）

「大丈夫か？ まだ寝ていた方が……」

「平気だつて、何ともないから」

にやにやと笑い、ベッドに腰を下ろしたフォルテを見上げる。

「フォルテは元気だった？ シヴァさんとクレイアさんも」

「ああ。こちらは変わらない」

「よかった」

家に帰ってきた、という感じがする。

昔とは違う。家に帰り、親がおかえりと言う事にすら苛立っていた頃とは。

「……ただいま」

「おかえり」

柔らかな微笑みが降って来て、日常に帰った事を再確認する。

同時に、顔が熱くなった。最近やたらと美形ばかり見ているが、フォルテはなんとなく別格に見える。言うなれば、美術館の芸術品と憧れの先輩の差か。

「有馬」

名前を呼ばれても、今の状態だと恥ずかしさが増すだけだ。動悸も加速して、そういえばベッドに居たという事を思い出してますます沸騰しそうになる。

寝転がった体をごろんと転がして、布団に顔を埋める。カバーはひ

んやりと冷たい。

「……………有馬？」

もう一度呼ばれる。今度こそどう反応していいのかわからなくなり、手に汗が滲む。

何も変な意図が無いとは分かっているのだが、今声を出したら確実に上ずる。

と思っていると、右肩をがしりと掴まれて布団から引き剥がされた。

「ひぎゃあっ！ な、何……………」

「無視するな」

「あ、ご、ごめん、その……………あー、えーっと」

真っ赤な顔でわたわたしているのを見て、フォルテが心配そうな顔になる。

「やっぱり熱が……………」

「無いってば」

段々と涙すら滲んでくる。1度感じた気恥ずかしさというのは中々収まらないもので、フォルテの一挙一動に温度が上昇していく。

「本当にどうしたんだ。お、おい」

「……………ふ、フォルテのせい」

「な、何かしたか？」

普段は鋭いのに、何故かこういう所だけが鈍感だ。有馬もだが。

こういう点は有馬と数馬は似ておらず、数馬は人からの好意に聡い。というか妖怪レベルで人の感情を読む。

「な、なんか、押し倒すし」

「押し倒っ……………！？ いやっ、その」

「しかもごっつ！ ベッドですけど…！」

「いや……………その……………すまない」

「謝られてもむなしの！ 喜べ！」

既に自分でも何を言っているのかわからない。

赤面して涙目だが、勢いに任せて叫ぶとフォルテも気圧された。

「……………あ、ああ」

「感想はっ!」

「……や、柔らかい」

「変態!」

羞恥心が限界を超えると、人間色々超えられるのである。

有馬の暴走はその後10分程続いた。

外で朝食のトレイを片手に待機していたクレイアが呟いた。

「……あと一息でしょうか」

「先は長いと見た。いやあ、初心だねえ」

「変にちよっかいをお掛けにならないでくださいね」

「分かってるさ。やー、いいものを見た」

にやにや笑いの元魔王に、クレイアが微笑みかける。

「シヴァ様もご覧になりたかったでしょうに……」

「君たちって不敬にも程があるよねえ」

「うふふ。愛です」

やはり再会にテンションが上がっているクレイアであった。

……元からこうだと言えなくもないが。

25 おうちにかえる（後書き）

実は意を決して言おうとしていたものの
有馬に押されて有耶無耶に終わった という話

次回は会議のターンと思われませう

26 責任アレルギー

有馬は怒りなのか羞恥なのか分からぬままに暴走しきり、せえせえと息切れしたまま甲斐甲斐しくクレイアに食事を口に運ばれた。今日の食事は普段とは違い、病人向けのようなメニューで構成されている。

フォルテは既に退出して仕事に戻っていった。名残惜しさを感じたような気がして、何故か気恥ずかしくなった。

「お兄様がお作りになったのですよ」

「……さすが」

数馬は料理上手である。家事スキル全般は有馬よりも上だ。伊達に飲食店を経営している訳では無い。そもそも数馬が有馬に劣る点というのは本当に数少ないのである。

上位互換のような人間が側にいてよくグレなかったものだ、と2人は常々思っていた。

「そういえば」

ふと思いつき、差し出された食事を咀嚼して嚥下してからクレイアに問う。

「いつもの食事は誰が作ってるの？」

「料理人と私が作っていますわ」

「……クレイアさんも？」

絶妙なタイミングでミルクの入ったコップが差し出される。受け取ってこくりと喉に流し込む。冷たさと薄い甘みが心地よい。

「元々は大量に作っているのですが、それでは足りないと思いい数は私の方で作って追加しております」

「へえー」

「いきなり増やさせては勘付かれるとも限りませんものね」

最早有馬に疑問を抱かせる間もなく給餌（給仕ではなく）を終える。相変わらず瀟洒かつ洗礼された動作で食器を下げ、クレイアは部屋を出て行った。

入れ替わりに入ってきたのはロボを始め、守護者達である。

「体調はどうじゃ？」

「熱は下がったみたい」

ロボの後にはベルとメアが続いている。有馬はルネが居ない事に首を傾げたが、フリーダムかつ実力まで十分なるルネの事なのでさして心配はしない。

「……なんか、ベルとメアが並ぶと、こっ……すっごいね」

「そう？」

「……」

タイプの違う美少年が並ぶ様は壮観である。背徳的な色気を纏うメア、逆に神秘的な魅力を振り撒くベル。まさに悪魔と精霊だ。

（アイドルユニット……いや、この世界そんなんばっかだった）

行動した範囲は割と狭いのに、やたらと美形遭遇率が高い。思い返して溜息を吐いた。

「ど、どうした！」

溜息ひとつで心配げに尾を下げる様子が愛らしい。やっぱり犬（ではないが）は和む、と有馬は口元を緩ませた。

翌日になると、体力はある程度戻ってそこそこ元気になっていた。それでも久しぶりに歩くためふらふらしているが、なんとか自室を出て居間に辿りつく。

「おはよー」

「おはよう」

隣に座り、挨拶を交わす。何でもない日常の1コマが平和を感じさせ、何となくほっとする。

用意されていたティーポットからカップに紅茶を注ぎ、有馬は一周回って慣れたのかフォルテに寄りかかって一息ついた。

「平和だー……」

「……和んでいる所悪いが、また何か起こったらしいぞ」

「え」

よしよしと頭を撫でながら、苦い表情でロボ達に言われた事を伝える。

「魔王城の辺りに不穏な雰囲気がある。この世のものではないらしい」

「……異世界の何か？」

「だろう、な」

「侵略とかだつたらやだなあ」

まさにその言葉は的中しているのだが、今は知るよしもない。

やがてクレイアが朝食を運んできて、2人は和やかに談笑しつつゆっくりと過ごした。

数分後、食事を終えた頃にシヴァが訪ねて来た。以前から儂げな養子であったが、何故かやつれてますます影がある。それでも美形に見えるのが凄い、と有馬は思った。

「お久しぶりです、アリマ様。と言っても寝ておられる時に一度見

舞いに来たのですが」

「……大丈夫？ あ、クマできてる」

「仕事が忙しく、徹夜が続いておりまして」

本業も副業も忙しい。フォルテが平然としているのは、裏の方が格段に忙しいためだ。

幽鬼のような姿でふらふらと去っていくのを哀れみの目で見送る。

「……フォルテが疲れてないって事は、あっちの？」

「ああ。最近きな臭くてな……頭が痛い」

「何か手伝える事あったら言ってね。優秀な契約者^{ハンリ}が居るから」
今のは幻聴だ。

フォルテは軽く咳払いをして紅茶を一口飲み、「優秀な、何だ」と聞き返した。

「……守護者」

あからさまに口が滑ったという態度である。

有馬は今だ、部下を持つ事に肯定的でない。

元々リーダーシップは無いし、責任というものを嫌っている有馬はあまり部下を持ちたくない。故に、王妃という大役を受けた事も未だに自分でも信じられない快挙である。

「それにしても、ほんの1週間で随分仲間を増やしたな」

「半分はここに居た時からだけどね」

フォルテは一通りロボ達から話を聞いた。ロボを初めとして、幾人もと契約を結んだと。そして素直に感嘆した。

突然消えて、命の危険すらある状況で生き残り、尚且つ魔領にコネを作って来たのだ。これが優秀でなければ何だと言うのだろう。

1番重要な事実については2人とも知らないのだが。

「凄いな。……そもそも、あの契約方法は一生を縛るから滅多にな
い。自ら一生を縛られる事を望むとは」

「……本当、びっくりだよな。まあ、皆寿命長いし、残り7、80
年くらい良いと思ってるんじゃないかな」

神獣に精霊に魔王、そして魔族。どれも長命どころか前の2つは寿

命があるかどうかすら怪しい。

「なるほど……そういう考えもあるか」

「こんな年で寿命とか考えたくないけどね」

死にかけたり苦痛を味わったりして、最近めっきり死を近く感じてしまっ。

しかしこれでも15歳だ。まだそこまで考えたくない。

「……俺もだな」

苦笑し、フォルテはカップを置いて立ち上がった。

「仕事？」

「ああ」

「いってらっしゃい」

そう言って手を振る。フォルテは柔らかく微笑んで、いってくる、と言って部屋を出て行った。

有馬は自室に戻り、とりあえずソファに沈む。疲れは取れたが、今一頭の整理が付かない。フォルテのこと、気絶する前のこと、魔領の異変のこと、考えるべき事が多すぎる。

1番気になるのはやはり気絶する前、ルネにされた事だ。

(……何だったのあれは)

思い出せる限り最後の記憶は、喉に焼けた串でも突っ込まれたような痛みだ。目の前が真っ赤というか目の奥すら痛かった。

やはりその前の流れからして何か意味があったのだらうが、全く予想もつかない。

(というか宝石も何……?)

貰った時の事はあまり記憶にない。それほどあっさり手渡されて、気にも留めていなかったのだ。出所すら覚えていない。

うーんと1人悶々としていると、がちやりと寝室側の扉が開く。

「お、有馬嬢」

「……」

下手人の登場である。ルネはびよんとソファに飛び乗り、媚びるよ

うに体を擦り付ける。

悔しいことにとても可愛らしい。

「ぐっ……」

「ふふふ。そうピリピリするものじゃあないよ」

ご機嫌取りとばかりに尻尾を手に絡めてきたりするのがまたあざとい。

有馬は艶やかな毛並みをさらさらと撫でながら、恨みがましい目を向けた。

「何だったの？ あれ」

猫だというのにはつきり分かる笑み。尻尾が頬を撥り、そしてルネは爆弾を投下した。

「魔王就任おめでとう！」

「はい？」

くつくつくと楽しげに笑うと、ルネはぺらぺらと魔王の決まりやら何やらを説明し始めた。

「まず証は意識すれば体外に出す事が出来る。あれを持つ限り言葉は魔族に対し絶対の強制力を持つからね」

「……は、はあ」

「普通の契約よりずっと強制力は強い。悪用しないようにね」

「……はあ……って！」

ようやく言葉の意味が掴めたのか、有馬はルネの体をがしりと掴んで持ち上げた。

「魔王！？」

「魔王」

「誰が！？」

「君が」

「ひ、ひどい！」

「うふふ」

召喚された時よりもショックである。

まさかあれほど拒んだものに無理矢理ならされるとは思ってもいな

かった。

「人でなし！ サド！ 鬼畜！ やだつて言ったのに！」

「私は聞いていないよ」

「そういう問題かあああつ！！」

罵倒の語彙が多いように見えて少ない。更に言うとサドは伝わっていない。

かといって愛らしい猫を殴れる性格ではないので、結局脱力して溜息を吐いた。

「こんつの……」

ぶつぶつと繰り返しながらも、膝に乗せたルネを撫でる。触り心地が良いため少し落ち着いてきた。……諸悪の根源に落ち着かされるとはなんとも奇妙だが。

「それでだね。説明を再開するよ」

「……はあ」

「君は魔王だ。魔王は証を媒体に魔族を従わせる事が出来て、また儀式をすれば神 魔神と顔を会わせる事が出来る。知られていないけど、勇者も同じように天神と会う事が出来るのさ」

「神！？」

有馬は知識にある2柱を思い出す。元の世界では迷信じみた存在ではあるが、この世界では立派に存在する生物(?)だ。精霊の上位版だと思えば違和感もないし、何せ本気で神と一戦かました狼が身近に居るし、数馬も会ったらしい。

アニマラーナでの信仰は始祖に注がれているが、それでも神の影響は深い。借りた本に描かれた2柱の絵は、天神が白金の髪に水色の目をした神々しい美女、魔神は禍々しい鎧とマントを付けた大男。現実とはかなり差があるのだが(何せ天神はロリで魔神は変態美形だ)、会ってみたいような気もする。

「儀式といつても滅茶苦茶簡単だからね。やり方には差も無いし、そのうち兄上殿と一緒に習うかい」

「うん」

「ふふ。機嫌は直ったかな」

「直るかっ！」

せめて擦ってやろうと手を伸ばすが、ルネはひょいと逃げ出してテーブルに移った。

「……で、次」

「君はまあ特に仕事は無いよ。あそこは分割してしつかり統治されてるし、魔王の仕事といえば 寿命の分割とか」

「寿命？」

「魔族の寿命は魔力の量で決まる。寿命の離れた相手と結婚する場合に、魔力の量を同じにしてやる事が出来るんだ。片方に揃えるんじゃないく平均化だけだね」

「へえー……」

今一イメージが沸かない。魔族の寿命については既に知っているが「結構難しいよ。あとは魔族化の依頼を受けたりとか、陳情を聞いたり」

「魔族化？」

「魔族になる事だよ。具体的に言うとな体を作り変える改造手術」

「仮面 イダーみたい……：そっいや魔族の体って人間とどう違うの？」

「んー……魔法機能に特化してるだけだよ。人間は食事で得るエネルギーや栄養で生きるけど、魔族は魔力でそれを賄えるようになってるのさ」

そもそも人間のルーツが魔族なのだ。

かつては世界中に魔族が居たが、1万年ほど前に疫病等で数を減らし、今の魔領に集まった。そして1人の強者 魔帝によって纏められる。当時は種も纏まりがなかったが、魔帝国は栄華を誇った。五千年経った頃に、魔帝国は末期を迎える。荒れた国土を見て、魔帝は己の魔力を1つの石に封じ、次代に託す事にした。魔力を失った魔帝は程無く崩御し、瓦解した魔帝国を再び纏めたのがネインクルスことルネである。

人間はその頃に時折生まれていた突然変異で、弱いかわりに魔力に頼らず生きる事が出来た。強制力が働かないため利用されやすく、仕方なく大陸から送り出され、魔族の庇護を受けながら数を増やし、やがて魔族の手を離れて逆に反抗するようになった。

「複雑な……」

「大変だったよ」

魔族は人間を虐げた事などない。むしろ、最初は不幸な同族として哀れみ慈しんでいた。

要するに、同情を向けられてグレたようなものだ。そして反乱を起こされれば討伐せざるを得ない。それが魔族からの理不尽な襲撃だと曲解され、結局は魔族側が手を引いて魔領に引き籠もった。それからは無関心を貫いている。

けれど人間は間違った認識のまま突っ走り、今だ恨みを抱いて突っ掛かる。魔王という分かり易い対象がいる事もそれを手伝った。

長い話を聞き終え、有馬は溜息を吐き、立ち上がった。

「逆恨みというか……」

「ふふふ。面白いだろう」

「……。で、今度は自分たちから出た獣人を迫害するの？ ループしてない？」

「まあね。しかしつくづく仲が悪いとは思ってたけど、まさか妖精族が向こうに付くとは予想もしなかったよ」

今だ大戦争には発展した事が無いが、人間派の四種族はその他の種族を嫌っている。

海で隔たれているからまだ平穏だが、やろうと思えば大地を作るくらいやってのけるのが魔族と妖精族だ。飛びぬけて魔力が多く、魔法に長けている。海そのものを凍らせる、または海底を隆起させる、またはモーセのように海を割り開く事すら可能だ。

故に、冷戦状態は終わらない。

「更に今回の不穏な出来事。まさかのまさかで、これは大戦争に発展するかもねえ」

「え、縁起でもない……」

頭では理解できても、心では理解できない。人種差別、種族の対立。元の世界では遠く、この世界では近く感じられるもの。

人種入り乱れ、外国人にも接する機会は多かった現代日本。更に戦争の時代には生まれておらず、禍根は無い。だから種に囚われ感情を決めてしまう事自体、全く理解し難い。

「そうなたらどうするのかね？ 君たち異世界人は」

「どつって言われても……」

有馬はどの種族も嫌えず、好きとも言えず、結局は何とも言えない。戦争になれば当然アニマラーナに付く。だが、あの傭兵たちが敵国として参加したら？

「……それを防げるのが魔王と勇者という立場なのだよ」

そう言われて、有馬は黙り込む。戸棚からお菓子を取り出してソファに戻り、無言で口に運ぶ。得た役割と責任の重さ、そして、自分に出来ること。

じっと考える有馬を、ルネはただ楽しげに見つめていた。

誰かが怒られている。

自分ではない。あれは中学１年生の頃の所属していた、図書委員会の委員長だ。

「すいません、すいませんっ」

「謝っても仕方ないのよ」

必死に、洒落つ気のない頭を何度も下げて謝っている。

それは１０月の事で、図書室でボヤ騒ぎがあった。誰かが図書室で煙草を吸い、それが引火したらしい。

「あなたは黙認していたんだから。こんな時期に……」

吸った生徒は見つからなかった。と言うか煙草を吸う生徒が多く、特定できなかった。

委員長は気が弱い男子生徒で、黙認していたのも脅されたからだ。けれど、この時ばかりは話さなければ自分に押し掛かる。受験のこともあり、彼は洗い浚い吐いた。

煙草の件は生徒に嚴重注意がされた。内申にも影響があつただろう。委員長には特に何も無かつた。むしろ、その脅していた生徒達に悩まされた。

『委員長、だいじょぶすか』

有馬は心配した。敬語もまともに使えない、子供も同然の12歳の言葉は案外染み入つたらしい。煤けた背中の委員長は、涙目だつた。『無理。胃が千切れる……』

彼は煙草を吸つていた生徒たちの恨みを買つていた。無言の悪意、言葉の悪意、暴力に嫌がらせ。彼は穏和で知的だが、気弱かつひ弱だつた。耐えられる筈も無い。

『せいぜい和んでください』

『もうちよつと和める見た目になってから言つ……い、いや、城崎さんが可愛くない訳では無くて……ほら、好みとかがね』

『チツ』

『ひいつ』

本当に針の筵だつたらしい。たとえ向こうが悪くとも悪意は伝播する。元々数少なかった友人も失い、図書室に来るとカウンター裏に体育座りして噁り泣いていた。

『ちくしょう溺死しろ……轢死……圧死……窒息死』

有馬はこの弱すぎる先輩に対し、友人に対するものとは少し違つて持ちでいた。恋かもしれないと思つたがよく分からない。

『……委員長!』

『うひいつ』

よく分からないなりに、有馬はせめて逃げ場を以てあげる事にした。

数カ月後。受験勉強も図書室でしている委員長は相変わらず涙目で胃を押さえていたりしたが、なんとか自殺も転校もしていない。

有馬の心も何ら変わらない。やっぱり恋か、と思っていた。

『……ああ、そうだ。この前来た転校生なんだけどね』
『転校生っすかー』

カウンター裏にみかん箱を置いてかりかりとシャープペンシルを走らせる様子をちらちらと見ながら、カウンターに座った有馬はぼんやりと言葉を返す。

転校生。1月の新学期にやって来た転校生。こんな時期に珍しい、と有馬は思った。

『なんだか味方になってくれそうなんだ』

嬉しげな様子に、ざわりと心が揺れた。確か、転校生は女子である。有馬は委員長から見えない方向を向きいて眉根を寄せた。

『本当ですか』

つい刺々しい口調になる。なんとなく、可愛がったペットが他に懐いているような気分だ。

『わ、わからないけど』

その言葉に少し溜飲を下げたが、傷つけてしまったただろうかと少し気にした。

それからも関係は変わる事はなかった。既に引退しているのだが、委員長はよく図書室に来た。少なくとも有馬が当番の時には毎回居た。

そして、暫く経った日の事だ。

図書室にやって来た有馬は、本棚に寄りかかるように蹲る委員長を見て驚いた。落ちて来た本が回りに散らばり、明らかにひと悶着あったように見える。

『委員長！ な、何が』

『ひいつ』

その反応が何時も通りな事に安心した。そして顔を上げた彼を見て再び驚く。

『血！ 血、出てる』

『ええっ』

『な、殴られ……て』

口元から血が出ている。委員長は青ざめた顔で口を嚙む。肯定に等しかった。

『馬鹿だ……』

『ほ、本当にね……くっそ……ああ、やっちゃまった』

珍しく荒い言葉に、悔しそうな顔。それは殴られたから、だけではないように見えた。嫌な予感がする。

『何したんですか』

『……殴っちゃった。あれは……鼻、折れたかも』

『馬鹿だあああ！』

有馬はもう泣きたい気分だった。委員長は成績も素行も良く、既にそこそこいいランクの高校に推薦合格していた。それなのに暴力騒ぎでは、取り消しだろう。

『味方とかいう人は！？』

『ごめん』

『はあ？』

『いやね、煙草事件の……多分ボヤ起こした馬鹿なんだけど、そいつとデキちゃって』

僅かに安心すると共に怒りが湧き上がる。有馬は落ちた本を拾って本棚に押し込みながら、再び俯いた委員長の頭に手を置く。

『委員長も馬鹿だ』

『……うん』

『超哀れ。マジかわいそう』

『……うん』

『死ぬ気で頑張ってください』

『うん……』

ぼすぼすと頭を撫でる。委員長は切なげに一瞬見上げたが、すぐに俯いて泣いた。

有馬はその時、不意に気づいた。この気持ちが悪心ではなく、ただ

の庇護欲であると。

その時から、少し避けるようになった。

あれからどこか変な目を向けてくるのも知っていた。けれど頼られていることは嬉しかった。

しかし、自分が弱者に施しを与え優越感を抱いていた事に気づいて気持ち悪くなった。

どこか自分1人気まづいまま、卒業式の日に告白された。無論場所は人気の無い図書室。

『そ、その……す、好きなんだ………』

差し出されたのは卒業式で配られていた赤いチューリップである。有馬は相変わらずのへたれさに苦笑しながら、頭を下げた。

『付き合おうと思えば付き合えますけど。でも、多分なんか違います。すみません』

全く知らない仲だったら断らなかつただろう。けれど、仲の良かった相手に不誠実な思いでいたくない。

子犬のような目で肩を落とした委員長は、ぽつりと言った。

『……城崎さんが優しいから勘違いしたんだっ。うっ………』

『すみませんね。なんか子犬みたいで放っておけなかつたから』

『うっ………せ、責任とってよ………』

『女々しいっす。明日の受験頑張ってください、あ、これ卒業祝い』

委員長は号泣していた。色んな意味で泣いていた。卒業式自体はむしろこの学校から離れられる事が嬉しいのか全く泣いていなかったが、この瞬間は泣いていた。

『城崎さあああぁん………』

『委員長なら立派なヒモになれます。頑張って寄生先見つけてパラサイトしてください』

『そ、そんな無責任な………』

そうしてその日、笑って別れた。
そして

いつの間に寝ていたのか、と有馬は身を起こす。何故か横にフォルテが居た。

そして先程まで見ていた夢を思い出し、う、と眉を顰めた。

（責任アレルギーはあのせいかな）

高校に進学して数ヶ月。委員長であったその人は、結局その先で居場所を見つけられずに中退したらしい。有馬には何も書かれていないメールが届いただけだった。

委員長の責任。密告の責任。優しくする事にすら責任が付き纏う。

「おはよう」

どこか後味の悪いあの一連の出来事は、思っていたよりも後を引いていたらしい。

「……おはよう」

けれどその夢を見た事で、どこか吹っ切れた。重い責任も、支えてくれる人が居れば乗り切れる。あの委員長だって一時は自分に救われたかもしれない。

そう思うと、なんとか魔王も務められるような気がしてくるのであった。

26 責任アレルギー（後書き）

戦歴は片思いのみ。片思いされたこともある。という話

ついでに言っと人に嫌われたくないのも、この煤けた背中を見ていた所為かもしれない。もしくは生まれつき。

という訳で、魔王ルート突入。

27 戦争Ⅱ恋愛Ⅱ外交

有馬は再びぼんやりとし始めた。いくら支えてくれる人が居たとしても、突然魔王はハードルが高すぎるのではないだろうかと思つた。(せめてこう……足輕組頭から成り上がり形式で……いや、そういうのは兄ちゃんに任せるわ……頑張れ、勇者立志伝)
出来ることなら町娘で一生を終えたかったが、それは既に無理だ。こうなつたら天下取つてやると思案し始めた頃、心配げな声が掛かつた。

「……どうしたんだ、難しい顔をして」

「はえっ」

素つ頓狂な声を上げる。今の今までフォルテの存在を忘れていたらしい。

そして寄りかかっている事に気づいて僅かに赤くなる。

「しぎよっ、……とは？」

そして思い切り囁んだ。

フォルテは笑いを堪えながら「休憩だ」と言う。

「そ、そ、そう」

穴があつたら入りたい。さりげなく体を起こして離れようとするよ、ひよい、と肩に腕が伸ばされた。

「ちよ」

びくりと掴まれた肩が震える。隣で笑う気配がして、いつもと違う、と動揺が走った。

「何で離れる」

「何でも何も……いや、大丈夫？ 頭」

「正常だ」

真面目に言われ、有馬は深呼吸してから抗議する。すぐに声を出したら上ずってしまいそうな気がした。

「……恥ずかしいんだけど」

「そうか？ いいだろう、誰も見ていない」

「ま、まあ、そっ……いやそれ……あれ？」

イコール2人きり。

それに思い至る。今までも何度も2人きりにはなっているが、帰ってきてからどうも違う。

前はこんなにベタベタしていただろうか。いつも隣に座っていたし触れる事も少なくなかったが、ここまで強引な事は無かった気がする。

有馬は身動きして逃げようとし、ちらりと見たフォルテの切なげな目に、びくりと停止した。

「……、フォルテ？」

どうも記憶にある委員長と同じ目をしている気がする。

「顔が赤いな」

思わず両手で目元を覆うと同時に、じわりと涙が滲むのを感じた。

「また熱か？」

はつきりとからかいを込めた声音に、へなりと力が抜ける。

（これで恋愛経験ゼロって、王族の初期ステータスは化物か………んなー！？）

べりつと片手が剥がされ、潤んだ片目が見開かれる。

「いやほんと恥ずかしいから！ 恥ずかしっ のわっ！ ぎゃーっ！」

「……もう少し静かにできないのか？」

「叫ばせるような事をするからっ！」

もう片手も剥ぎ取られ、両手を捉まれる。拘束が解けたため身を引こうとするが、むしろ身を乗り出されて有馬は涙目で悲鳴を上げた。

「……ああ、今、確信が持てた」

「死ぬほど恥ずかしいので離してくださいお願いします」

「死なれては困るな」

フォルテは両手を離す。

そして逃げ出そうとする有馬の背中を巧みに捕まえると思いつき寄り引き寄せる。元より運動能力は雲泥の差、回避できる筈もなかった。

「手じゃなきゃ良いって訳じゃないいい！」

それでも顔を見られない位置の方がまだ落ち着く。抱き締められる方が落ち着くのも変な話だが、真っ向から見詰め合うよりはいくらかマシだ。とポジティブに考えた。

「有馬……」

「なんか嫌な予感がするから逃げていい？」

「……そんなに嫌か……？」

「耳が！」

最早拷問の域だ。耳元を感じるフォルテの低い掠れ声と吐息に、有馬は背筋に寒気が走るのを感じた。もうやだ、と暴れる有馬の背を撫で付ける大きな手。

「……む、無理、こういう空気向いてない」

かつて受けた告白の数十倍は恥ずかしい。あの時は断る意思がはっきりしていたからか、むしろ冷静だった。

こうして行動で訴えられ、しかも悪い気もしないとなるとただただ恥ずかしい。

そしてふと気づいた。

（いやいやいやいや何勝手に好きとか仮定してんの！？ 自意識過

剰！）

「そうか。そういう所も、好きだ」

（好きだったあああああああ！！）

囁かれた言葉に、嬉しさやら何やらを感じられる余裕がない。むしろ恥ずかしすぎてもう涙が出ていた。

固まった有馬をひよいと膝に乗せる。有馬の口はわなわなと震えて既に言葉もない。

「お前は？」

(やばいやばいやばい王子の本気舐めてました！ すいません！ 逃げたい！)

「……有馬。意識を飛ばしていないで、答えてほしい」

「え？ あっ、はい！ 理解した！」

それは答えと言えるのだろうか。

「で？」

悪魔だ。有馬は優しかった当初のフォルテを思い出してますます涙目になった。

頭が沸騰しそうなほど煮え立っている気がする。全身が熱い。インフルエンザで寝込んだときよりも熱い。体温が5度くらいは上がった気がした。

「で、でって、何？」

「有馬はどう思うんだ？」

「あうえあつ、……なにを！」

「俺を」

「わかんない！」

「人に言わせておいて……」

批難するように言われ、有馬はあつあつと言葉にならない声を漏らす。

「でも、そういう所って何！ 一部分!？」

「……そう反撃してくるか」

「だ、だ、だって」

「そういう所“も”、だ。全部好きだ。満足か？」

「満足っていうか、なんか、なんか……」

満足を通り越してもう限界だ。心臓は煩いほどに鳴るし、じわりと

手に汗を掻くほど体温が上がっている。

「どうした」

「……腹たつ！」

「何でだ？」

「なんか、余裕で……もてあそばれてるような……」

「お前な……」

呆れたような声に、有馬は少し余裕を取り戻した。

「最初の頃のウブっぽいフォルテはどこに……」

「慣れた。……あと、余裕じゃない」

「へえ」

「努力している」

「へえー……」

「気を抜くと、もう、駄目だ」

切なげな吐息は故意だろうか、と有馬は震える手でフォルテの服を握り締めた。

「……それは、言うべきじゃないんじゃない」

「そうだな」

「誰の入れ知恵……」

「義兄上だ」

「……兄？」

「数馬殿だ。俺の兄にもなるだろう」

その言葉に、場違いにも感心してしまった。

（確かにそうだった……あ、じゃあフィーもフォルテの姉に）

同時に、昔兄と交わした会話を思い出した。

『いいか有馬』

『何さ』

『恋は外交と同じだ』

『外交……』

『終始相手のペースで不利な条約結びました、じゃ外交官はクビだ。』

ペリーになれ』

『日米通商修好……修好通商?』

『日米修好通商条約だ。西暦何年?』

『せ、せんはつびやく……ろくじゅう』

『惜しい、1858年。じゃあ日米和親条約は』

『え、えーつと』

(中略)

『くっ……世界史は卑怯!』

『ちなみに恋は戦争とか言っただけで押し切るのは脈のある相手にしか通用しないぞ。通報されるのがオチだ』

『そんなリアルなオチはいらない!』

結局最後は変な方向に到着するあたりが城崎兄妹だ。正直な所途中から恋愛の話をしている事を忘れていた。

『どんな入れ知恵?』

『恋は戦争と同じだ、脈はあるから自分の勢いで押しつけて余裕を見せて付けばいい、と』

『あたしに言った事と違うし……』

つまり数馬の目からも、脈有りに見えたのだろう。

そう思うと少し落ち着いていた羞恥心がむずむずと湧き上がる。

『しかし、上手いかないな』

『いや、動揺させると言う意味なら大成功……』

『落ちていないだろう』

『……どうだろ』

嫌いではない、むしろ好きだ。胸の高鳴りを恋だというなら、十分に恋している。

けれど言葉に出来るようなものでもない。ただただ、熱くて仕方ない。

『恋、というか』

ぼんやりと、頭に浮かぶままにぼつりと呟く。

そう、敢えて言葉にするならば。

「愛？」

「っ……あ、有馬」

「あ、待つて今なんか凄い間違った事を言ったような
我に返ったように慌てるが、フォルテは止まらない。」

「間違いだなんて認めるか。聞いたぞ」

「いや、あう、あー、あの、なんか、家族的な、ね？」

「夫婦になるのだからな」

「言葉が通じない……」

腰を引き寄せている腕に力が入る。有馬はふと、ひとつの可能性に
思い至った。

「……薬とか盛られてない？」

「可能性はあるな」

「ええっ」

「お前の契約した精霊に茶を貰ったんだが」

「ベルうつつう……」

情けない声を上げると、くい、と顎を持ち上げられる。

「薬は関係ない。好きだ」

「そう乱発されると希少価値が無くなるというか」

「それでも言いたくて仕方が無い」

「病気じゃないかな」

「かもしれないな。恋の」

「頭の！ うえっ！？ ……な、なっ」

柔らかい感触が額に落ちた。すぐ後に軽いリップ音が耳に届く。

何をされたか理解すると、有馬は潤んだ目をぱちくりとさせて唇を
震わせる。

掠れた吐息が喉から漏れる。フォルテは目を細め、今度は目の横あ
たりに口付けた。

「……っフォルテ！」

「何だ？」

「そ、そ、そういうの、恥ずかしいから！」

「だから、誰も見ていないと」

「あいつらなら覗き見くらい軽いでしょうがっ！」

あいつらとは言うまでも無い。無駄に魔法に長けた者が多いため、盗視盗聴は常に恐れるべきだと有馬は思った。

「見るなら見ればいい」

「だかつ……ん！」

もう黙れ、とばかりに唇に唇が押し付けられる。やや仰け反るような姿勢でのキスに、見開かれた目は次第にぎゅっと閉じられて眦から涙が零れた。

次第に体から力が抜けていき、服を握り締めていた手が力無く落ちる。

こうなってしまうえば従順なもので、フォルテは暫くその唇を堪能するのであった。

翌日、またも熱が出た。といっても38度と少しで、前の時よりはマシらしい。

有馬は悶々としたまま、昨日の熱を引き摺ったような体をベッドに横たえている。

(どいつも、こいつも……うっ)

謎の茶を飲ませたベルを締めてやりたい所だが、起き上がるのも億劫だ。

本人は笑って「あれはただのハーブティだよ」と言い訳し、いつの間にか寝室にまで設置されたソファに座って何やら本を見ている。

ベッドの端には頭だけを乗せてメアが熟睡し、その横に口ポ。そして枕の横にはルネ。

「みず」

「はいはい」

不機嫌に呟くと、ぱちんと指が鳴らされる。体がふわりと起き上がり、ベッドサイドから水差しとコップが勝手に浮かび上がる。

ゆっくり口元に運ばれたコップは、有馬が口を開くのを待って軽く傾いた。

満足すると、コップは元の位置にふわりと戻り、有馬の体もゆっくり寝かされる。

その時、ドアがノックされた。

「……どーぞ」

ばたんと扉が開き、現れたのは数馬一行である。もうすっかり、数馬にフィー、ランラクル、という組み合わせが定着しつつあった。

ちなみに実は一昨日、夕食を共にした。仕事に忙しかったシヴァは不参加だが。

何故かフォルテとランラクルが睨みあっていたが、有馬はクレイアとフィーと一緒にガールズトークに興じていたため全く気づかなかった。

「おう有馬、知恵熱だつて？」

「兄ちゃんが……変な……入れ知恵するから」

掠れてはいないがだるそうな声で返答する。すると数馬はにんまりと笑う。

「フー事は、ちゃんと買った訳か」

「おっ、かげさま、で……あー……ベルと兄ちゃんのせいだ」

「僕が飲ませた奴、素直になる効能しかないよ」

「つまり本能に忠実になるんじゃないか」

「ほんっ、と……に、治ったら、締める」

有馬は潤んだ目でベルと数馬を交互に睨みつけた。

「男は本当にしょうもないですね。こちら、城下で買ったお見舞いです」

「ありがとう……」

へにやりと力ない笑いを浮かべる。不憫な、という目でフィーがその頭を撫でた。

お見舞いは果物が入った籠である。どうやら異世界でも見舞い品は変わらないらしい。

「俺からも、これを」

「……ジュース？」

「熱さましの薬湯だ。飲み口も甘くて飲み易いらしい」

ランラクルが置いたのは、ワインボトルのような瓶である。中身は薄桃色の透き通った液体で、巻かれたラベルには“熱冷まし”と書かれていた。

「今飲んでおくか？」

あくまで心配するような口調に、有馬は少し和んだ。こくりと頷くと、ランラクルは瓶の口から栓を抜いて少しコップに注ぐ。

「体を起こしますね」

「うーい……」

フィーが背中中に手を添える。有馬はゆったりと体を起こし、コップを受け取って口を付けた。

「どうだ？」

「……あー……甘い。カゼシロップ……」

「そんなに甘いのかよ」

数馬がコップに指を突っ込んで少し掬い取り、ぺろりと舐めた。

行儀が悪い、とフィーが睨みつける。既に尻に敷かれていそうな雰囲気だった。

「甘いなこりや。薄めるか？」

「いーや……まあ、飲めるし」

一気に傾けて飲みきる。とろりとした甘さは割ときついが、少量なら問題ない。

「よかった」

ランラクルは嬉しそうに笑った。

すると今度は前触れ無くドアが開く。

「お、フォルテ」

「お邪魔しておりますわ」

「……邪魔する」

フォルテはやたら人の多い室内を見回し、「義兄上、義姉上、ようこそ」と挨拶し　最後にランラクルを睨んで、「お前もな」と付け足した。

唐突な訪問と何故か刺々しい態度に、有馬が小首を傾げる。

「仲、悪いの」

「当たり前だ」

「……なんで？」

再び体を寝かせながら、有馬は目をぱちくりとさせた。

種族間の問題は無い筈だ。少なくとも獣人族と竜人族は同じ魔族サイドの種族である。

ならば、馬が合わないのだろうか。

「ふふふ。青春だねえ」

いつの間にやら起きたルネが楽しげに声を上げる。それを聞き、足元でロボが唸った。

「困った事じゃ」

全く意味が分からず、ますます有馬は困惑する。

ランラクルとフォルテは睨み合った後、同時に溜息を吐く。

「恋敵だからな。仲良くできる筈もない」

そう言ったのはランラクルだ。その視線は真っ直ぐに有馬を向いている。

「……叶わないとは承知しているが、……好きだ、アリマ」

ぼんやりとしていた意識が一気に覚醒した。有馬は目を見開き、うえ、と声を上げる。

「返事はいらぬ。本当は言つつもりもなかった」

他の者達は誰も言葉を発さない。面白そうに見ているのが数馬とベルとルネで、ロボは溜息混じりに傍観し、フィーはおろおろしている。メアは熟睡中だ。

有馬は衝撃から立ち直ると、困ったように眉を下げる。

「…………意識が朦朧としてきた。…………寝ていい？」

そして思い切り現実逃避に走った。

27 戦争Ⅱ恋愛Ⅱ外交（後書き）

ドーピングありますがようやく甘い話に持っていけて満足です。

真面目なので1度決めたら突っ走ったフォルテですが、休憩時間をとつくに過ぎても戻ってこなかったためブリザードを纏ったシヴァ（疲労）に連れ戻されました。めでたくない。

そして誰もメアに突っ込みを入れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7583u/>

獣の国でお嫁さん

2011年9月20日19時00分発行